

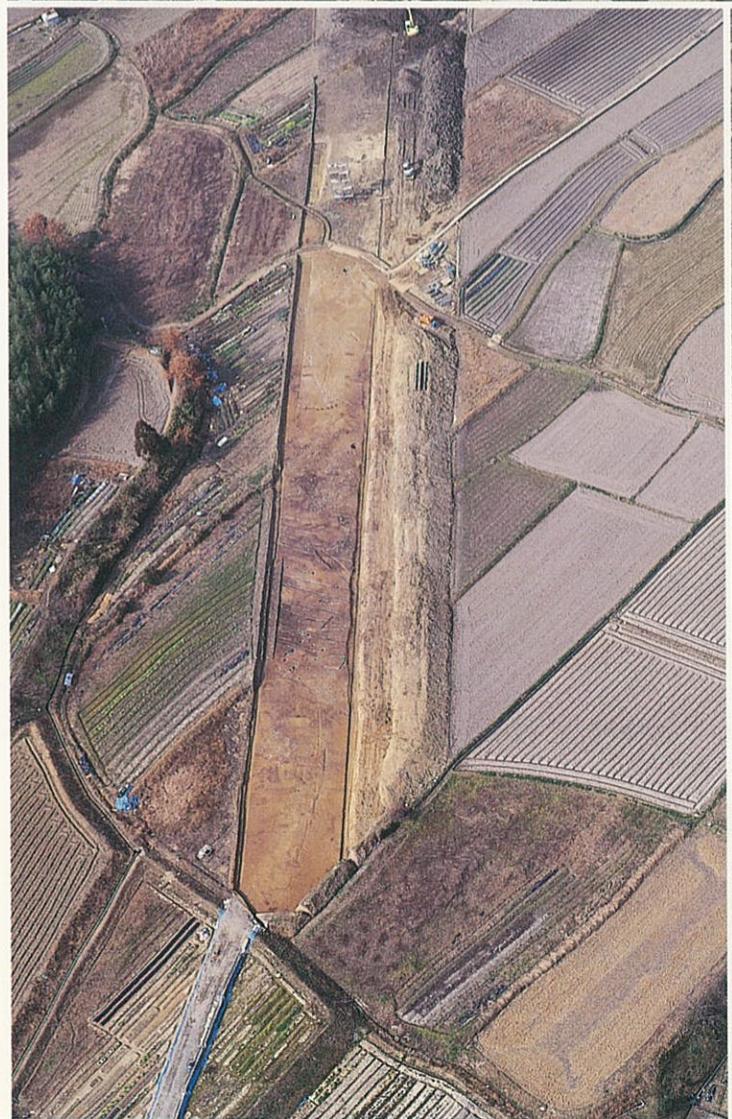
箕面市所在

庄田遺跡

都市計画道路茨木箕面丘陵線建設に伴う発掘調査報告書

1999年2月

(財)大阪府文化財調査研究センター



上：奈良時代集落跡全景
下左：柱穴断面（柱穴208）
下右：柱穴断面（柱穴27）



上：中世遺構全景
下：中世溝



上：石器
下：製塙土器

序 文

庄田遺跡は、箕面市栗生間谷東2丁目にある奈良時代の集落跡です。今回の調査は、都市計画道路茨木箕面丘陵線建設工事に先立つものです。

今回の調査では、奈良時代の大規模な掘立柱建物跡群や倉庫跡・塀跡・溝などの遺構が多数検出され、硯や製塩土器など当時の珍しい遺物も多数出土しました。これらの遺構・遺物は当地域の歴史にとどまらず、日本の古代史を解明していく上でも貴重な資料となるものと確信されます。

最後に、発掘調査および遺物整理事業の実施にあたり、多大の御協力をいただきました大阪府茨木土木事務所、箕面市教育委員会、地元自治会など関係各位に深く感謝するとともに、今後も文化財保護に御協力いただきますようよろしくお願い申しあげます。

平成11年2月

財団法人 大阪府文化財調査研究センター

理事長 坪井清足

例　言

1. 本書は、大阪府箕面市粟生間谷東2丁目に所在する庄田遺跡の発掘調査報告書である。
2. 調査は、都市計画道路茨木箕面丘陵線建設工事に先立つもので、大阪府茨木土木事務所国際文化公園都市関連事業建設事業所の委託を受け、平成9年度に発掘調査を、平成10年度に遺物整理事業を実施した。
3. 発掘調査事業は、当センター北部調査事務所調査第1係係長西口陽一、技師伊藤武が担当し、遺物整理事業は西口陽一が担当した。
4. 本報告書に掲載した航空写真は大阪航空株式会社が撮影したものである。それ以外の遺構写真は伊藤武が、遺物写真は北部調査事務所調査第1係主査平井貞子が撮影した。
5. 本調査に伴い、製塙土器の胎土分析をパリノ・サーヴェイ株式会社に委託し、実施した。分析結果は、本書第5章に掲載した。
6. 本書の執筆分担は、目次に示した。
7. 出土遺物・写真・図面などは当センターが保管している。
8. 発掘調査および遺物整理事業において、下記の方々の御指導・御協力を賜った。記して感謝する。

(敬省略、順不同)

大阪府教育委員会文化財保護課 玉井功、橋本高明

箕面市立郷土資料館 飯島正明、福田薰

川合町自治会長 白井慶三

【調査・整理補助】田中千賀、平田麻希、瀧本勇一、内山義行、松田智子、阿相元喜、大家智子、前田千津子、二宮栄子、市川奈緒、久貝洋子、鹿島真由美

凡　例

- ・遺構実測図の基準高は東京湾平均海水位(T.P.)を用い、平面位置は国土座標軸第VI座標系に基づいた。本文中における座標の記載は、すべてm単位である。
- ・方位の矢印の示す方向は座標北を示す。
- ・土色に関しては、小山正忠・竹原秀雄編1998『新版標準土色帖』第8版 監修農林水産省農林技術會議事務局・色票監修財団法人日本色彩研究所に準拠した。
- ・遺物実測図では基本的に土師器は断面を白色で、須恵器は黒色で表現した。
- ・遺物写真の縮尺率は、わかるもののみ()内に示した。
- ・第5章の「庄田遺跡に関わる製塙土器の胎土分析」については、パリノ・サーヴェイ株式会社から提出された報告書をそのまま記載しているため、挿図・表・写真図版等の番号は、通し番号を用いず、第5章単独の番号を振った。

本文目次

序文	
例言	
凡例	
第1章 調査に至る経緯	（伊藤） … 1
第2章 位置と環境	（伊藤） … 1
第3章 調査成果	3
第1節 基本層序	（伊藤） … 3
第2節 遺構	（伊藤） … 5
<奈良時代>	5
<中世>	18
<近世以降>	19
第3節 遺物	（西口） … 24
第4章 試掘調査	（伊藤） … 51
第5章 自然科学的調査	
庄田遺跡に関する製塙土器の胎土分析	（パリノ・サーヴェイ株式会社） … 52
第6章 まとめ	68
<遺構>	（伊藤） … 68
<遺物>	（西口） … 69

挿図目次

第1図	調査区位置図
第2図	調査区位置及び周辺遺跡図
第3図	調査区配置図
第4図	基本層序柱状図
第5図	柱穴断面図
第6図	建物跡模式図
第7図	奈良時代遺構平面図
第8図	建物跡模式図
第9図	柱穴断面図
第10図	奈良時代遺構平面図
第11図	柱穴断面図
第12図	奈良時代建物跡復原模式図
第13図	奈良時代遺構平面図
第14図	中世土坑平面・断面図
第15図	近世以降小畦畔検出範囲
第16図	近世以降小畦畔断面図
第17図	中世遺構平面図
第18図	建物3～12出土土器実測図（1～22）
第19図	A～D区遺構出土土器実測図（1～26）
第20図	A区1層（1～15）、2層（16～30）出土土器実測図
第21図	A区2層（1～9）、3層（10～16）、耕土（17・18）、排土（19～25）出土土器実測図
第22図	B区1層（1～21）、2層（22～38）出土土器実測図

- 第23図 B区3層(1~18)、4層(19・20)、耕土(22~27)出土土器実測図
- 第24図 C区1層(1~6)、2層(7~25)、3層(26~31)出土土器実測図
- 第25図 C区3層(1~27)出土土器実測図
- 第26図 C区4層(1~9)、5層(10~17)、耕土・排土(18~23)出土土器実測図
- 第27図 D区1層(1~15)、2層(16~29)出土土器実測図
- 第28図 D区2層(1~3)、3層(4~6)、耕土・床土(7・8)、試掘1トレンチ(9・10)、試掘13トレンチ(11・12)出土土器実測図
- 第29図 A~D区出土製塙土器実測図(1~29)
- 第30図 A~D区出土製塙土器実測図(1~16)
- 第31図 建物跡4(3・4)、B区1層(1)、B区2層(2)出土瓦実測図
- 第32図 B区・C区・D区・試掘13トレンチ出土サヌカイト製石器実測図
- 第33図 A~D区出土銅製品・鉄製品・土製品・陶硯実測図
- 第34図 庄田遺跡周辺表面採集サヌカイト製石器実測図
- 第35図 試掘調査区配置図
- 第36図 試掘調査区基本層序柱状図

表目次

第1表 遺物観察表

図版目次

(図版1~14 遺構、図版15~48 遺物)

図版1	調査地全景	図版25	遺物
図版2	調査区全景	図版26	遺物
図版3	調査区全景	図版27	遺物
図版4	調査区全景	図版28	遺物
図版5	調査区全景	図版29	遺物
図版6	奈良時代遺構	図版30	遺物
図版7	奈良時代遺構	図版31	遺物
図版8	奈良時代遺構	図版32	遺物
図版9	奈良時代遺構	図版33	遺物
図版10	奈良時代遺構	図版34	遺物
図版11	中世遺構	図版35	遺物
図版12	中世遺構	図版36	遺物
図版13	試掘調査	図版37	遺物
図版14	試掘調査	図版38	遺物
図版15	遺物	図版39	遺物
図版16	遺物	図版40	遺物
図版17	遺物	図版41	遺物
図版18	遺物	図版42	遺物
図版19	遺物	図版43	遺物
図版20	遺物	図版44	遺物
図版21	遺物	図版45	遺物
図版22	遺物	図版46	遺物
図版23	遺物	図版47	遺物
図版24	遺物	図版48	遺物

第1章 調査に至る経緯



第1図 調査区位置図

当遺跡は勝尾寺川右岸の箕面市粟生間谷東2丁目地内の水田地帯に位置する。大阪府は当地に国道171号線から「国際文化公園都市」へとつづく都市計画道路茨木箕面丘陵線の建設を計画した。建設予定地のうち、茨木市側では以前に行われたほ場整備の際、弥生時代から中世にいたる遺物が採取されていたが、箕面市側ではほ場整備は行われておらず、遺跡の有無さえ全くの不明であった。したがって1997年（平成9年）4月から7月にかけて、当センターは当該地の遺構・遺物の有無および遺構が確認された場合にはその深度を確認する目的で、道路予定地の両側に幅2mの調査区を各水田ごとに25箇所設定して試掘調査を行った。

その結果、奈良時代から中世にいたる柱穴・溝等の遺構、及び多数の遺物が道路予定地のほぼ全面で確認され、道路予定地内が遺跡であることが判明した。大阪府教育委員会による北端部の一部を除く道路予定地全面の事前の発掘調査が必要であるとの判断に基づき、当遺跡を当地の字名をとって「庄田遺跡」と命名し、大阪府茨木市木事務所の依頼を受けた当センターが、大阪府教育委員会の指導のもと、1997年（平成9年）9月から翌年3月の間、道路建設予定地のうちの箕面市側のほぼ全面を発掘調査することとなった。調査面積は8800m²である。

第2章 位置と環境

庄田遺跡は「西国街道」の北、勝尾寺川右岸の箕面市と茨木市の市境に位置する。西国二十三番札所勝尾寺に向かうための交通の要衝である。近接する茨木市域では前期古墳として有名な紫金山古墳、将軍山古墳をはじめ、府指定史跡である海北塚古墳など多くの古墳が点在し、また宿久庄・宿久庄西遺跡など集落跡として周知された遺跡も広がっている。ところが箕面市域は平安時代以降の文献等には頻繁に登場するものの、ごく最近までは発掘調査件数が極めて少なく、考古学的データに乏しい地域であった。ようやく近年、この勝尾寺川の対岸で「国際文化公園都市」の計画に伴う土地区画整備事業・都市計画道路の建設等に先立って発掘調査も数多く実施されるようになり、考古学的資料も徐々に増えつつある。

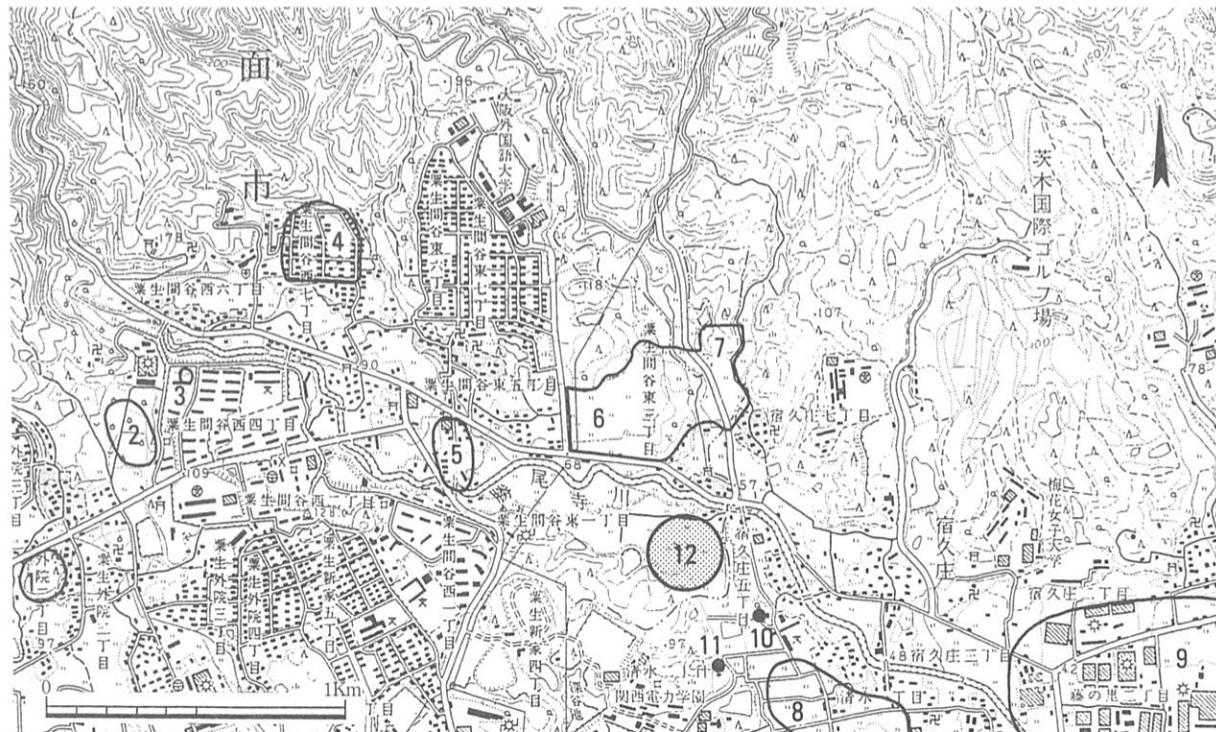
当地からも見渡すことができる勝尾寺川対岸の粟生間谷遺跡では、奈良時代から中世にいたる集落跡とともに三彩の小壺が出土し注目を集めた。小壺内には約50個ものガラス玉が納められており、出土状況から、宅地内全体の地鎮の遺構と考えられている。また粟生間谷遺跡の東に隣接する徳大寺遺跡では10世紀後半の梵鐘鋳造遺構を検出している。鋳造遺構の底には円形の鋳型底部と、鋳型を固定するために井桁状に組まれた丸太の痕跡が良好に残存していた。遺構内からは鋳型片・黑色土器・綠釉陶器が出

土している。栗生間谷遺跡は現在も調査が継続中であり、今後新たな発見が期待される。

庄田遺跡が位置する地域は、奈良時代には摂津国嶋下郡宿人（久）郷に属した。荘園制成立以後は、もともと摂津国の国衙領であったものが摂関家藤原氏の荘園である垂水東牧となり、さらに藤原氏が氏神である春日神社に寄進したことから、春日神社領へとかわった。当地の字名「庄田」も、荘園の田地であったことから付けられたものと思われる。東は宿久庄と接しており、応永8年（1401）には宿久庄・小野原の住民が栗生の山子として勝尾寺四至内に入山し、勝尾寺と堺相問題で激しく争ったことが知られる（『勝尾寺文書』）。このとき勝尾寺側が寺領境界の根拠とした「八天石藏」は、現在も勝尾寺の周りの山林内に国の史跡として保存されている。

遺跡周辺の水田は、勝尾寺川の段丘上に位置するため、昔から水不足には悩まされたようである。おそらくその状況は古代も同様であったろう。この水不足を解消するため、明治年間に南の丘陵裾部に溜め池が造られた。西から西池、中池、新池と並ぶ溜め池の内、最も新しい新池が当遺跡の南に築かれている。この溜め池は丘陵から流れ出る谷川を堰止めて造られたものであるが、現在は農閑期に勝尾寺川から水を引き、万が一のときに備えている。それでもごく最近の水不足の年には、3ヶ所ある溜め池の水を使い切ってもまだ水が足りなかったという。

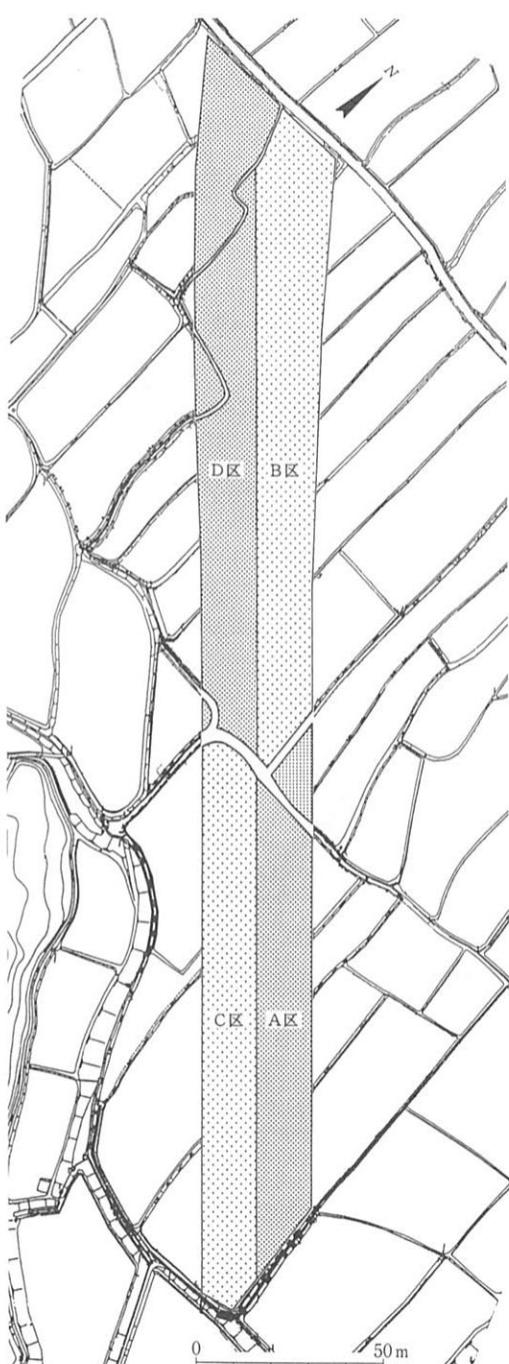
遺跡のすぐ東南の茨木市宿久庄には式内社新屋坐天照御魂神社が、南の同清水には春日神社（元式内社須久久神社）が鎮座するなど、当地は歴史的にも重要な地域であった。周辺には未だ確認されていない重要な遺跡がまだまだ地中に眠っていると予想される。当遺跡周辺の考古学的な調査は、今ようやく始まったところであり、今後調査が進むにつれて、さらに多くの文化財が発見され、当地の歴史も解明されるであろう（第2図）。



1.外院遺跡 2.善福寺原城跡 3.栗生奥有舌尖頭器出土跡 4.栗生間谷城跡 5.栗生間谷大日遺跡 6.栗生間谷遺跡
7.徳大寺遺跡 8.宿久庄西遺跡 9.宿久庄遺跡 10.新屋坐天照御魂神社 11.春日神社（元須久久神社）
12.今回の調査地（庄田遺跡）

第2図 調査区位置及び周辺遺跡図

第3章 調査成果



第3図 調査区配置図

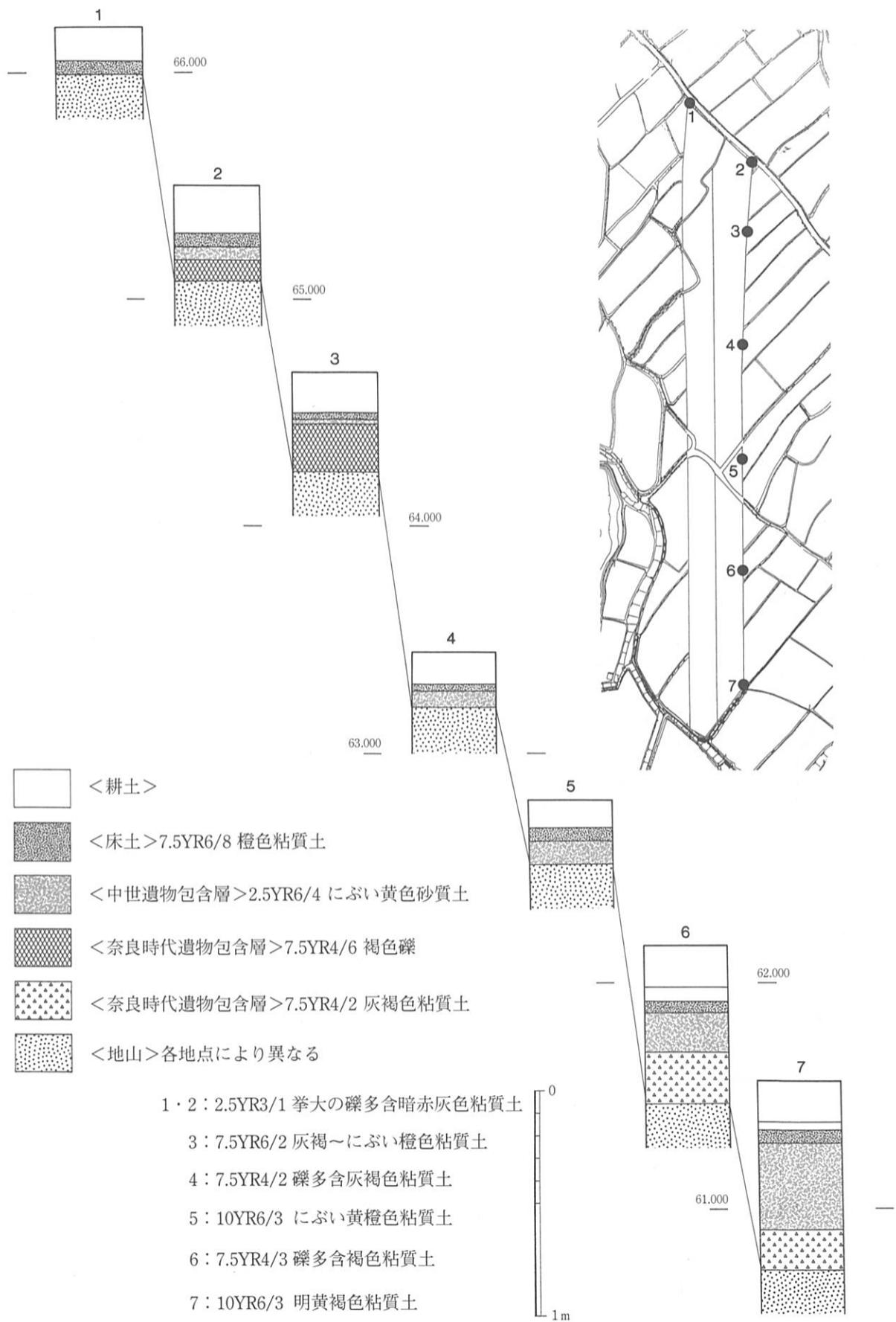
土置き場、及び進入路確保の都合上、調査区をほぼ1/4ずつ4分割して調査を行った。それぞれを調査順にA～D調査区と名付けた(第3図)。以下の報告では4調査区をまとめて報告するが、遺構検出位置など、適宜A～D調査区を記すようにした。

第1節 基本層序

南東から北西にかけて約300mもある長い調査区であるため、北と南、あるいは各水田ごとに若干の層序の違いがあるが、基本的には、上から現代耕土、床土(両者併せ1層、あるいは耕土層)、中世の遺物包含層であるにぶい黄灰色砂質土(2層)と堆積し、遺構面(地山)に達する。ただし、にぶい黄灰色砂質土と遺構面との間に、南方の一部では灰褐色粘質土(A・C区の3層、およびD区の4・5層)が、北方の一部には褐色礫(B・D区の3層、およびB区の4層)が堆積する。これらは奈良時代の遺物包含層である。この層が堆積している箇所から奈良時代の遺構が検出された。また一部には中世の遺物包含層である淡黄灰色砂質土が削平されており、床土の直下が遺構面(地山)となる箇所もある。地山は北から南にかけて変化に富む。南端部では明黄褐色粘質土であったものが、北に向かうにつれて礫を多く含む褐色粘質土、にぶい黄橙色粘質土、礫を多く含む灰褐色粘質土、灰褐～にぶい橙色粘質土となり、北端部で拳大の礫を多く含む暗赤灰色粘質土へと変化する。またC区の南端部は黒褐色土が混じるにぶい黄橙色砂質土である。この黒褐色土はにぶい黄橙色砂質土の面に円形や不整形、あるいは溝状に現われており、遺構と誤認しやすい。

遺構面までの深さは、南端部で約70～80cm、中央付近で約40～50cm、北端部で約20～30cmである(第4図)。

なお、試掘調査時と本調査時においては、遺物取り上げの層名が異なる。第3節の報告では一部両者の層名が登場するので注意されたい。第3節の本文・挿図・一覧表、および図版に記載されている層名のうち、各調査区とも「耕土層」とは本調査の「1層」に対応し、D調査区の「4・5層」とは本調査の「3層」に対応する。なお、B調査区の「4層」とは「3層」のうちの最下層を意味する。



第4図 基本層序柱状図

第2節 遺構

奈良時代と中世の遺構を同一遺構面で検出した。

<奈良時代>

建物跡13棟と塀跡1棟、溝1条のほか多数の穴を検出した。これらは大きく南と北の2群に分かれる。

南群は国土座標のX=-128.770からX=-128.805の範囲に広がる一群である。建物跡1～3の3棟と溝1条がある(第7図)。

建物跡1はA区で検出した。2間×2間の総柱建ちの建物跡で、倉庫跡と考えられる。柱間寸法は南北が1.7m、東西1.5m等間である。北で西に35度振れる。

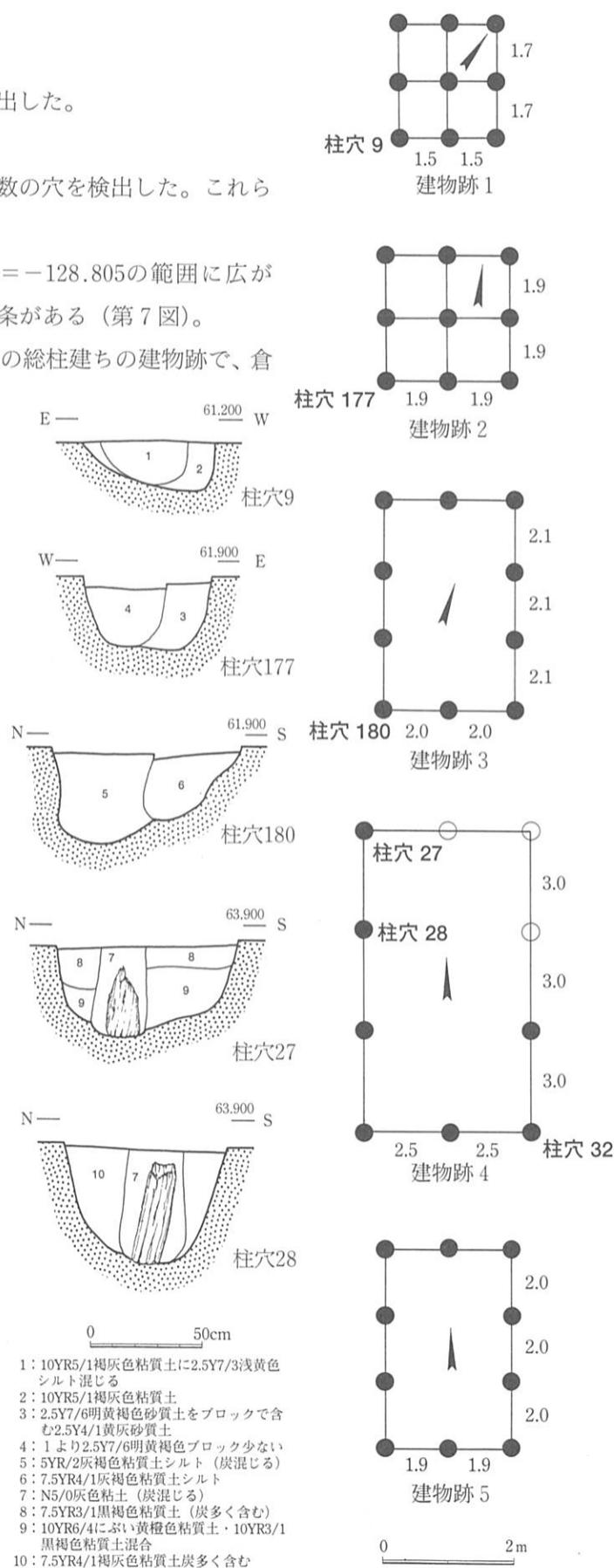
建物跡2はC区で検出した。2間×2間の総柱建ちの建物跡で、建物跡1と同じく倉庫跡と考えられる。柱間寸法は東西南北とも1.9m等間で、北で西に2度振れる。

建物跡3もC区で検出した。2間×3間の南北棟である。柱間寸法は梁間が2.1m、桁行が2.0mの等間で、北で西に13度振れる。

北群は国土座標のX=-128.595からX=-128.645の範囲に広がる一群である。建物跡4～13の10棟と塀1棟のほか多数の穴がある(第10図・第13図)。

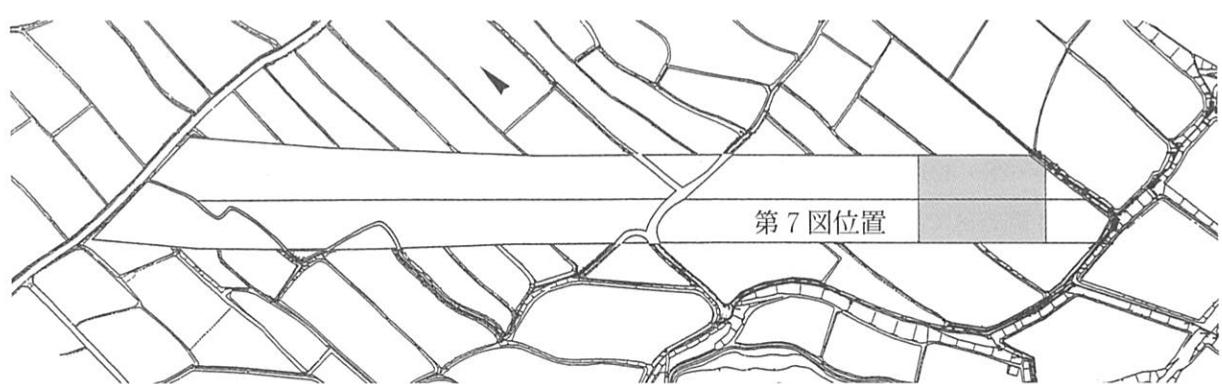
建物跡4はB調査区で検出した。梁間が2間の南北棟である。桁行は3間分を検出した。検出したほかの建物跡の桁行が3間まででおさまることから、当建物跡も桁行はおそらく3間であると考えられる。柱間寸法は梁間が2.5m、桁行が3.0m等間である。本調査で検出した建物跡の中では最大である。北で東に2度振れる。7箇所検出した柱掘方のうち3箇所には柱根が残っていた(柱穴27・28・32)。

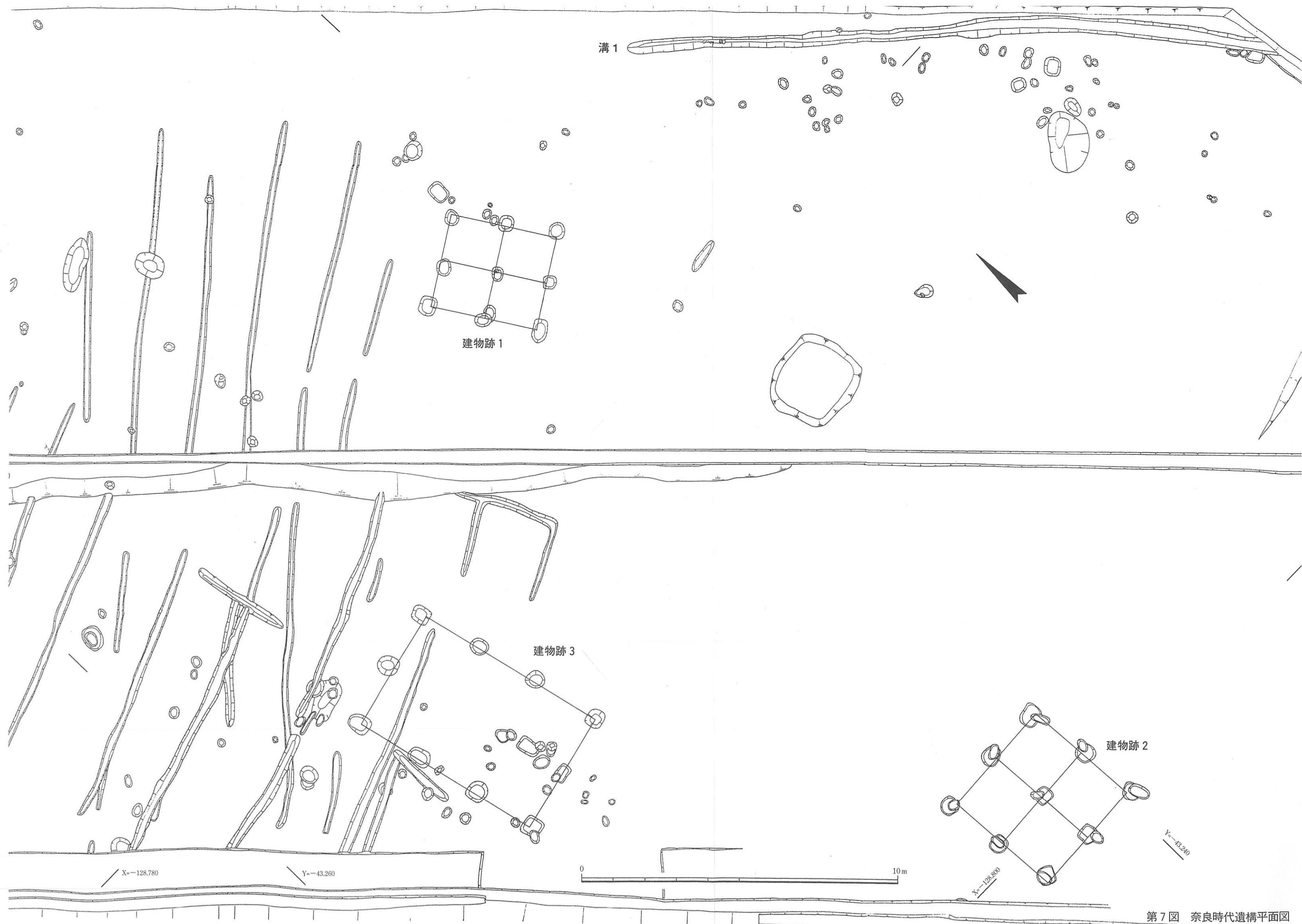
建物跡5はB調査区で検出した。2間×3間の南北棟である。柱間寸法は梁間が1.9m、桁行が2.0m等間で、北で東に7度振れる。建物4と切り合う。



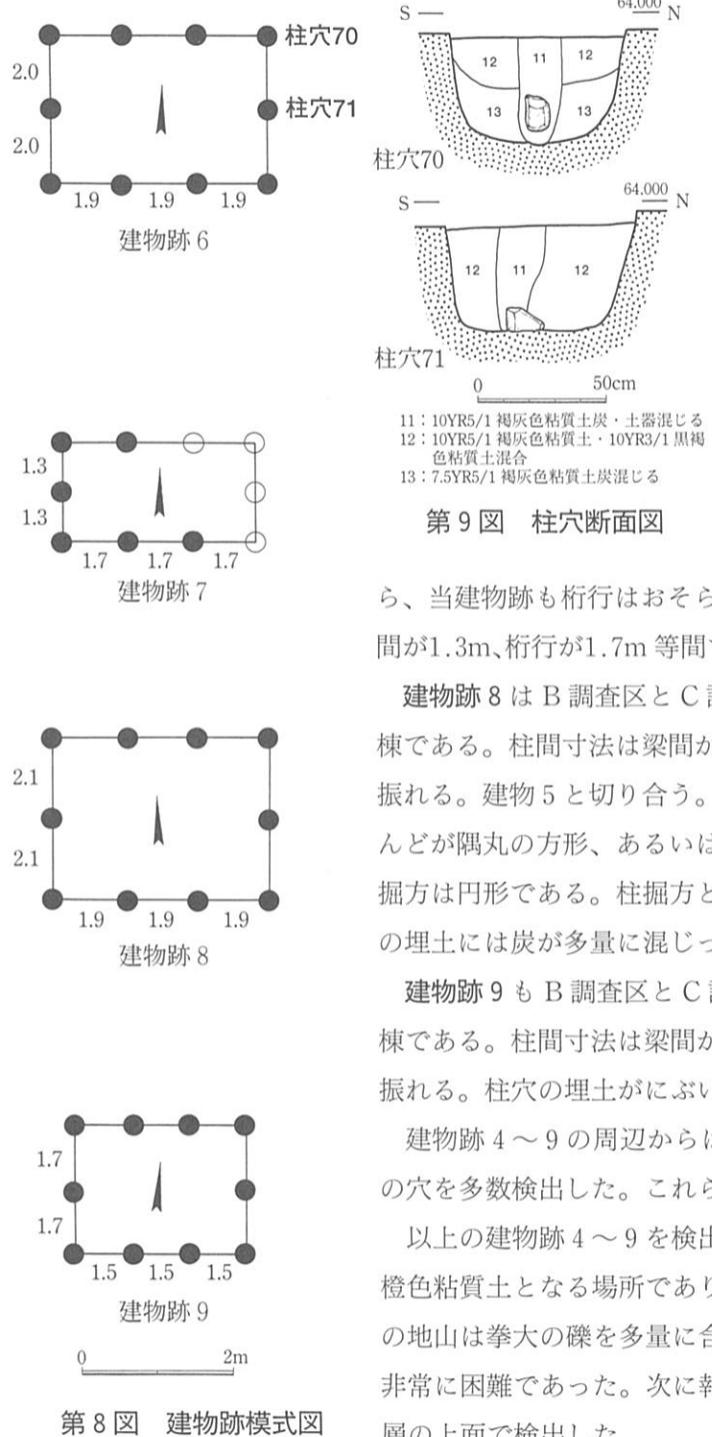
第5図 柱穴断面図

第6図 建物跡模式図





第7図 奈良時代遺構平面図



第9図 柱穴断面図

建物跡 6 は B 調査区で検出した。2間×3間の東西棟である。柱間寸法は梁間が2.0m、桁行が1.9m等間で、北で西に3度振れる。東の妻柱筋では柱の抜取り痕跡が明瞭に残る。また、柱掘方の底に礎石を据える柱穴がある。

建物跡 7 は B 調査区で検出した。梁間が2間の東西棟である。西の妻を検出しているが、東の妻は調査区外のため検出していない。桁行は2間分を検出した。建物跡 4 と同じく、検出したほかの建物跡の桁行が3間まででおさまることか

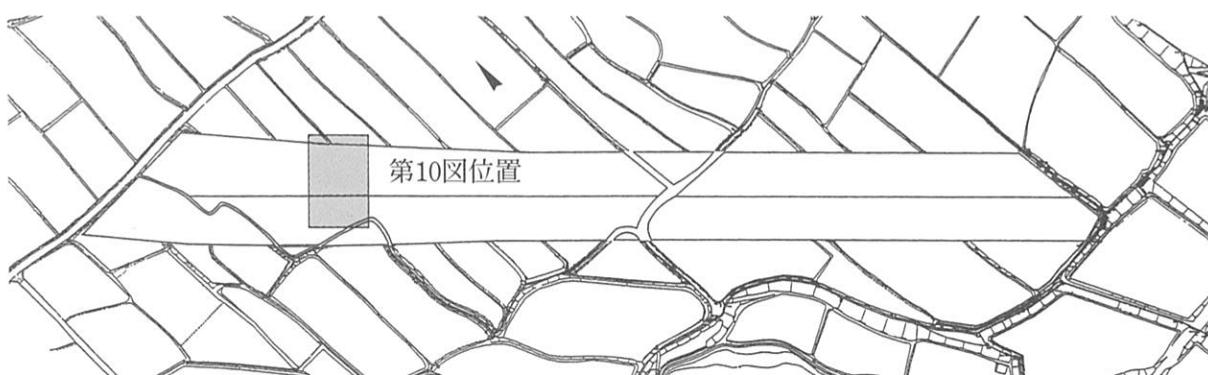
ら、当建物跡も桁行はおそらく3間であると考えられる。柱間寸法は梁間が1.3m、桁行が1.7m等間で、北で西に1度振れる。建物 4 と切り合う。

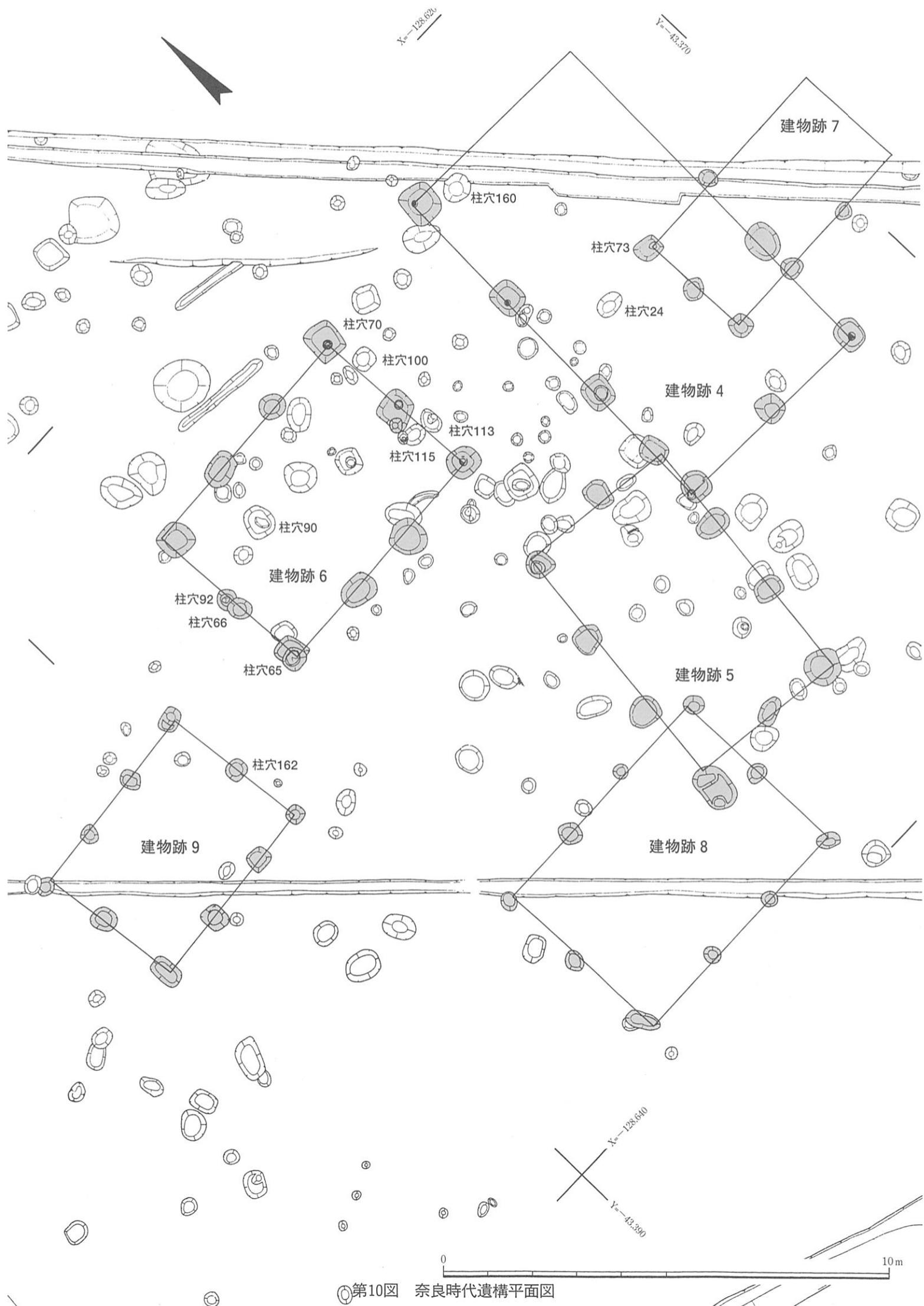
建物跡 8 は B 調査区と C 調査区との境で検出した。2間×3間の東西棟である。柱間寸法は梁間が2.1m、桁行が1.9m等間で、北で西に1度振れる。建物 5 と切り合う。これまで報告した建物跡の柱掘方は、ほとんどが隅丸の方形、あるいは長方形であったのに対して、当建物跡の柱掘方は円形である。柱掘方と抜取り穴との区別は困難であったが、柱穴の埋土には炭が多量に混じっており、検出が容易であった。

建物跡 9 も B 調査区と C 調査区との境で検出した。2間×3間の東西棟である。柱間寸法は梁間が1.7m、桁行が1.5m等間で、北で西に5度振れる。柱穴の埋土がにぶい黄橙色粘土であることを特徴とする。

建物跡 4～9 の周辺からは、直径15cm程度から柱掘方と同規模程度の穴を多数検出した。これらは建物跡としてはまとまらない。

以上の建物跡 4～9 を検出した範囲は、ちょうど地山が灰褐～にぶい橙色粘質土となる場所であり、遺構検出が容易であったが、これより西の地山は拳大の礫を多量に含む暗赤灰色粘質土となるため、遺構検出が非常に困難であった。次に報告する建物跡10～13、および塙跡はその礫層の上面で検出した。





○第10図 奈良時代遺構平面図

建物跡10から13は南北に並ぶ一連の建物跡である。4棟は東側柱筋を揃え、北で東に5度振れる。ただし北側の建物跡10～12はB・Dの2調査区に別れて検出したため、建物のまとめ方を現地で詳細に検討できなかった。したがって、本書では建物の復原案として以下のA～Cの3案を提示することとする（第12図）。

A案 建物跡10・11は2間×2間の建物跡で、建物跡12が2間×3間の総柱建ちの倉庫跡とする案である。建物跡10は東西に、建物跡11は南北にやや長く、柱間寸法は、建物跡10が東西2.0m、南北1.6m等間、建物跡11が東西1.9m、南北2.4m等間である。ただし、両者とも柱穴が1箇所ずつ未検出である。両者は2.4m隔てる。建物跡12は建物跡11から南に3.0m隔てた南北3間、東西2間の総柱建ちの倉庫跡である。柱間寸法は、南北1.7m、東西2.1m等間である。

B案 建物跡12はA案と同じ総柱建ちの倉庫跡で、建物跡10と11を1つの建物としてまとめる案である。ただし、A案では建物跡10の西側柱筋の1つと考えていた柱穴をB案では柱穴と認識せず、梁間2間、桁行4間の南北棟とする。柱間寸法は、梁間が2.0m等間で、桁行が北から3.2m、2.4m、2.4m、2.4mとなる。北の1間目と2間目に間仕切りの柱が建つ。

C案 建物跡10はA案と同じ東西にやや長い2間×2間の建物跡で、建物跡11が2間×3間の南北棟、建物跡12が2間×2間の総柱建ちの倉庫跡とする案である。柱間寸法は、建物跡12が東西2.1m、南北1.7m等間で、建物跡11は梁間が2.0m等間、桁行は北から2.4m、2.4m、3.0mと南の1間のみが広い。建物跡11と建物跡12とは1.7m隔てる。

A・C案とも、建物跡10は更に東に1間分伸び、2間×3間の東西棟と復原することもできるが、建物跡10から13の東側柱筋が揃っていることから、2間×3間とはせず、2間×2間でまとめた。

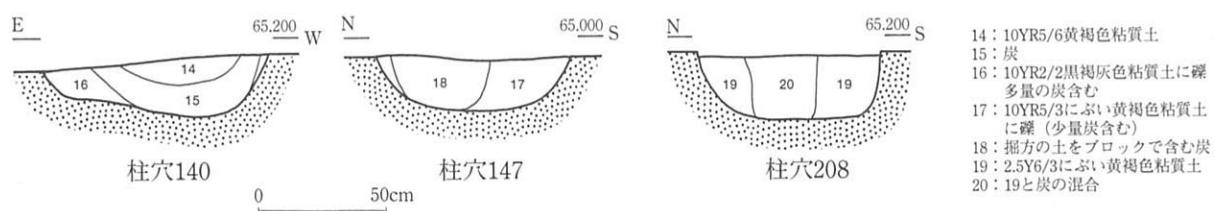
B案の場合、西側柱筋に若干のずれがあったA案の建物跡10と建物跡11を無理に1棟にまとめたため、その分柱の並びがやや不自然となった。また桁行の最も北の1間分の柱間がほかの3間とは異なることになる。

C案も同様に、A・B案では2間で4.2mあった建物跡12の北側柱筋を、梁間2間で4.0mの建物跡11としてまとめたため、西南隅の柱穴が若干西にずれる。また桁行の最も南の1間分の柱間が北の2間とは異なることとなる。さらに南の倉庫跡建物跡12とがあまりにも接近しすぎとなる。

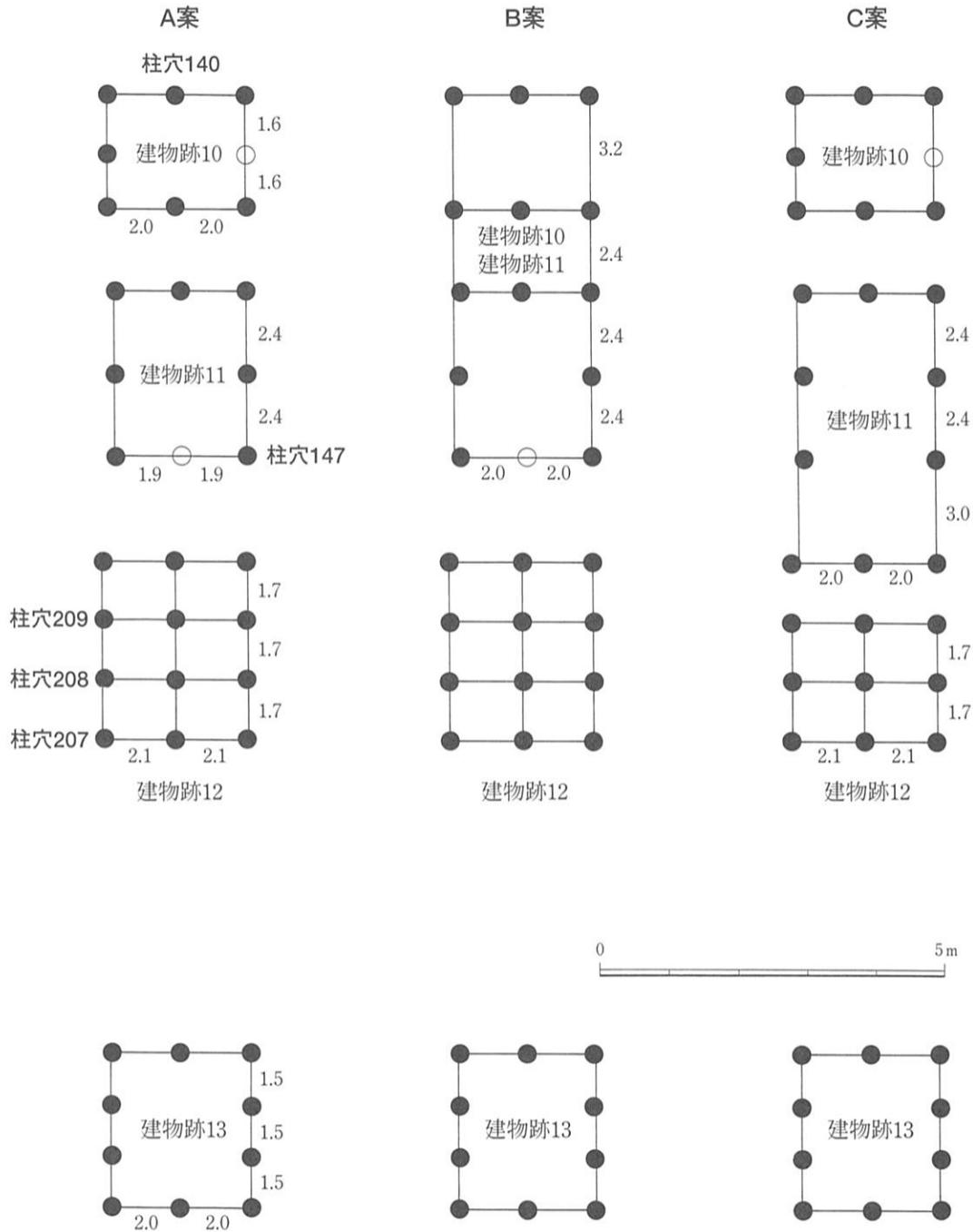
柱の掘方および抜き取り穴の堆積状況からも、建物跡12の総柱建ちの倉庫跡は南北3間、東西2間であったことが窺える。建物跡10・11はそれぞれ1箇所ずつの柱穴が検出できなかったものの、A案の建物復原案が最も妥当と思われる。

建物跡13は建物跡10～13と東側柱筋を揃え、振れも同じくする一連の建物跡のうちの1つである。建物跡12から南に9.0m隔てた2間×3間の南北棟で、柱間寸法は梁間が2.0m、桁行1.5m等間である。

以上の建物跡10から13は、柱抜き取り穴の中に多量の炭が入ることを特徴とする。遺構検出にはその炭が唯一の手掛かりとなった。



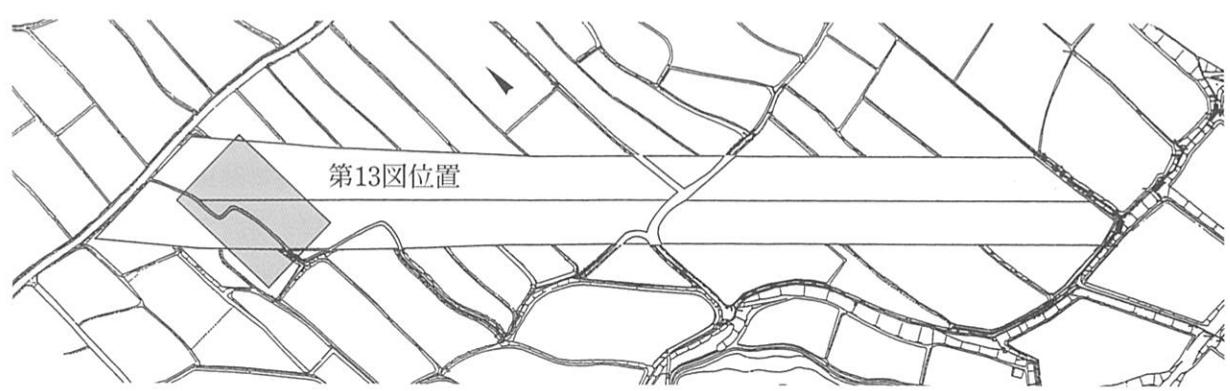
第11図 柱穴断面図



第12図 奈良時代建物跡復原模式図

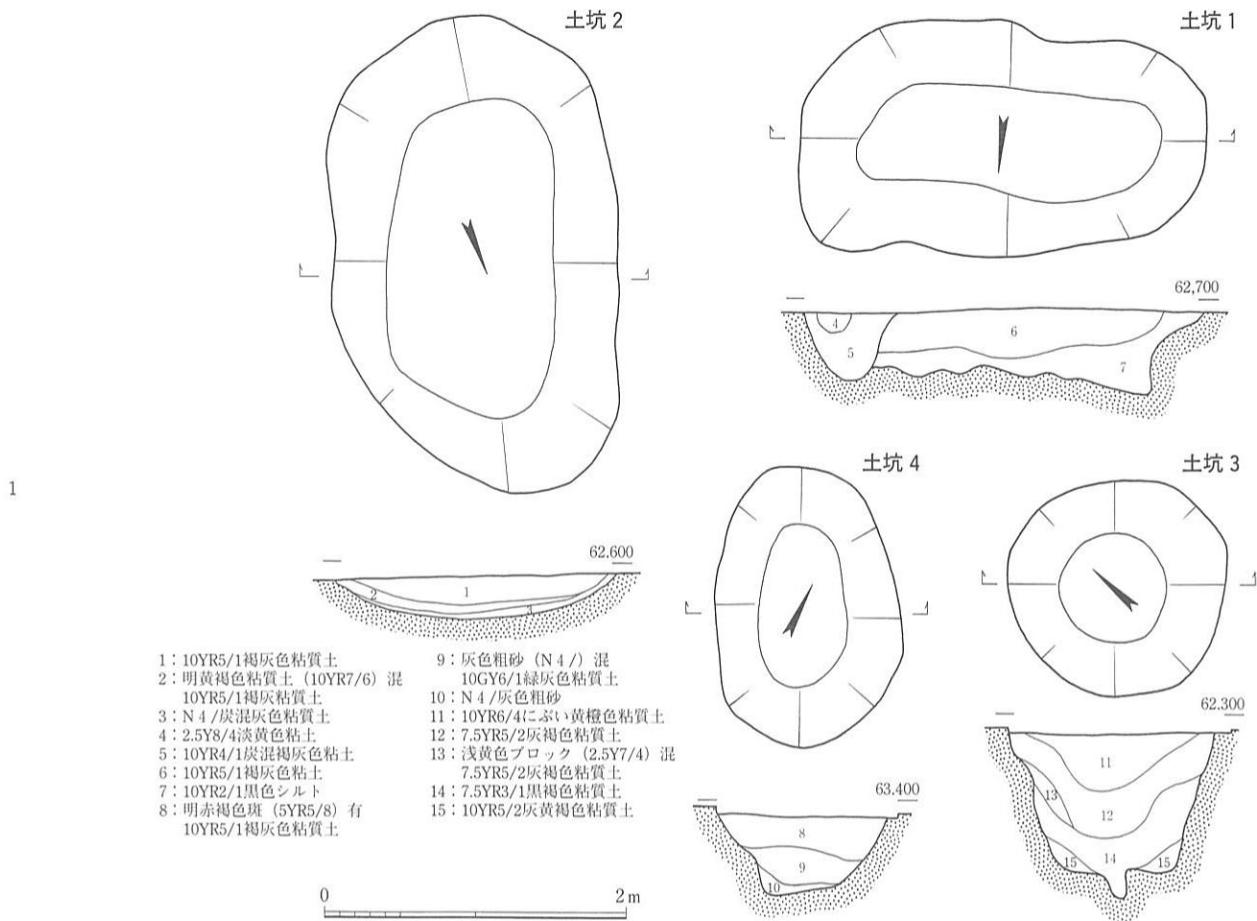
堀跡は建物跡10～13の西で検出した。建物跡10～13とは約14.5m 隔てる南北の一本柱塙である。北で東に1度振れる。8間分を検出したが、柱間寸法は0.9～1.9mと揃っていない。総延長は11mである。柱穴の規模が小さかったため、柱掘方と抜取り穴との区別は困難であったが、建物跡10～13と同じく、柱穴の埋土に炭が混入している。建物跡10～13と同時期の塙であったことが窺える。この塙跡以西には奈良時代の遺構が広がらないことから、この塙が北群集落域の西を限る施設であったことが推定できる。

北群一帯を覆う褐色礫層中、及び柱穴の埋土中からは、土師器・須恵器のほか、多くの製塩土器片が出土した。





第13図 奈良時代遺構平面図



第14図 中世土坑平面・断面図

<中世>

奈良時代の遺構と同一面で、溝・土坑・小穴多数を検出した（第17図）。

各遺構は南端部の国土座標 $X = -128.790$ 以南と、 $X = -128.620$ から $X = -128.670$ の間を除く広範囲にに広がる。

溝は A・C 区の南半の国土座標 $X = -128.760$ から $X = -128.790$ の範囲でまとめて検出した。2 ~ 3 m の間隔で南西から北東方向にむかって規則的に掘られており、調査区を斜めに横断する。この方向は、南から延びる丘陵に規制されたためと思われる。溝の方向には 2 種類がある。1 つは東で北に約 20 度振れる溝、1 つは東で北に約 40 度振れる溝である。両者は国土座標 $Y = -43.253$ 付近を境に西が前者、東が後者となる。溝はほぼ垂直に掘込まれており、溝底には鋤跡が明瞭に残るものがある。深さは深いもので約 25cm を測る。

土坑は 17 基を検出した。主なものを第14図に示した。

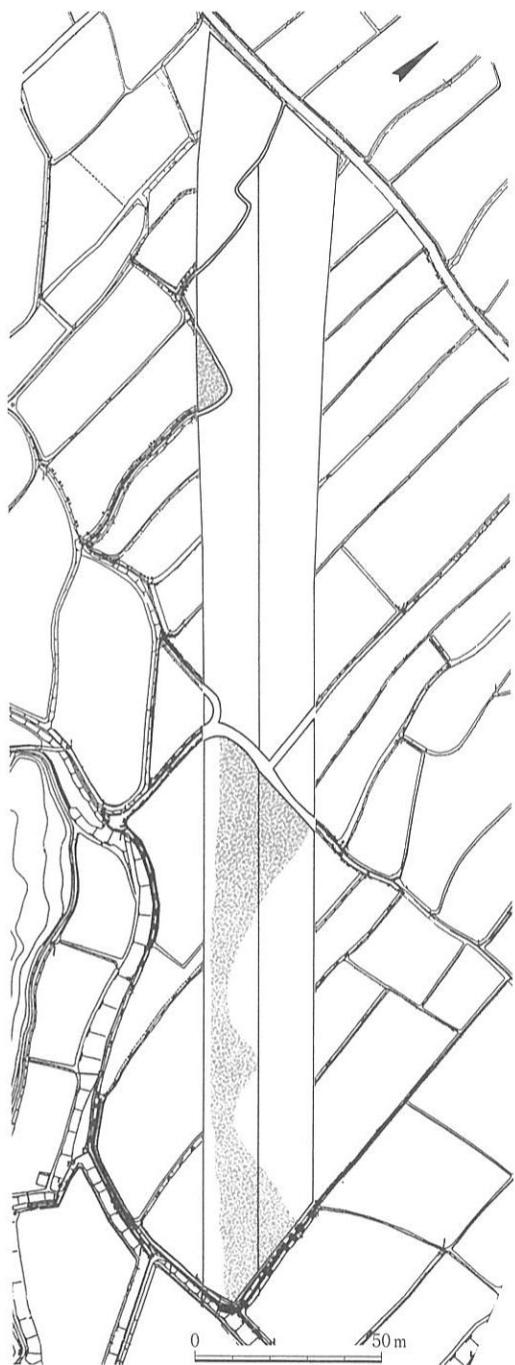
土坑 1 は A 区で検出した。平面形が長辺 2.7m、短辺 1.6m の橢円形で、深さが 0.55m を測る。

土坑 2 も A 区で検出した。長辺 3.15m、短辺 1.9m の橢円形の平面で、深さが 0.3m。

土坑 3 は C 区で検出した。直径約 1.4m の円形の平面で、深さ 1.1m。

土坑 4 も C 区で検出した。長辺 1.85m、短辺 1.25m の橢円形の平面で、深さ 0.6m である。

このうち土坑 3 は井戸の可能性が高い。また第14図の断面図には載せていないが、D 調査区南端部で検出した土坑 5 も井戸の可能性がある（袋綴じ図面）。



第15図 近世以降小畦畔検出範囲

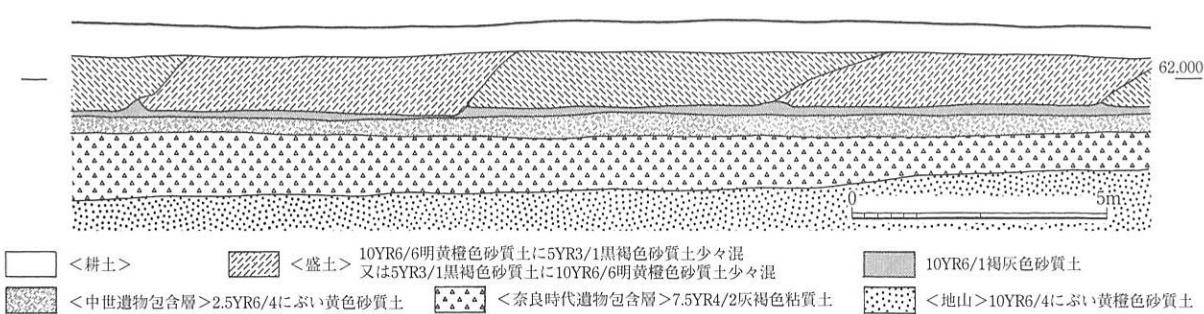
小穴群は東西南北の方位を無視して、広範囲に不規則に広がる。直径10~50cm、深さ20~30cm程度の円形や橢円形の小穴である。建物跡として認識できるものはない。小穴の埋土は2.5Y6/3にぶい黄色粘質土であり、炭の小粒が含まれているものが多い。

<近世以降>

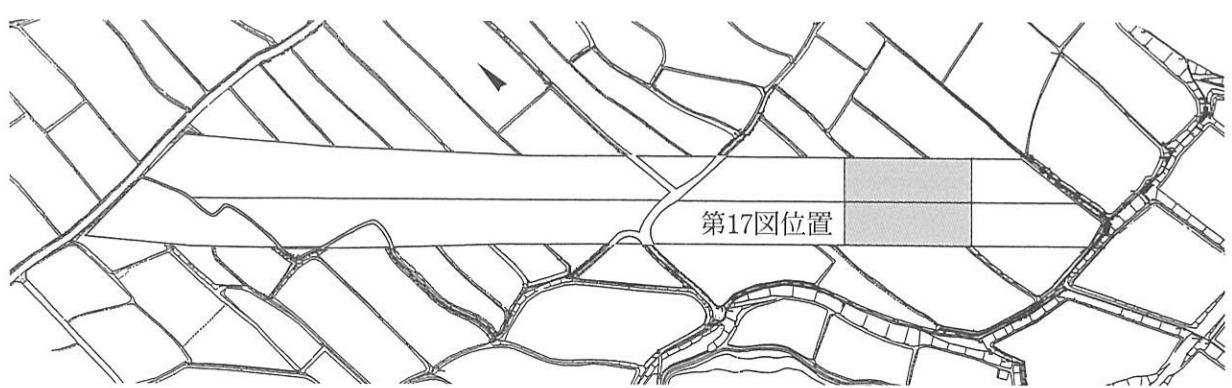
A・C・D調査区の一部で小畦畔を数条検出した（第15図）。試掘調査では平面検出を行ったが、本調査では機械掘削で除去したため、平面検出は行っておらず、壁面の観察にとどまった（第16図）。

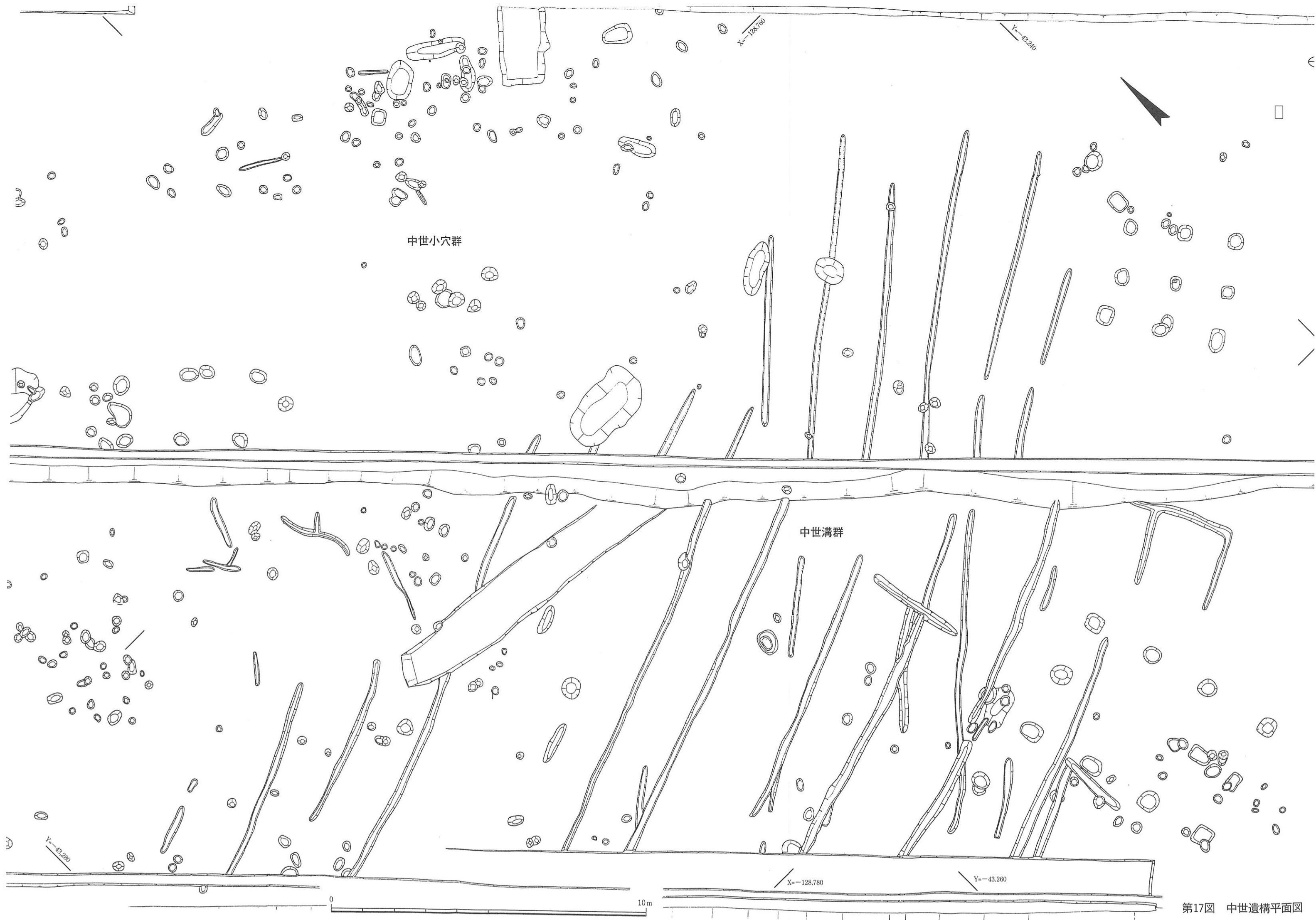
畦畔は中世の遺物包含層であるにぶい黄色砂質土上に堆積する薄い灰色砂質土が1.3~2.0mの間隔に盛り上がったものである。幅10~20cm、高さ5~10cm程度の畦畔で、ほぼ国土座標の南北を向く。この上層には明黄橙色砂質土に黒褐色砂質土が少々混じる土と、黒褐色砂質土に明黄橙色砂質土が少々混じる土が、畦畔に向かって西から斜めに規則正しく交互に堆積する。この堆積は耕作地を嵩上げするための盛り土である。小畦畔は盛り土工事を行うための基準畦畔と考えられる。

灰色砂質土を除去した面から、染め付け陶器の小片が出土した。



第16図 近世以降小畦畔断面図





第17図 中世遺構平面図

第3節 遺物

庄田遺跡からは、コンテナ（35×54×15cm）に60箱の遺物が出土した。大半は、奈良時代の遺構・包含層出土の土器である。量としては、遺構・包含層出土の中世土器がそれに続いている。他に、旧石器時代の石器、縄文時代の石器・土器、弥生時代・古墳時代の土器なども少量出土しているが、現位置を保って出土したものではなく、二次的堆積層内出土のものである。出土遺物の主要なものは、長さ3分の1の大きさで挿図に掲載し、すべて写真図版に掲載した。法量や出土遺構・層位などの詳細なデータは、遺物観察表（第1表）を参照されたい。

第18図には、建物3～12出土土器を図示した。1・2は、建物3出土土器で、奈良時代の須恵器蓋・坏である。3～6は、建物4出土土器で、奈良時代の土師器甕・高台付き椀・大型坏・須恵器坏である。7～10は、建物5出土土器で、奈良時代の土師器甕・須恵器蓋・坏である。11～15は、建物6出土土器で、奈良時代の土師器蓋・椀・皿・須恵器坏である。13は、口縁端に煤・タールが黒く付着しており、灯明皿に使用されていたことが分かる。16～18は、建物7・9・10出土土器で、奈良時代の土師器皿・須恵器蓋・外面刷毛目の土師器大型甕である。19・20は、建物11出土土器で、奈良時代の外面刷毛目の土師器鍋・内面に暗文のある大皿である。21・22は、建物12出土土器で、奈良時代の外面刷毛目の土師器小形甕・須恵器坏である。

第19図には、A～D区の遺構出土土器を図示した。1は、調査区東端で検出された奈良時代の須恵器壺である。2～21は、B区で検出された建物跡以外の穴出土土器である。すべて奈良時代のものであった。中で、かえりのある径19.5cmに達する大型の平たい須恵器蓋（第19図3）が珍しかった。22～25は、C区で検出された溝出土土器である。溝9出土の須恵器坏身（22）は、古墳時代後期のものである。溝7・溝10出土の須恵器蓋・坏（23・24）は、奈良時代のものである。スキ溝出土の土師器坏（25）は、鎌倉時代のものである。26は、D区溝23出土土器である。この奈良時代の坏は、内面に蛇がとぐろを巻くように、細い粘土紐が右廻りにとぐろを巻いており、須恵器坏の作り方がよく分かる例であった。

第20図以降は、A～D区の各層ごとの土器を図示した。

(A区) A区の上層である1層出土土器が第20図1～15である。奈良時代の須恵器が多いが（1～8）、平安時代の土師器椀（9）、鎌倉時代の土師器小皿（10）、平安～鎌倉時代の和泉型の瓦器椀（12・13）、東播ねり鉢（14）、常滑焼大甕（15）が含まれていた。

A区の中層である2層出土土器が第20図16～30、第21図1～9である。奈良時代の須恵器が多いが（第20図17～30）、弥生後期の甕（16）も含まれていた。他には、奈良時代の綠釉皿（第21図1）、平安末期の白磁椀（2～4）、「吉」と見込み部に陰刻された鎌倉時代の青磁碗（5）、土師器の三足鍋脚部（6）、外面刷毛目の土師器大型甕（7）、把手（8）、移動式かまど片（9）などがあった。

A区の下層である3層出土土器が、第21図10～16である。すべて奈良時代の須恵器で、坏（14）裏面には墨書があった。高台部がはずれた坏（16）の見込み部には、ヘラによる刻線文様が描かれていた。

A区の最上層である耕土層中には、鎌倉時代の青磁碗片（第21図17・18）が含まれていた。また、A区耕土中からは、奈良時代の須恵器（19～22）、土師器（23）、平安末期の和泉型瓦器椀（25）、鎌倉時代の土師器羽釜（24）などが採集された。

(B区) B区の上層である1層出土土器が第22図1～21である。奈良時代の須恵器（1～12）、土師器（13～15）が多いが、灰釉陶器皿（16）、綠釉陶器皿（17）もある。他には、鎌倉時代の東播ねり鉢（18～20）、

飴釉天目茶碗（21）などがあった。

B 区の中層である 2 層出土土器が第22図22～38である。奈良時代の須恵器（1～32）が多い。須恵器坏の底裏にヘラ描波状文を施したもの（26）が珍しかった。他には、外面に櫛描波状文や突帯をもった古墳時代後期の須恵器甕口縁部片（33）や平安時代の土師器小皿（34）、鎌倉時代の土師器小皿（35）、三足鍋脚部片（36）、青磁壺（37）、皿（38）などがあった。

B 区の下層である 3 層出土土器が第23図 1～18である。奈良時代の須恵器（1～11）、土師器（13～17）がほとんどだが、中には、弥生後期の鉢（12）や鎌倉時代の土師器小皿（18）なども混在していた。蓋上面に墨書で円弧のような文様を描いた須恵器蓋（2）が珍しかった。

B 区の最下層である 4 層出土土器が第23図19・20である。生駒西麓産と推定される黒褐色をした縄文後期鉢底部片（19）と、割れ口断面がセピア色で、極めて堅緻に焼成された古墳時代中期の須恵器甕口縁部片（20）である。共に単独で出土したものである。

B 区の最上層である耕土層中には、鎌倉時代の瓦器三足鍋の脚部片（21）が含まれていた。また B 区排土中からは、奈良時代の須恵器蓋（22・23）や奈良～平安時代の緑釉陶器壺（24）、皿（25）や糸切り痕のある須恵器壺（26）や鎌倉時代の土師器三足鍋脚部片（27）などが採集された。

(C 区) C 区の上層である 1 層出土土器が第24図 1～6 である。奈良時代の須恵器杯（1～3）と、鎌倉時代の東播ねり鉢（4）、草花文を蓋上面に描いた青白磁合子蓋（5）、瓦器椀（6）などがあった。

C 区の中層である 2 層出土土器が第24図 7～31 である。奈良時代の須恵器・土師器が多いが（7～21）、平安～鎌倉時代の土器も多い（22～31）。奈良時代の須恵器蓋（7～11）の中には、9 のように口縁端部内面にかえりをもつものがあって、飛鳥時代のものである可能性もあった。19は須恵器小鉢であるが、口縁端部内面、一段下がった所に剥離箇所があり、かえり状のものが付いていた様子である。22は土師器小皿、23は土師器羽釜、24・25は瓦器椀、26は蓮弁文様の青磁碗、27は白磁碗、28～31は東播ねり鉢である。

C 区の下層である 3 層出土土器が第25図 1～25 である。3 層からは、多数の奈良時代の須恵器・土師器が出土した。須恵器蓋には、やはりかえりをもつもの（2・3）が混じっている。7 は、蓋上面に段がつく蓋である。須恵器杯（8～13）の中には、見込み部に整形時の調整が雑で、細い粘土紐のとぐろが伺えるもの（8）や、底裏に爪痕を連続して残すもの（10）などがあった。須恵器壺（14～21）の中には、底部外面にザルの圧痕を残す珍しい例（21）もあった。土師器甕（22）は、外面に刷毛目を縦方向に施し、内面も部分的に刷毛目調整し、黒斑付きの恐らく丸底長胴の甕である。なお、3 層中には、ごく少量の楠葉型瓦器椀（24）や東播ねり鉢（23）などの中世土器、生駒西麓産の弥生後期の壺（25）なども混じっていた。

C 区の最下層である 4 層・5 層出土土器が第26図 1～9、10～17 である。主として、試掘トレーンチで丁寧に遺物が分層して取り上げられたもので、最下層の内容がより純粹化されたものである。結果的には、4 層・5 層も共に奈良時代の遺物包含層であった。

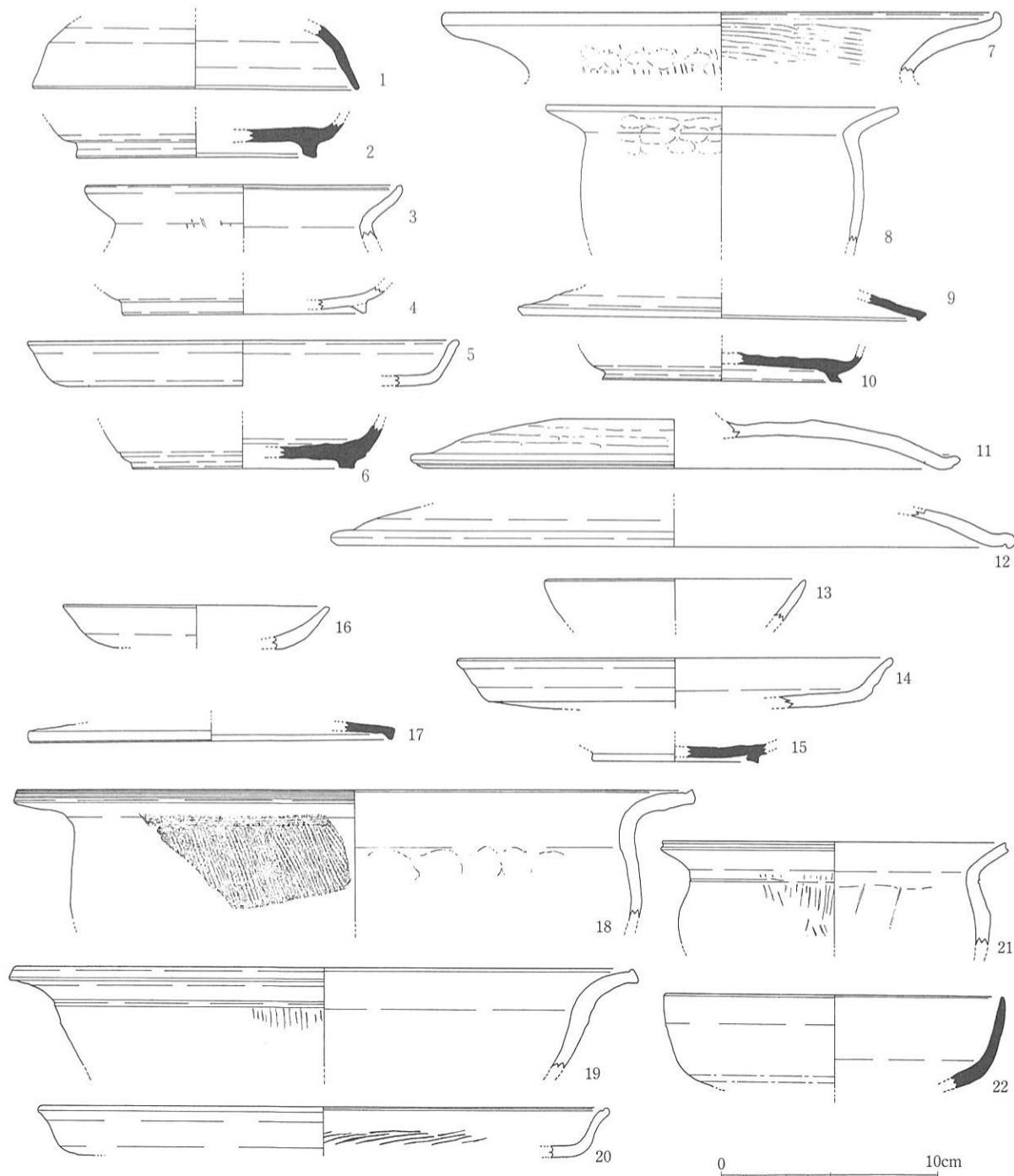
4 層出土土器には、須恵器蓋（1・2）、坏（3～5）、壺（6～8）、外面に刷毛目の施された土師器把手付き鍋（9）などがあった。

5 層出土土器には、須恵器杯（10～13）、壺（14）、鉢（15・16）、用途不明品（17）などがあった。16 は、口縁端部に蓋用の紐穴が焼成前に一対であけられているもので、灰色軟質、焼成不良で粗雑な感じのする須恵器であった。17は、極めて精良な粘土を使用し、堅緻に焼成された精巧な須恵器で、上端面

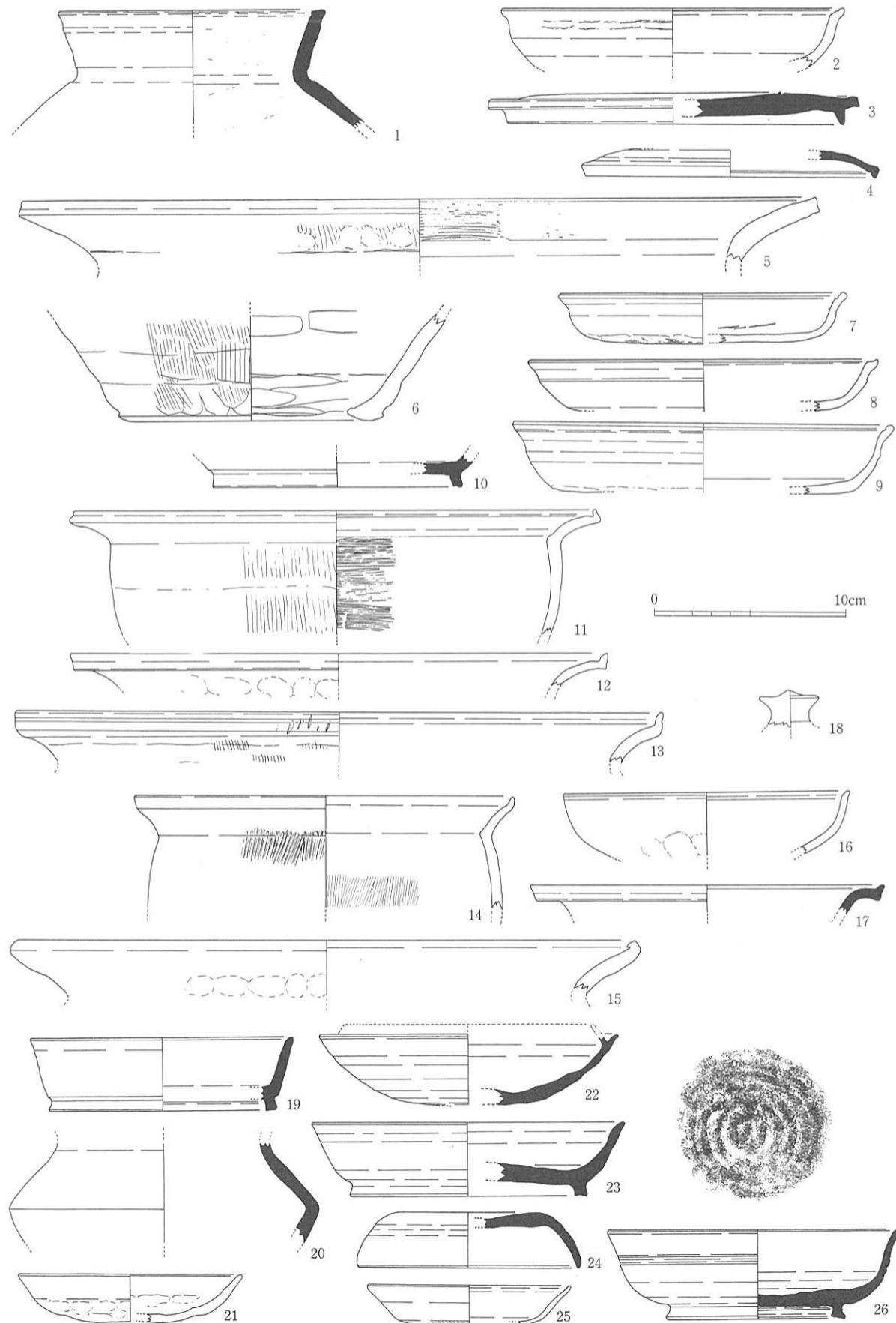
に焼成時の自然釉を受けているので、外面縦方向に壁のような仕切りをもつものであることが分かる。内面にも縦方向に何かが付着していた痕跡をもっている。旧の器形を推定できない用途不明須恵器である。

C 区の最下層である耕土層中には、奈良時代の須恵器坏 (18・19)、鎌倉時代の蓮弁文様の青磁碗 (20)などが含まれていた。また、C 区排土中からは、須恵器把手 (21)、坏 (22)、(23) などが採集された。

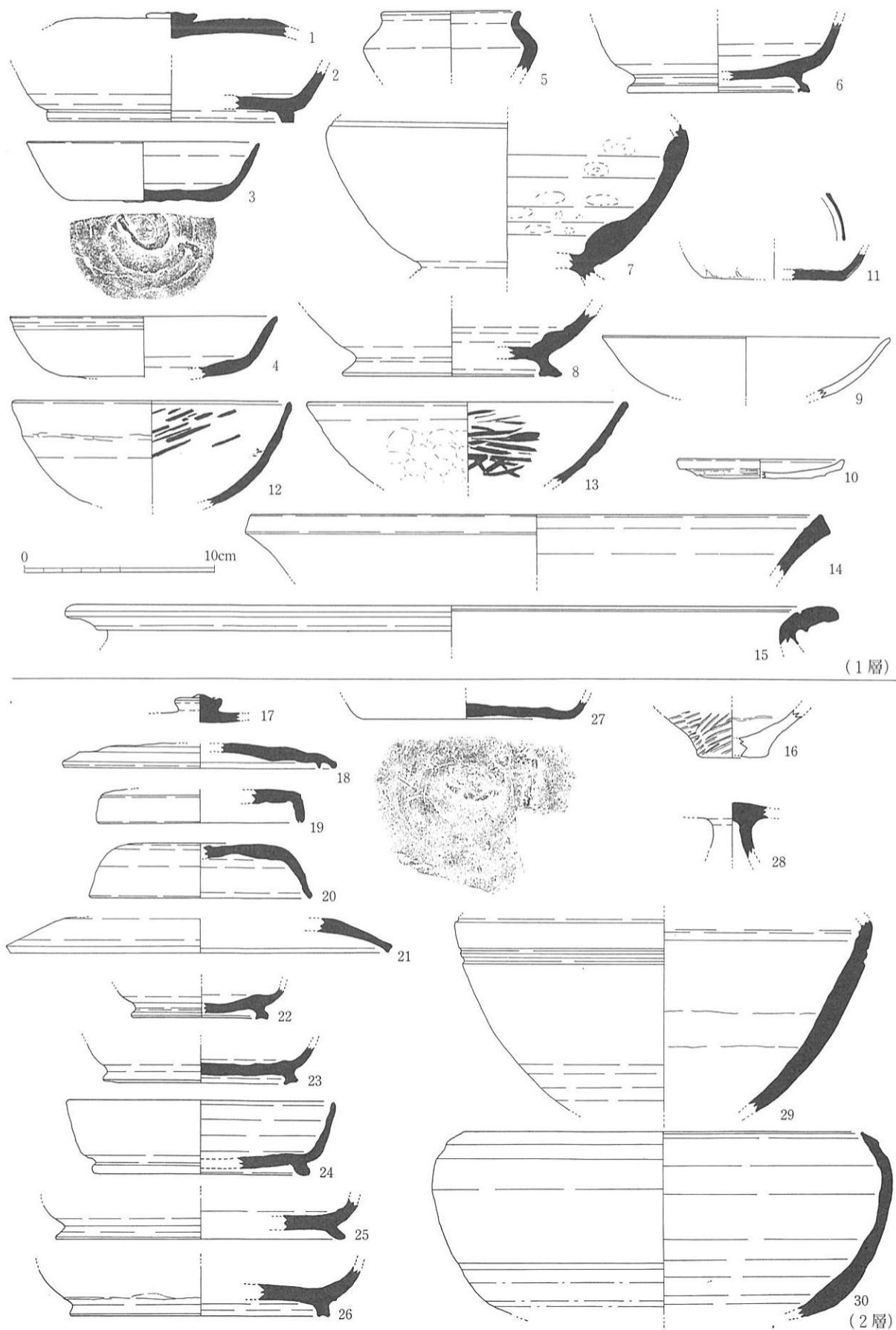
(D 区) D 区の上層である 1 層出土土器が、第27図 1～15である。外面に叩き目が施された弥生後期の甕が単独で 1 個体分検出されている (1)。蓋裏にヘラ描沈線が施された古墳中期の須恵器坏蓋 (2)



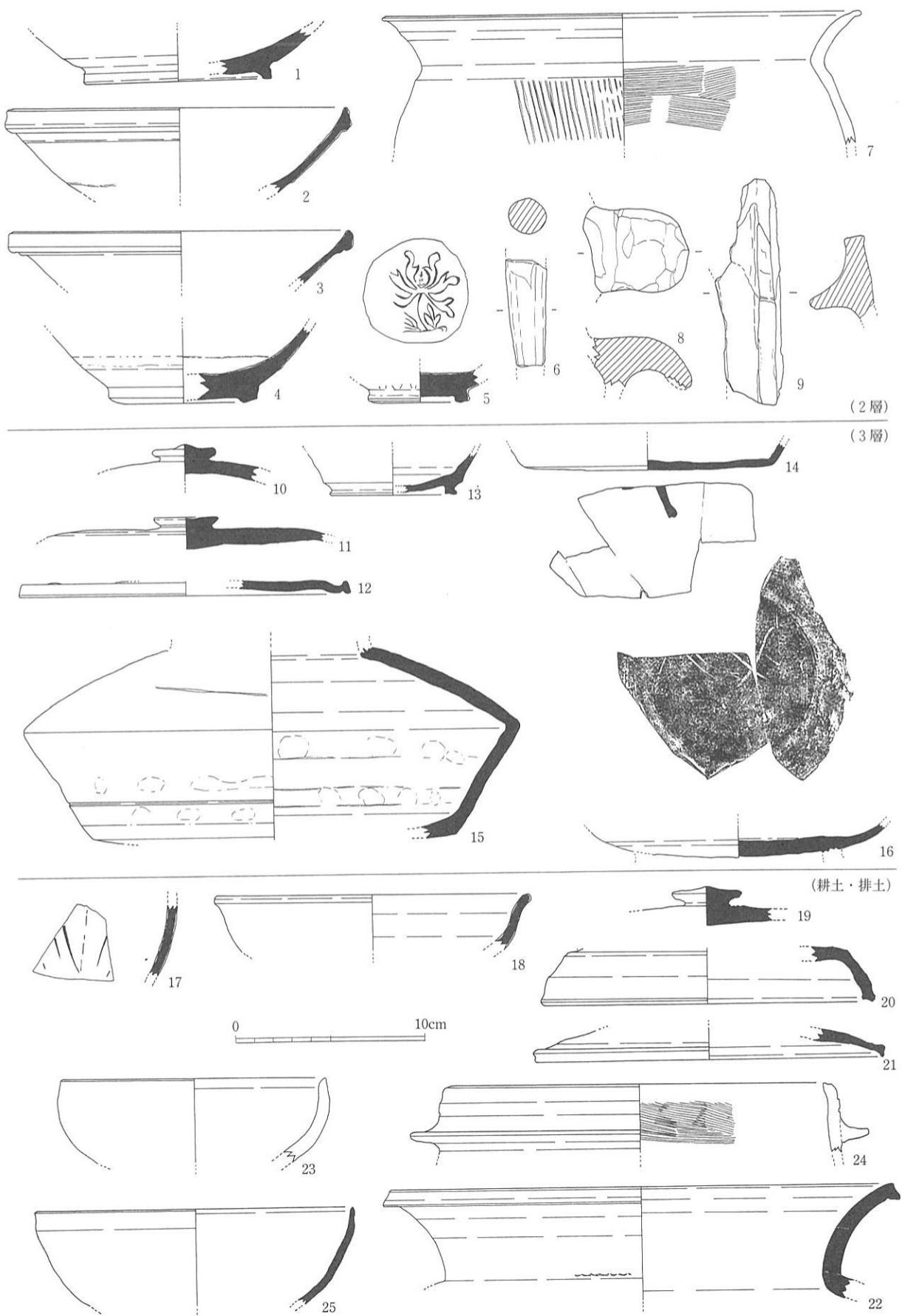
第18図 建物 3～12出土土器実測図 (1～22)



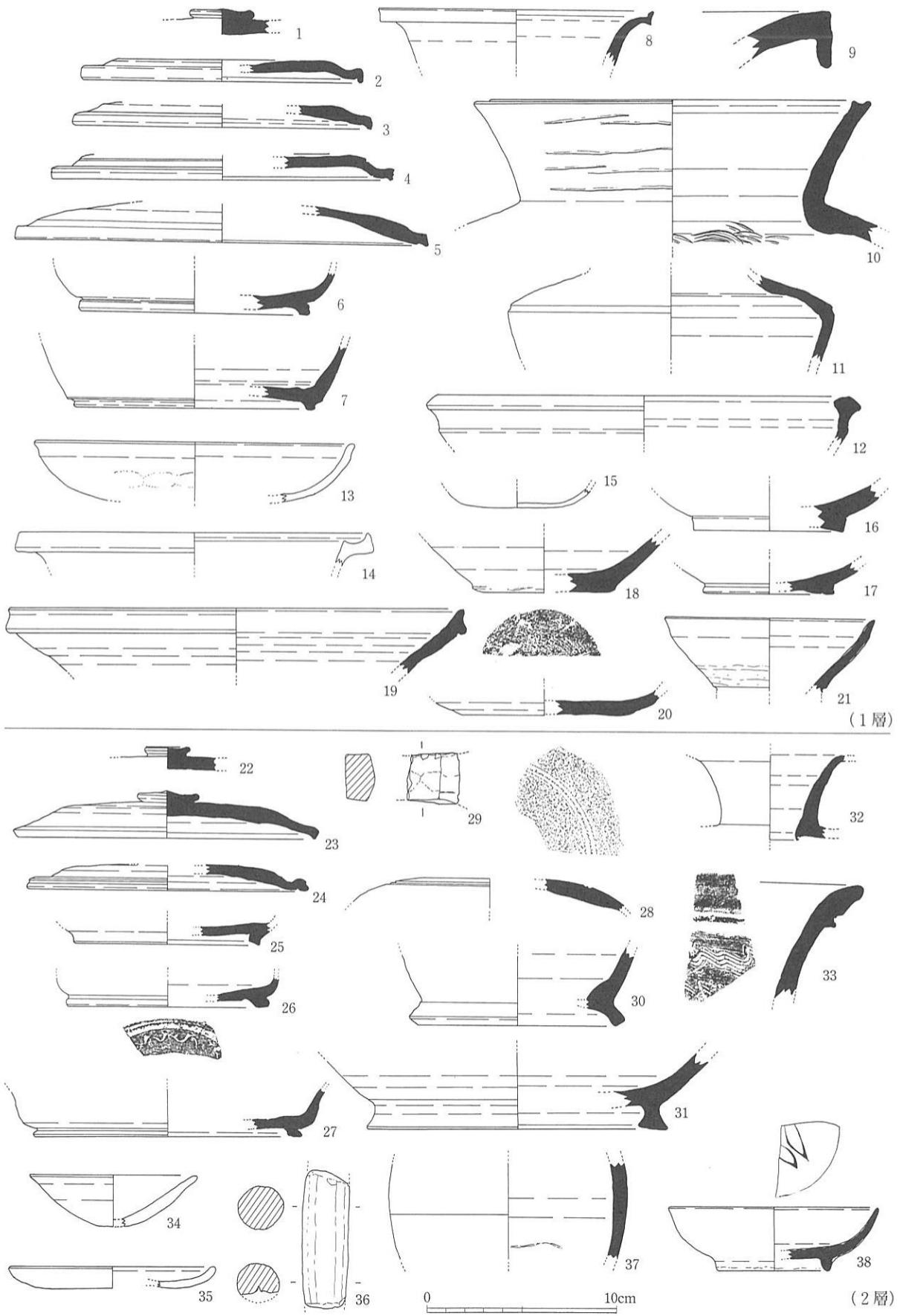
第19図 A～D区遺構出土土器実測図（1～26）



第20図 A区 1層 (1~15)、2層 (16~30) 出土土器実測図



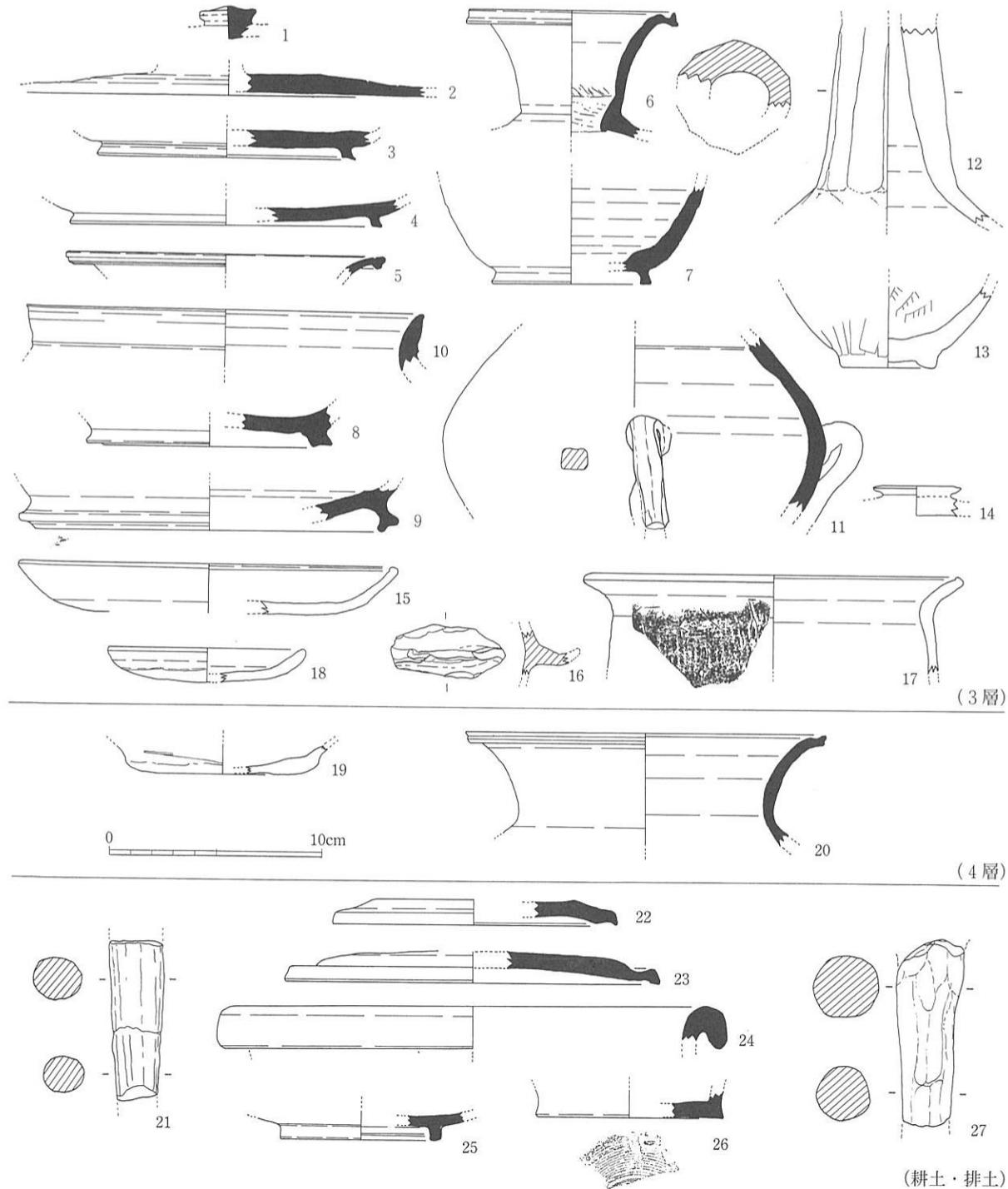
第21図 A区 2層 (1~9)、3層 (10~16)、耕土 (17・18)、排土 (19~25) 出土土器実測図



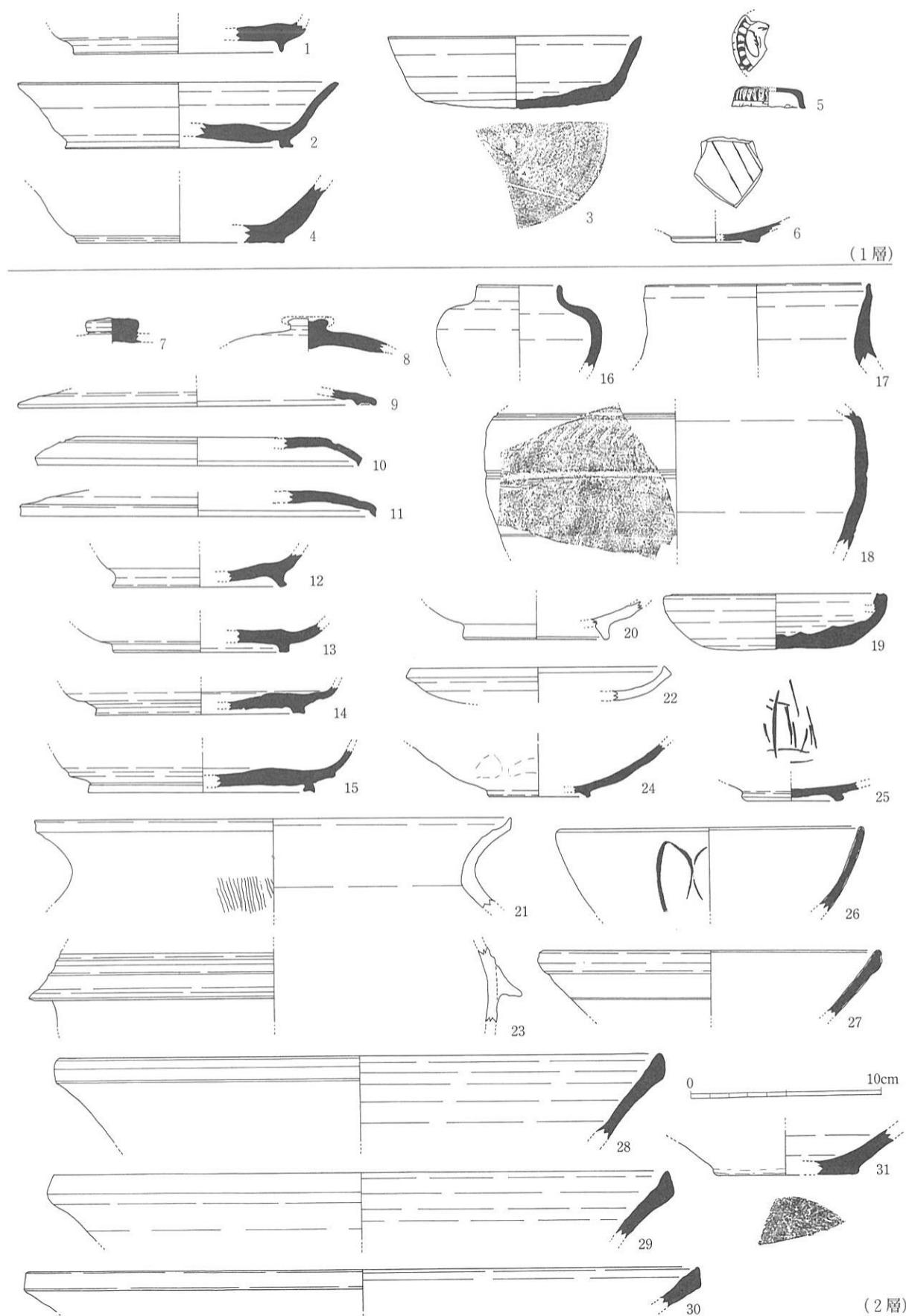
第22図 B区1層(1~21)、2層(22~38)出土土器実測図

も単独で検出された。他には、奈良時代の須恵器壺（3）や土師器甕（4）、高坏（5）、平安時代の土師器椀（6）、椀（7）、鎌倉時代の土師器小皿（8）、瓦器椀（9～11）、白磁皿・碗（12・13）、青磁碗（14）、東播ねり鉢（15）などがあった。

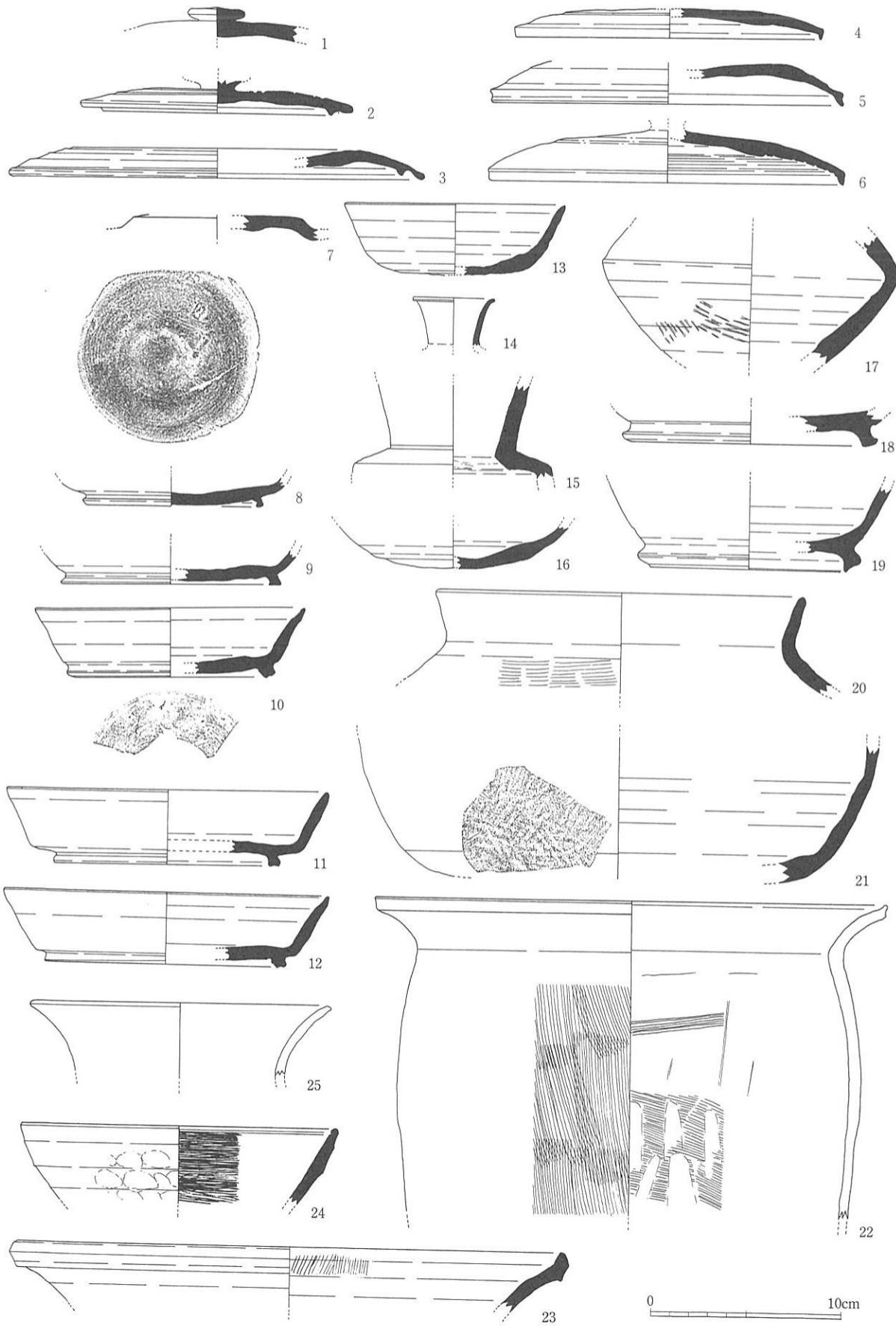
D区の中層である2層出土土器が、第27図16～28、第28図1～3である。表裏両面共貝殻条痕のある深鉢片（16）や、金雲母を多量に含んだ茶褐色胎土の上げ底になった底部片（17）は、縄文後期の土器片である。他には、奈良時代の須恵器蓋（18～20）、高坏（21）、緑釉陶器皿（22）、平安～鎌倉時代の瓦片である。



第23図 B区3層（1～18）、4層（19・20）、耕土（21）、耕土（22～27）出土土器実測図



第24図 C区1層(1~6)、2層(7~31)出土土器実測図

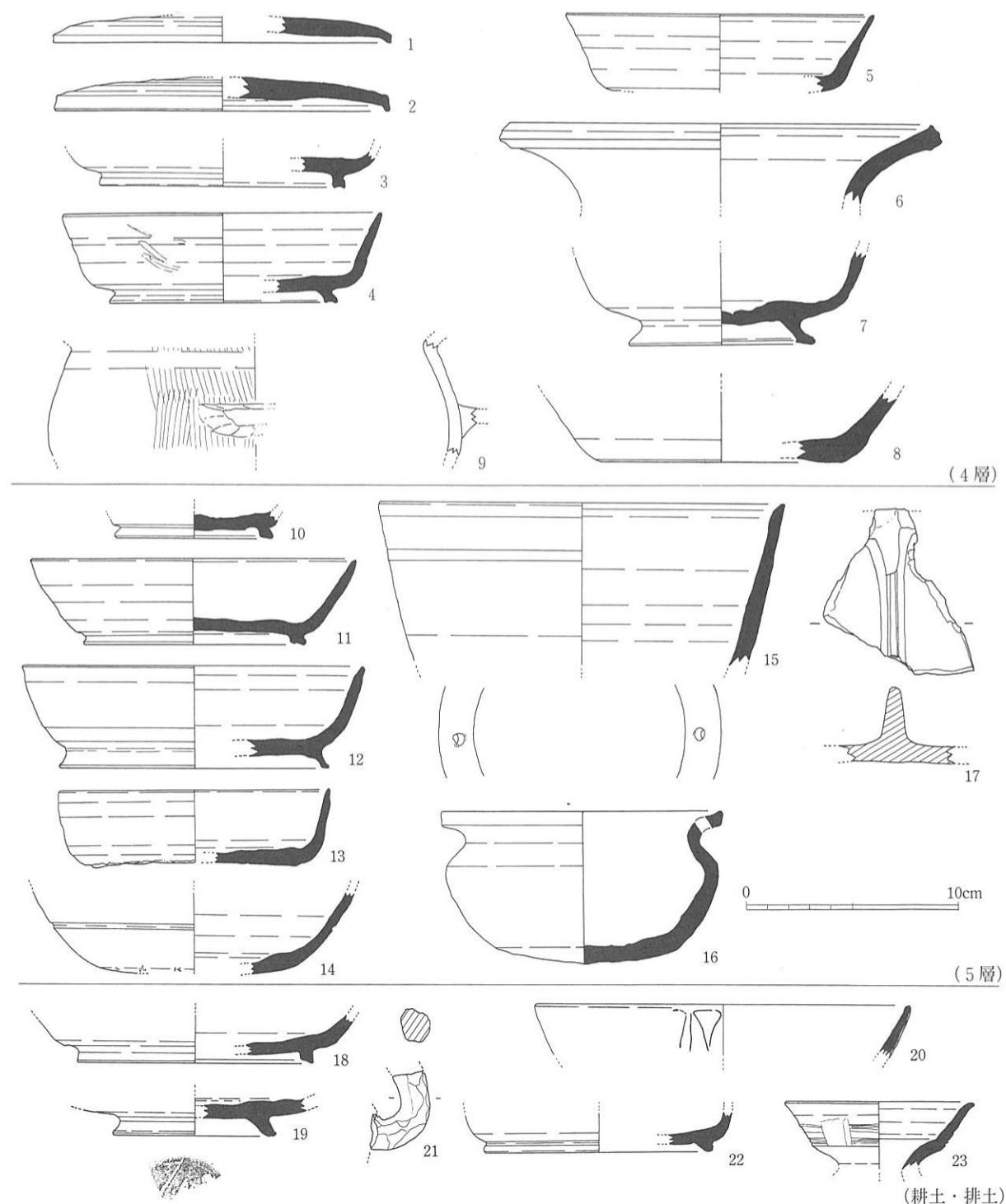


第25図 C区3層出土土器実測図（1～25）

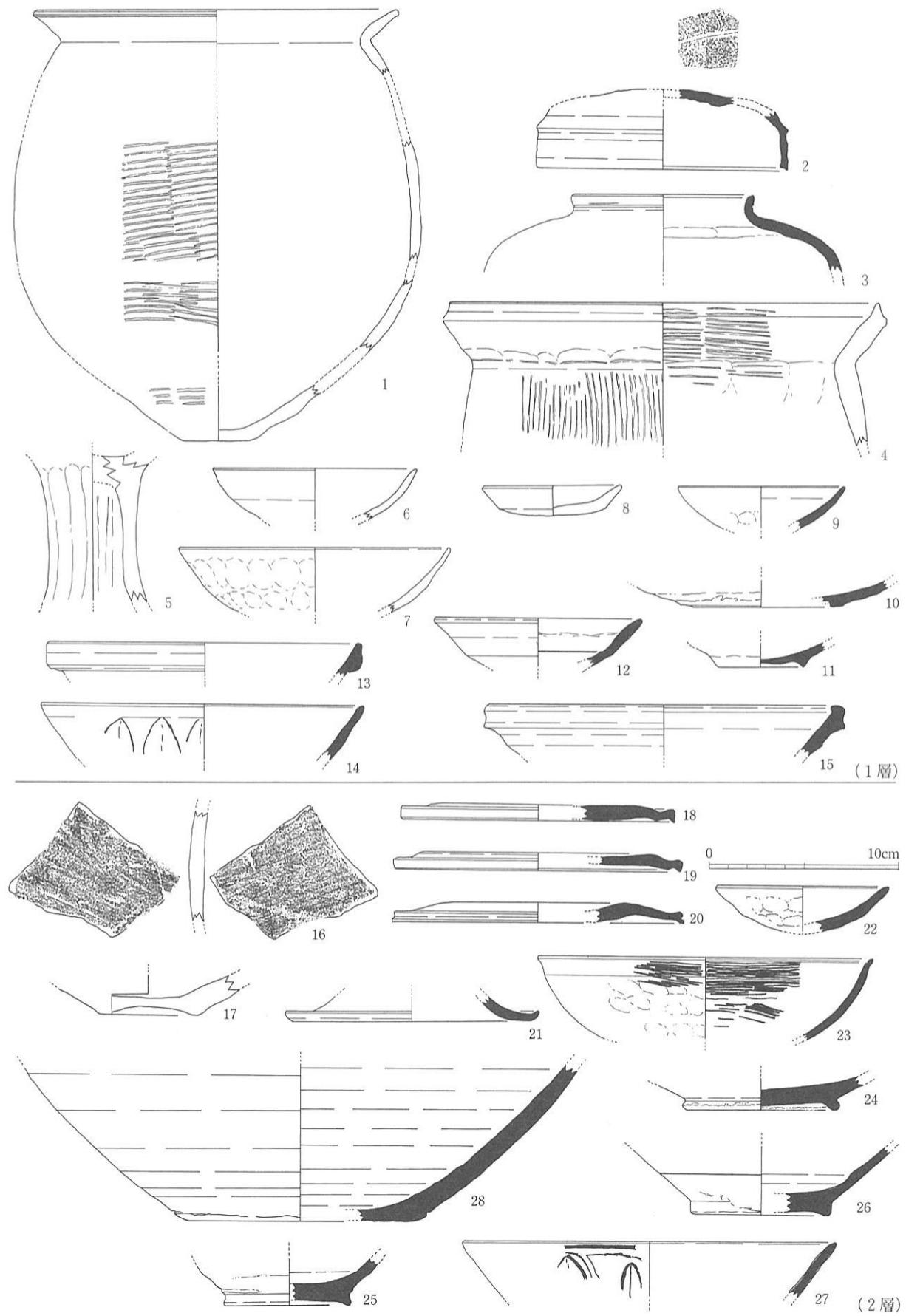
器碗（23）、白磁碗（25・26）、鎌倉時代の瓦器碗（24）、青磁器（27）、東播ねり鉢（28）などがあった。土師器も、第28図1・2は奈良時代の甕、3は鎌倉時代の羽釜であった。

D区の下層である3層出土土器が、第28図4～6である。奈良時代の須恵器坏（4）、壺（5）、きれいな櫛描波状文の施された甕口縁部片（6）などがあった。

D区の最下層である耕土・床土層中からは、平安末期の土師器小皿（7）、鎌倉時代の土師器小皿（8）



第26図 C区4層（1～9）、5層（10～17）、耕土・排土（18～23）出土土器実測図

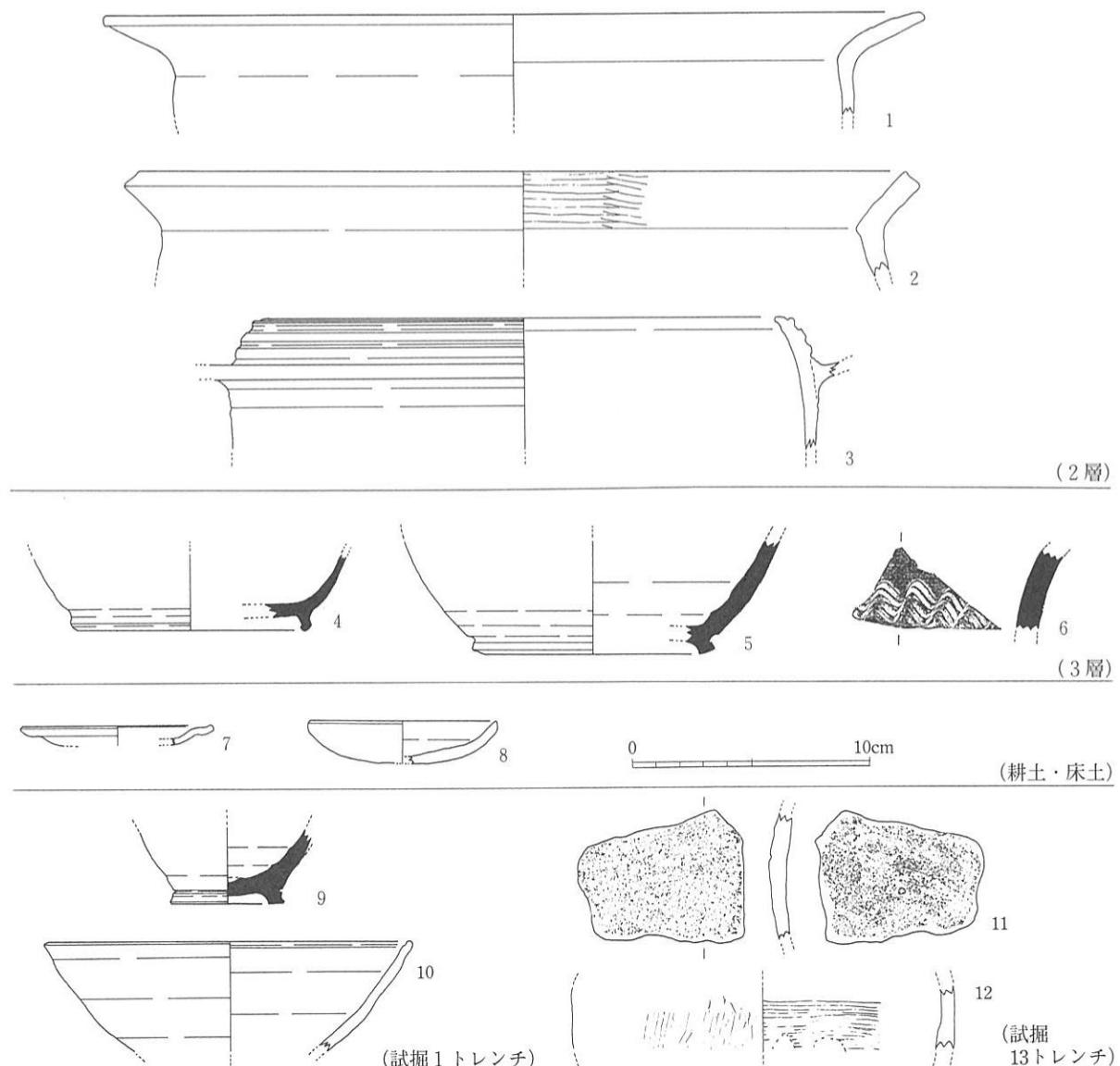


第27図 D区1層(1~15)、2層(16~28)出土土器実測図

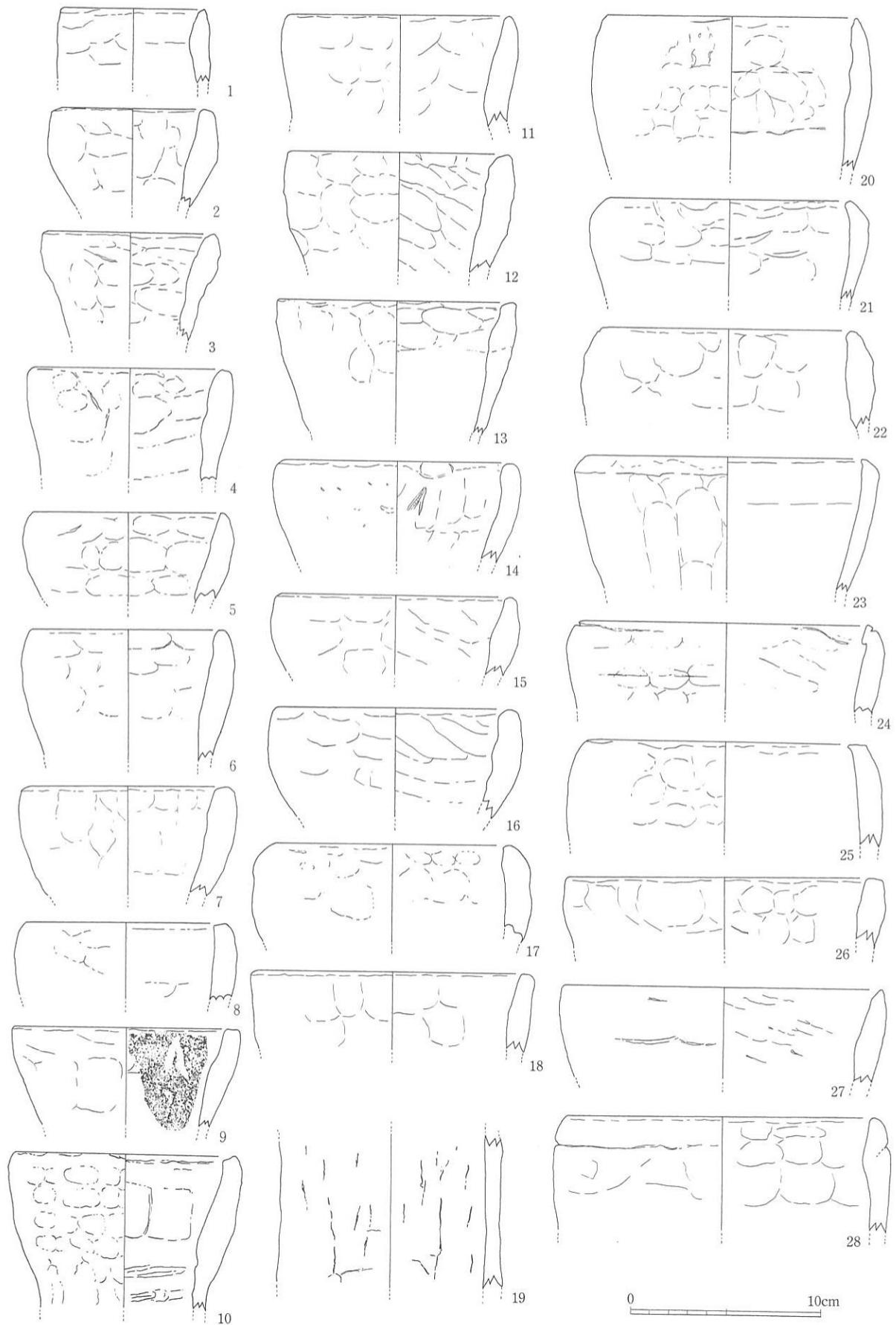
などが出土した。

あと、今回の本調査対象外となった試掘1トレンチや試掘13トレンチからも土器が出土している。1トレンチ床土出土の奈良時代の須恵器壺(9)や1トレンチ1層出土の平安前期の土師器碗(10)、13トレンチ1層出土の条痕が僅かに残る縄文後期の深鉢片(11)や奈良時代の外面刷毛目の甕(12)などである。

(製塩土器) B区が中心であるが、他の調査区からも奈良時代の製塩土器が多数出土している。一括して、第29図・第30図に図示した。製塩土器は、断面が厚いもの(第29図1~28)、内面に布目のあるもの(第30図1~10)、断面が薄いもの(第30図11~17)に3分類した。断面の厚いものは、口径が8.1~17.9cmまで、幅があった。また、内面の指押えも横方向に押えるのが普通であるが、ことさら斜めになでているものがあり(第29図12・15・16)、製作者の異なることが推定された。また、口縁端部の断面形も、端面が丸くなるものが多いが、中には端面が薄く尖るもの(20)、内傾するもの(21・23)、面をもつも



第28図 D区2層(1~3)、3層(4~6)、耕土・床土(7・8)、
試掘1トレンチ(9・10)、試掘13トレンチ(11・12)出土土器実測図



第29図 A～D区出土製塙土器実測図（1～28）

の（8～10、25）などの違いがあった。また、外面は手づくねで指押え痕をもつものがほとんどだが、中には、粘土紐の継目をことさら大きく残すもの（27・28）もあって、やはり、製作者の違いによる技法の異なりと考えられた。内面に布目のあるものも、口径が9～19cmまで、幅があった。口縁端部の断面形は、薄く終るもの（第30図1・2）、端部外面に面をもつもの、あるいは内傾するもの（3～5）などの違いがあった。内面の布目も細いものから荒いものまで、各種あった（6～10）。断面が薄いものは、橙色、黄褐色などの明るい色のものが多かった。口縁端部が内傾するもの（13～15）、外反するもの（11・12）、直口気味のもの（16・17）などの違いがあった。断面の厚いもの、内面に布目のあるもの、断面の薄いものは、その製塩土器の生産者、もしくは生産地の異なることが胎土の観察からも推測されたが、一方で、形式差を越えて共通する要素も存在する。第30図5は、その胎土中に大きな黒っぽい軽石を多数含んでいて、土器自身も非常に軽い。黒っぽい細粒の玄武岩質軽石（スコリア）は、第30図11・12にも、口縁端部が内傾する第29図21にも多数含まれている。軽石が胎土中に多数含まれる製塩土器は、そ

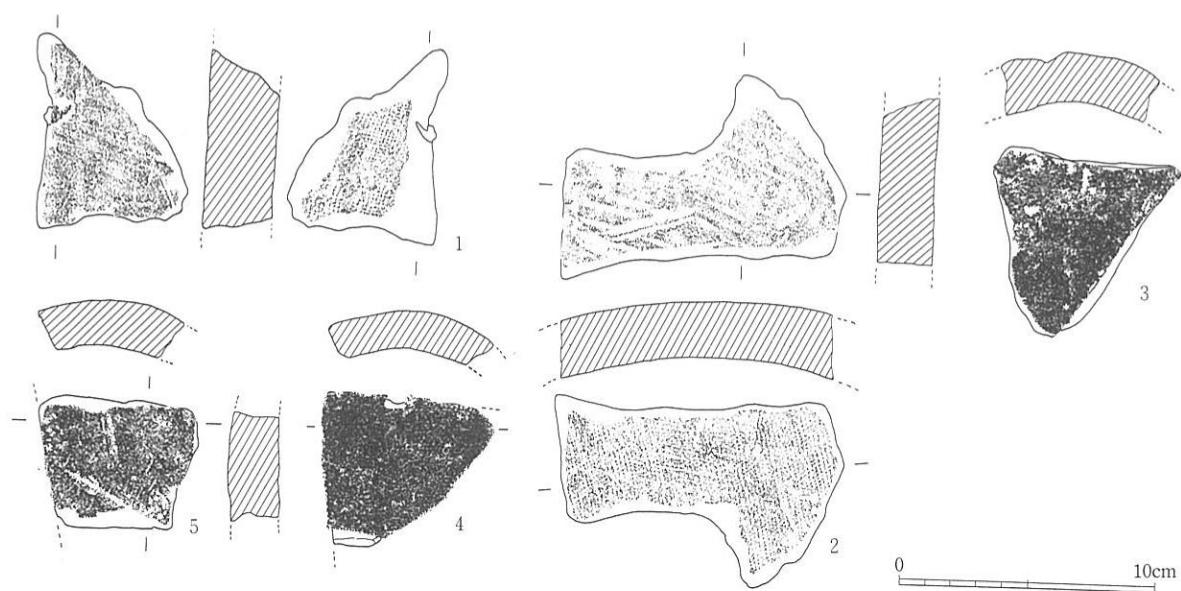


第30図 A～D区出土製塩土器実測図（1～17）

ういう目で見れば、実は、かなりあって、たとえば、奈良時代の建物 5 穴54からは、多数の製塩土器片が集中して出土しているが(図版47)、21点取り上げた製塩土器中、6点(図版47a-1~6)に軽石は含まれていた(なお、金雲母を含むものも2点存在した)。軽石は火山噴出のものだけに、火山周辺に産地が限られる訳だが、内面に布目痕をもつ奈良時代の製塩土器(六連式土器)分布地域の中で、当時の海浜に軽石が多数打ち上げられていた所、恐らく北九州地域に産地が求められるのであろう。

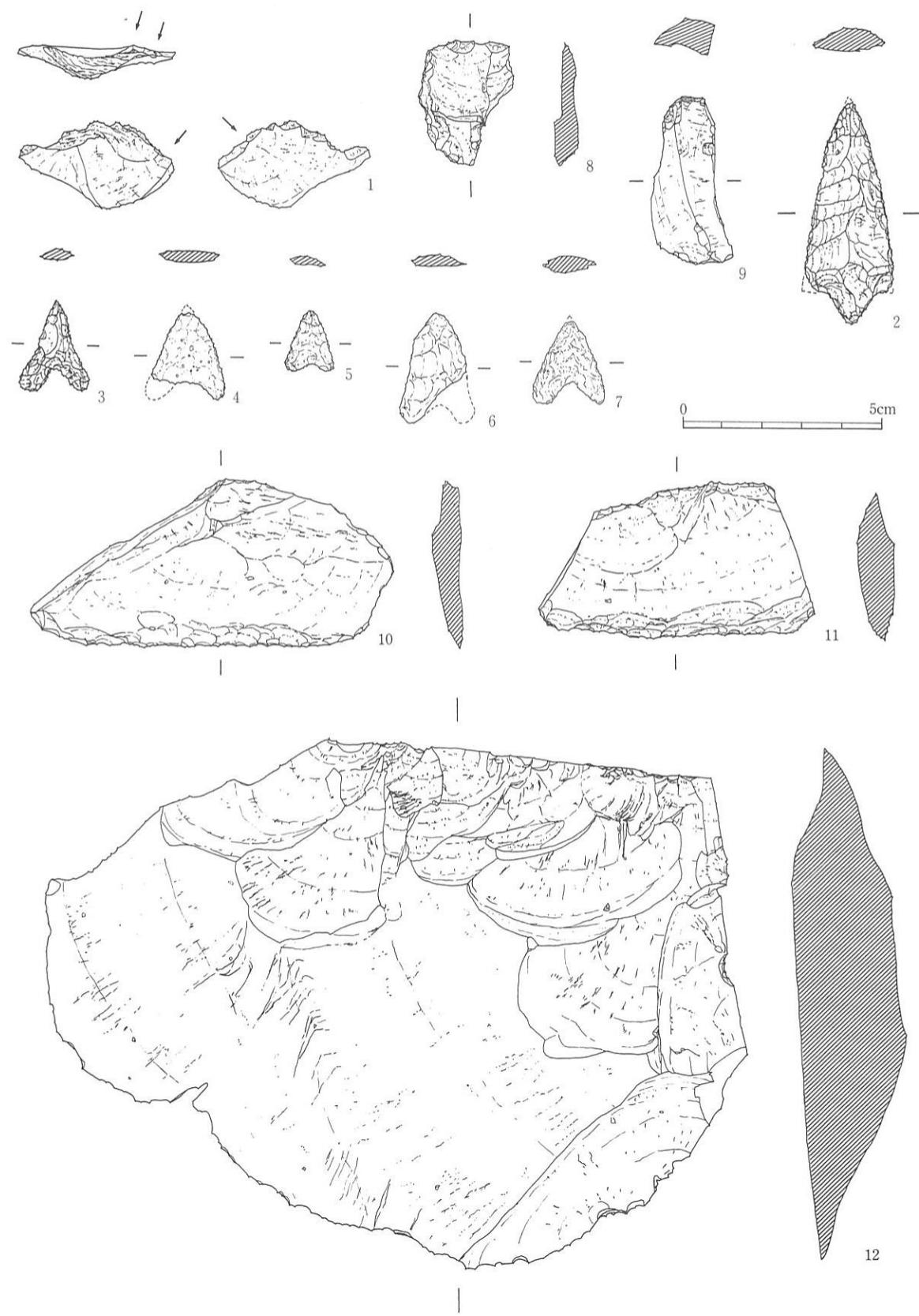
(瓦) 奈良時代の建物4の柱穴から外面平行叩き目、内面布目の奈良時代の瓦片が2点出土している(第31図1・2)。他の3点の瓦は、B区1層・2層の包含層出土である。建物4は、瓦の出土量からすると、部分的に瓦葺きだった可能性がある。

(石器) 石器はすべて後世の包含層中から出土した。第32図1は、サヌカイト製の翼状剝片である。全面著しく風化している。暗灰色と灰色の縞目のあることから、二上山地域でも春日山周辺のサヌカイトと考えられる。2は、黒色をした二上山サヌカイト製の有舌尖頭器である。先端部と基部の返しの部分を少し欠くが、ほぼ完形と言える。重さは7gあって、有舌尖頭器としては小型の部類に入る。この有舌尖頭器の返し部分は横方向に伸びる平基式のものである。縄文時代草創期～早期のものと考えられる。3は、2の有舌尖頭器のすぐ横から出土した二上山サヌカイト製の両側縁に抉りの入る凹基式石鏸である。なお、この石鏸は超音波洗浄器で洗浄することにより、製作時の色(漆黒色)と鋭さを甦らせることができた。時期は、有舌尖頭器と同じ時期と考えられた。4は、暗灰色をした二上山サヌカイト製の凹基式石鏸で、表裏面に小さなガス穴が多数あいている。5は、暗灰色の二上山サヌカイト製の小型凹基式石鏸である。6は、基部に抉りの入る五角形のサヌカイト製石鏸である。この石鏸は全面著しく風化し、灰白色を呈している。一部割れ口から内部を見ると、ガラス質の非常に強いサヌカイトのため、四国・金山産のサヌカイトと考えられた。7も四国・金山産と考えられる凹基式石鏸で、外面全体が銀色に光っている。4～7の石鏸は、形態から、縄文後期～晩期のものと考えられた。8・9は、暗灰色をした二上山サヌカイト製楔形石器である。10・11は、灰色に表面が風化した金山サヌカイト製削器である。共に薄板状の薄片の剝片部を細部加工することにより刃部を作り出している。10の背部には、



第31図 建物4(1・2)、B区1層(3・4)、B区2層(5)出土瓦実測図

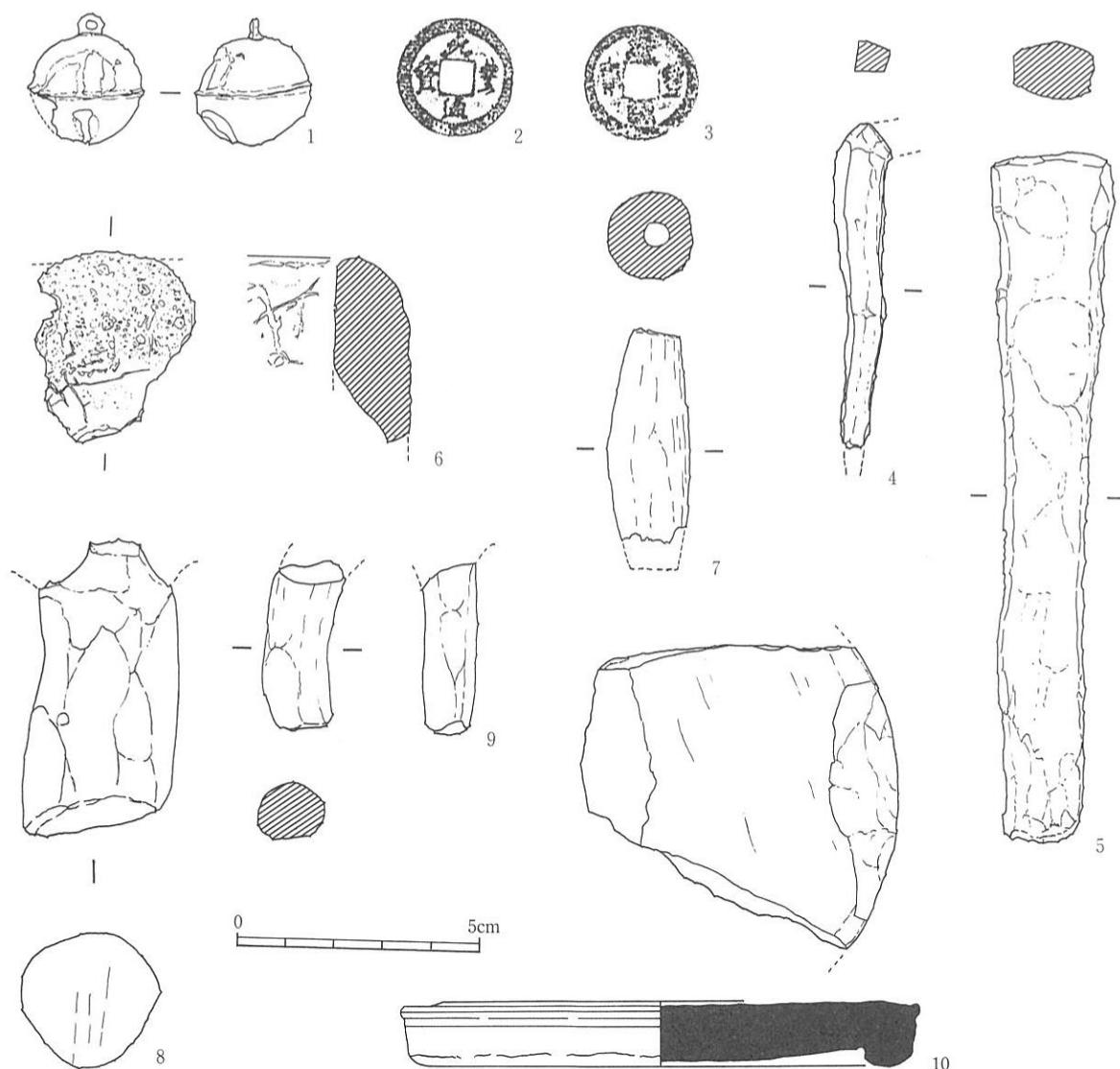
サヌカイトの表皮部分が残っていて、暗灰黄色を呈している。8～11も時期は縄文後期と考えられた。12は、暗灰色をした二上山サヌカイト製石核である。この石核の表部分には、表皮部分が残っており、



第32図 B区・C区・D区・試掘13トレンチ出土サヌカイト製石器実測図（1～12）

それは俗に言われる「爪形石」である。爪形状に表面が陥没しており、それは、旧大和川転石サヌカイトの特徴の一つである。裏面に小剝片を同一方向から何枚も剝がした痕跡が残っており、石核と考えられた。681gもあるこの石核がなぜ、これ以上加工されなかったのかは不明である。この石核の時期も伴出遺物がないので不明だが表面の風化の状況からすると、縄文後期頃と考えられた。

なお、庄田遺跡の調査区北端部を中心とした水田中には、サヌカイト剝片や石器・土器が含まれていて、雨後の翌日などには、表面採集することが可能であった。調査区の西方200mから東方100mの範囲からは、縄文後期頃のサヌカイト製凹基式石鏸(第34図1～4)、平基式石鏸(5～8)、凸基式石鏸(9)、石錐(10)、楔形石器(11～14)、石鏸未製品(15)、小型の削器(図版48b-1)、石核(図版48b-2・3)、江戸時代の緑灰色チャート製火打石(図版48a-16～21)などが採集された。他にも、サヌカイト剝片が122点213g採集された。このサヌカイト剝片中には、金山サヌカイト剝片(図版48c)が、二上山サヌカイト剝片(図版48d)に混じっていた。石核の中にも金山サヌカイト製のものがあり(図版48b-2)、石鏸の中にも金山サヌカイト製のものがあり(図版48a-6)、恐らく縄文後期になって急激に金山サヌカイ



第33図 A～D区出土銅製品・鉄製品・土製品・陶硯実測図

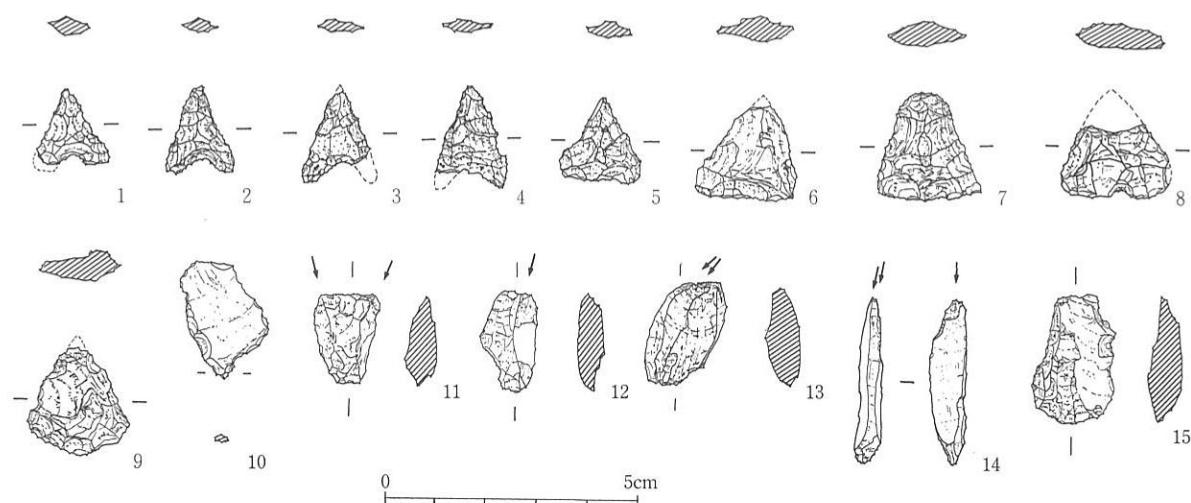
トがこの遺跡まで大量に流出する状況の存在することが推定された。

他に、石器としては、以上の図示したもの以外に写真図版だけに掲載した石器がある。図版23e-1は、A区排土中から採集した二上山サヌカイト製の縦長剝片である。2は、A区穴16から出土した、部分的に細部加工の施された玄武岩製縦長剝片である。1・2共に所属時期は不明である。3・4は、江戸時代の緑灰色チャート製火打石の破片である。図版29b-6・7は、暗灰色をしたB区3層出土の二上山サヌカイト剝片である。8・9は、B区排土中、2層出土の緑灰色チャート製火打石の破片である。図版37a-3～7は、暗灰色をした二上山サヌカイトの剝片である。3は縦長剝片で、楔形石器から剝がされた剝片と考えられる。6は、風化の度合いがやや進んでいて、他は縄文時代のものと考えられるが、これだけは旧石器時代のものかと考えられた。8は石核残片で、暗灰色をしたサヌカイト表皮の部分を多く残し、二上山サヌカイトであることが分かった。図版40d-1は、1トレンチ床土出土の暗灰色をした二上山サヌカイト剝片である。表皮部分を残しており、「爪形石」であることが分かる。

(銅製品) 第33図1はA区(22トレンチ)で2層上面から単独出土した銅鈴である。長さ2.7cm、幅2.4cm、厚さ0.1cm。この鈴は、下方向からの強い打撃を受けて、内側にへこんでしまっていて、その部分には一辺1cm程の穴があいてしまっていた。この損壊は、恐らく昔のもので、鈴として機能しなくなっていたものと推定された。時期は、層位から平安時代頃と推定されるが、厳密には不明である。2・3はA区・D区の共に2層出土で、字体は異なるが、共に宋錢の元豊通宝である。

(鉄製品) 第33図4は、C区2層出土の鉄カスガイである。残存長6.7cm、幅1cm、厚さ0.8cm、重さ7gある。全体の3分の1程の剝片である。時期は2層出土なので、古ければ奈良時代、新しければ鎌倉時代であろう。5は、B区2層出土であるが他の遺跡出土例から中世のものと推定される馬鍔の鉄歯である。長さ14.1cm、重さ103gあり、固い大地を切り拓くのに大いに有用な道具であったのだろう。

(土製品) 第33図6は、B区耕土～床土出土のフイゴの羽口片である。外面端部は、灰白色に変色し、発泡化している。内面は赤紫色に変色している。内外面共にヒビ割れ痕が多数ある。同様なものは、A区1層からも細片が出土しており(図版23C-1)、鍛治がこの遺跡でも行なわれていたことを推定させる貴重な例となった。7は、B区(15トレンチ)1層出土の土錐で、下端部を一部欠失している。重さは12gある。1層出土のため時期は限定できないが、多くの奈良時代の土器に混じって出土したので、その時



第34図 庄田遺跡表面採集サヌカイト製石器実測図（1～15）

期のものである可能性が高かった。8・9はC区・A区出土の奈良時代の土馬の脚部分の破片である。8は、径3.1cmもある大型の脚で、9は径1.4cmと細い脚である。図版29a-1は、建物10の柱穴(穴139)出土の径5cm厚さ3cmの焼土片である。

(陶硯) 第33図10は、A区2層出土の奈良時代の陶硯である。径10.7cm程ある、円形硯の3分の1程の破片である。底部には、幅1cm高さ0.4cm程の太い高台を貼り付けており、底面を浮かす工夫をしている。表面の縁辺6～7mmの間は少しくぼんでいる。表面中央も少しくぼんでいる。表面全体はツルツルに磨き込まれ、墨をすったものと考えられた。硯としては、他に例をみない形式のものである。

第1表 遺物観察表

番号	挿図番号	図版番号	器種	高さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	時期	出土遺構・層位	出土日	実測 番号	備考
1	第18図1	図版15a-1	須恵器・蓋	(3.0)	15.2	0.5	奈良	C区 69 穴183	98 01 30	105	建物3
2	〃 2	〃 - 2	〃 ・ 杯	(1.7)	(13.8)	0.4	〃	C区 69 穴181	98 02 09	103	〃
3	〃 3	〃 - 3	土師器・小型甕	(2.5)	14.7	0.5	〃	B区 24 穴29	98 01 20	140	建物4
4	〃 4	〃 - 4	〃 ・ 梗	(1.1)	(13.2)	0.4	〃	B区 24 穴30	98 01 20	141	〃
5	〃 5	〃 - 5	〃 ・ 中皿	2.1	20.0	0.4	〃	B区 24 穴30	98 01 20	143	〃
6	〃 6	〃 - 6	須恵器・杯	(2.1)	(13.0)	0.7	〃	B区 24 穴29	98 01 20	161	〃
7	〃 7	〃 - 7	土師器・甕	(2.9)	25.7	0.8	〃	B区 56 穴50	98 01 21	141	建物5
8	〃 8	図版15b-1	〃 ・ 小型甕	(6.3)	16.4	0.5	〃	B区 23 穴53	98 01 22	155	〃
9	〃 9	〃 - 2	須恵器・蓋	(1.2)	18.4	0.4	〃	B区 56 穴51	98 01 21	340	〃
10	〃 10	〃 - 3	〃 ・ 杯	(1.5)	13.0	0.3	〃	B区 56 穴51	98 01 21	154	〃
11	〃 11	〃 - 4	土師器・蓋	(2.3)	25.7	0.7	〃	B区 24 穴70	98 01 21	169	建物6
12	〃 12	〃 - 5	〃 〃	(1.8)	32.0	0.6	〃	B区 25 穴66	98 01 22	233	〃
13	〃 13	図版16a-1	〃 ・ 皿	(2.0)	12.2	0.5	〃	B区 56 穴65	98 01 21	231	〃。灯明皿
14	〃 14	図版15b-6	〃 ・ 杯	(2.3)	20.3	0.6	〃	B区 25 穴67	98 01 21	235	〃
15	〃 15	図版16a-2	須恵器・杯	(0.9)	(8.2)	0.5	〃	B区 56 穴65	98 01 21	232	〃
16	〃 16	〃 - 3	土師器・皿	2.0	12.3	0.6	〃	B区 24 穴73	98 01 21	339	建物7
17	〃 17	〃 - 4	須恵器・蓋	(0.8)	16.8	0.4	〃	D区 56 穴211	98 03 11	342	建物9
18	〃 18	〃 - 5	土師器・大型甕	(6.2)	31.8	0.7	〃	B区 28 穴140	98 01 23	315	建物10
19	〃 19	〃 - 6	〃 ・ 鍋	(4.6)	28.7	0.9	〃	B区 27 穴155	98 01 24	316	建物11
20	〃 20	〃 - 7	〃 ・ 大皿	2.3	26.2	0.5	〃	B区 27 穴155	98 01 24	341	〃
21	〃 21	〃 - 8	〃 ・ 小型甕	(4.8)	16.0	0.6	〃	D区 59 穴208	98 03 11	329	建物12
22	〃 22	〃 - 9	須恵器・杯	(4.3)	15.8	0.6	〃	D区 59 穴201	98 03 04	330	〃
23	第19図1	図版16b-1	〃 ・ 壺	(6.0)	(18.0)	0.7	〃	A区 21トレス溝内	97 06 17	42	
24	〃 2	〃 - 2	土師器・杯	(3.1)	17.8	0.5	〃	B区 23 穴26	98 01 20	160	
25	〃 3	〃 - 3	須恵器・蓋	1.6	19.5	1.1	〃	B区 23 穴26	98 01 20	164	
26	〃 4	〃 - 4	〃 〃	1.4	15.2	0.4	〃	B区 23 穴40	98 01 20	142	
27	〃 5	〃 - 5	土師器・大形鍋	(3.4)	(41.6)	1.0	〃	B区 24 穴56	98 01 21	145	
28	〃 6	図版17b-1	〃 ・ こしき?	(5.5)	(20.5)	0.8	〃	B区 24 穴61	98 01 21	167	
29	〃 7	図版17a-1	〃 ・ 杯	2.6	14.8	0.4	〃	B区 55 穴79	98 01 21	165	
30	〃 8	〃 - 2	〃 〃	2.7	18.5	0.5	〃	B区 55 穴79	98 01 21	239	
31	〃 9	〃 - 3	〃 〃	3.7	20.0	0.4	〃	B区 55 穴79	98 01 21	166	
32	〃 10	図版18a-1	須恵器・杯	(1.7)	(14.4)	0.6	〃	B区 24 穴84	98 01 21	184	
33	〃 11	図版17b-2	土師器・鉢	(6.5)	27.5	0.6	〃	B区 24 穴84	98 01 21	174	
34	〃 12	〃 - 3	〃 ・ 大甕	(1.7)	28.4	0.4	〃	B区 24 穴84	98 01 21	177	
35	〃 13	〃 - 4	〃 〃	(2.6)	34.0	0.6	〃	B区 24 穴84	98 01 21	175	
36	〃 14	〃 - 5	〃 ・ 甕	(4.9)	20.0	0.5	〃	B区 56 穴85	98 01 21	242	
37	〃 15	〃 - 6	〃 ・ 大甕	(2.9)	32.4	0.8	〃	B区 56 穴85	98 01 21	241	
38	〃 16	〃 - 7	〃 ・ 梗	(3.3)	15.1	0.4	〃	B区 24 穴106	98 01 22	178	
39	〃 17	図版18a-2	須恵器・壺	(1.5)	18.6	0.4	〃	B区 24 穴106	98 01 22	183	
40	〃 18	〃 - 3	土師器・蓋	(1.9)	3.2	不明	〃	B区 24 穴135	98 01 22	181	
41	〃 19	〃 - 4	須恵器・杯	3.8	13.7	0.5	〃	B区 24 穴160	98 01 23	317	
42	〃 20	〃 - 5	〃 ・ 壺	(5.2)	16.3	0.7	〃	B区 24 穴160	98 01 23	318	
43	〃 21	〃 - 6	土師器・小型皿	2.5	10.6	0.5	〃	B区 29 穴168	98 01 26	319	
44	〃 22	〃 - 7	須恵器・杯	(3.7)	15.7	0.6	古墳後期	C区 70 溝9	98 02 09	97	
45	〃 23	〃 - 8	〃 〃	3.9	16.3	0.7	奈良	C区 70 溝10	98 02 09	100	
46	〃 24	〃 - 9	〃 ・ 蓋	2.9	11.6	0.7	〃	C区 69 溝7	98 02 09	104	
47	〃 25	〃 - 10	土師器・小皿	(2.1)	10.7	0.3	鎌倉	C区 11トレス 鋤溝	97 06 13	96	
48	〃 26	図版18b	須恵器・杯	4.7	15.2	0.4	奈良	D区 79・80 溝23	98 02 13	331	
49	第20図1	図版19a-1	〃 ・ 蓋	(1.4)	(12.6)	0.6	〃	A区 22トレス 1層	97 06 07	147	
50	〃 2	〃 - 2	〃 ・ 杯	(2.8)	(16.5)	0.7	〃	A区 21トレス 1層	97 06 04	153	
51	〃 3	〃 - 3	〃 〃	3.2	12.3	0.4	〃	A区 23トレス 1層	97 06 24	76	
52	〃 4	〃 - 4	〃 〃	(3.3)	14.3	0.5	〃	A区 23トレス 1層	97 06 24	78	
53	〃 5	〃 - 5	〃 ・ 小型壺	(3.3)	9.2	0.6	〃	A区 22トレス 1層	97 06 07	29	
54	〃 6	〃 - 6	〃 ・ 壺	(3.7)	(13.1)	0.7	〃	A区 23トレス 1層	97 06 24	57	
55	〃 7	図版19b-1	〃 〃	(8.4)	19.3	0.7	〃	A区 23トレス 1層	97 06 24	77	

番号	挿図番号	図版番号	器種	高さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	時期	出土遺構・層位	出土日	実測番号	備考
56	第20図8	図版19a-7	須恵器・壺	(3.6)	(15.3)	0.9	奈良	A区 20トレス 1層	97 06 04	117	
57	〃9	図版19b-2	土師器・楕	(3.2)	15.2	0.4	平安	A区 23トレス 1層	97 06 07	55	
58	〃10	〃-3	〃・小皿	1.0	8.7	0.4	鎌倉	A区 21トレス 1層	97 06 04	45	
59	〃11	〃-4	白磁・皿	(1.5)	(9.6)	0.4	〃	A区 21トレス 1層	97 06 04	197	
60	〃12	〃-5	瓦器・楕	(5.5)	14.8	0.5	平安末期	A区 23トレス 1層	97 06 07	56	和泉型
61	〃13	〃-6	〃・楕	(4.3)	17.0	0.5	鎌倉	A区 19トレス 1層	97 06 03	118	和泉型
62	〃14	〃-7	須恵器・ねり鉢	(3.2)	30.4	0.8	〃	A区 19トレス 1層	97 06 03	120	東播
63	〃15	〃-8	常滑焼・大甕	(2.2)	41.2	0.9	〃	A区 22トレス 1層	97 06 07	139	
64	〃16	図版21b-1	弥生土器・甕	(2.6)	(7.4)	0.5	弥生後期	A区 7 2面精査	97 12 04	247	
65	〃17	図版20a-1	須恵器・蓋	(1.5)	(4.2)	0.4	奈良	A区 2 2層	97 11 28	249	
66	〃18	〃-2	〃〃	(1.3)	14.6	0.6	〃	A区 1 2層	97 11 28	254	
67	〃19	〃-3	〃〃	(1.8)	11.0	0.7	〃	A区 10 2層	97 12 19	85	
68	〃20	〃-4	〃〃	2.8	11.9	0.7	〃	A区 4 2層	97 12 18	83	
69	〃21	〃-5	〃〃	(1.8)	20.0	0.7	〃	A区 5 2面精査	97 12 05	211	
70	〃22	〃-6	〃・杯	(1.7)	(9.0)	0.3	〃	A区 3 2層	97 12 01	246	
71	〃23	〃-7	〃〃	(2.1)	(12.2)	0.4	〃	A区 4 2層	97 12 01	82	
72	〃24	〃-8	〃〃	3.9	14.2	0.6	〃	A区 3 2面精査	97 12 03	58	
73	〃25	〃-9	〃〃	(2.2)	(16.7)	0.6	〃	A区 4 2面精査	97 12 05	253	
74	〃26	〃-10	〃〃	(2.7)	(17.2)	0.5	〃	A区 2 2層	97 11 28	250	
75	〃27	図版20b-3	〃〃	(1.0)	(12.8)	0.7	〃	A区 23トレス 2層	97 06 25	61	
76	〃28	〃-4	〃・高杯	(2.9)	(3.7)	0.5	〃	A区 32 2層	97 11 27	251	
77	〃29	〃-1	〃・壺	(10.2)	22.1	1.1	〃	A区 4.5 2層	97 12 02	204	
78	〃30	〃-2	〃・鉄鉢	(9.7)	24.5	0.8	〃	A区 4 2層	97 12 02	62	
79	第21図1	図版21a-1	縁軸陶器・皿	(2.6)	(15.0)	0.8	〃	A区 22トレス 2層上面	97 06 05	35	
80	〃2	〃-2	白磁・碗	(4.5)	17.9	0.4	平安末期	A区 2 2層	97 11 28	243	
81	〃3	〃-3	〃〃	(2.8)	18.0	0.3	〃	A区 33 2層	97 11 28	245	
82	〃4	〃-4	〃〃	(4.0)	(13.8)	0.7	〃	A区 2 2層	97 11 28	244	
83	〃5	〃-5	青磁・碗	(1.7)	(6.4)	0.8	鎌倉	A区 5 2層	97 12 02	25	「吉」と陰刻
84	〃6	図版21b-2	土師器・三足鍋	(5.7)	2.2	1.9	〃	A区 13 2面精査	97 12 12	207	脚部
85	〃7	〃-3	〃・甕	(7.1)	25.3	0.5	奈良	A区 11 2面精査	97 12 09	212	
86	〃8	〃-4	〃・鍋	(4.6)	(5.6)	2.6	〃	A区 37 2面精査	97 12 03	252	把手部
87	〃9	〃-5	〃・かまど	(12.0)	(3.4)	1.1	〃	A区 23トレス 2層	97 07 07	303	移動式
88	〃10	図版23a-1	須恵器・蓋	(2.0)	(8.0)	0.7	〃	A区 21トレス 遺構面精査	97 06 17	171	
89	〃11	〃-2	〃〃	1.7	(14.9)	0.8	〃	A区 6 3層上面	97 11 28	206	
90	〃12	〃-3	〃〃	0.8	(17.8)	0.5	〃	A区 8 3層	97 12 12	84	
91	〃13	〃-4	〃・壺	(2.3)	(9.0)	0.5	〃	A区 22トレス 遺構面精査	97 06 21	146	
92	〃14	図版22b	〃・杯	(1.4)	(14.6)	0.4	〃	A区 8 3層	97 12 05	248	底裏に墨書
93	〃15	図版22c	〃・壺	(10.2)	26.5	0.7	〃	A区 3 3層	97 12 10	210	
94	〃16	図版23a-5	〃・杯	(1.7)	(15.7)	0.7	〃	A区 8 3層	97 12 12	205	内面にヘラ記号
95	〃17	図版21a-6	青磁・碗	(4.0)	(4.3)	0.5	鎌倉	A区 21トレス 耕土	97 05 29	170	
96	〃18	〃-7	〃〃	(3.0)	17.0	0.5	〃	A区 20トレス 耕土	97 05 28	119	
97	〃19	図版23b-1	須恵器・蓋	2.0	(7.0)	1.0	奈良	A区 23トレス 排土中	97 06 10	63	
98	〃20	〃-2	〃〃	(3.0)	17.5	0.5	〃	A区 21トレス 排土中	97 07 14	43	
99	〃21	〃-3	〃〃	(1.7)	18.8	0.7	〃	A区 23トレス 排土中	97 07 14	64	
100	〃22	〃-4	〃・壺	(6.1)	26.8	0.9	〃	A区 21トレス 排土中	97 06 25	173	
101	〃23	図版21b-6	土師器・鉢	(4.5)	14.2	0.7	〃	A区 23トレス 排土中	97 07 14	81	
102	〃24	〃-7	〃・羽釜	(3.7)	20.0	0.7	鎌倉	A区 23トレス 排土中	97 07 14	80	
103	〃25	〃-8	瓦器・楕	(5.2)	17.0	0.4	平安末期	A区 23トレス 排土中	97 06 10	79	
104	第22図1	図版24a-1	須恵器・蓋	1.3	(5.0)	0.8	奈良	B区 15トレス 1層	97 05 23	47	
105	〃2	〃-2	〃〃	(1.1)	14.8	0.6	〃	B区 15トレス 1層	97 05 23	136	
106	〃3	〃-3	〃〃	1.2	15.8	0.6	〃	B区 16トレス 1層	97 05 27	73	
107	〃4	〃-4	〃〃	1.3	18.1	0.6	〃	B区 15トレス 1層	97 05 23	50	
108	〃5	〃-5	〃〃	(2.0)	22.0	0.8	〃	B区 15トレス 1層	97 05 23	135	
109	〃6	〃-6	〃・杯	(2.3)	(14.9)	0.6	〃	B区 15トレス 1層	97 05 23	134	
110	〃7	〃-7	〃〃	(3.4)	(16.2)	0.7	〃	B区 16トレス 1層	97 05 27	72	

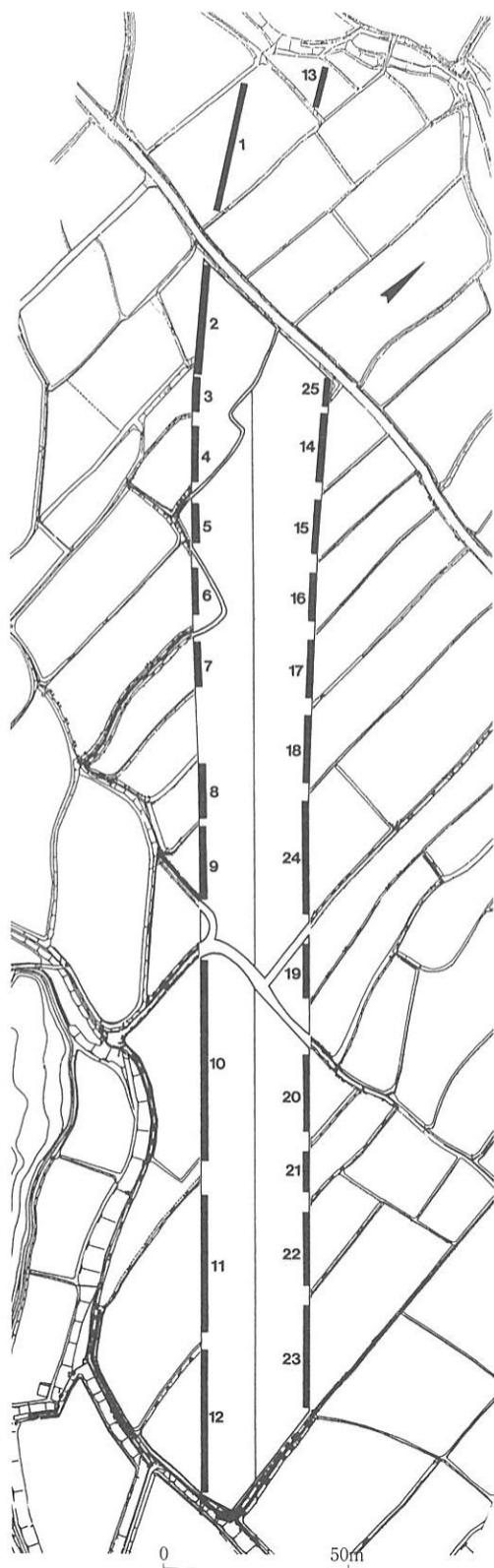
番号	挿図番号	図版番号	器種	高さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	時期	出土遺構・層位	出土日	実測番号	備考
111	第22図8	図版24a-8	須恵器・壺	(2.9)	14.6	0.6	奈良	B区 15トレス	1層	97 05 23	75
112	〃 9	〃 - 9	〃・大甕	(2.5)	(4.3)	1.3	〃	B区 15トレス	1層	97 05 23	68
113	〃 10	図版25a-1	〃・壺	(7.6)	(21.7)	1.0	〃	B区 15トレス	1層	97 05 23	48
114	〃 11	図版24b-1	〃〃	(4.5)	(17.3)	0.7	〃	B区 17トレス	1層	97 05 28	306
115	〃 12	〃 - 2	〃・鉢？	(2.5)	21.9	0.5	〃	B区 16トレス	1層	97 05 27	74
116	〃 13	〃 - 3	土師器・皿	3.2	16.8	0.4	〃	B区 17トレス	1層	97 05 28	309
117	〃 14	〃 - 4	〃・壺？	(1.8)	19.0	0.4	〃	B区 18トレス 床土～1層		97 05 29	313
118	〃 15	〃 - 5	〃・小皿	(0.9)	(7.6)	0.3	〃	B区 15トレス	1層	97 05 23	38
119	〃 16	〃 - 6	灰釉陶器・皿	(3.0)	(11.6)	1.0	〃	B区 16トレス	1層	97 05 27	121
120	〃 17	〃 - 7	緑釉陶器・皿	(1.6)	(9.4)	0.6	〃	B区 15トレス	1層	97 05 23	39
121	〃 18	〃 - 8	須恵器・ねり鉢	(2.9)	(12.3)	0.8	鎌倉	B区 15トレス 1層上面		97 05 23	130
122	〃 19	〃 - 9	〃〃	(3.4)	24.0	0.7	〃	B区 16トレス	1層	97 05 27	110
123	〃 20	〃 - 10	〃〃	(1.4)	(12.2)	0.7	〃	B区 16トレス	1層	97 05 27	113
124	〃 21	〃 - 11	飴釉天目・碗	(3.9)	11.0	0.5	〃	B区 16トレス 床土～1層上面		97 05 26	112
125	〃 22	図版25b-1	須恵器・蓋	1.1	(5.1)	0.6	奈良	B区 27	2層	98 01 06	214
126	〃 23	〃 - 2	〃〃	2.5	16.2	0.8	〃	B区 25	2層	98 01 06	208
127	〃 24	〃 - 3	〃〃	1.3	15.0	0.7	〃	B区 17トレス	2層	97 05 28	308
128	〃 25	〃 - 4	〃・杯	(1.2)	(10.8)	0.4	〃	B区 25	2層	98 01 06	203
129	〃 26	〃 - 5	〃〃	(1.5)	(11.8)	0.6	〃	B区 51	2層	98 01 09	217
130	〃 27	〃 - 6	〃〃	(2.5)	(16.6)	0.7	〃	B区 25	2層	98 01 06	209
131	〃 28	〃 - 7	〃・壺	(1.6)	(14.4)	0.8	〃	B区 17	2層	98 01 07	215
132	〃 29	〃 - 8	〃・平瓶	(2.7)	(2.8)	1.5	〃	B区 16トレス	2層	97 05 30	304
133	〃 30	〃 - 9	〃・壺	(3.7)	(12.3)	0.6	〃	B区 14トレス	2層	97 05 15	126
134	〃 31	図版25a-2	〃〃	(4.1)	(20.4)	1.1	〃	B区 25トレス	2層	97 12 22	268
135	〃 32	図版25b-10	〃〃	(4.5)	(8.0)	0.7	〃	B区 17トレス	2層	97 05 28	307
136	〃 33	〃 - 11	〃・甕	(6.1)	不明	1.0	古墳後期	B区 2	2層	98 01 06	332
137	〃 34	図版25c-1	土師器・小皿	2.7	8.9	0.5	平安	B区 21	2層	98 01 10	255
138	〃 35	〃 - 2	〃〃	1.2	10.7	0.4	鎌倉	B区 17トレス	2層	97 05 28	310
139	〃 36	〃 - 3	〃・三足鍋	(7.3)	2.4	2.3	〃	B区 49	2層	98 01 13	287
140	〃 37	〃 - 4	青磁・壺	(5.1)	12.7	0.8	〃	B区 19	2層	98 01 09	216
141	〃 38	〃 - 5	〃・碗	3.4	11.1	0.6	〃	B区 27	2層	98 01 06	213
142	第23図1	図版26a-1	須恵器・蓋	1.6	2.7	0.6	奈良	B区 14トレス	3層	97 05 19	69
143	〃 2	〃 - 2	〃〃	(1.0)	(18.5)	0.9	〃	B区 24	3層	98 01 17	168
144	〃 3	〃 - 3	〃・杯	(1.3)	(13.6)	0.7	〃	B区 24	3層	98 01 16	290
145	〃 4	〃 - 4	〃〃	(1.3)	(16.6)	0.6	〃	B区 24	3層	98 01 17	275
146	〃 5	〃 - 5	〃・壺	(0.9)	15.0	0.4	〃	B区 26	3層	98 01 12	149
147	〃 6	図版26b-1	〃〃	(6.0)	9.7	0.5	〃	B区 23	3層	98 01 13	259
148	〃 7	図版26a-6	〃〃	(5.0)	(12.6)	0.7	〃	B区 22	3層	98 01 13	257
149	〃 8	〃 - 7	〃〃	(1.9)	(10.7)	0.8	〃	B区 14トレス	3層	97 05 19	125
150	〃 9	〃 - 8	〃〃	(2.1)	18.0	0.6	〃	B区 24	3層	98 01 16	314
151	〃 10	〃 - 9	〃〃	(2.7)	18.8	0.9	〃	B区 24	3層	98 01 16	273
152	〃 11	図版26b-2	〃〃	(9.2)	18.1	0.8	〃	B区 25	3層	98 01 16	289
153	〃 12	図版27a-2	弥生土器・鉢	(3.9)	(9.7)	0.9	弥生後期	B区 25トレス	3層	97 06 07	202
154	〃 13	〃 - 1	土師器・高杯	(9.2)	(9.7)	1.6	奈良	B区 24	3層	98 01 14	320
155	〃 14	〃 - 3	〃・蓋	1.4	4.2	0.8	〃	B区 22	3層	98 01 14	258
156	〃 15	〃 - 4	〃・中皿	2.3	17.7	0.5	〃	B区 25	3層	98 01 17	272
157	〃 16	〃 - 5	〃・鍋	(2.5)	(5.4)	0.8	〃	B区 24	3層	98 01 24	334
158	〃 17	〃 - 6	〃・小型甕	(4.5)	17.4	0.6	〃	B区 24	3層	98 01 17	271
159	〃 18	〃 - 7	〃・小皿	1.6	9.5	0.5	鎌倉	B区 24	3層	98 01 16	269
160	〃 19	図版26c-1	縄文土器・鉢	(1.4)	(10.0)	0.7	縄文後期	B区 49	地山面	98 01 27	150
161	〃 20	〃 - 2	須恵器・甕	(5.3)	17.1	0.6	古墳中期	B区 24	4層	98 01 17	274
162	〃 21	図版27b-1	瓦器・三足鍋	(7.6)	2.5	2.0	鎌倉	B区 17トレス 耕土～床土		97 05 27	311
163	〃 22	〃 - 2	須恵器・蓋	1.2	13.5	0.8	奈良	B区 16トレス 排土中		97 05 28	127
164	〃 23	〃 - 3	〃〃	(1.5)	17.8	0.9	〃	B区 16トレス	〃	97 07 01	114
165	〃 24	〃 - 4	緑釉陶器・壺	(2.0)	22.3	0.7	平安	B区 16トレス	〃	97 07 01	116

番号	挿図番号	図版番号	器種	高さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	時期	出土遺構・層位	出土日	実測 番号	備考
166	第23図25	図版27b-5	緑釉陶器・皿	(1.4)	(9.8)	0.5	奈良	B区 15トレス	排土	97 07 01	131
167	〃 26	〃 -6	須恵器・壺	(1.3)	9.0	0.6	〃	B区 16トレス	排土	97 05 28	123
168	〃 27	〃 -7	土師器・三足鍋	(8.8)	3.1	2.9	鎌倉	B区 18トレス	排土	97 06 30	312
169	第24図1	図版30a-1	須恵器・杯	(1.6)	(13.5)	0.8	奈良	C区 11トレス	1層	97 06 13	137
170	〃 2	〃 -2	〃 〃	3.5	17.0	0.4	〃	C区 12トレス	1層	97 06 21	14
171	〃 3	〃 -3	〃 〃	3.8	13.4	0.6	〃	C区 12トレス	1層	97 06 21	15
172	〃 4	〃 -4	〃 ・ねり鉢	(3.1)	(15.6)	1.0	鎌倉	C区 10トレス	側溝	97 06 14	282
173	〃 5	図版30b-1	青白磁・合子蓋	1.0	3.9	0.3	〃	C区 10トレス	1層	97 06 13	284
174	〃 6	〃 -2	瓦器・椀	(1.1)	(6.3)	0.4	〃	C区 10トレス	1層	97 06 13	283
175	〃 7	図版30d-1	須恵器・蓋	(1.3)	2.8	0.5	奈良	C区 10トレス	2層	97 06 16	21
176	〃 8	〃 -2	〃 〃	(1.8)	(8.3)	0.7	〃	C区 71	2層	98 01 30	185
177	〃 9	〃 -3	〃 〃	(0.8)	19.0	0.4	〃	C区 69	2層	98 01 30	188
178	〃 10	〃 -4	〃 〃	(1.5)	17.0	0.5	〃	C区 70	2層	98 01 30	194
179	〃 11	〃 -5	〃 〃	(1.4)	19.9	0.6	〃	C区 東方	2層	98 01 30	222
180	〃 12	〃 -6	〃 ・杯	(1.8)	(10.9)	0.6	〃	C区 69	2層	98 01 30	195
181	〃 13	〃 -7	〃 〃	(1.6)	(13.1)	0.5	〃	C区 69	2層	98 01 30	189
182	〃 14	〃 -8	〃 〃	(1.4)	(14.6)	0.3	〃	C区 71	2層	98 01 30	190
183	〃 15	〃 -9	〃 〃	(2.2)	(16.0)	0.5	〃	C区 11トレス	2層	97 06 07	87
184	〃 16	〃 -10	〃 ・壺	(4.3)	8.8	0.6	〃	C区 東方	2層	98 01 30	228
185	〃 17	〃 -11	〃 〃	(4.3)	(12.6)	0.8	〃	C区 11トレス	2層	97 06 11	95
186	〃 18	図版30c-1	〃 〃	(7.4)	(20.4)	0.6	〃	C区 76	2層	98 02 06	107
187	〃 19	〃 -2	〃 ・鉢	2.9	11.8	1.0	〃	C区 71	2層	98 01 30	191
188	〃 20	図版31a-1	土師器・椀	(2.0)	(11.4)	0.5	〃	C区 10トレス	2層	97 06 19	278
189	〃 21	〃 -2	〃 ・甕	(5.0)	25.2	0.9	〃	C区 東方	2層	98 01 30	224
190	〃 22	〃 -3	〃 ・小皿	(1.9)	13.4	0.4	平安	C区 10トレス	2層	97 06 16	19
191	〃 23	〃 -4	〃 ・羽釜	(4.0)	26.1	0.6	鎌倉	C区 11トレス	2層	97 06 11	94
192	〃 24	〃 -5	瓦器・椀	(2.8)	(13.4)	0.5	〃	C区 10トレス	2層	97 06 16	18
193	〃 25	〃 -6	〃 〃	(1.0)	(7.0)	0.4	〃	C区 69	2層	98 01 30	193 和泉型
194	〃 26	〃 -7	青磁・碗	(4.5)	16.0	0.5	〃	C区 10トレス	2層	97 06 12	280
195	〃 27	〃 -8	白磁・碗	(3.5)	18.0	0.6	平安末期	C区 10トレス	2層	97 06 16	281
196	〃 28	〃 -9	須恵器・ねり鉢	(4.5)	32.4	0.5	鎌倉	C区 76	2層	98 02 06	106 東播
197	〃 29	〃 -10	〃 〃	(3.6)	32.4	0.6	〃	C区 70	2層	98 01 30	192 〃
198	〃 30	〃 -11	〃 〃	(2.2)	35.6	0.9	〃	C区 10トレス	2層	97 06 16	20 〃
199	〃 31	〃 -12	〃 〃	(2.4)	(11.4)	0.8	〃	C区 11トレス	2層	97 06 07	88 〃
200	第25図1	図版31b-1	〃 ・蓋	(1.5)	(8.5)	0.8	奈良	C区 69	3層	98 01 30	226
201	〃 2	〃 -2	〃 〃	(1.7)	14.5	0.7	〃	C区 69	3層	98 01 30	262
202	〃 3	〃 -3	〃 〃	(1.5)	22.0	0.8	〃	C区 70	3層	98 01 31	90
203	〃 4	〃 -4	〃 〃	1.5	16.2	0.6	〃	C区 69	3層	98 01 30	186
204	〃 5	〃 -5	〃 〃	2.2	18.5	0.6	〃	C区 70	3層	98 01 31 98 02 03	260
205	〃 6	図版32a-1	〃 〃	(2.8)	(18.6)	0.7	〃	C区 69	3層	98 01 30	265
206	〃 7	〃 -2	〃 〃	(1.3)	(10.8)	0.7	〃	C区 38	3層	98 02 03	230
207	〃 8	〃 -3	〃 ・杯	(1.6)	(11.8)	0.4	〃	C区 69	3層	98 01 30	263 砥に転用・墨痕あり
208	〃 9	〃 -4	〃 〃	(2.0)	(13.2)	0.6	〃	C区 69	3層	98 01 30	223
209	〃 10	図版32b-2	〃 〃	3.6	14.3	0.6	〃	C区 11トレス	南3層	97 06 16	23
210	〃 11	〃 -3	〃 〃	3.9	17.0	0.5	〃	C区 69	3層	98 01 30	219
211	〃 12	〃 -4	〃 〃	3.8	17.1	0.6	〃	C区 11トレス	南3層	97 06 14	91
212	〃 13	〃 -5	〃 〃	3.8	11.6	0.6	〃	C区 11トレス	南3層	97 06 14	89
213	〃 14	図版33a-1	〃 ・壺	(2.5)	4.3	0.3	〃	C区 11トレス	南3層	97 06 16	98
214	〃 15	〃 -2	〃 〃	(4.7)	10.7	0.9	〃	C区 11トレス	南3層	97 06 14	60
215	〃 16	〃 -3	〃 〃	(2.2)	(12.2)	0.8	〃	C区 11トレス	3層下面	97 06 11	108
216	〃 17	〃 -4	〃 〃	(6.8)	15.8	0.9	〃	C区 69	3層	98 01 30	264
217	〃 18	〃 -5	〃 ・杯	(1.8)	(14.8)	0.7	〃	C区 11トレス	南3層	97 06 16	27
218	〃 19	〃 -6	〃 〃	(4.4)	(14.8)	0.5	〃	C区 69	3層	98 02 03	101
219	〃 20	〃 -7	〃 ・壺	(5.3)	(22.4)	0.8	〃	C区 69	3層	98 01 30	227
220	〃 21	〃 -8	〃 〃	(7.5)	(27.6)	1.0	〃	C区 69	3層	98 01 30	229

番号	挿図番号	図版番号	器種	高さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	時期	出土遺構・層位	出土日	実測 番号	備考	
221	第25図22	図版33b-2	土師器・甕	(16.5)	27.0	0.6	奈良	C区 69 3層	98 01 30	261		
222	〃 23	〃 -1	須恵器・ねり鉢	(3.2)	28.8	0.7	〃	C区 11トレス(3層混)	97 06 11	187		
223	〃 24	〃 -4	瓦器・椀	(4.0)	16.8	0.7	鎌倉	C区 11トレス	98 06 04	138	楓葉型	
224	〃 25	〃 -3	弥生土器・壺	(4.0)	16.0	0.4	弥生後期	C区 70 3層	98 01 30	225	生駒西麓産	
225	第26図1	図版34a-1	須恵器・蓋	(1.2)	16.2	0.8	奈良	C区 11トレス	97 06 16	32		
226	〃 2	〃 -2	〃 〃	(1.6)	16.0	1.0	〃	C区 11トレス	97 06 16	33		
227	〃 3	〃 -3	〃 〃 杯	(1.7)	(14.6)	0.7	〃	C区 11トレス	97 06 16	109		
228	〃 4	〃 -4	〃 〃	4.3	15.2	0.5	〃	C区 11トレス	97 06 16	34		
229	〃 5	〃 -5	〃 〃	(3.7)	14.6	0.6	〃	C区 11トレス	97 06 16	337		
230	〃 6	〃 -6	〃 〃 壺	(3.8)	20.2	0.8	〃	C区 11トレス	97 06 16	66		
231	〃 7	図版34b	〃 〃	(4.5)	(14.0)	0.5	〃	C区 11トレス	97 06 16	99		
232	〃 8	図版34a-7	〃 〃	(3.3)	(16.7)	1.0	〃	C区 11トレス	97 06 16	31		
233	〃 9	〃 -8	土師器・鍋	(5.3)	19.9	0.5	〃	C区 11トレス	97 06 16	71		
234	〃 10	図版35b-1	須恵器・杯	(1.3)	(8.0)	0.5	〃	C区 地山面(2面)	98 02 12	102		
235	〃 11	図版35a-1	〃 〃	4.1	15.6	0.5	〃	C区 11トレス	97 06 14	51		
236	〃 12	〃 -2	〃 〃	4.9	16.4	0.7	〃	C区 11トレス	97 06 17	67		
237	〃 13	図版35b-2	〃 〃	3.5	12.9	0.5	〃	C区 11トレス	97 06 17	46		
238	〃 14	〃 -3	〃 〃 壺	(3.9)	(15.3)	0.6	〃	C区 11トレス	97 06 17	338		
239	〃 15	〃 -4	〃 〃 鉢	(7.8)	19.4	0.8	〃	C区 11トレス	97 06 17	30		
240	〃 16	図版34c	〃 〃	7.3	13.5	0.9	〃	C区 11トレス	97 06 17	336		
241	〃 17	図版34d	須恵器・不明	(8.0)	(7.2)	3.6	〃	C区 77 最終遺構面(2面)	98 02 04	333	器種不明・土製品	
242	〃 18	図版35c-1	〃 〃 杯	(2.4)	(15.0)	0.7	〃	C区 12トレス	耕土	97 06 19	13	
243	〃 19	〃 -2	〃 〃	(1.8)	(10.7)	0.7	〃	C区 11トレス	水田耕土	97 06 12	92	
244	〃 20	〃 -3	青磁・碗	(2.5)	18.0	0.5	鎌倉	C区 11トレス	水田耕土	97 06 12	26	
245	〃 21	〃 -4	須恵器・壺	(3.7)	1.4	1.6	奈良	C区 11トレス	排土中	97 06 19	70	
246	〃 22	〃 -5	〃 〃 杯	(1.9)	(12.7)	0.6	〃	C区 10トレス	排土中	97 06 27	279	
247	〃 23	〃 -6	〃 〃 膜	(3.3)	9.0	0.5	〃	C区 11トレス	排土中	97 06 25	65	
248	第27図1	図版38a	弥生土器・甕	(23.0)	(21.6)	0.6	弥生後期	D区 2トレス	1層	97 06 13	16	
249	〃 2	図版38b	須恵器・杯蓋	(4.2)	13.4	0.6	古墳中期	D区 2トレス	1層上面	97 06 11	1	天井部外面に刻線あり
250	〃 3	図版38c-1	〃 〃 甕	(4.1)	(19.1)	0.5	奈良	D区 5トレス	1層	97 05 22	2	
251	〃 4	〃 -2	土師器・甕	(7.6)	22.7	1.0	〃	D区 6トレス	1層	97 05 21	28	
252	〃 5	図版38d-1	〃 〃 高杯	(8.0)	(4.7)	0.9	〃	D区 6トレス	1層	97 05 21	59	
253	〃 6	〃 -2	〃 〃 楢	(2.8)	11.0	0.4	平安	D区 5トレス	1層	97 05 22	3	
254	〃 7	〃 -3	〃 〃 碗	(3.5)	14.3	0.4	〃	D区 8トレス	1層	97 06 10	36	
255	〃 8	〃 -4	〃 〃 小皿	1.6	7.2	0.6	鎌倉	D区 8トレス	1層	97 06 10	44	
256	〃 9	〃 -5	瓦器・椀	(2.3)	8.8	0.4	〃	D区 8トレス	1層	97 06 10	41	
257	〃 10	〃 -6	〃 〃	(1.4)	(13.3)	0.5	〃	D区 8トレス	1層	97 06 10	54	
258	〃 11	〃 -7	〃 〃	(1.3)	(6.9)	0.4	〃	D区 8トレス	1層	97 06 10	52	
259	〃 12	〃 -8	白磁・皿	(2.6)	11.0	0.5	平安末期	D区 82・83	1層	98 02 16	327	
260	〃 13	〃 -9	〃 〃 碗	(1.8)	16.5	0.4	〃	D区 88	1層	98 02 23	298	
261	〃 14	〃 -10	青磁・碗	(3.0)	17.2	0.5	鎌倉	D区 82・83	1層	98 02 16	325	
262	〃 15	〃 -11	須恵器・ねり鉢	(2.7)	18.6	0.6	〃	D区 6トレス	1層	97 05 22	24	束縛
263	〃 16	図版39a-1	縄文土器・深鉢	(7.1)	(8.9)	0.8	縄文後期	D区 63	2層	98 02 27	302	
264	〃 17	〃 -2	〃 〃	(2.2)	(9.7)	1.1	〃	D区 2トレス	2層	97 06 12	17	
265	〃 18	〃 -3	須恵器・蓋	0.8	14.6	0.7	奈良	D区 84	2層	98 02 23	301	硯に転用・墨痕あり
266	〃 19	〃 -4	〃 〃	0.9	15.3	0.6	〃	D区 91	2層	98 02 26	295	
267	〃 20	〃 -5	〃 〃	1.1	15.5	0.7	〃	D区 49	2層	98 02 18	324	
268	〃 21	〃 -6	〃 〃 高杯	(1.3)	13.5	0.5	〃	D区 92	2層	98 02 27	297	
269	〃 22	〃 -9	綠釉陶器・皿	(1.7)	(10.9)	0.6	〃	D区 89	2層	98 03 02	321	
270	〃 23	〃 -8	瓦器・椀	(4.4)	17.8	0.4	平安後期	D区 83	2層	98 02 19	293	楓葉型
271	〃 24	〃 -7	〃 〃	(2.4)	9.1	0.6	鎌倉	D区 81	2層	98 02 23	305	
272	〃 25	図版39b-1	白磁・碗	(2.5)	(9.7)	1.0	平安末期	D区 2トレス	2層	97 06 19	6	
273	〃 26	〃 -2	〃 〃	(3.7)	13.7	0.5	〃	D区 84	2層	98 02 23	299	
274	〃 27	〃 -3	青磁・碗	(3.0)	20.0	0.5	鎌倉	D区 83	2層	98 02 19	292	
275	〃 28	〃 -4	須恵器・ねり鉢	(8.5)	(29.8)	1.0	〃	D区 89	2層	98 03 02	296	

番号	挿図番号	図版番号	器種	高さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	時期	出土遺構・層位	出土日	実測 番号	備考
276	第28図1	図版40a-1	土師器・甕	(4.3)	34.9	0.7	奈良	D区 5トレ 2層上面	97 05 20	4	
277	〃 2	〃 - 2	〃 "	(4.2)	32.6	0.8	〃	D区 80 2層	98 02 18	300	
278	〃 3	〃 - 3	〃 · 羽釜	(5.6)	(26.8)	0.6	鎌倉	D区 88 2層	98 03 02	294	
279	〃 4	図版39b-5	須恵器・杯	(3.2)	(13.8)	0.5	奈良	D区 4トレス 3層南半	97 05 21	7	
280	〃 5	〃 - 6	〃 · 壺	(4.8)	(16.1)	0.8	〃	D区 4トレス 3層	97 05 21	10	
281	〃 6	〃 - 7	〃 · 甕	(3.8)	(7.2)	0.9	〃	D区 6トレス 3層	97 05 28	22	
282	〃 7	図版40a-5	土師器・小皿	0.8	8.2	0.3	平安後期	D区 4トレス 床土	97 05 17	11	
283	〃 8	〃 - 4	〃 "	1.8	(7.9)	0.5	鎌倉	D区 9トレス 耕土	97 05 31	12	
284	〃 9	図版40e-1	須恵器・壺	(3.2)	(7.3)	0.6	奈良	D区 1トレス 床土	97 05 09	9	
285	〃 10	〃 - 2	土師器・椀	(4.7)	15.7	0.4	平安前期	D区 1トレス 1層	97 05 17	8	
286	〃 11	〃 - 3	繩文土器・深鉢	(5.5)	(7.2)	0.7	繩文後期	D区 13トレス 1層	97 05 10	285	
287	〃 12	〃 - 4	土師器・甕	(3.0)	(4.7)	0.8	奈良	D区 13トレス 1層	97 05 12	286	
288	第29図1	図版41a-1	製塙土器	(3.8)	8.1	1.0	奈良	B区 21 2層	98 01 20	218	
289	〃 2	〃 - 2	〃	(5.2)	9.1	1.4	〃	B区 24 穴30	98 01 20	158	
290	〃 3	〃 - 3	〃	(5.7)	9.5	1.3	〃	B区 16トレス 1層	97 05 27	122	
291	〃 4	〃 - 4	〃	(5.9)	11.1	1.4	〃	B区 24 穴70	98 01 21	343	
292	〃 5	〃 - 5	〃	(4.7)	11.3	1.3	〃	B区 23 2層	97 12 22	270	
293	〃 6	〃 - 6	〃	(6.9)	11.4	1.4	〃	B区 24 3層	98 01 17	276	
294	〃 7	〃 - 7	〃	(5.8)	11.6	1.5	〃	B区 15トレス 排土	97 07 03	133	
295	〃 8	〃 - 8	〃	(4.0)	11.8	1.3	〃	B区 23 穴26	98 01 20	152	
296	〃 9	図版42a-2	〃	(5.2)	(12.1)	1.2	〃	A区 21トレス 1層	97 06 04	196	
297	〃 10	図版41a-9	〃	(8.3)	12.7	1.4	〃	B区 55 穴79	98 01 21	238	
298	〃 11	図版42a-3	〃	(5.6)	12.5	1.3	〃	D区 56 3層	98 03 02	328	
299	〃 12	〃 - 4	〃	(6.3)	12.3	1.5	〃	B区 24 穴70	98 01 21	236	
300	〃 13	〃 - 5	〃	(7.0)	12.6	1.2	〃	B区 24 穴47	98 01 21	157	
301	〃 14	図版43a-1	〃	(5.4)	13.1	1.0	〃	B区 16トレス 排土中	97 07 01	115	
302	〃 15	〃 - 2	〃	(4.2)	13.2	1.4	〃	B区 15トレス 1層上面	97 05 23	128	
303	〃 16	〃 - 3	〃	(5.8)	13.5	1.5	〃	B区 15トレス 1層	97 05 23	37	
304	〃 17	〃 - 4	〃	(5.0)	14.8	1.4	〃	B区 24 2層	98 01 13	256	
305	〃 18	〃 - 5	〃	(4.2)	15.1	1.2	〃	B区 26 3層	98 01 12	148	軽石含有
306	〃 19	〃 - 7	〃	(8.2)	12.0	0.8	〃	B区 15トレス 1層	97 05 23	40	
307	〃 20	〃 - 8	〃	(8.1)	14.8	1.3	〃	B区 25 穴67	98 01 21	234	
308	〃 21	〃 - 6	〃	(5.2)	14.7	0.9	〃	B区 24 3層	98 01 14	322	軽石含有
309	〃 22	〃 - 9	〃	(5.1)	15.5	1.4	〃	B区 24 2層	98 01 14	288	
310	〃 23	〃 - 10	〃	(7.1)	16.2	0.9	〃	B区 24 穴84	98 01 21	179	
311	〃 24	〃 - 11	〃	(4.6)	16.8	1.1	〃	B区 24 2層	98 01 14	266	
312	〃 25	図版44a-1	〃	(5.3)	16.8	1.3	〃	B区 24 穴84	98 01 21	176	
313	〃 26	〃 - 2	〃	(3.8)	17.1	1.4	〃	B区 25 3層	98 01 16	291	
314	〃 27	〃 - 3	〃	(4.9)	17.3	1.6	〃	B区 14トレス 3層	97 05 20	124	
315	〃 28	〃 - 4	〃	(6.1)	17.9	1.4	〃	B区 15トレス 1層	97 05 26	49	
316	第30図1	〃 - 5	〃	(4.2)	9.0	1.1	〃	B区 24トレス 穴70	98 01 21	237	
317	〃 2	〃 - 6	〃	(5.1)	11.1	0.9	〃	B区 15トレス 1層	97 05 23	53	
318	〃 3	〃 - 7	〃	(3.9)	12.8	1.1	〃	B区 24 2層	98 01 16	323	
319	〃 4	〃 - 8	〃	(8.3)	15.4	1.3	〃	B区 15トレス 1層	97 05 23	132	
320	〃 5	図版45a-1	〃	(7.0)	19.0	1.5	〃	B区 24 3層	98 01 17	277	軽石含有
321	〃 6	〃 - 2	〃	(3.6)	8.8	0.8	〃	B区 24 穴30	98 01 20	159	
322	〃 7	〃 - 3	〃	(3.0)	10.1	1.2	〃	B区 17トレス 排土～床土	97 05 27	335	
323	〃 8	〃 - 4	〃	(3.3)	11.3	1.0	〃	B区 24 穴27	98 01 20	163	
324	〃 9	〃 - 5	〃	(2.1)	15.2	1.0	〃	B区 24 穴29	98 01 20	162	
325	〃 10	〃 - 6	〃	(4.1)	19.0	0.9	〃	A区 21トレス 溝内	98 06 10	172	
326	〃 11	〃 - 7	〃	(5.5)	8.9	0.9	〃	B区 24 穴135	98 01 22	180	軽石含有
327	〃 12	〃 - 8	〃	(5.0)	9.5	0.8	〃	D区 56 3層	98 03 02	326	〃
328	〃 13	図版46a-1	〃	(3.3)	9.9	1.0	〃	C区 78 地山面(2面)	97 05 23	129	
329	〃 14	〃 - 2	〃	(4.3)	12.5	0.7	〃	B区 56 穴54	98 01 21	156	
330	〃 15	〃 - 3	〃	(4.1)	14.2	0.9	〃	B区 56 穴85	98 01 21	240	

第4章 試掘調査



第35図 試掘調査区配置図

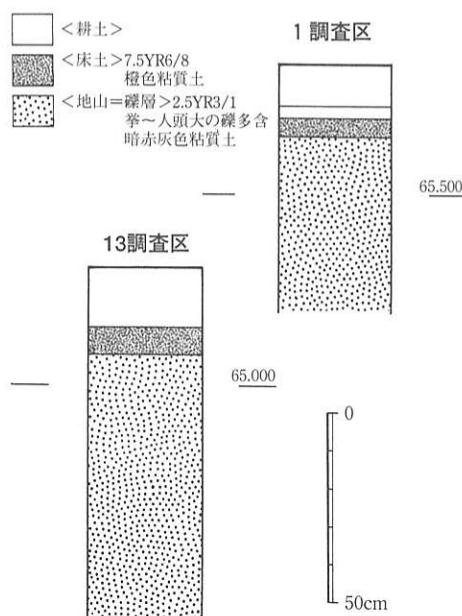
試掘調査は、本調査に先立ち、1997年4月1日より同7月31日までの間、今回本調査を行った道路予定地の南辺と北辺の両側に、各水田ごと幅2mの調査区を25ヶ所設定して実施した。遺構の有無、および遺構が検出された場合には遺構面の深度を確認することを目的とする調査である。

25ヶ所中、23ヶ所は本調査において再度詳細な調査を行っているため、第3章でまとめて報告した。残りの2ヶ所（1・13調査区）は、本調査の調査区北端を通る東西道路より北側にあり、試掘調査の成果に基づく大阪府教育委員会の調査不要との判断により、本調査は実施しなかった。

以下に、この1・13調査区の試掘成果を簡単に報告する。

両調査区とも、現代の耕土・床土の直下が直ちに礫層となる。礫層中には人頭大の石までもが含まれる。ちょうど南方には、丘陵の谷部を塞き止めて構築した溜め池があることから、この礫は溜め池を造る以前に南方の谷から北の勝尾寺川に向かって流れ出した土石であると考えられる。

出土遺物は土師器・須恵器のほかに1調査区からはサヌカイトの剝片、13調査区からは縄文土器片（第28図11）・石鏃（第32図7）などが出土した。



第36図 試掘調査区基本層序柱状図

第5章 自然科学的調査

庄田遺跡に関する製塩土器の胎土分析

パリノ・サーヴェイ株式会社

はじめに

畿内内陸部の遺跡から出土する古代の製塩土器の存在は、当時の塩をめぐる流通形態や社会情勢などを示唆する情報の一つとして注目されている。ここでは、製塩土器の材質すなわち胎土に着目し、胎土中に含まれる鉱物や岩石の種類構成から、製塩土器の地質学的背景を考える。製塩土器の地質学的背景とは、土器の材料となった粘土や砂の採取地を含む周辺地域の地質のことであり、土器の製作地ひいては製塩が行われた地域をも示唆するものもある。ただし、具体的な地域の特定には、分析例の蓄積と製塩土器に関わる各地の発掘調査成果など考古学的な側面での事例の蓄積が必要である。しかし、現時点でも遺跡内における製塩土器の胎土の状況を把握し、また遺跡間での比較を行うことにより、製塩土器の動きすなわち塩の動態の一端を考えることはできる。本分析は、その端緒として位置付けられる。

1. 試料

表1 試料表

試料は、茨木市溝昨遺跡、箕面市の勝尾寺川右岸に位置する庄田遺跡、羽曳野市古市の駒ヶ谷遺跡、塩の生産地遺跡として岬町の山田海岸遺跡の各地で出土した製塩土器の破片32点である。試料には便宜的に試料番号1～32を付けた。内訳は、溝昨遺跡が2点（試料番号1、2）、庄田遺跡が12点（試料番号3～14）、駒ヶ谷遺跡が12点（試料番号15～26）、山田海岸遺跡が6点（試料番号27～32）である。溝昨遺跡の試料は古墳時代とされているが、他の試料は全て奈良時代のものとされている。

各試料の注記などは表1に示す。

遺跡名	試料番号	注記など	重鉱物	薄片
溝昨	1	3D区 K13e7-III 穴362(1)		○
	2	3D区 K13e7-III 穴362(2)		
庄田	3	B区-22 3層 152	○	○
	4	B区-22 3層 140(1)	○	○
	5	B区-22 3層 140(2)	○	○
	6	B区-22 3層 140(3)	○	○
	7	B区-23 穴34 191(1)	○	○
	8	B区-23 穴34 191(2)	○	○
	9	B区-23 3層 153(1)	○	○
	10	B区-23 3層 153(2)	○	○
	11	B区-24 穴45 202	○	○
	12	B区-24 穴48 205	○	○
	13	B区-25 3層 162	○	○
	14	B区-55 3層 164	○	○
	15	井戸424 No.2	○	○
	16	井戸424 No.3	○	○
駒ヶ谷	17	井戸424 No.4	○	○
	18	井戸424 No.5	○	○
	19	井戸424 No.14	○	○
	20	井戸424 No.15	○	○
	21	井戸424 No.16	○	○
	22	井戸424 No.17	○	○
	23	井戸424 No.18	○	○
	24	井戸424 No.19	○	○
	25	井戸424 No.20	○	○
	26	井戸424 No.21	○	○
山田海岸	27	D07-PQ 19-00 III-B 178-2	○	○
	28	D07-PQ 19-00 157-3	○	○
	29	D07-PQ 19-00 162-2	○	○
	30	D07-PQ 19-00 I-A 177-5	○	○
	31	D07-PQ 19-00 157-4	○	○
	32	D07-PQ 19-00 I-A 177-1	○	○

2. 分析方法と試料の選択

現在、土器の胎土分析は、単に肉眼で観察する方法から蛍光X線などの機器分析により元素組成を出す方法まで様々な手法が用いられている。当社ではこれまでに、試料に含まれる細砂径の重鉱物を取り出してその組成を特徴とする重鉱物分析を最も多く行ってきた。重鉱物分析は、結果の表示が簡単でかつ特徴を把握しやすく、ある程度定量的な比較のできるデータであることから、多数の試料を比較し、その傾向を見出すのに適した手法である。また、これまでに堺市小阪遺跡から出土した縄文土器や土師器を中心とした試料について重鉱物分析を行い、胎土の分類と周辺地質との関係などにおいて成果が得られている。したがって、今回も重鉱物分析を用いる。ただし、重鉱物分析は胎土中に細砂粒径の重鉱物が多く含まれていなければ分析結果を得ることはできないという条件がある。例えば、細砂径の重鉱物がほとんど含まれない須恵器や陶磁器の分析には適さない。今回の試料の胎土は粗粒な砂を含んでいるが、重鉱物が多いかどうかはわからない。また、試料とした破片の中には小さなものもあり、処理後に充分な量の重鉱物を得られないという状況も予想された。ここでは、それを補う手法として薄片観察を用いる。薄片観察では、数値的なデータは得られないが、重鉱物分析では捉えられなかった軽鉱物や岩石片の種類も調べることができる。また破片の大きさによりデータが出せないということもない。

以上のことから、本分析では、小さな破片を除いた24点の試料について重鉱物分析を行い、溝咲遺跡の1点（試料番号2）を除く31点の試料について薄片観察を行った。各分析を行った試料は、表1に示す。各分析の処理手順は以下に述べる。

a) 重鉱物分析

試料は、適量をアルミナ製乳鉢を用いて粉碎、水を加え超音波洗浄装置により分散、#250の分析篩により水洗、粒径1/16mm以下の粒子を除去する。乾燥の後、篩別し、得られた1/4mm-1/8mmの粒子をポリタンクスチレン酸ナトリウム（比重約2.96に調整）により重液分離、重鉱物のプレパラートを作製した後、偏光顕微鏡下にて同定した。鉱物の同定粒数は、250個を目標とした。同定の際、不透明な粒については、斜め上方からの落射光下で黒色金属光沢を呈するものを「不透明鉱物」とし、それ以外の不透明粒および変質等で同定の不可能な粒子は「その他」とした。

b) 薄片観察

試料をダイアモンドカッターで切断、正確に0.03mmの厚さに研磨し、薄片を作製する。薄片は偏光顕微鏡により観察する。

薄片を顕微鏡下で観察すると胎土中には碎屑片として鉱物片・岩片が含まれている。また、素地の主要構成物となる粘土鉱物・碎屑片は高温で焼成されているため、その一部に加熱変化を生じていることが認められる。本文では、胎土の碎屑片の種類・量比を明らかにするとともに、鉱物の加熱変化状態から焼成温度を推定した。

3. 結果

(1) 重鉱物分析

各遺跡の試料ともに全体的には「その他」とした変質粒が非常に多く、同定のできた重鉱物粒の割合が比較的低い（表2）。しかし、同定のできた重鉱物の種類には各遺跡ともそれぞれ特徴が把握できる。なお、24点の試料のうち、庄田遺跡の試料番号10と14、駒ヶ谷遺跡の試料番号16、21、23、24の計6点は、同定粒数が100個未満であった。これらの結果は、グラフにはせず比較的多いと考えられる鉱物名を

提示するに留めた（図1）。以下に各遺跡ごとに結果を述べる。

a) 庄田遺跡

同定粒数100個以上を数えられた試料6点のうち、ほとんど「その他」からなる組成が2点（試料番号3、7）、ザクロ石を特徴とする組成が2点（試料番号4、6）あり、他に緑レン石と不透明鉱物を特徴とするもの、単斜輝石（ほとんど透輝石と思われる）、角閃石、緑レン石を特徴とするものがそれぞれ1点ずつある（試料番号8、12）。同定粒数100個未満の試料のうち、試料番号10は輝石と角閃石、ジルコンがあり、試料番号14は角閃石とザクロ石が認められた。

b) 駒ヶ谷遺跡

同定粒数100個以上を数えられた試料7点のうち、ほとんど「その他」からなる組成が3点（試料番号19、25、26）あるが、これらのうち試料番号19と26はジルコンを微量含む。残る4点のうち、角閃石と酸化角閃石およびジルコンを特徴とする組成が2点（試料番号17、18）あり、他に角閃石とジルコンを特徴とするものと角閃石、酸化角閃石、黒雲母、不透明鉱物を特徴とするものがそれぞれ1点ずつある（試料番号15、22）。同定粒数100個未満の試料のうち、試料番号16は緑レン石があり、試料番号21と24は斜方輝石と酸化角閃石、試料番号23はジルコンが認められた。

c) 山田海岸遺跡

5点の試料ともに角閃石を特徴とするが、試料番号29はさらに酸化角閃石を含み、試料番号32は不透明鉱物とジルコンを伴う。

(2) 薄片観察

観察結果を一覧表にして表3に示す。以下に観察された各項目について説明する。

表2 胎土重鉱物分析結果

遺跡名	試料番号	カシラン石	斜方輝石	単斜輝石	角閃石	酸化角閃石	黒雲母	ジルコン	ザクロ石	緑レン石	電気石	紅柱石	不透明鉱物	その他	合計	
庄田	3	1	0	0	0	1	0	0	0	0	0	0	0	248	250	
	4	0	0	0	1	3	1	1	33	0	0	0	1	210	250	
	6	0	3	1	4	14	0	0	47	1	0	0	0	180	250	
	7	0	2	2	0	0	0	4	0	0	0	0	0	242	250	
	8	0	2	1	3	0	0	0	0	28	1	1	30	184	250	
	10	0	2	2	2	1	0	3	0	0	0	0	1	81	92	
	12	1	5	21	33	0	2	4	0	8	1	0	6	47	128	
	14	0	0	0	1	0	0	0	1	0	0	0	0	82	84	
駒ヶ谷	15	1	5	1	45	8	0	11	0	0	0	0	0	179	250	
	16	0	0	0	0	0	3	0	2	14	0	0	0	47	66	
	17	0	1	0	44	91	7	9	0	0	1	0	2	95	250	
	18	0	12	2	14	82	0	13	0	0	0	1	2	124	250	
	19	0	2	0	0	0	1	10	0	0	1	1	0	228	243	
	21	0	1	0	0	1	0	0	0	0	0	0	0	73	75	
	22	0	1	2	2	5	9	0	0	0	0	0	9	106	134	
	23	0	0	0	0	0	0	2	0	0	0	0	0	8	10	
	24	0	1	0	0	1	0	0	0	0	0	0	0	7	9	
	25	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	250	250	
山田海岸	26	0	1	0	0	0	0	2	0	0	0	0	0	0	160	163
	27	0	5	0	25	0	0	0	1	0	0	0	4	93	128	
	28	1	4	0	149	4	0	1	0	4	0	0	1	86	250	
	29	0	9	1	48	23	0	1	0	0	0	0	3	121	206	
	30	2	3	1	17	1	0	0	0	1	2	0	1	145	173	
	32	0	2	0	29	2	0	3	1	2	0	0	20	44	103	

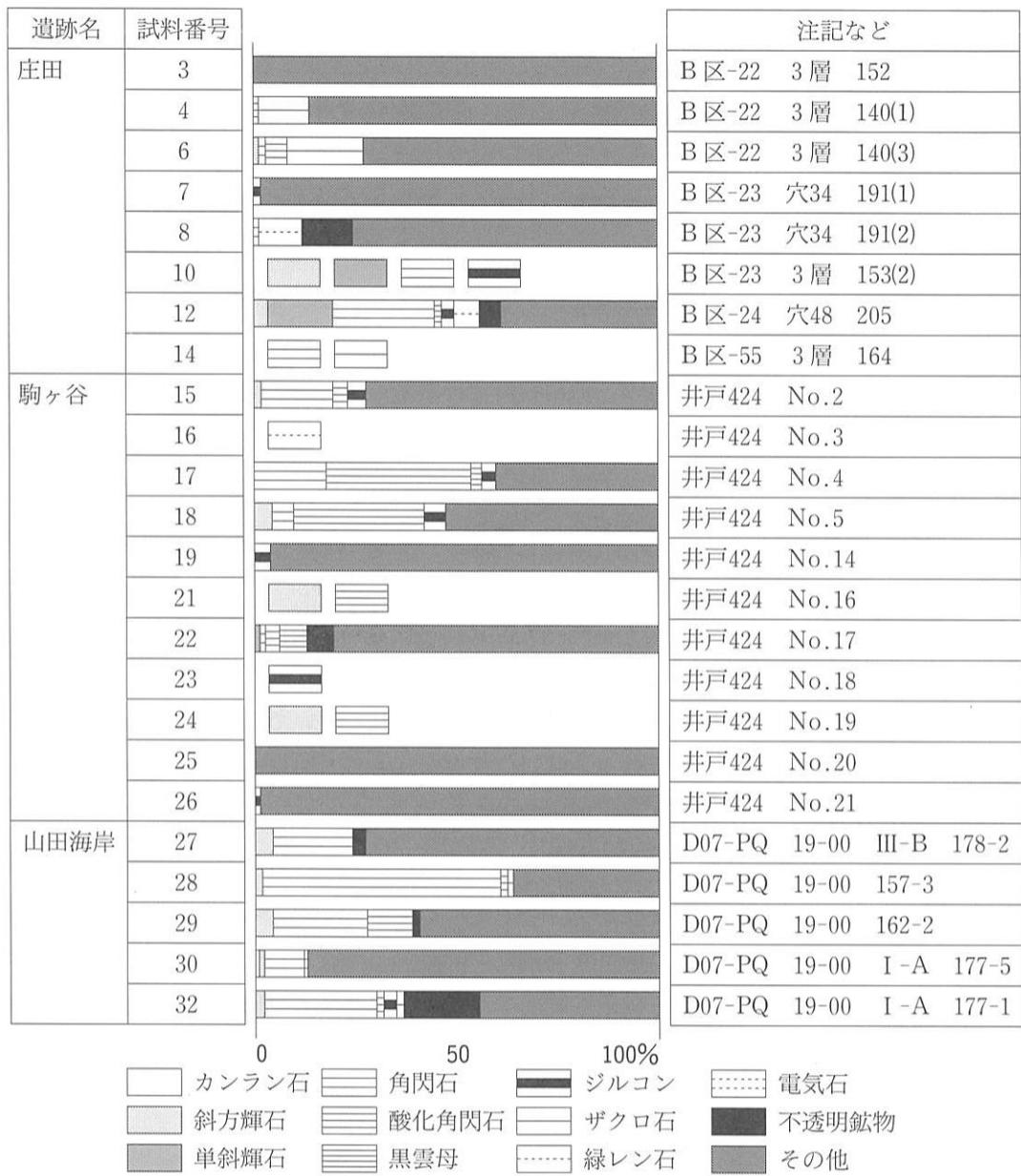


図1 胎土重鉱物組成

a) 鉱物片

試料には鉱物片として、石英・カリ長石・斜長石・角閃石が多くの試料に含まれる。この他に存在する鉱物は黒雲母・白雲母・緑レン石などである。

石英：鉱物片としての石英は全試料（31試料）に中量ないし微量の範囲で存在し、少量含まれる試料がもっとも多い（15試料）。破片状または他形粒状を呈し、一部は波状消光が顕著である。石英片にはクラックの生成や部分溶融などの加熱変化は認められず、高温加熱された形跡はない。各試料に含まれる石英の最大粒径の平均は1.29mmで粗粒である。

カリ長石：25試料に少量～微量で存在する。カリ長石は他形粒状を示す正長石のほかにパーサイトおよびマイクロクリンとして含まれ、一部にはミルメカイト組織も認められる。各試料に含まれるカリ長石片の最大粒径は1.70～0.20mm、最大粒径の平均値は0.86mmを示す。比較的大型で、花崗岩起源と推

定されるものが大部分である。

一般に陶磁器中のカリ長石は約1,150°Cで溶化し、溶化ガラスを生成する。観察試料では1試料(駒ヶ谷遺跡試料番号21)にカリ長石の周縁部が微溶化している現象がみられ、1,150°C±の焼成温度と推定される。

斜長石：斜長石は18試料に少量～微量の範囲で存在し、破片状～板状を呈する。各試料中の最大粒径は1.50～0.08mm、最大粒径の平均値は0.60mmを示す。集片双晶が発達し、一部は風化作用により生成したセリサイトをそのまま残存し、高温焼成で生ずる加熱変化はみられない。

黒雲母：黒雲母は7試料に認められ、葉片状または長柱状を呈する。駒ヶ谷遺跡出土の3試料は異常に黒雲母に富み、中量～少量で含まれるが、他の試料には微量～きわめて微量で含まれる。各試料に含まれる黒雲母の最大粒径の平均は0.79mmを示す。黒雲母は褐色～赤褐色の多色性が顕著で加熱による変化はみられない。

角閃石：11試料に微量～きわめて微量で存在し、他形の破片粒状を呈する。角閃石は淡緑色～淡黄褐色の多色性を示し、大部分は弱い酸化角閃石化を受けている。

単斜輝石：単斜輝石はきわめて微量で1試料(庄田遺跡試料番号5)に検出される。

b) 岩片

岩片として最も多く検出される岩種は砂岩で23試料に認められ、次いでチャートが18試料に、花崗岩が13試料に、凝灰岩が12試料に、石英片岩が10試料に含有される。このほか、文象岩・流紋岩・デイサイト・白雲母片岩・変質岩・火山ガラスの岩片が認められる。

砂岩：23試料に検出される。一般には亜角礫状を呈する細粒～中粒砂岩の岩片が少量～微量の範囲で含まれるが、駒ヶ谷遺跡の1試料(試料番号25)には中量～少量で異常に多く含まれ、粒径最大5.8mmに達するものがあり、平均最大粒径は1.67mmで粗粒である。

チャート：チャートは18試料に少量～微量の範囲で存在し、大部分は亜角礫状の岩片である。最大粒径は2.40～0.10mmを示し、平均最大粒径は0.73mmである。チャートは微晶質石英の集合体となっている。チャート岩片が検出される現象は、原土の供給後背地にチャート層が発達する中～古生層が分布していることを示唆している。

頁岩：2試料に亜角礫状を呈して微量で含まれる。いずれもセリサイトを主成分鉱物とする。セリサイトは加熱変化を示さず、残留している。試料の最大粒径の平均は1.0mmである。

泥岩：5試料に少量～微量で含まれる。亜角礫～亜円礫状を呈する粘土岩の岩片で、非晶質化したものとスメクタイト質の組織を残留するものがある。試料中の泥岩の平均最大粒径は1.05mmを示す。新第三紀以降の若い地層に起源していると考えられる。

凝灰岩：12試料に少量～微量の範囲で検出される。亜円礫状～亜角礫状を呈し、1) 非晶質のガラス質物質を主構成物とし、一部はセリサイト化している凝灰岩と、2) 基質が珪長質鉱物で交代され、完晶質化し、石英を斑晶状に伴う濃飛型の凝灰岩、の二種が認められる。試料中の凝灰岩の最大粒径は3.40～0.15mmで、平均最大粒径は1.11mmを示す。変質した凝灰岩は古第三系の濃飛流紋岩に属していると考えられる。

流紋岩・デイサイト：流紋岩が3試料、デイサイトが1試料検出される。最大粒径平均はそれぞれ0.79mmおよび0.65mmである。凝灰岩の一部と同様に濃飛流紋岩に起源する岩片であろう。

花崗岩：13試料に花崗岩の岩片が含まれる。主に石英・カリ長石・斜長石で構成される酸性深成岩の

表 3 薄片觀察結果

注	量比	： ◎：多量 ○：多量～中量 ○：中量 ○～△：中量～少量 △：少量 △～+：少量～微量 +：微量 +～±：微量～微量 ±：微量～微量
	色調	： ○：濃色 ○～△：濃色～中間 △：中間 △～+：中間～淡色 +：淡色
	配向性	： ○：強い ○～△：強い～中程度 △：中程度 △～+：中程度～弱い +：弱い
	粘土量比	： ○：多い ○～△：多い～中程度 △：中程度 △～+：中程度～少ない +：少ない
	海法	： ○：良好 ○～△：良好～中程度 △：中程度 △～+：中程度～不良 +：不良

岩片で、稀に黒雲母が含まれる。一般には少量～微量の範囲で検出されるが、駒ヶ谷出土の1試料には中量～少量で含まれる。亜角礫状を呈する岩片で試料中の花崗岩の最大粒径は4.80～0.30mm、平均最大粒径は1.75mmで粗粒である。

文象岩：主としてミルメカイトを主成分鉱物とする岩片で、4試料から微量で検出される。平均最大粒径は0.69mmである。領家帶花崗岩体の周縁部に発達する半深成岩相の一部であろうと推定される。

石英片岩：10試料に少量～微量で検出される。亜角礫状の形態で、片理構造が顕著な細晶～中晶質石英で構成される。雲母片岩とともに広域変成帯に由来する岩片で、1試料は千枚岩質である。試料中の石英片岩の最大粒径は3.90～0.32mm、平均最大粒径は1.16mmで粗粒である。

雲母片岩：2試料に少量の黒雲母千枚岩（庄田遺跡試料番号5）および微量の白雲母片岩（庄田遺跡試料番号13）として検出される。

火山ガラス：1試料（庄田遺跡試料番号7）に微量で含まれる。不規則形の非晶質ガラスで軽石の断片と考えられる。

変質岩：1試料（庄田遺跡試料番号8）に微量で含まれる。緑れん石・曹長石で構成される緑色岩の一種で、変成帯から由来した可能性が高い。

c) 素地鉱物

基質（粘土部）は含鉄セリサイトを主要粘土鉱物とし、少量の石英細片（0.02mm以下）を伴う。多くの試料には少量～微量の酸化鉄（赤鉄鉱）が含まれ、その一部には酸化鉄結核が認められる。

粘土鉱物：粘土鉱物は8試料に多量、8試料に中量～少量、9試料に少量～微量で含まれ、6試料では完全に非晶質化している。粘土鉱物は微細な鱗片状またはやや粗粒な長柱状を呈することからセリサイトと判定される。ただし、セリサイトは淡褐色に着色し、水酸化鉄に汚染された含鉄セリサイトとなっている。セリサイトは鉱物学的には白雲母と同質の鉱物であるが、陶磁器等の素地を構成する微細な鱗片状粘土鉱物に対して用いられている。セリサイトは可塑性が高く、素地を構成する重要な粘土鉱物の一つであるが、高温焼成で加熱変化を受け易く、900°C以上の焼成温度では非晶質化することが知られている。一般的にはセリサイトが中量以上残存する試料は900°C以下の温度で焼成されたと推定される。なお、角閃石・輝石類が含まれる試料の素地を構成するセリサイトは一般に含鉄質である特徴がみられるが、本観察試料もその一例となる。

酸化鉄：試料断面が赤味を帯びる試料に含まれ、観察試料では2試料に比較的多く（中量～少量）含まれ、19試料では少量～微量、3試料に微量で含まれる。粘土中の含水酸化鉄（褐鉄鉱）は、実験的には320～350°Cの加熱で脱水し、赤鉄鉱に転移するため、焼成物中では結核状および鉱染状を呈する赤鉄鉱として存在する。原料粘土としての観点からみると、焼成時に生じた赤鉄鉱は比較的低温で素地を膠着し、焼成温度を低下させる効果が高い物質の一つと考えられる。

d) 焼成温度

一般に粘土を高温焼成すると、その温度条件と化学組成に対応した鉱物が晶出したり（代表的な鉱物はムライト）、溶融・非晶質化などの現象がみられる。観察試料では、焼成温度の推定に次の現象について検討して、指針として適用した。

1) 素地を構成する主要粘土鉱物のセリサイトがほとんど加熱変化（非晶質化）を受けていない試料の焼成温度は900°Cと推定される。

2) 角閃石が存在する場合、角閃石が800°C以上の加熱を受けると酸化角閃石に変化することが知られて

いる。酸化角閃石はさらに900°C以上に加熱されると、鉱物片の周縁から内側に黒色鉄鉱物化し、最終的には不透明鉱物に変化する。酸化角閃石の黒色化で各段階での加熱温度の推定も可能である。

3) セリサイトの一部は確実に加熱変化を受けているが、大部分が残存し、石英・長石類に加熱変化がみられない試料の焼成温度は900°C±と見積もり、セリサイトの残存量が中間的な状態に達した状態では900+と推定する。

4) セリサイトの大部分は加熱により非晶質化しているが、石英・カリ長石・斜長石にあまり加熱変化がみられない試料の焼成温度を1,150°C-と推定される。

5) 1,150°C以上の焼成温度は、曹長石の溶化、カリ長石の溶化、ムライトの晶出などの現象で判定する。

観察試料の場合、加熱変化は1)～4)にわたる範囲内にあり、各試料の推定焼成温度は以下のように判定され、約900°Cで焼成された試料が11、900～1,150°Cで焼成された試料は19試料、1,150°Cで焼成された試料は1試料となる。

900°C- (9試料)：庄田遺跡；試料番号8、12

駒ヶ谷遺跡；試料番号15、16、17

山田海岸；試料番号27、29、30、32

900°C± (2試料)：駒ヶ谷遺跡；試料番号18

山田海岸；試料番号28

900°C+ (6試料)：庄田遺跡；試料番号11

駒ヶ谷遺跡；試料番号19、20、22、24、25

1,150°C- (13試料)：溝呂遺跡；試料番号1

庄田遺跡；試料番号3～7、9、10、13、14

駒ヶ谷遺跡；試料番号23、26

山田海岸；試料番号31

1,150°C± (1試料)：駒ヶ谷遺跡；試料番号21

e) 遺跡ごとにみた薄片の特徴

表3を概観すると以下に述べるような各遺跡の傾向が見出せる。

庄田遺跡：碎屑片は一般に粗粒で、とくに石英(最大粒径2.8mm)、砂岩(2.8mm)、凝灰岩(3.40mm)、花崗岩(4.8mm)、石英片岩(3.9mm)、雲母片岩(3.8mm)などで著しい。庄田遺跡全体では斜長石片に富む傾向が見られるが、詳細に見た場合、庄田遺跡出土品でも一部の試料には斜長石片が欠落している。このような試料では砂岩・凝灰岩の岩片に富み、花崗岩の岩片に乏しい傾向が見られる。駒ヶ谷遺跡：試料番号15、17、18の3試料が酷似した組織を示し、いずれも含鉄セリサイト中に粗い黒雲母を混在する組織を示す。他の出土品はいずれも黒雲母を含まず、チャート・砂岩・結晶片岩に富み、花崗岩を含まない特徴を有している。

山田海岸遺跡：全体的に焼成温度が低く、含鉄セリサイトを主成分鉱物とする粘土で製造された特徴を有する。岩片としてはチャート・砂岩・結晶片岩(石英片岩)に富み、花崗岩片はほとんど含まれない。

4. 考察

(1) 胎土の分類

各遺跡における胎土の重鉱物組成や鉱物片、岩石片の特徴は前項で述べた通りであるが、これらの結果をまとめると各遺跡における製塙土器の胎土は以下のように整理される。

a) 溝昨遺跡

カリ長石を含まず、斜長石と流紋岩を特徴とし、チャートと砂岩を伴う胎土。今回は1試料の薄片観察のみの結果であるが、これと類似する胎土は、今回の他の遺跡の試料には認められない。

b) 庄田遺跡

重鉱物分析により4種類の胎土が比較的明瞭に認識されたが、その中でほとんど「その他」からなる重鉱物組成の試料は、薄片観察により異なる胎土であることが識別できる。したがって、少なくとも以下に示す5種類の胎土が庄田遺跡の製塙土器の中には存在する。

1) 重鉱物組成ではほとんど「その他」からなるが、薄片ではカリ長石、斜長石、花崗岩を特徴とし、砂岩を伴う。試料番号3に認められる胎土である。

2) 重鉱物組成ではほとんど「その他」からなるが、薄片ではカリ長石、斜長石を含まず、砂岩と凝灰岩を特徴とする。試料番号7に認められる胎土である。

3) 重鉱物組成ではザクロ石を特徴とし、薄片ではカリ長石、砂岩、花崗岩を特徴とする。試料番号4、6に認められる胎土である。重鉱物組成からは試料番号14もこれに分類される可能性があるが、薄片において花崗岩が認められないことから、庄田遺跡における6番目の胎土となる可能性もある。

4) 重鉱物組成では緑レン石と不透明鉱物を特徴とし、薄片では凝灰岩を特徴とし、カリ長石、斜長石、頁岩、砂岩を伴う。試料番号8に認められる胎土である。

5) 重鉱物組成では単斜輝石、角閃石、緑レン石を特徴とし、薄片ではカリ長石、斜長石および花崗岩を特徴とする。試料番号12に認められる胎土であるが、重鉱物組成の傾向と薄片観察結果から試料番号10もこれに分類される可能性が高い。

c) 駒ヶ谷遺跡

重鉱物組成では5種類程度に分類できたが、薄片観察結果を合わせると重鉱物組成の出せなかつた試料も含めて以下の5種類に分類できる。

1) 重鉱物組成では角閃石または酸化角閃石とジルコンを特徴とし、薄片では黒雲母と花崗岩を特徴とする。薄片観察における焼成温度の推定の項で述べたように、角閃石は800°Cで酸化角閃石に変化する性質がある。すなわち、焼成時の条件（温度や酸素の流通など）によって酸化角閃石の量比は変化すると考えられる。したがって、焼成以前の素地土の状態を考えた胎土の分類では、今回の重鉱物組成に認められた程度の酸化角閃石の量比の違いは考慮しない。以上のことから、試料番号15、17、18を1つの胎土とする。

2) 重鉱物組成では緑レン石を特徴とし、薄片ではチャートと砂岩を特徴とする。カリ長石も斜長石も薄片では認められない。試料番号16に認められる胎土である。

3) 重鉱物組成ではほとんど「その他」からなり、微量のジルコンを含むことが特徴であり、薄片ではチャートと砂岩を特徴とする。試料番号19、25、26に認められる胎土である。

4) 重鉱物組成では黒雲母と不透明鉱物を特徴とし、薄片では砂岩と流紋岩を特徴とする。試料番号22に認められる胎土である。

5) 重鉱物組成では斜方輝石と酸化角閃石を特徴とし、薄片では斜長石、チャート、砂岩、凝灰岩を特徴とする。試料番号21と24に認められる胎土である。なお、試料番号23は、重鉱物組成ではジルコンを特徴とするが、薄片の特徴は上記2点の試料と類似する。これら3点はいずれも重鉱物の同定粒数が100個未満であるから、同じ胎土に分類される可能性もある。

d) 山田海岸遺跡

重鉱物組成では角閃石を特徴とする試料ばかりであったが、薄片観察ではその中にも違いのあることが認められた。ここでは以下のように4種類の胎土に分類される。

1) 重鉱物組成では角閃石を特徴とし、薄片では岩片の少ないことが特徴であり、微量の砂岩しか認められない。試料番号27に認められる胎土である。

2) 重鉱物組成では角閃石を特徴とし、薄片では白雲母とチャート、花崗岩を特徴とする。試料番号28に認められる胎土である。

3) 重鉱物組成では角閃石を特徴とし、薄片ではチャートと石英片岩を特徴とする。試料番号29、30に認められる胎土である。

4) 重鉱物組成では角閃石とジルコン、不透明鉱物を特徴とし、薄片はチャートと石英片岩を特徴とする。試料番号32に認められる胎土である。

なお、重鉱物分析を行うことのできなかった試料番号31は、薄片観察の結果では上記の3)と4)の胎土に類似するが、これらの試料では認められなかった凝灰岩が含まれることから、異なる胎土に分類される可能性がある。

以上、溝呂遺跡から山田海岸遺跡まで計15種類の胎土を分類することができたが、遺跡間で共通して認められる胎土はなく、各遺跡とも製塩土器の胎土の状況は全く異なるものであるといえる。すなわち、各遺跡における製塩土器をめぐる事情において共通する部分はほとんどなく、それぞれ異なっていた可能性が高い。山田海岸遺跡から庄田遺跡や駒ヶ谷遺跡にもたらされた製塩土器も現時点ではなかった可能性が高い。製塩土器をめぐる事情が具体的にどのように異なっていたかは、後述するように今後、製塩土器の製作地域をより狭い範囲に絞っていく段階で明らかにされると考える。

(2) 胎土から推定される地質学的背景について

重鉱物分析や薄片観察で認められた鉱物片や岩片は、おそらく由来となる岩石の表面が風化して碎屑物となり、それが河川などにより運ばれて堆積し、砂層あるいは粘土層となった地層からあるいは河原の砂のような地表から採取されたものと考えられる。したがって、その鉱物片や岩片の種類から地質を推定する場合に、河川の流域という視点がある。また、製塩土器の製作場所は製塩場所と近いと考えれば、土器材料の採取地は河川の下流域であるから、その堆積物中の鉱物片や岩片には、流域に分布するいくつかの異なる地質が複合された結果が反映されている。ここでは、まず各遺跡から最も近い河川下流域の堆積物の地質学的背景と胎土から推定される地質学的背景とを比較してみる。

庄田遺跡に近い河川下流域は、現在の尼崎市付近であり淀川や神崎川、武庫川などが流れている。庄田遺跡の試料の胎土に多く見られる砂岩と花崗岩という組合せは、例えば神崎川上流に広がる丹波帯とよばれる中～古生代の地質とその中に点在する白亜紀～古第三紀の花崗岩体という地質学的背景が推定できる。すなわち、近傍の海岸地域で作られた製塩土器である可能性も考えられるということである。

駒ヶ谷遺跡については、近い河川下流域といえば堺市付近になるが、ここには大和川や石津川が流れている。これら河川の上流域には、金剛山地を構成している領家帶の花崗岩類が広く分布している。駒ヶ

谷遺跡の試料において分類した1) の胎土からは、このような背景も推定できるので、これらの試料については近傍の堺市付近の海岸で作られた可能性考えることができる。しかし、1)以外の胎土の特徴であるチャートや砂岩については、大阪平野を取り巻く地質の中で考えると淀川以北にしか分布しないため、駒ヶ谷遺跡の2)～5) の胎土の試料は、少なくとも淀川以南の大坂湾岸で作られた可能性は低いといえる。

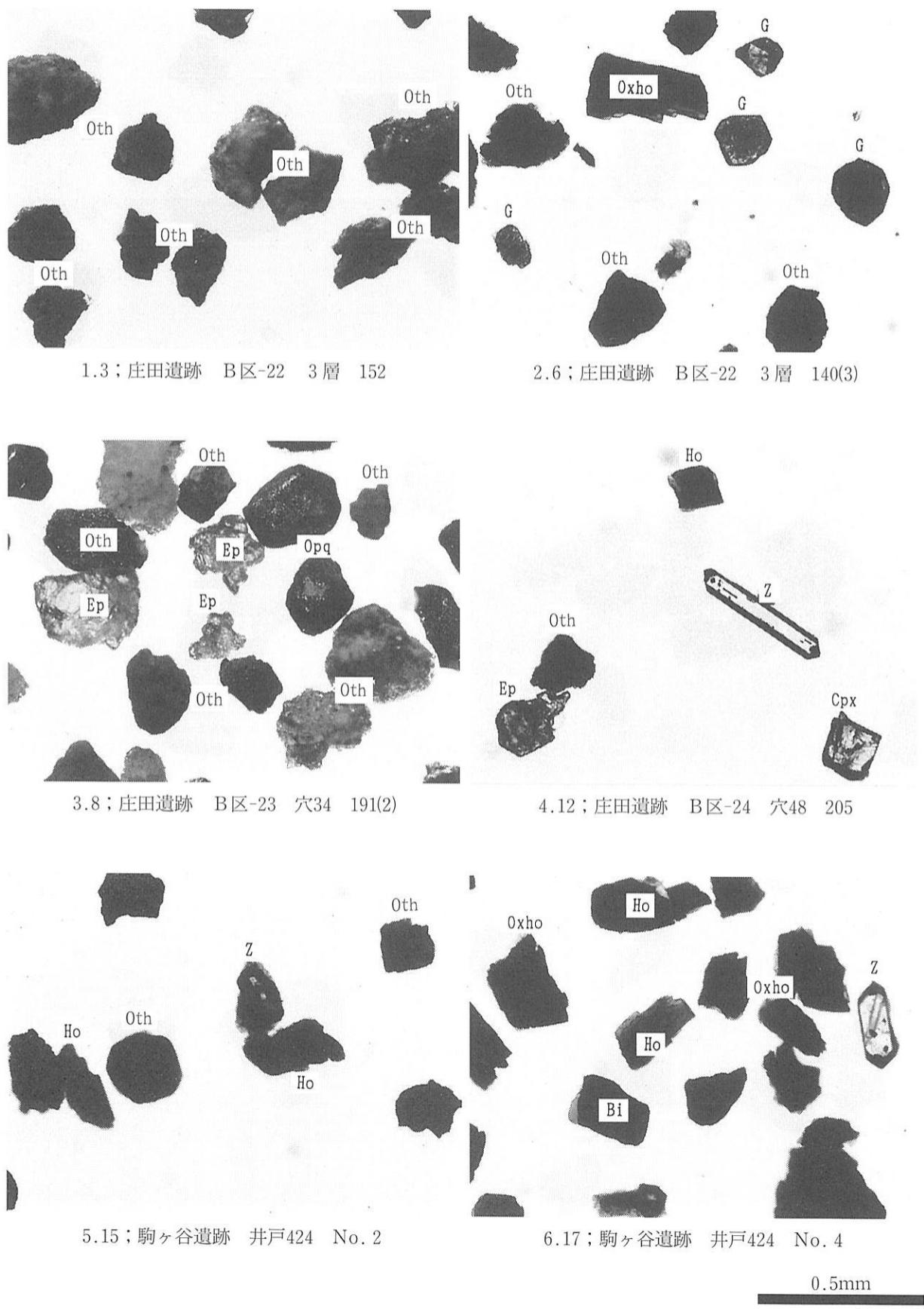
山田海岸遺跡の位置する岬町には、番川や大川など和泉山脈から大阪湾へと流れ下る河川が数本ある。和泉山脈を構成している地質は、和泉層群とよばれる砂岩、泥岩、礫岩を主体とした中生代の堆積岩である。山田海岸遺跡の試料に認められた砂岩やチャートなどは和泉層群に由来する可能性がある。ここで、山田海岸遺跡の試料には石英片岩を含むものも多いが、石英片岩の由来としては、和泉層群に接する三波川帯の結晶片岩類が考えられる。また、以前当社が行った分析により、番川流域で採取された堆積物で角閃石の多い重鉱物組成が確認されている（パリノ・サーヴェイ株式会社、1992）。この重鉱物組成の特徴である比較的新鮮な角閃石は、泉南丘陵に分布する大阪層群中のテフラ層に由来する可能性が考えられる。これらのことから、山田海岸遺跡の試料は、生産地遺跡とされていることもあり、遺跡近傍で作られた土器である可能性が高い。今回の結果では、生産地における製塩土器でも複数種の胎土が混在していることがわかった。ただし、重鉱物組成は互いに類似することなどから、複数の土器の製作地からもたらされていたとしても、それらの製作地は、それほど離れていたなかったと考えられる。

現時点では、胎土と遺跡近傍の地質とを比較しただけであり、今回の胎土から推定される地質と同様の地質は日本全国に広く分布している。今後、より遠隔地（例えは北陸や山陽など）との関係を問題とする場合には、遠隔地の試料や砂や粘土などの自然堆積物など多くの分析事例を蓄積し、解析していく必要がある。事例の蓄積が進めば、製塩土器の製作地をはじめ、より具体的な古代の製塩事情の検証が可能となることが期待される。

引用文献

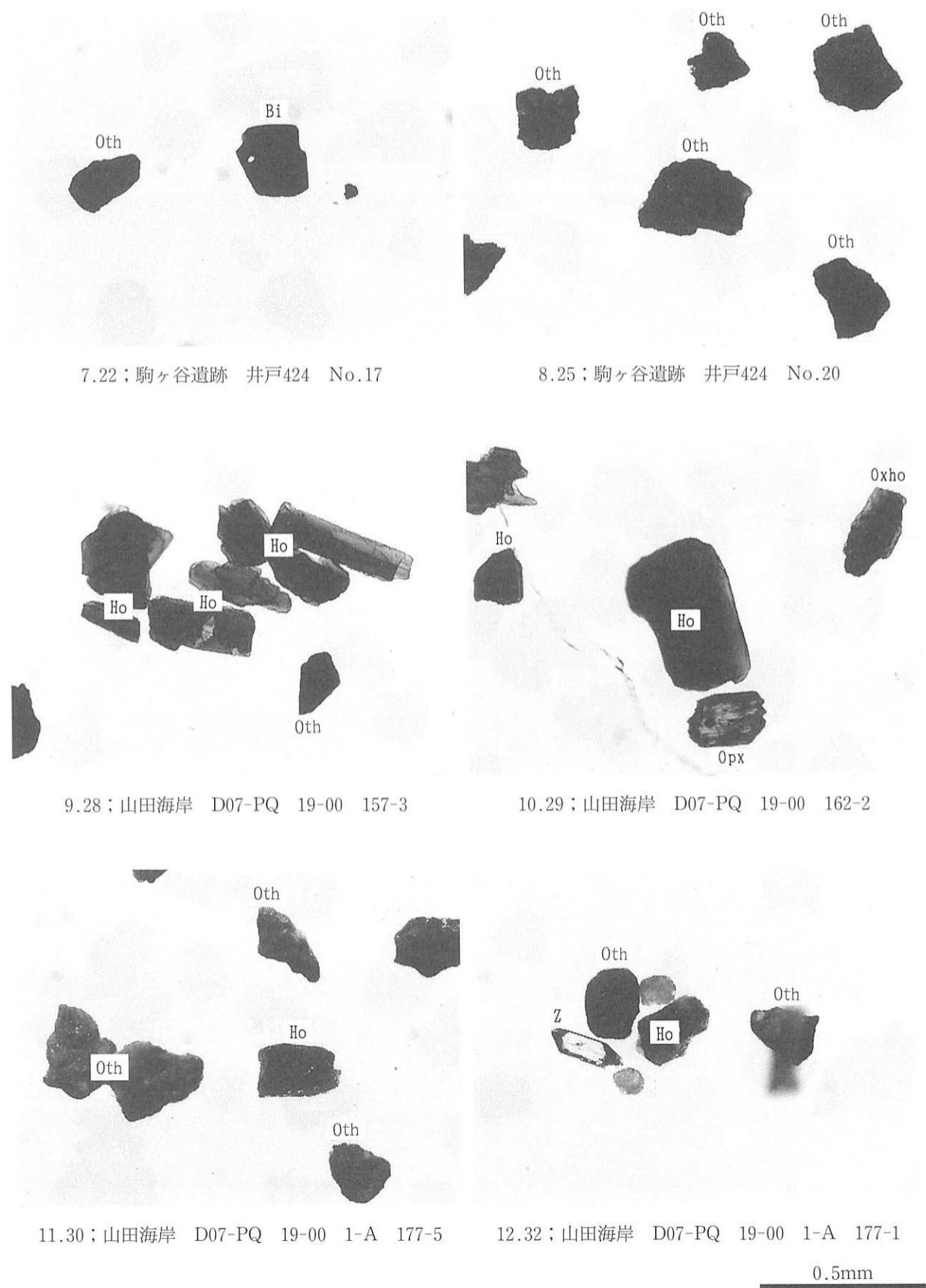
大阪府教育委員会・大阪文化財センター 1992 『小阪遺跡 本報告書－近畿自動車道松原海南線・府道松原泉大津線建設に伴う発掘調査－』 小阪遺跡周辺地域の地質と土器胎土の鉱物分析 (p.619-637) パリノ・サーヴェイ株式会社

図版1 胎土中の重鉱物(1)



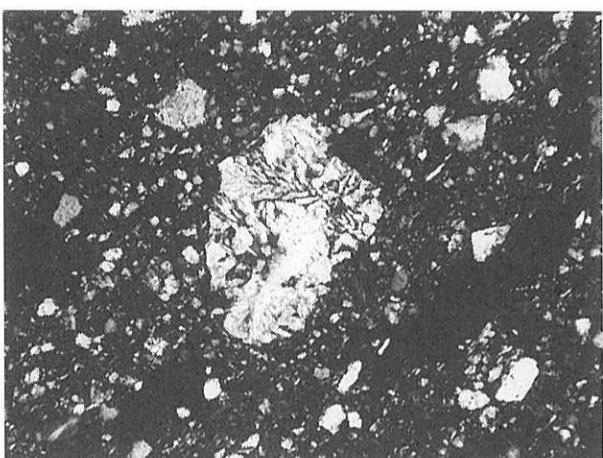
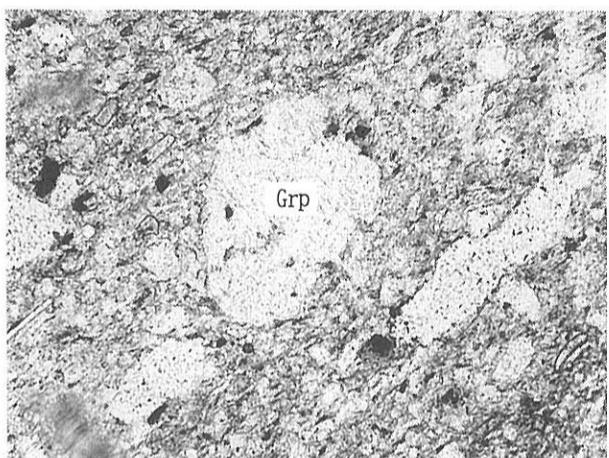
Cpx: 単斜輝石。Ho: 角閃石。Oxho: 酸化角閃石。Bi: 黒雲母。Z: ジルコン。G: ザクロ石。
Ep: 緑レン石。Opq: 不透明鉱物。Oth: その他。

図版2 胎土中の重鉱物(2)

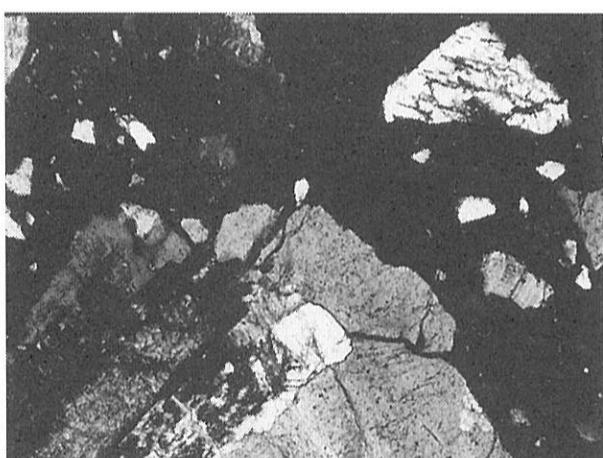
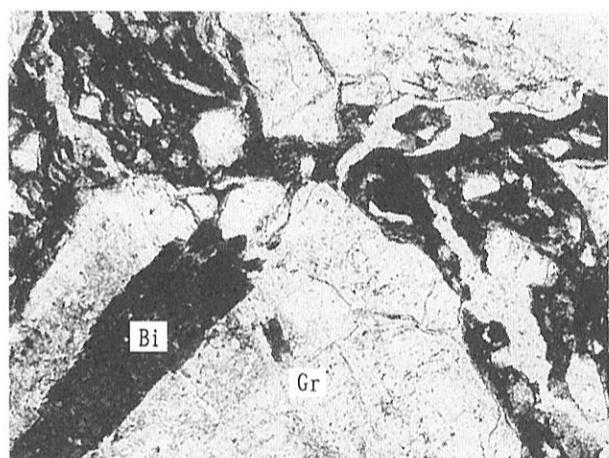


Opx : 斜方輝石. Ho : 角閃石. Oxho : 酸化角閃石. Bi : 黒雲母. Z : ジルコン. Opq : 不透明鉱物.
Oth : その他.

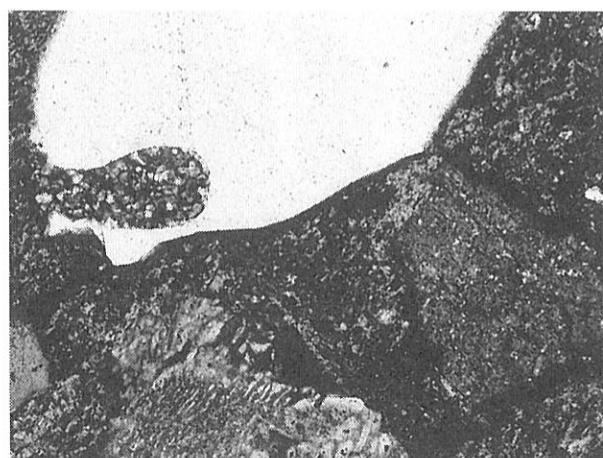
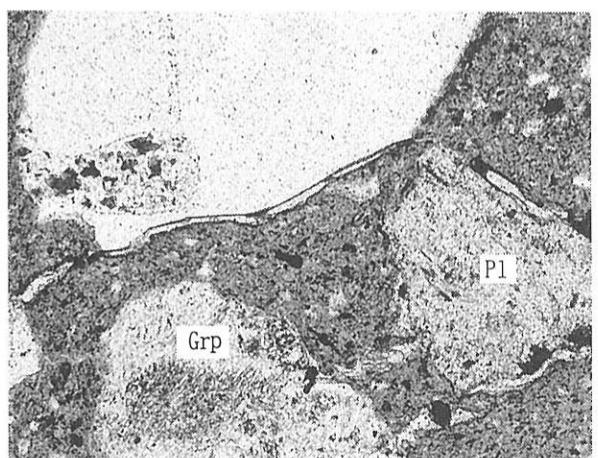
図版3 胎土薄片(1)



1.1 ; 溝昨遺跡 3 D区 K13e7-III 穴362(1)



2.3 ; 庄田遺跡 B区-22 3層 152

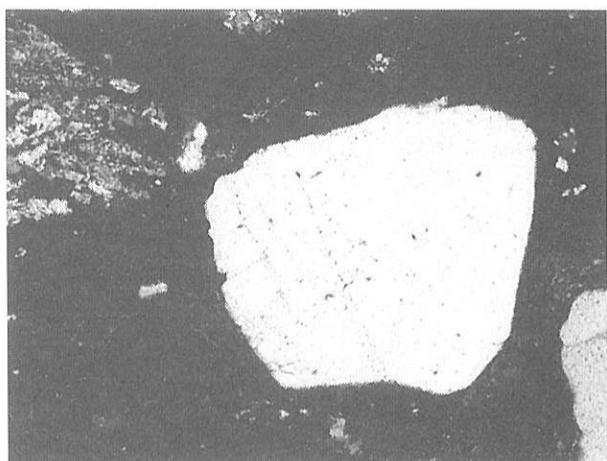
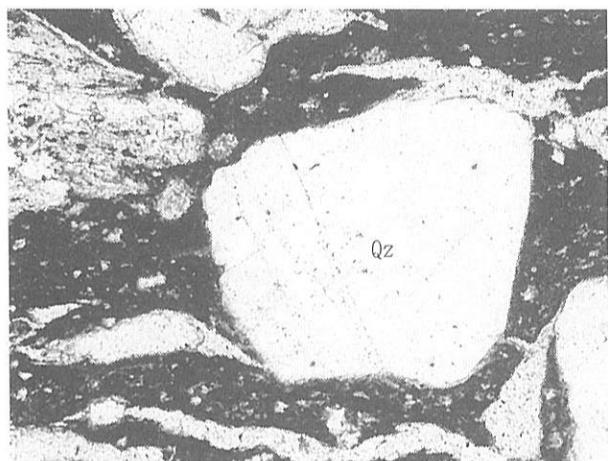


3.8 ; 庄田遺跡 B区-23 穴34 191(2)

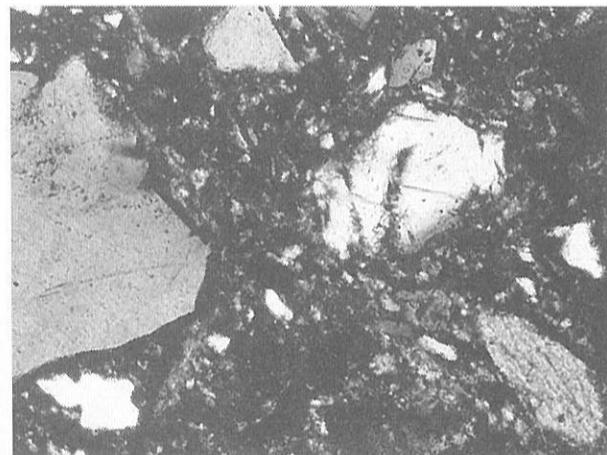
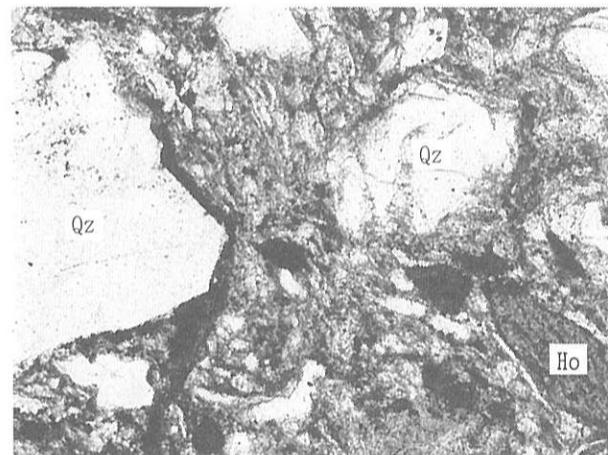
0.2mm

Qz : 石英. Pl : 斜長石. Bi : 黒雲母. Ss : 砂石. Gr : カコウ石. Grp : 文象岩.
写真左例は下方ポーラーのみ、右列は直交ポーラー下。

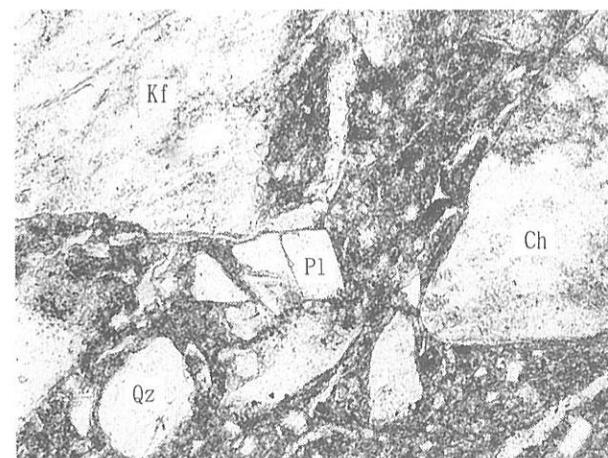
図版4 胎土薄片(2)



4.13; 庄田遺跡 B区-25 3層 162



5.18; 駒ヶ谷遺跡 井戸424 No. 5

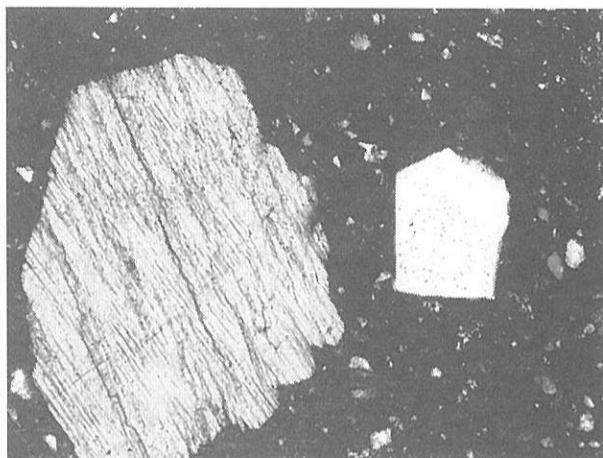
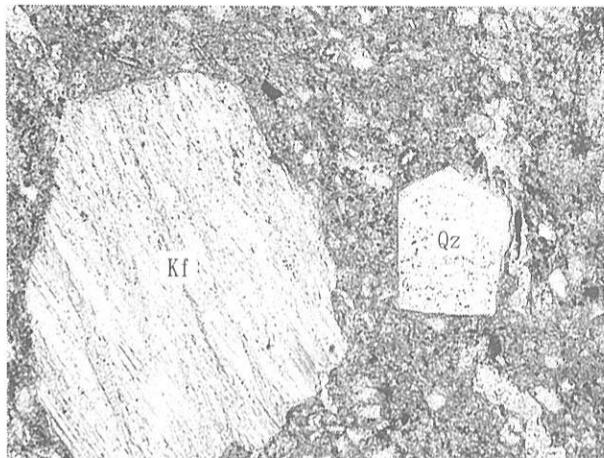


6.22; 駒ヶ谷遺跡 井戸424 No. 17

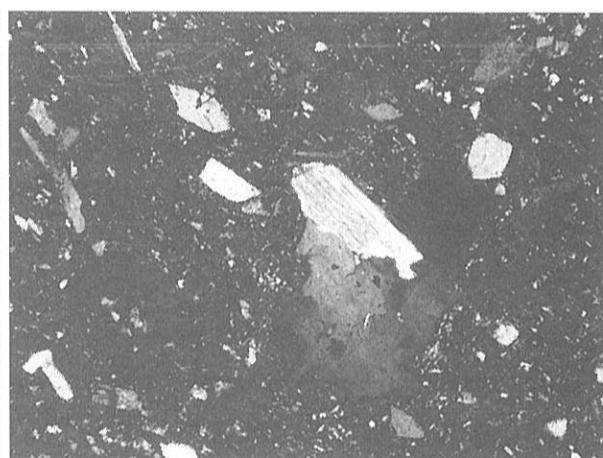
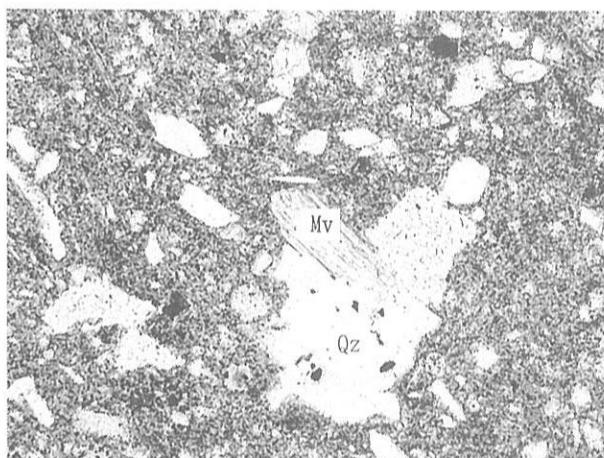
0.2mm

Qz: 石英。Kf: カリ長石。Pl: 斜長石。Ho: 角閃石。Ch: チャート。M-s: 白雲母片岩
写真左列は下方ポーラーのみ、右列は直交ポーラー下。

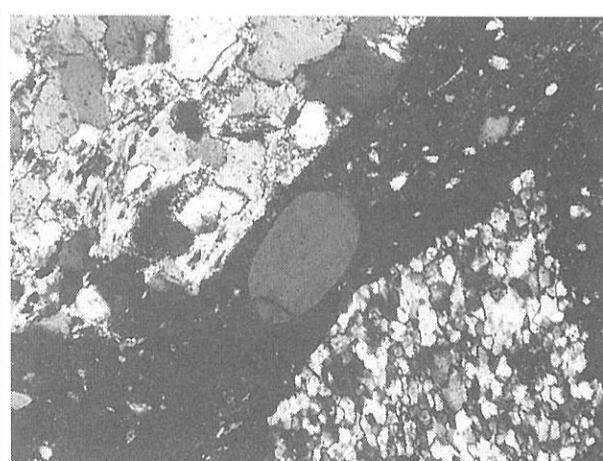
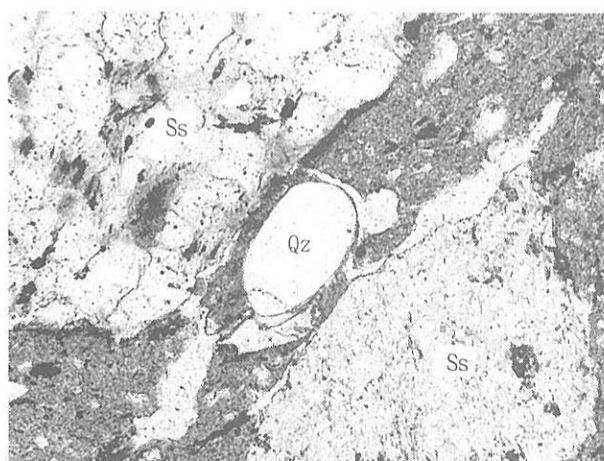
図版5 胎土薄片(3)



7.23；駒ヶ谷遺跡 井戸424 No.18



8.28；山田海岸 D07-PQ 19-00 157-3



9.29；山田海岸 D07-PQ 19-00 162-2

0.2mm

Qz：石英. Kf：カリ長石. Mv：白雲母. Ss：砂岩.
写真左列は下方ポーラーのみ、右列は直交ポーラー下。

第6章　まとめ

以下、今回の調査によって明らかとなったこと、また調査を行っていく過程で生じた疑問点などを記し、まとめとする。

<遺構>

◎調査区のほぼ全面から、奈良時代から中世にいたる遺構を検出し、当地が奈良時代から宅地利用されていたことが判明した。

◎調査区の中央やや北よりの国土座標 X=−128.645から X=−128.670の範囲からは、いずれの時代の遺構も検出していない。ここは地下水位が高く、発掘調査中も湧水で悩まされた場所である。宅地として利用するには向きであり、それは人々が生活を始めた当初からの環境であったことが窺える。

◎奈良時代の遺構は建物跡13棟と塀跡1棟、溝1条のほか多数の穴を検出した。これらは大きく南と北の2群に分かれる。南群には建物1～3の3棟と溝がある。建物跡3の西側には奈良時代の遺構が広がらないことから、南群集落域の西辺部を検出したものと考えられる。北群には建物4～13の10棟と塀跡1棟がある。そのうち建物4は桁行の柱間が3m、梁行の柱間が2.5mと今回検出した建物跡のうち最も大型のものであった。建物4・7は調査区の北に未確認の柱穴が延びており、奈良時代の集落域も更に北方を中心に広がっていたことが予想される。

◎検出した13棟の建物跡のうちには総柱建ちの倉庫跡が3棟ある。

◎建物4と5、建物4と7、建物5と8には切り合い関係があることから、狭い時期幅のなかでの建て替えがあったことが判明する。

◎建物9から建物10～13の間には若干の空白地を設ける。建物10～13は東側柱筋が南北に通っていることから、同一時期に正確な設計プランに基づき建てられたものであることが判明する。

◎建物跡10～13・8および塀跡の柱抜き取り穴には多量の炭が入っており、火災に遭ったことが推測される。

◎塀跡以西で奈良時代の遺構を検出してないことから、北群の西はこの塀によって限られていたと推定できる。

◎奈良時代の建物跡は若干の振れはあるものの、東西南北の方位を意識して設計している。

◎以上検出した奈良時代の建物跡等の遺構には、建物跡4のように都城遺跡にみられるような規模の大きなものがあること、建物跡10から13のように整然と並ぶこと、また出土した遺物のなかに硯や墨書き器が含まれていることなどから、これらの遺構は単なる農村集落とするよりは、公的な施設と考えたほうがよいかもしれない。

◎中世の遺構には、小穴群・溝・土坑等がある。これらは奈良時代の南北両群の間、及び北群の西で検出した。小穴の埋土には炭粒の入ったものが多い。

◎調査区南方で検出した規則的に掘られた溝は、耕作のための畝溝とは考え難い。排水対策、あるいは耕地開発に伴う基準の溝と考えられる。

◎土坑は17基を検出した。そのうち2基は井戸の可能性がある。

◎近世以降に行われた耕作地の嵩上げ工事には、小畦畔を基準に造成が行われたことが判明した。この基準畦畔に向かって交互に質の違う土を盛るのである。この工法と同じ工法は、例えば堺市陶器南遺

¹⁾跡などでも確認されており、大阪府下の広範囲で同様な工法により造成工事が行われていたことが窺える。

◎今回の調査で検出した奈良時代の建物跡の柱掘方は、ほとんどが隅丸の方形、あるいは長方形であった。都城などの調査ではごく当たり前のように思われていることではあるが、なぜ古墳時代から古代にかけての柱掘方は隅丸の（長）方形でなければならないのか疑問が残る。

◎建物跡の柱掘方内には、柱を据え付けるために用いた礎石が残っているものがあった。それは全ての建物跡の全ての柱掘方にみられるものではなく、一つの建物跡のなかでも1～2箇所の柱掘方にのみみられるものであった。柱の沈下を防ぐなど礎石としての機能のほかに、建物の床レベルを統一するために、柱の下に石を入れて柱の高さを調節するという役割も果たしたのではないだろうか。

<遺物>

◎旧石器時代、国府文化期の翼状剝片が出土した。

◎縄文時代草創期～早期の有舌尖頭器・石鏸が出土した。

◎縄文時代後期の土器・石器が出土した。石器の中に、四国・金山産サヌカイトを石器や剝片の多数含まれているのが珍しかった。

◎弥生時代後期の土器が出土した。

◎古墳時代中期の須恵器が出土した。

◎古墳時代後期の須恵器が出土した。

◎奈良時代後期の須恵器が出土した。

◎奈良時代の須恵器・土師器・製塙土器が多数出土した。製塙土器の中に、内面布目で、軽石を多量に含有する例のあることが分かった。産地は九州と推定されたが、重要な発見となった。

◎奈良時代の陶硯、転用硯、墨書き土器、瓦、土馬、土錘などが出土した。土錘は、勝尾寺川で網を使った漁のあったことを推定させる重要な資料となった。

◎奈良～平安時代の綠釉陶器、灰釉陶器、須恵器、土師器が出土した。

◎平安～鎌倉時代の瓦器、土師器、須恵器、青磁、白磁など中世土器が出土した。

◎中世の鉄馬鍬の歯の出土は、牛耕を推定させる貴重な例となった。

◎庄田遺跡は、遺物からすると、奈良時代を中心とした旧石器～鎌倉時代の複合遺跡と分かった。

【参考文献】

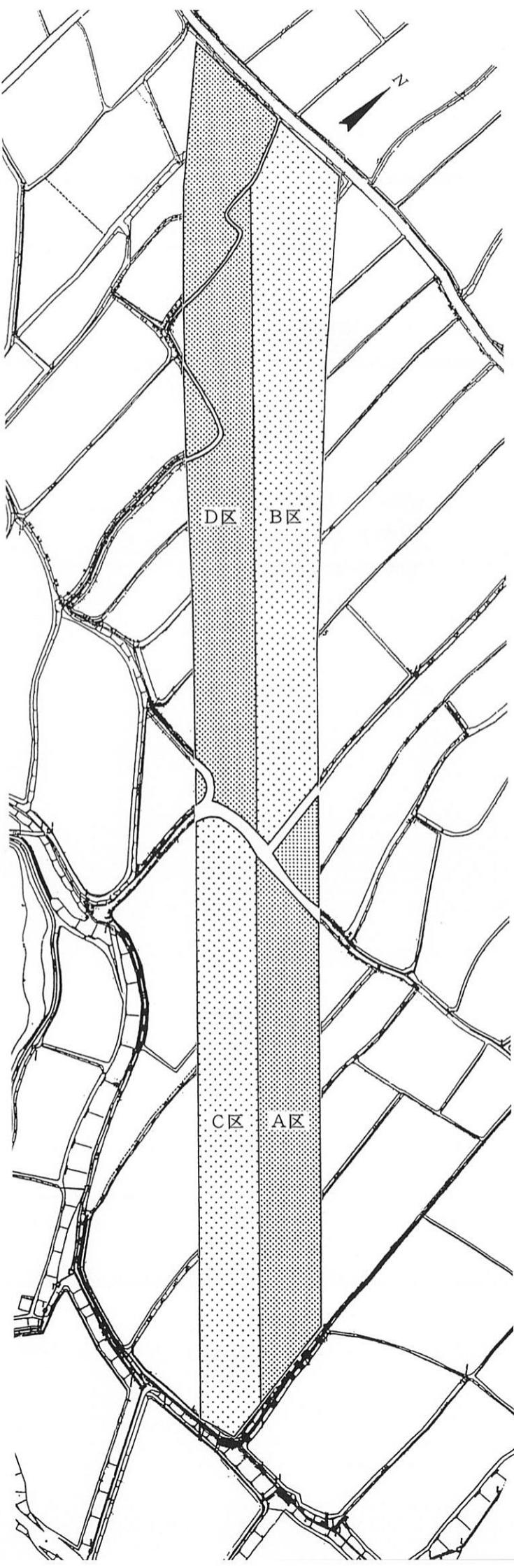
- 1) 大阪府教育委員会 1997. 3 『陶器南遺跡発掘調査概要・III』

図版

図版 1～12 遺構

図版13～14 試掘調査

図版15～48 遺物



図版1 調査地全景





1. B調査区全景



2. B調査区全景（東南より）



1. A調査区全景



2. A調査区全景（西北より）



1. D調査区全景



2. D調査区全景（東南より）



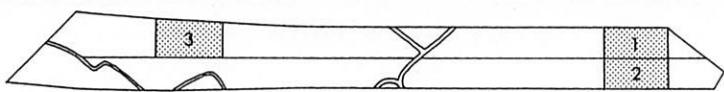
1. C調査区全景



2. C調査区全景（西北より）



奈良時代遺構（建物跡及び溝）





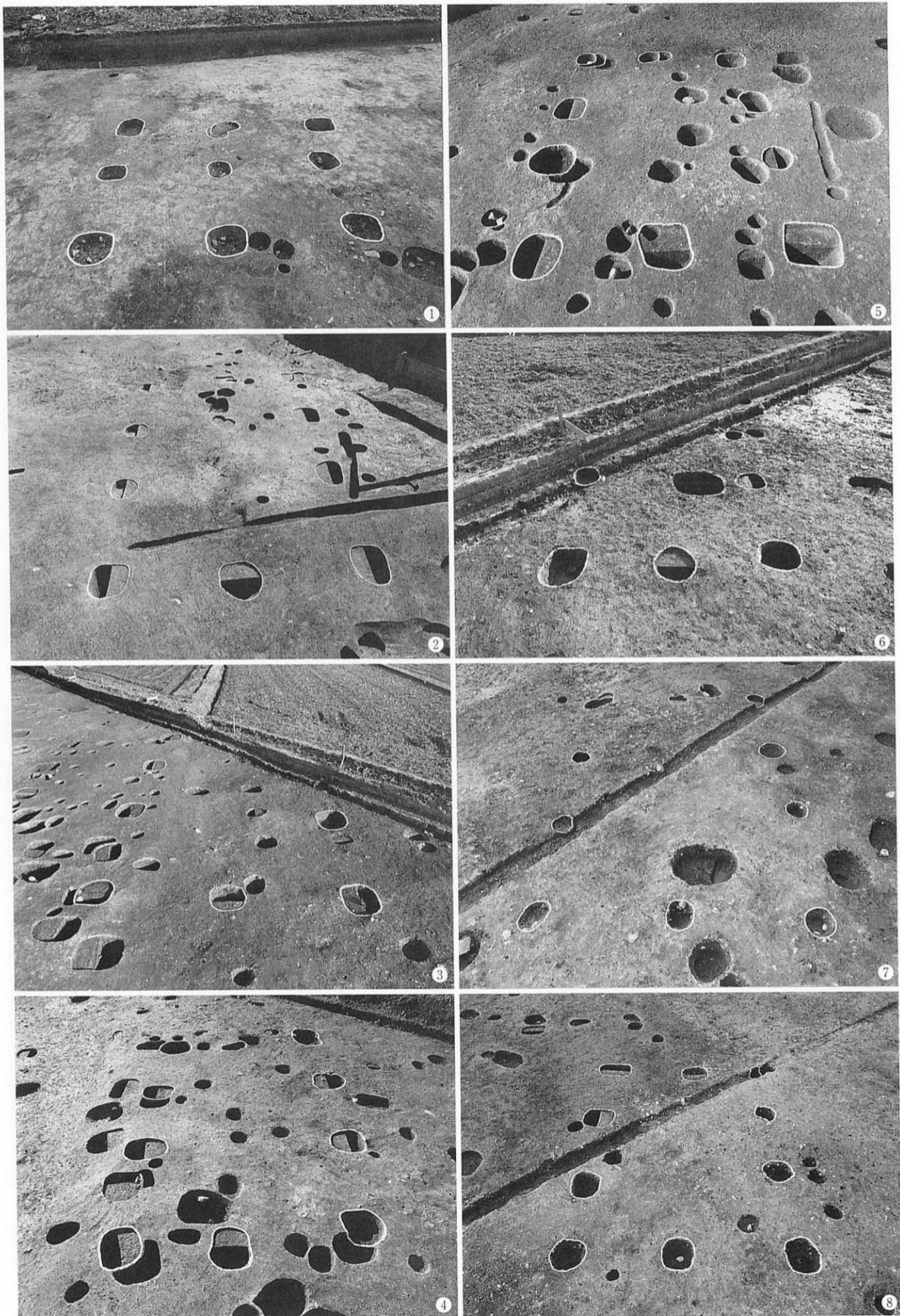
1. 奈良時代北群遺構全景（東南より）



2. 建物跡2・3（手前が2）

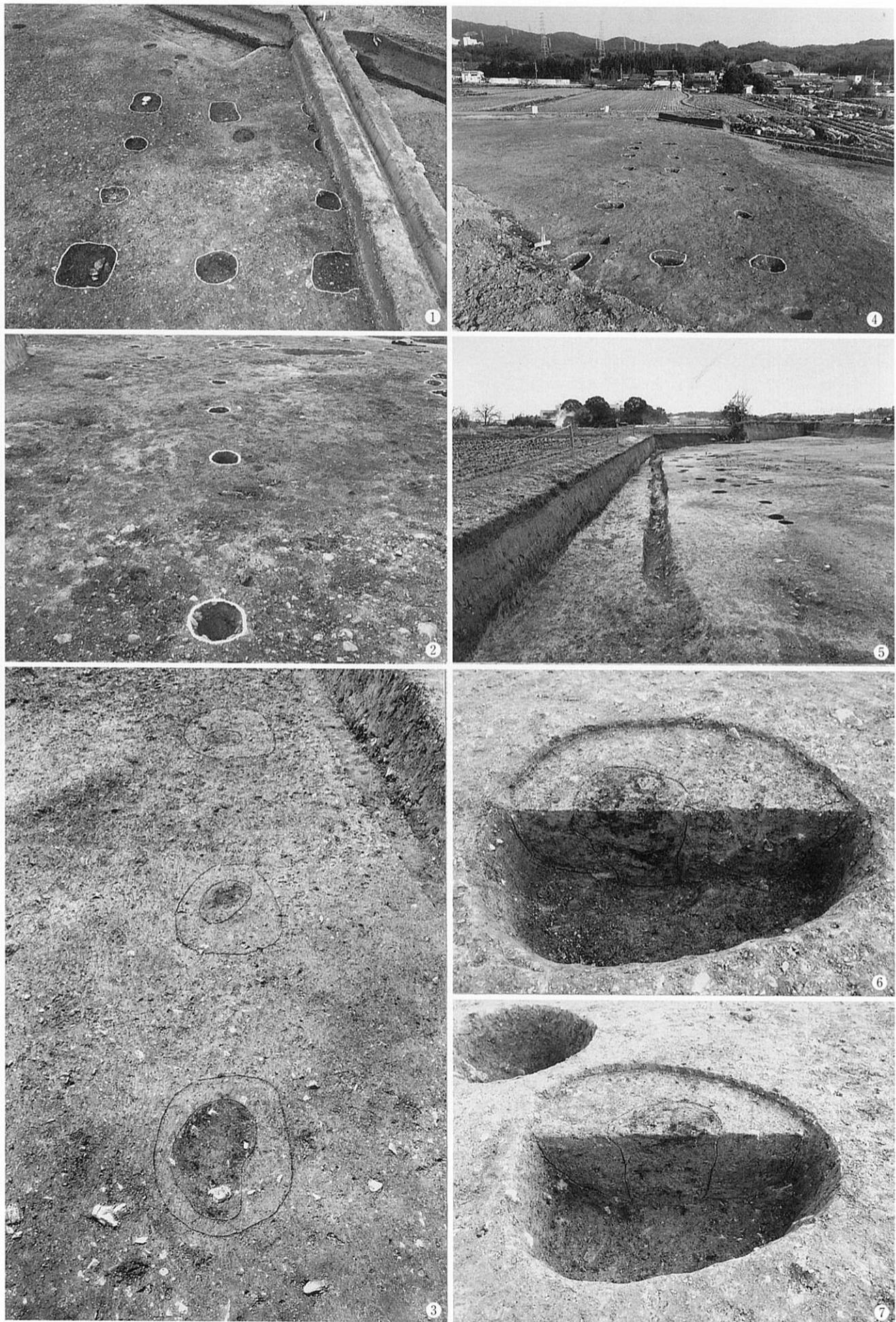


3. 建物跡11～13（手前が11）



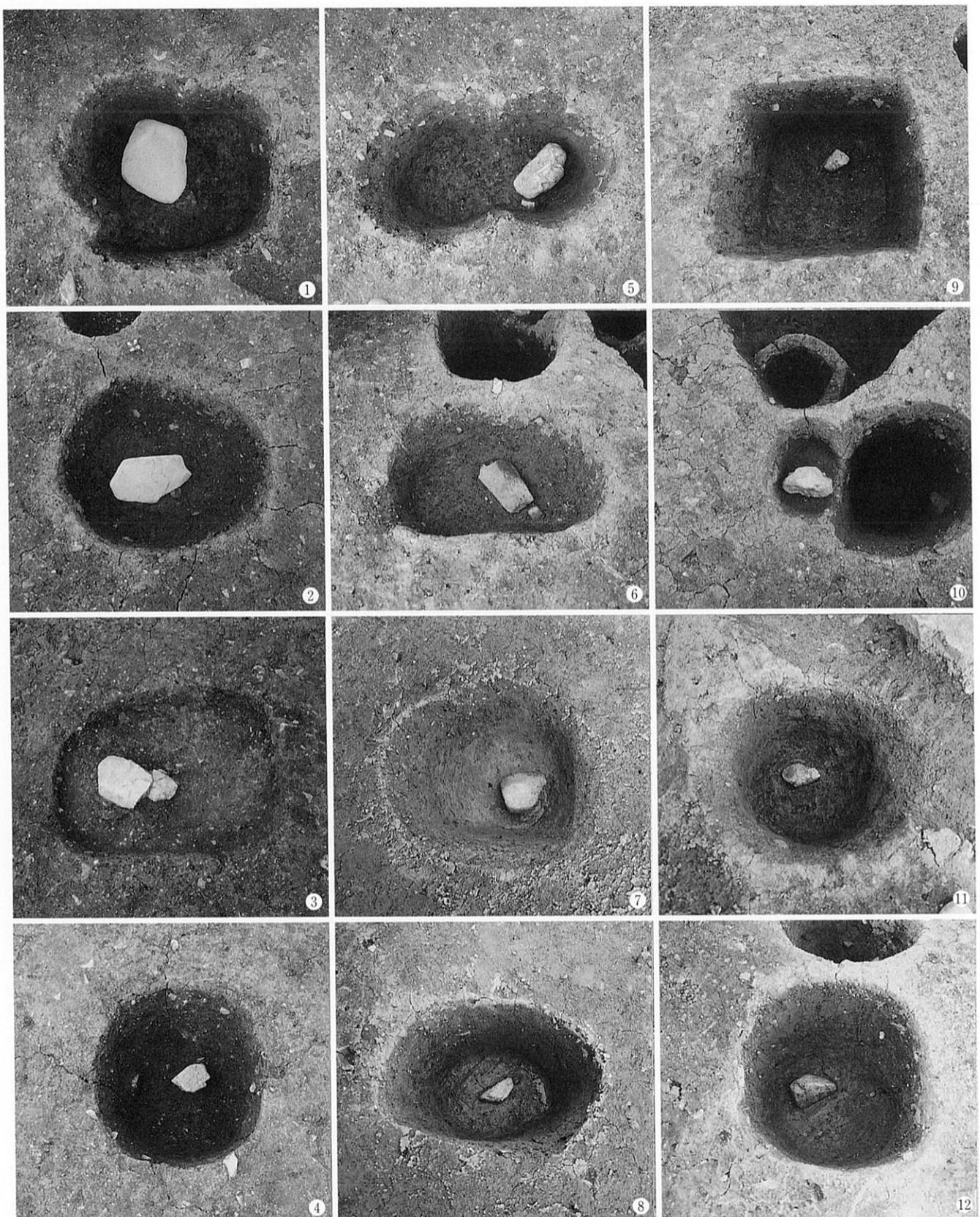
1. 建物跡 1 (東北より)
2. 建物跡 3 (北より)
3. 建物跡 4 (南より)
4. 建物跡 5 (北より)

5. 建物跡 6 (東より)
6. 建物跡 7 (西より)
7. 建物跡 8 (東より)
8. 建物跡 9 (東より)



1. 建物跡13（北より）
2. 墀跡（北より）
3. 建物跡12西側柱筋検出状況
(奥から柱穴207・208・209)

4. 建物跡10・11（奥が建物跡10）
5. 溝（西北より）
6. 柱穴207断面
7. 柱穴208断面



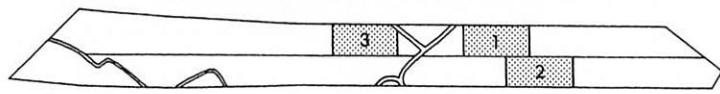
1. 柱穴65
2. 柱穴90
3. 柱穴225
4. 柱穴162

5. 柱穴92・66
6. 柱穴113
7. 柱穴73
8. 柱穴24

9. 柱穴70
10. 柱穴115
11. 柱穴160
12. 柱穴100

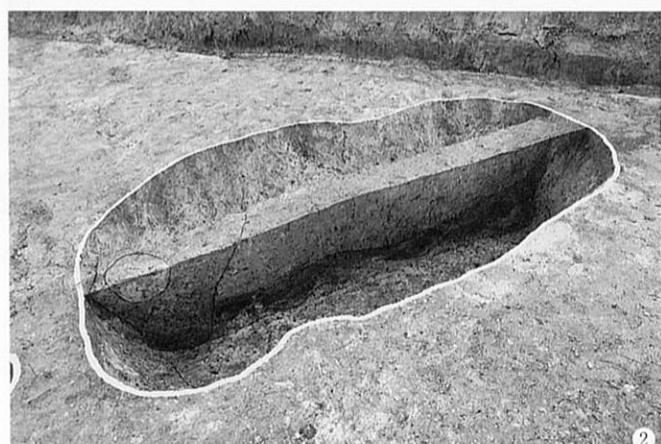


中世遺構（溝・土坑・小穴群）





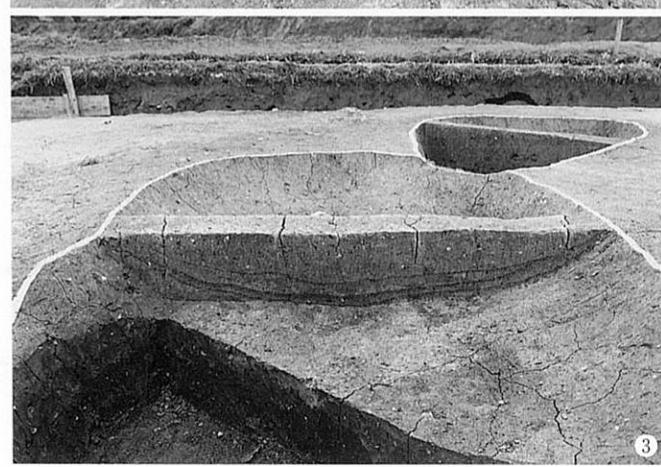
1. 溝（東北より）



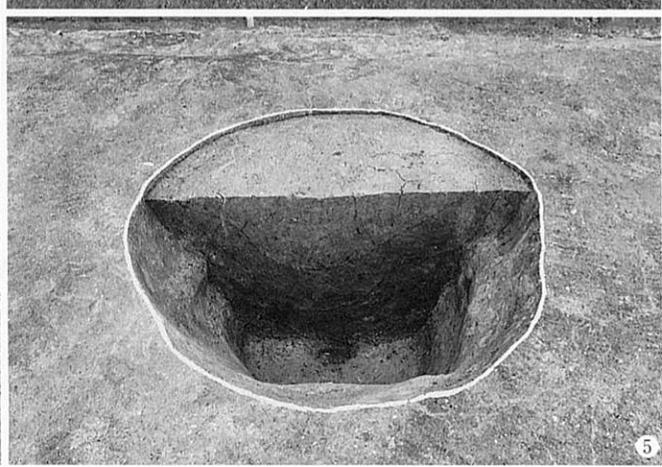
2



4



3



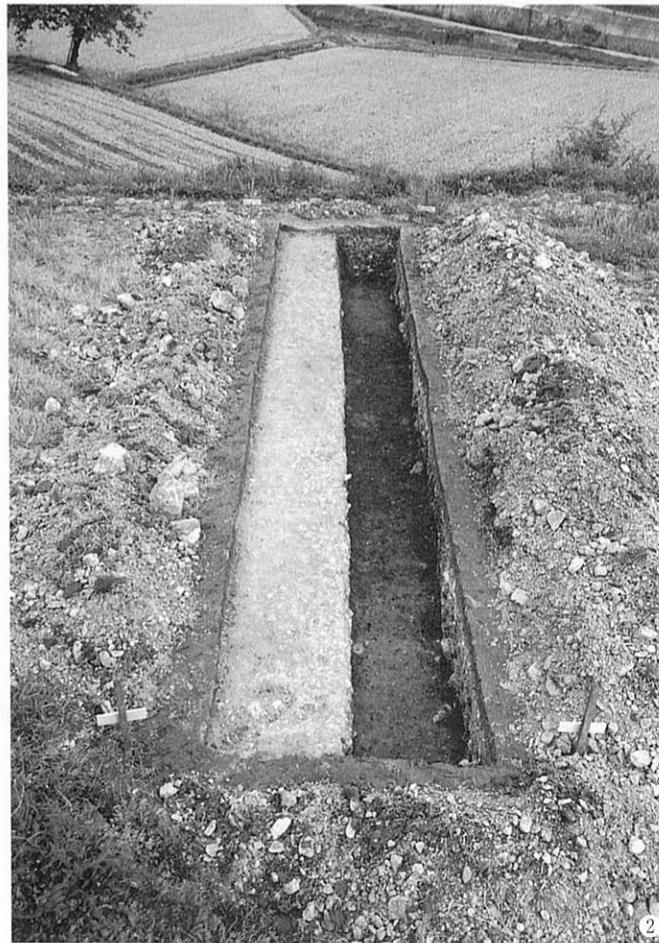
5

2. 土坑 1
3. 土坑 2

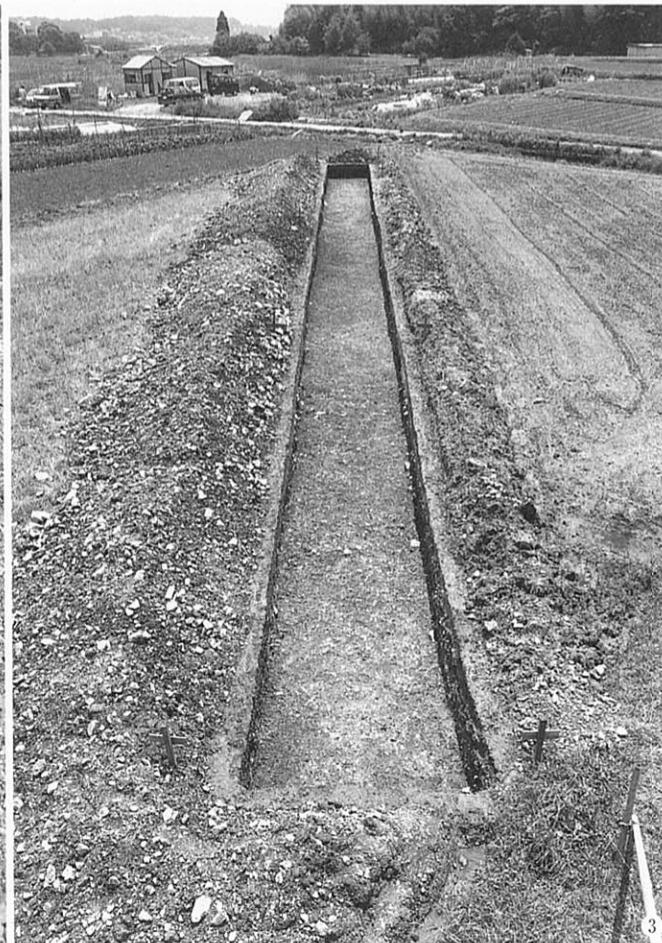
4. 北端部小穴群
5. 土坑 3



1. 試掘調査区全景



2. 13調査区全景



3. 1調査区全景



1

1. 6 調査区検出畦畔



2

2. 11調査区検出畦畔



3

3. 22調査区出土銅鈴



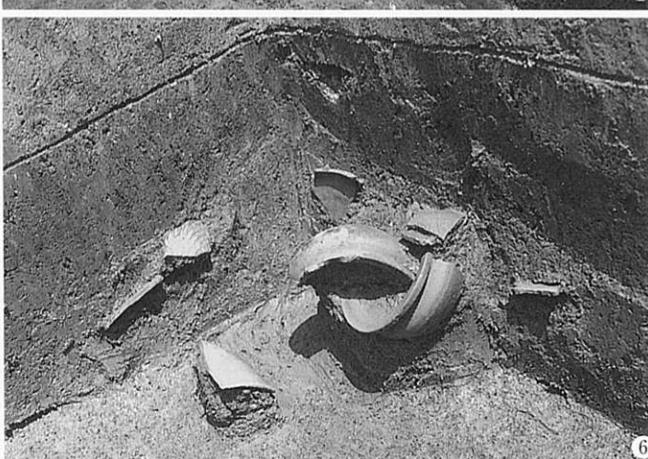
5

5



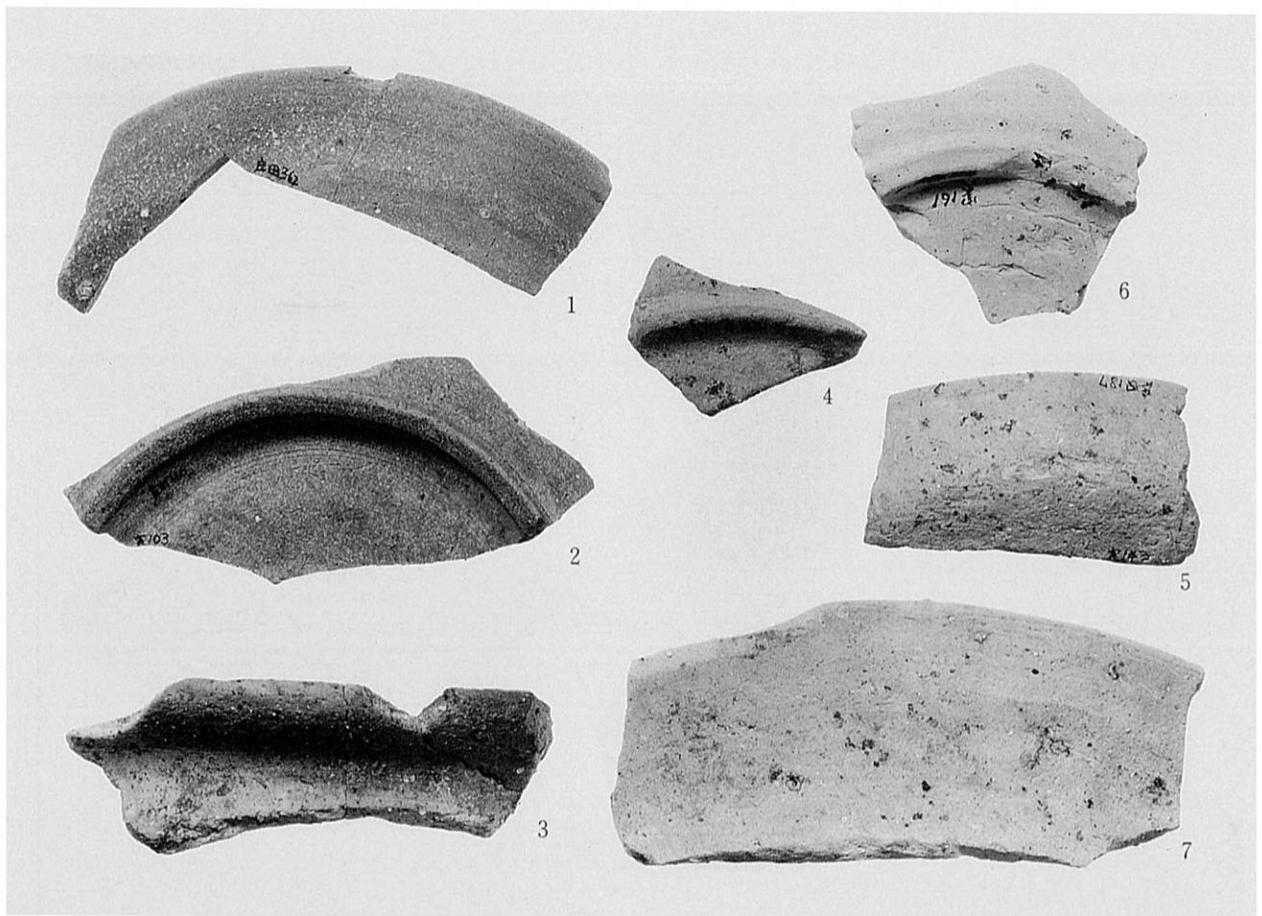
4

4. 15調査区出土有舌尖頭器



6

5. 11調査区壁面
6. 11調査区出土須恵器



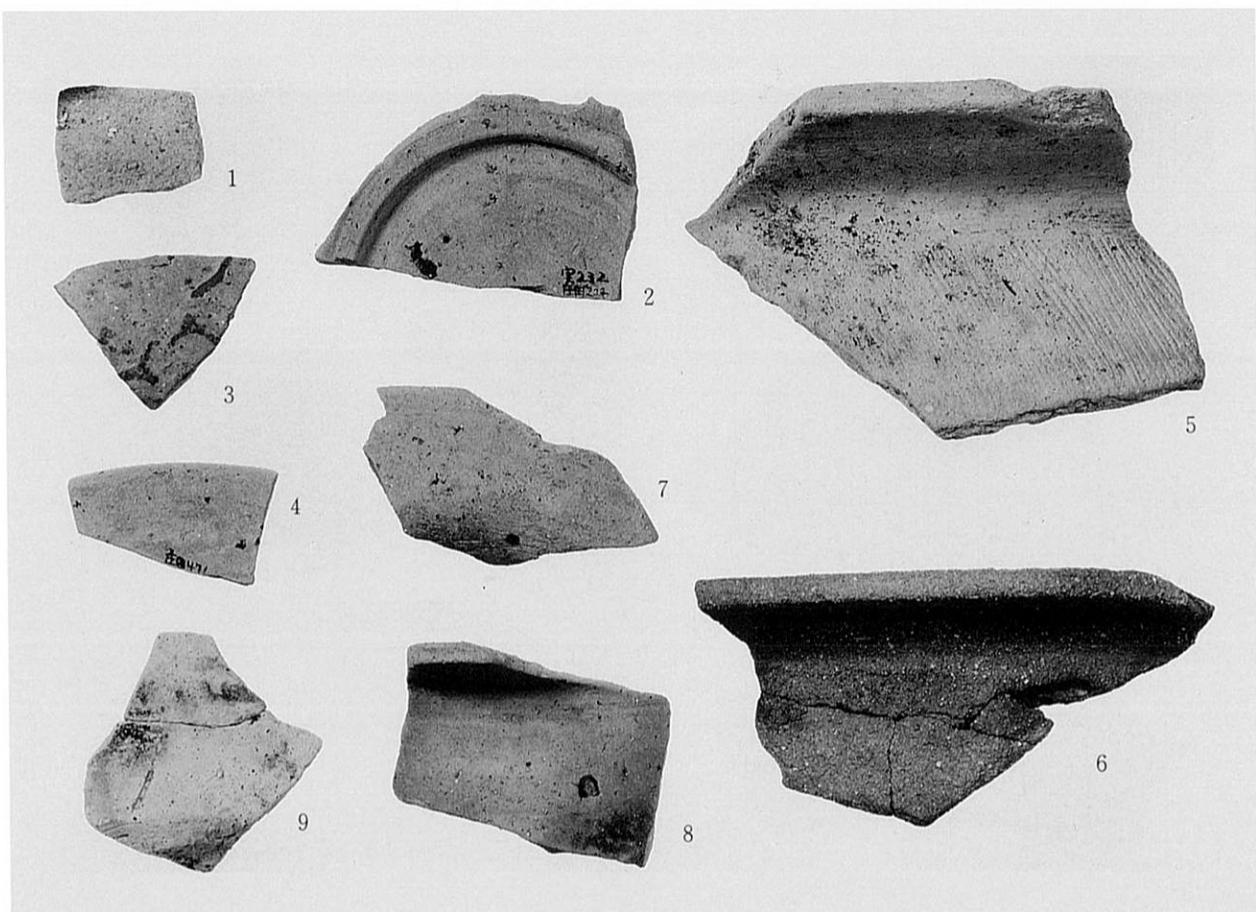
a. 建物3(1、2). 建物4(3~6). 建物5(7)出土土器

(2/3)

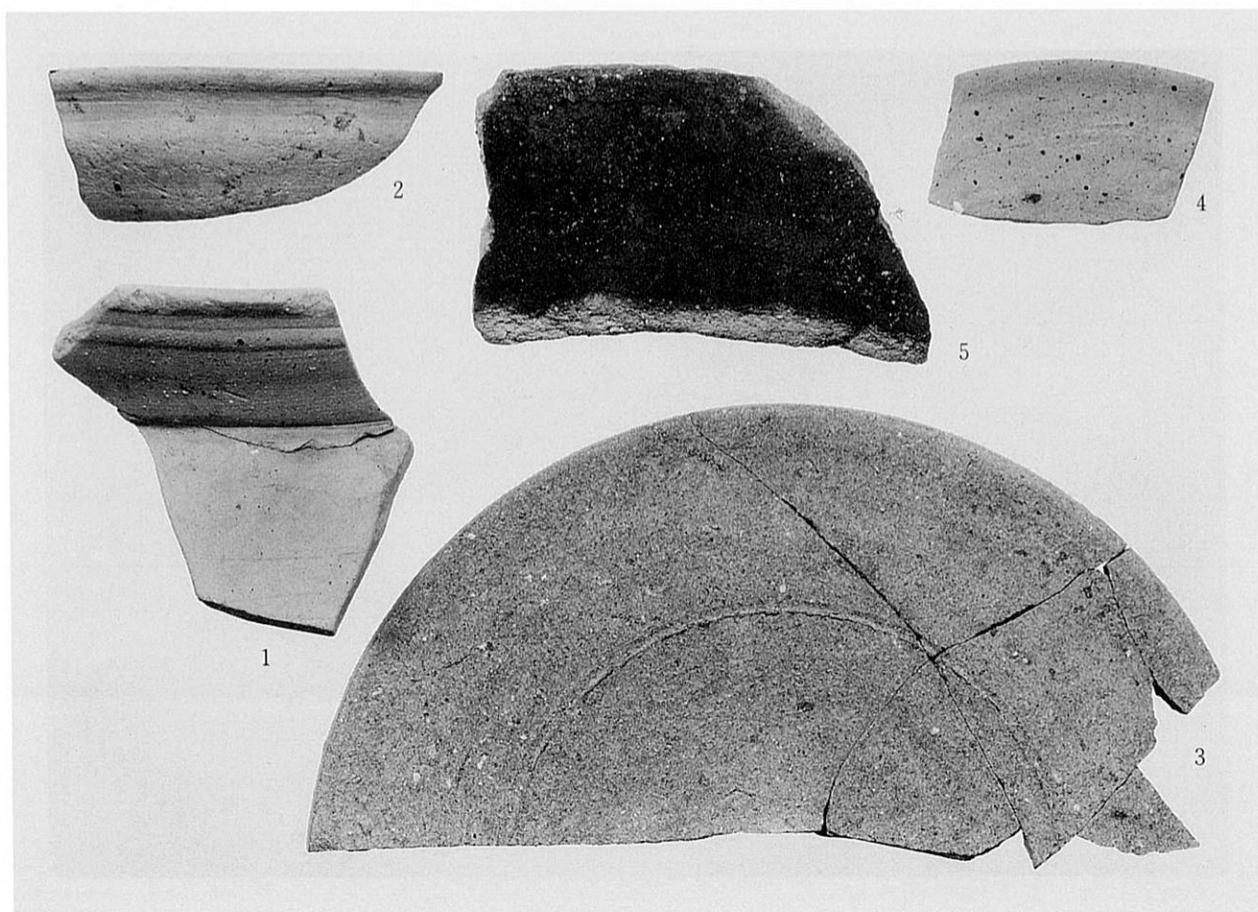


b. 建物5(1~3). 建物6(4~6)出土土器

(2/3)

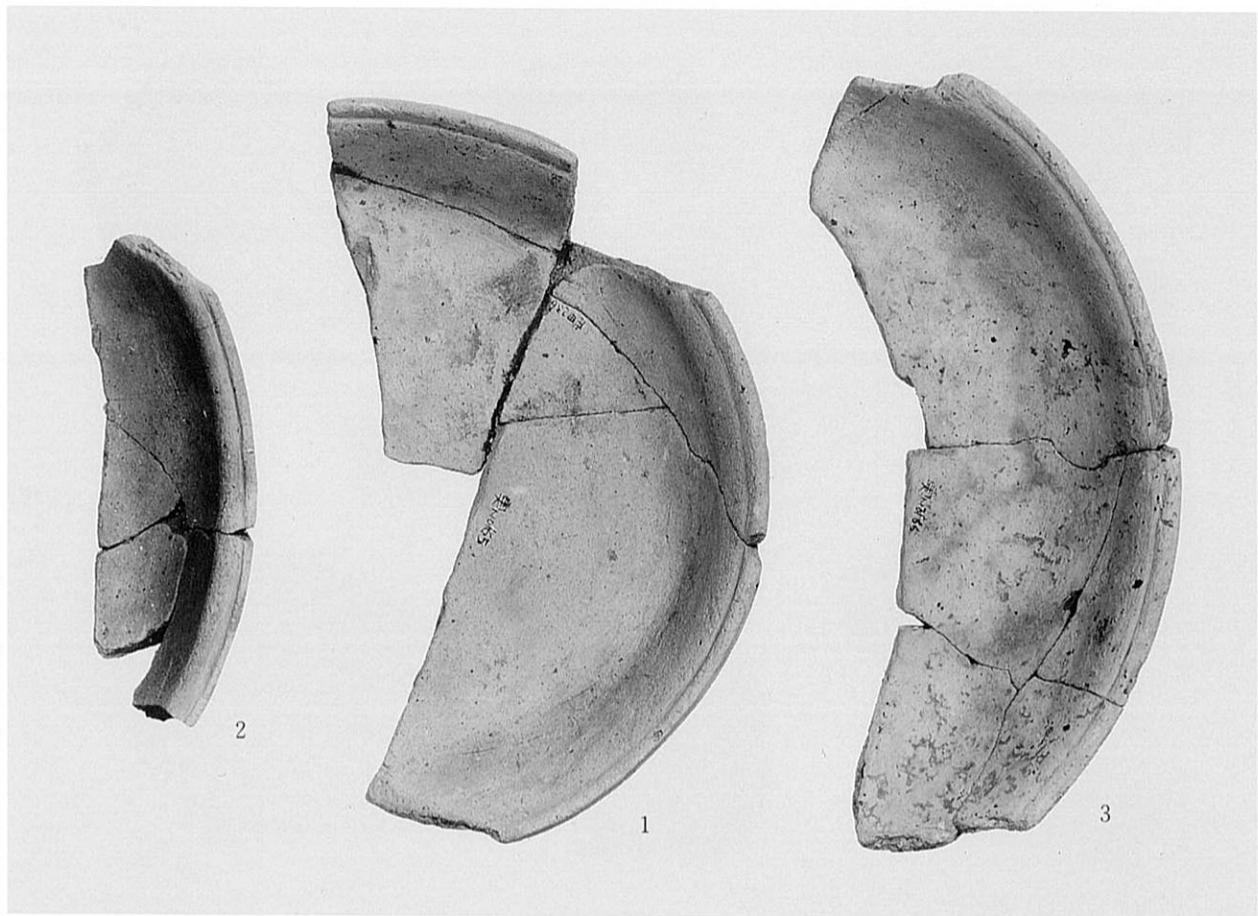


a. 建物 6 (1・2). 建物 7 (3). 建物 9 (4). 建物 10 (5). 建物 11 (6・7). 建物 12 (8・9) 出土土器 (2/3)



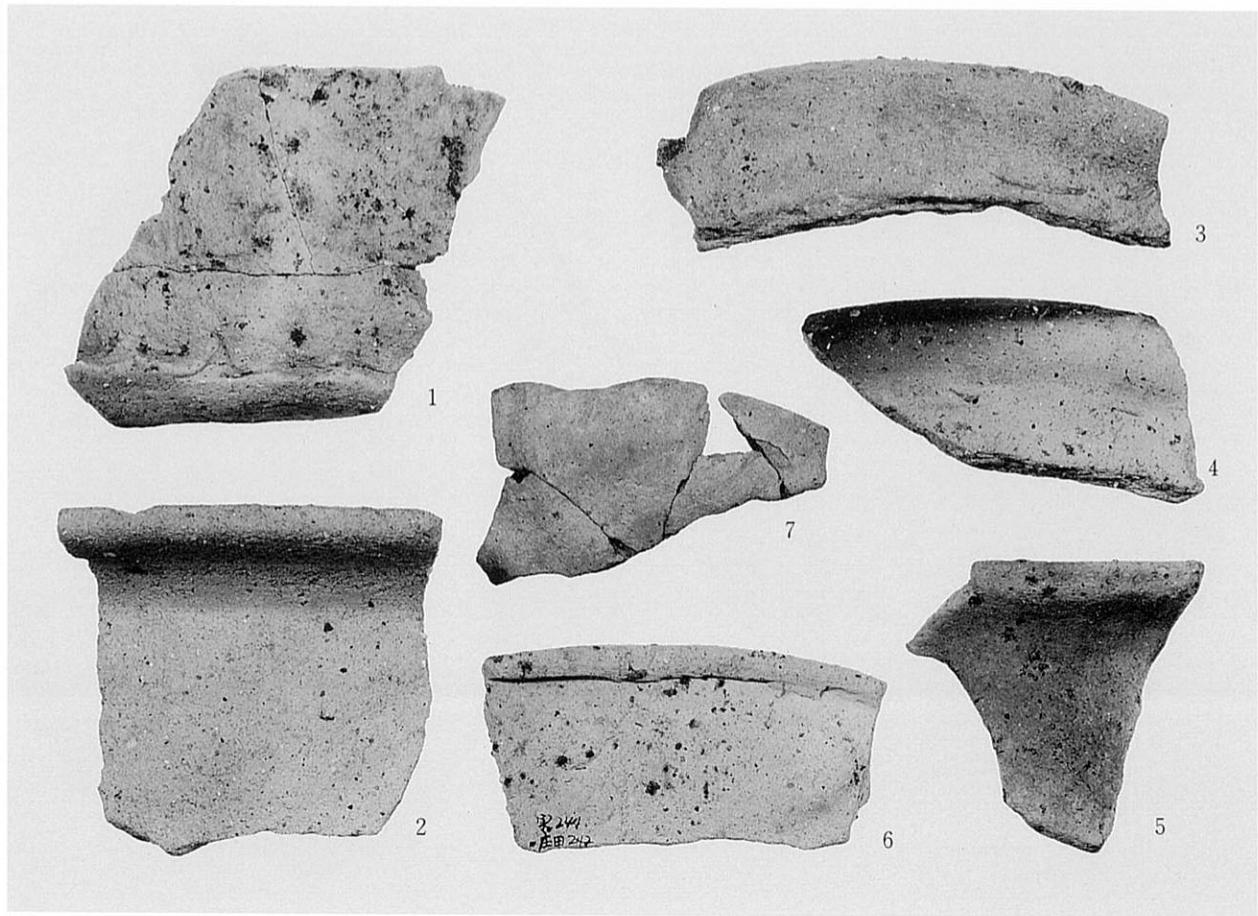
b. A区 (1). B区 (2~5) 遺構出土土器

(2/3)



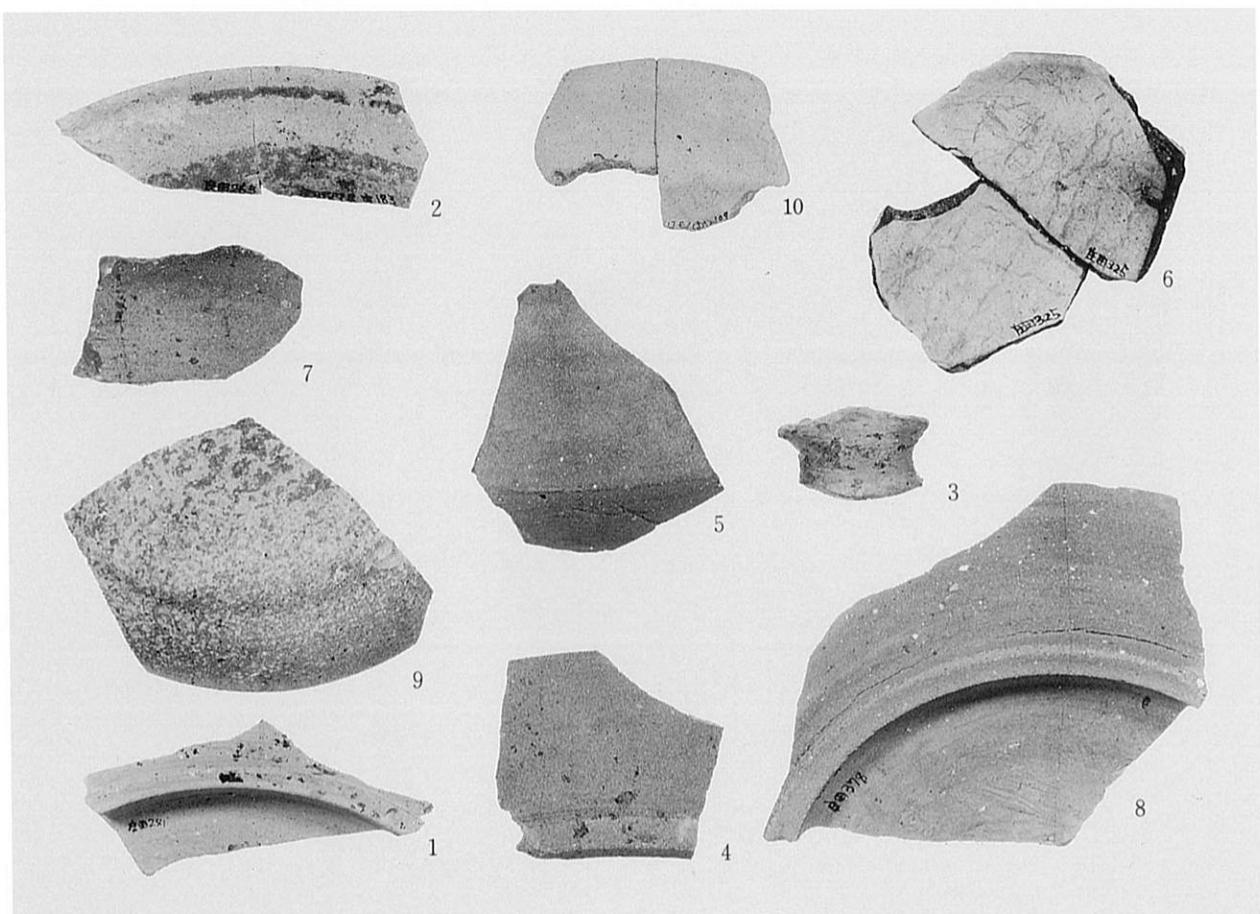
a. B区遺構出土土器 (1~3)

(2/3)



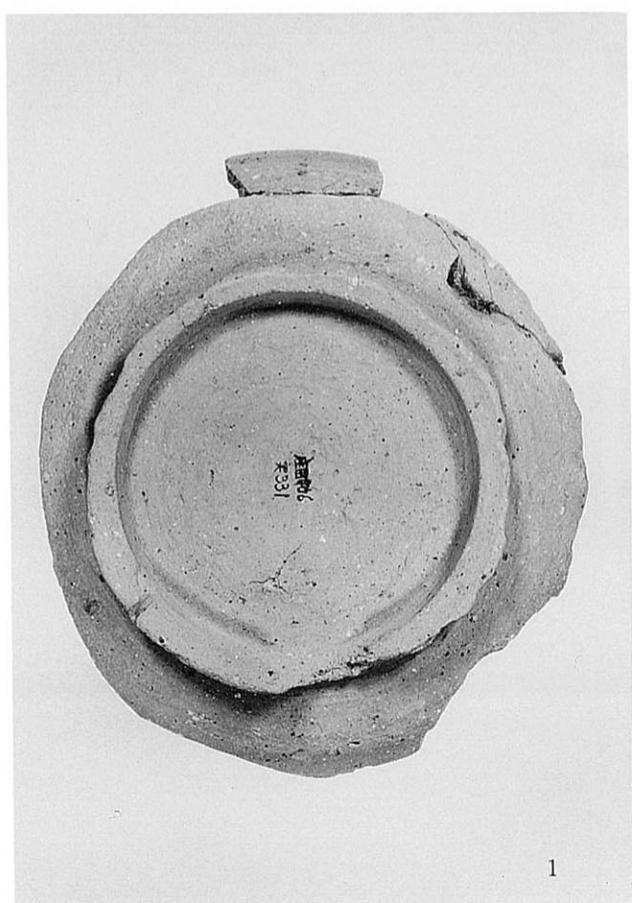
b. B区遺構出土土器 (1~7)

(2/3)



a. B区 (1~6), C区 (7~10) 遺物出土土器

(2 / 3)



1

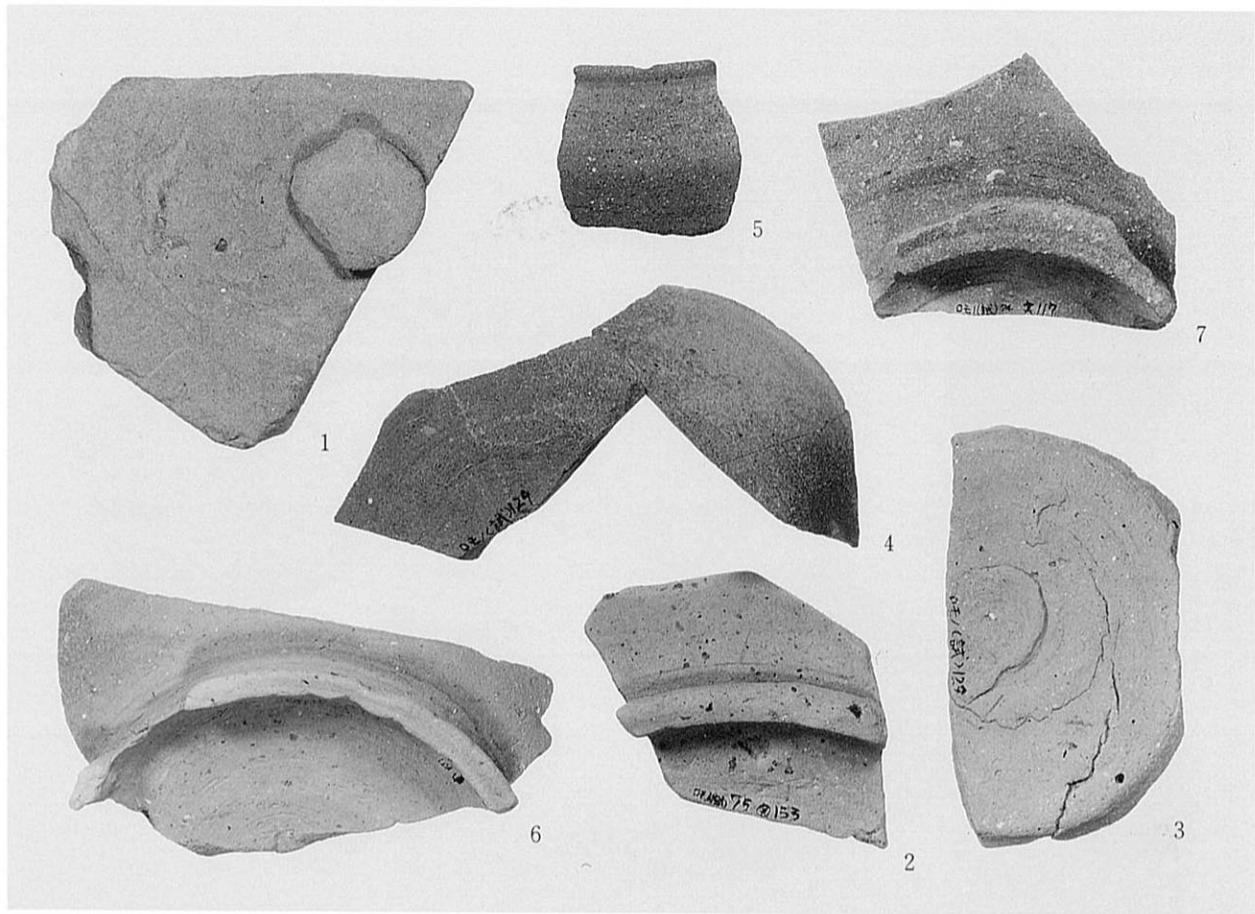


1'

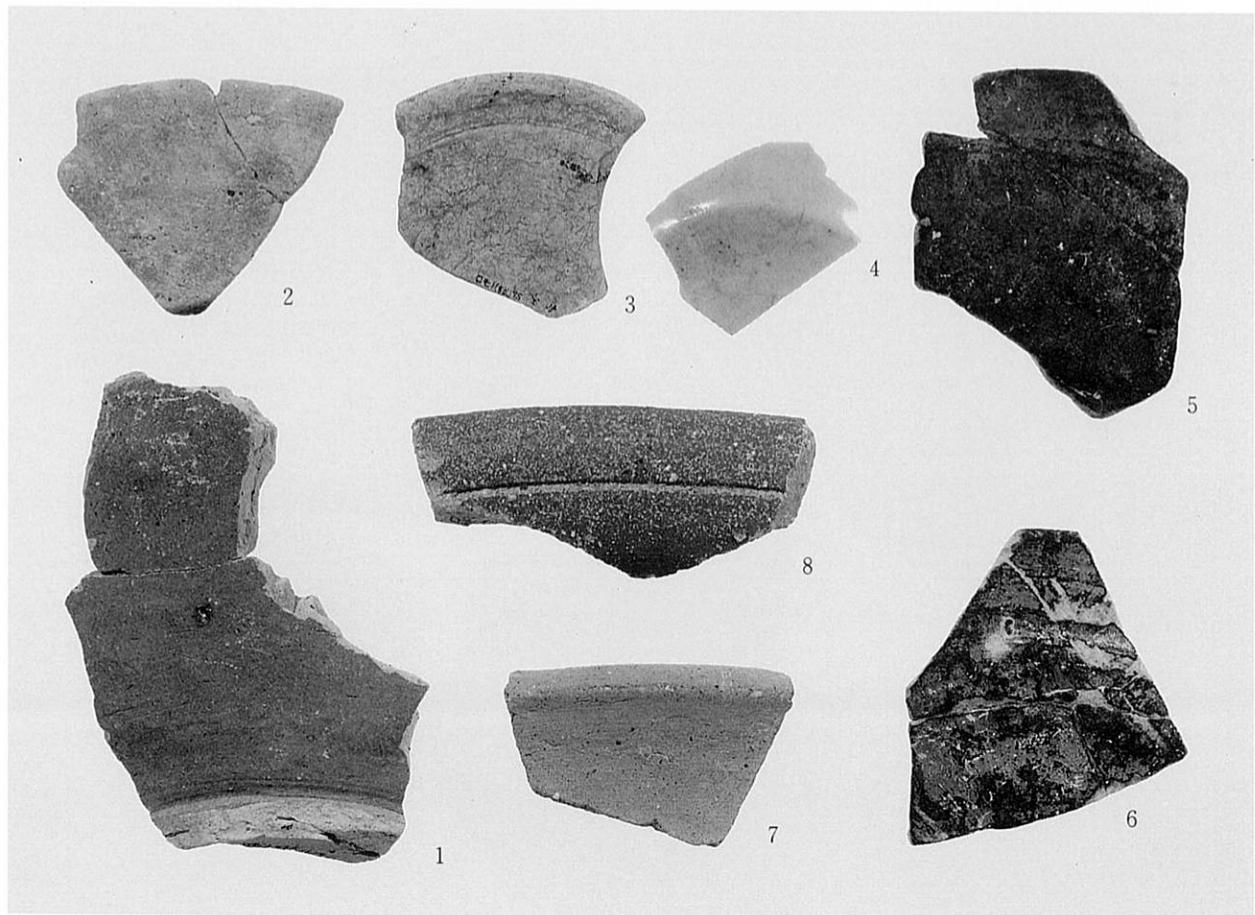
b. D区遺構出土土器 (1)

(3 / 5)

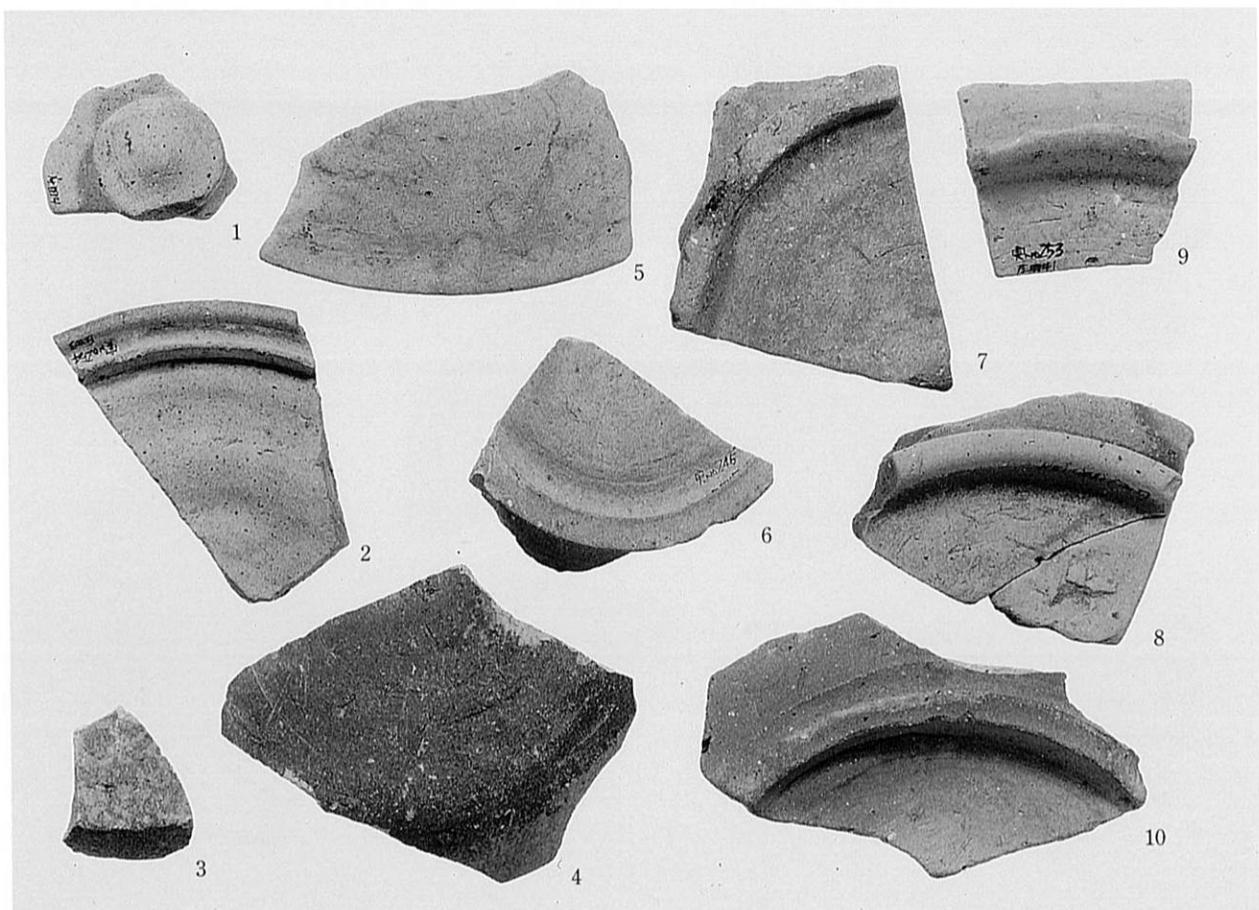
(3 / 4)



a. A区1層出土土器 (1~7) (2/3)

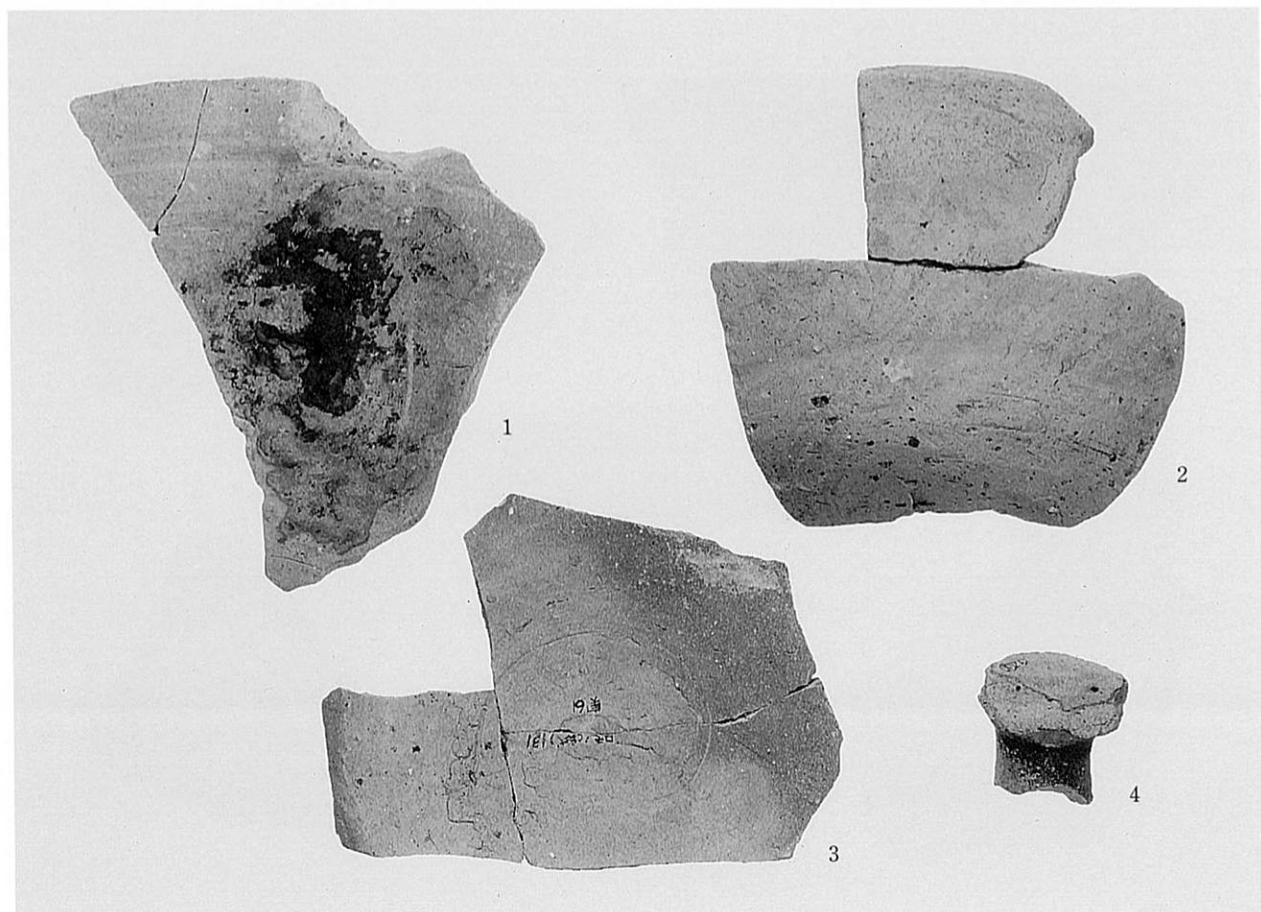


b. A区1層出土土器 (1~8) (2/3)



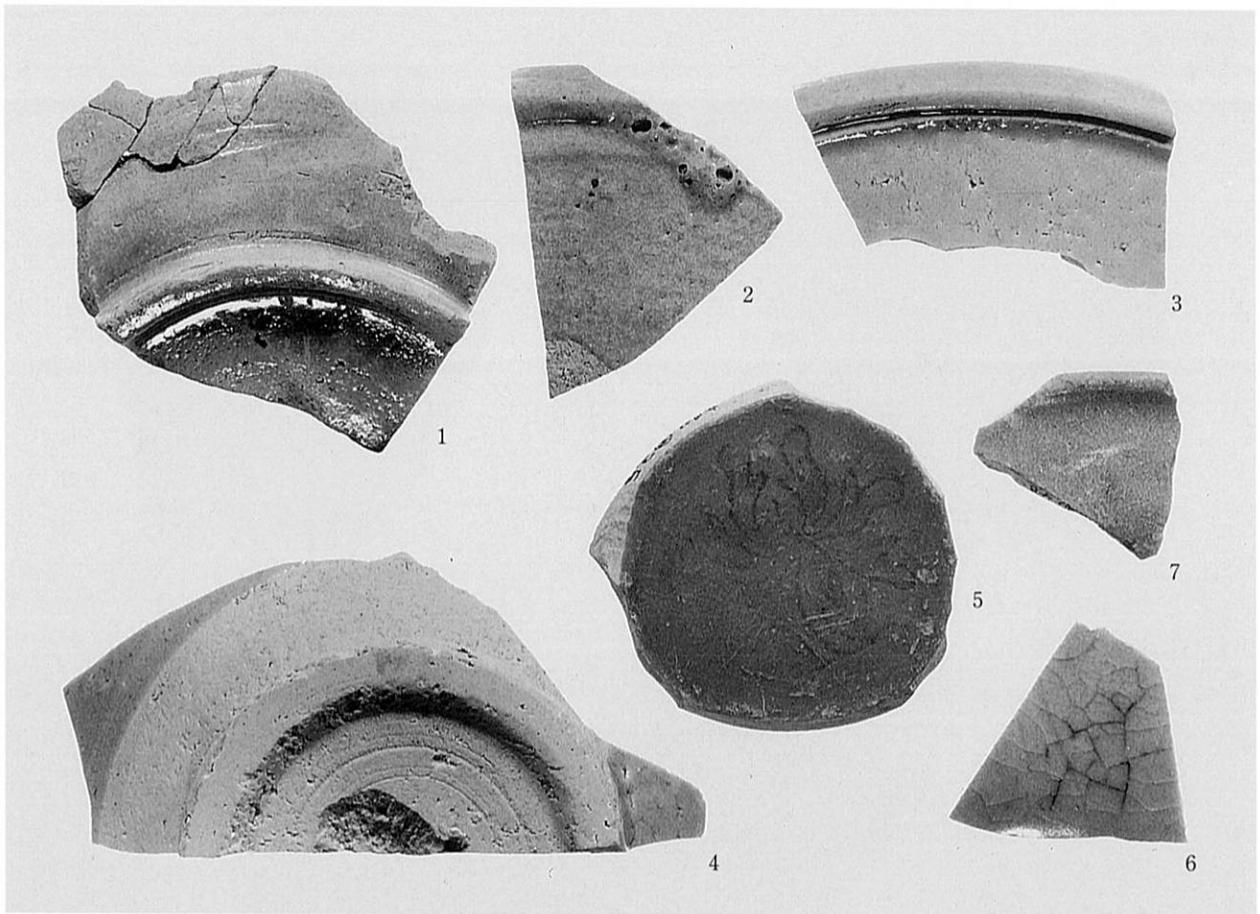
a. A区2層出土土器 (1~10)

(2/3)



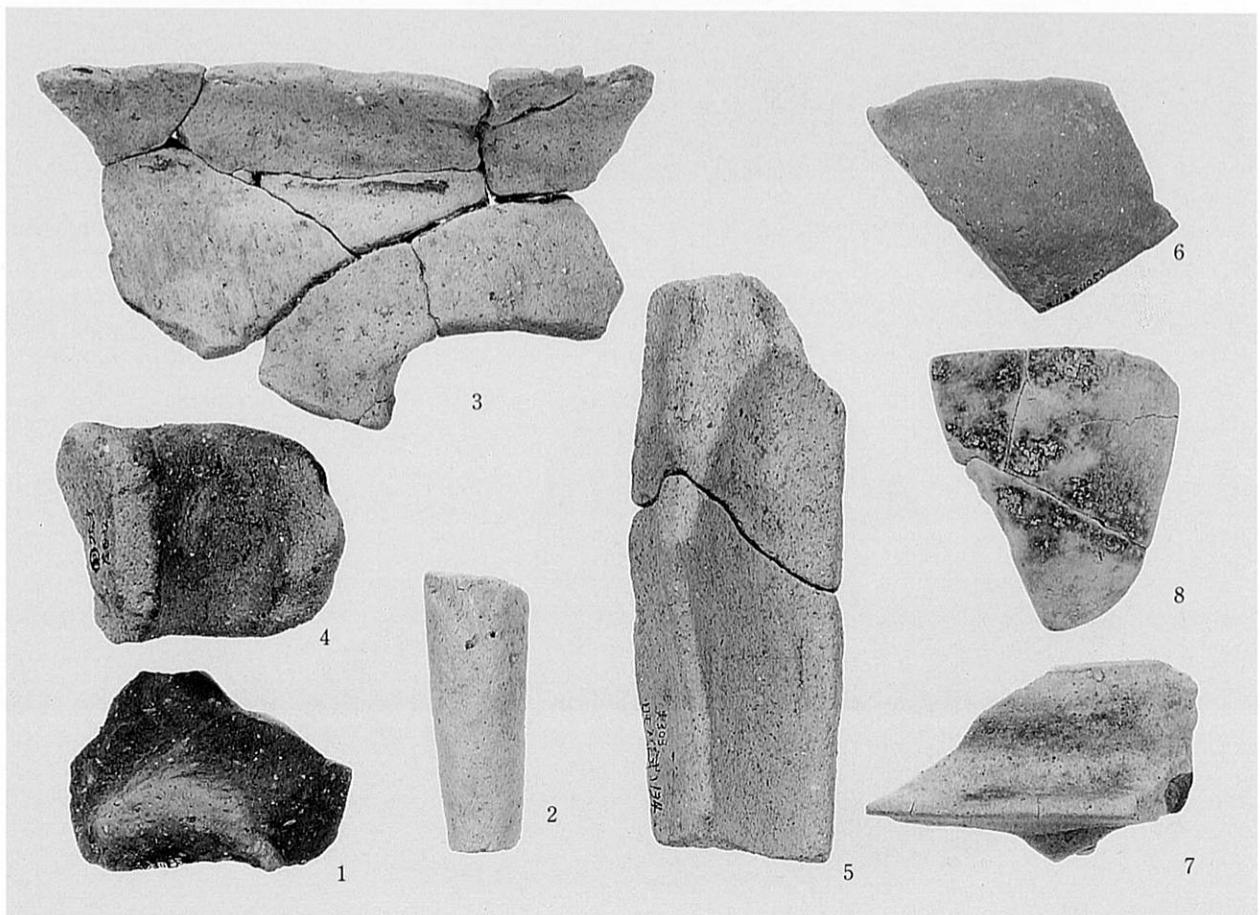
b. A区2層出土土器 (1~4)

(3/5)



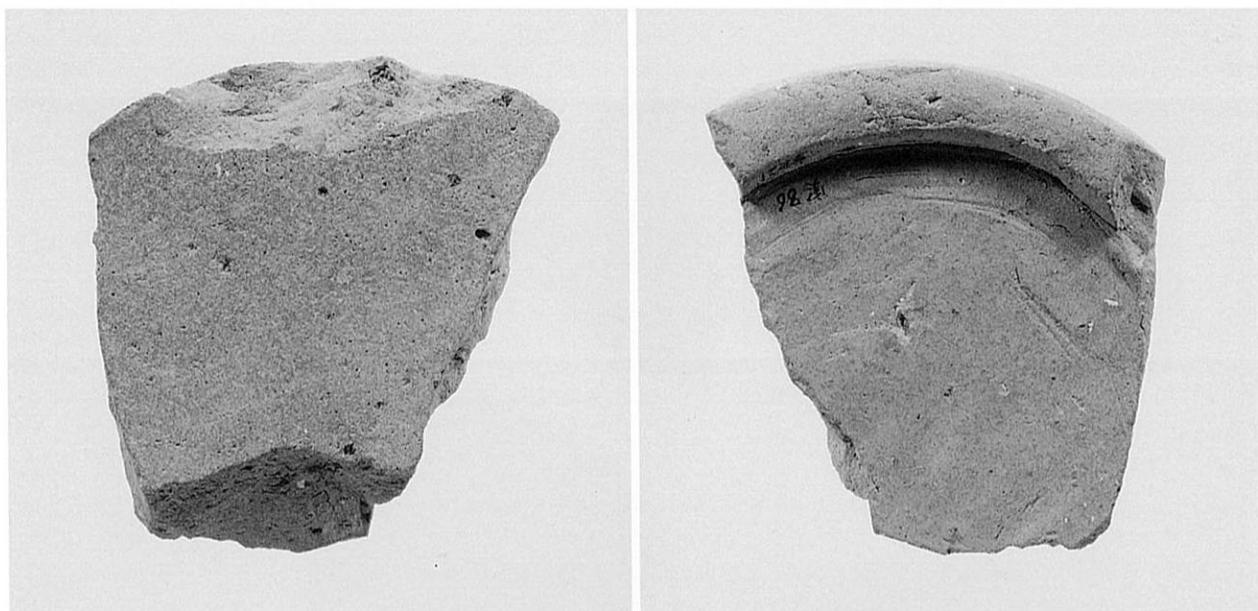
a. A区2層(1~5). 耕土(6・7)出土土器

(3/4)



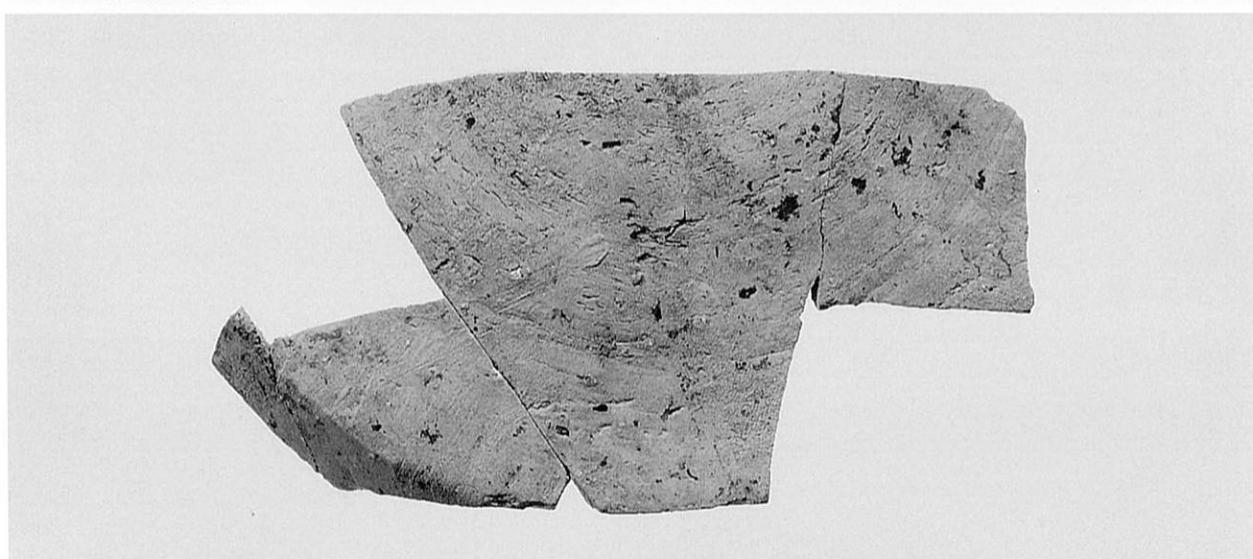
b. A区2層(1~5). 排土(6~8)出土土器

(2/3)



a. A区2層出土陶硯

(1／1)

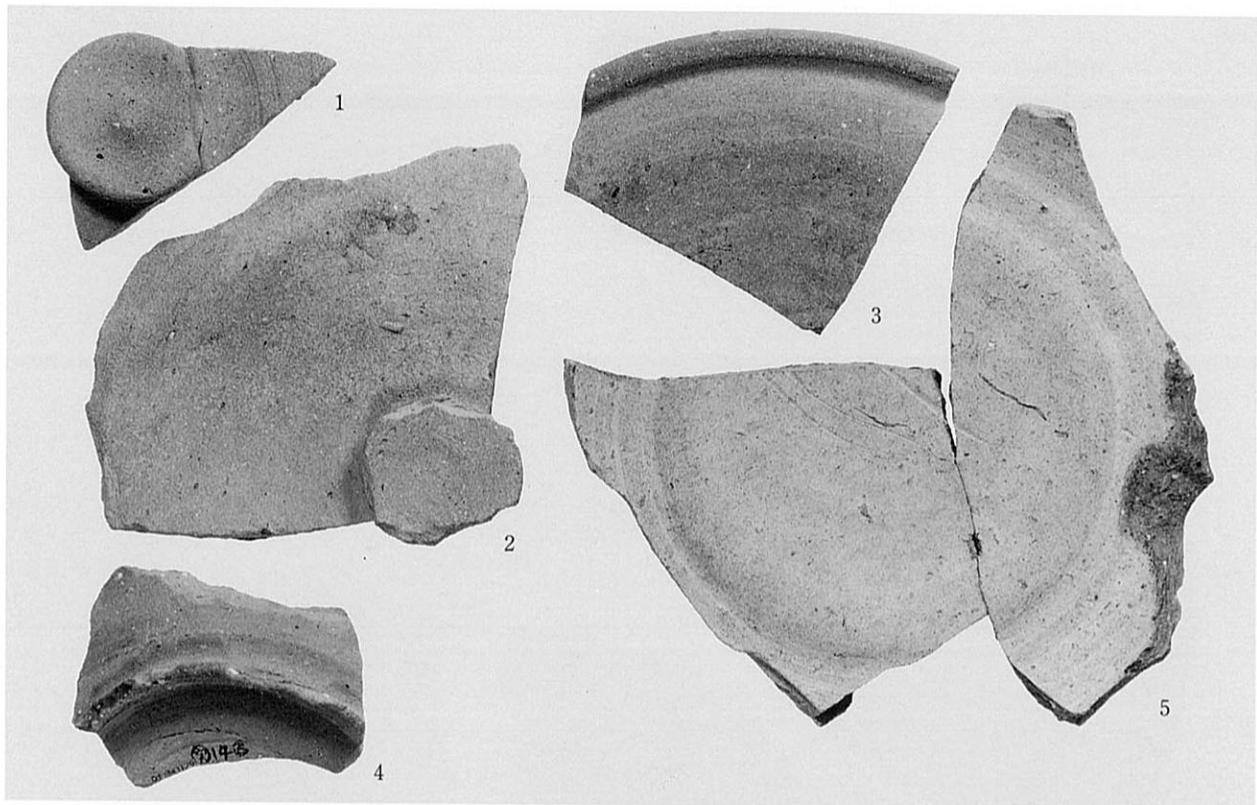


b. A区3層出土墨書土器

(1／1)

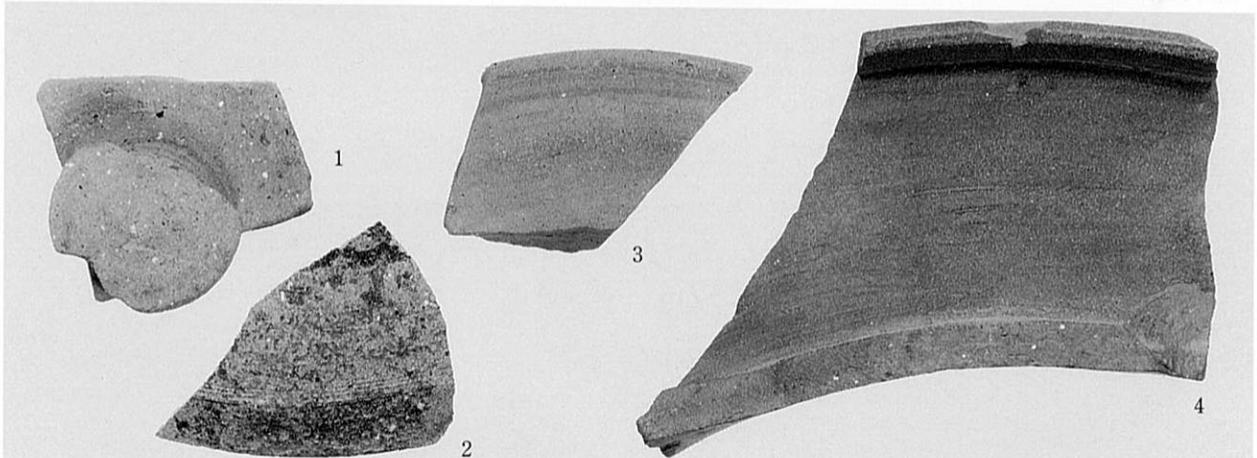


c. A区3層出土土器



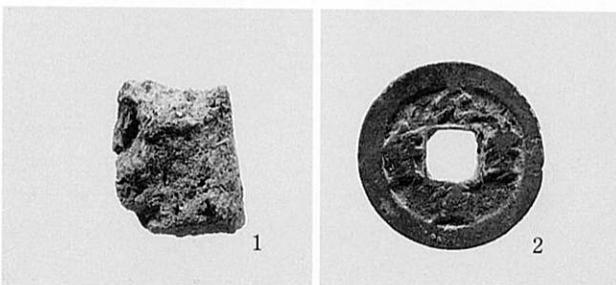
a. A区3層出土土器 (1~5)

(2/3)



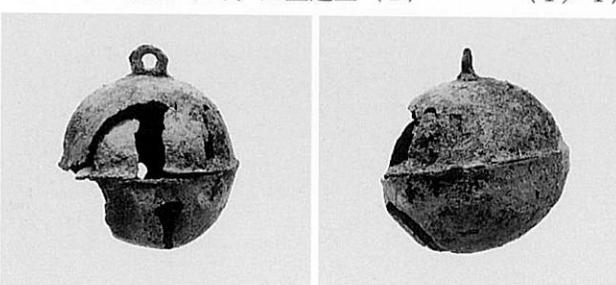
b. A区排土出土土器 (1~4)

(2/3)



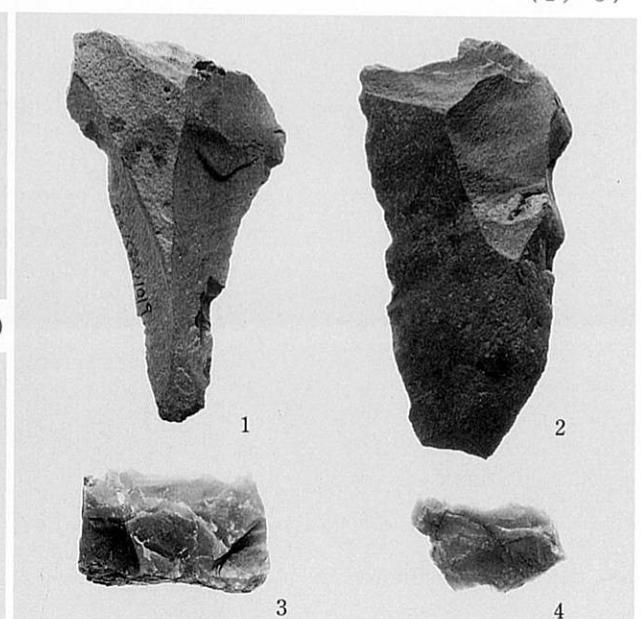
c. フイゴ羽口 (1). 元豊通宝 (2)

(1/1)



d. 銅鈴

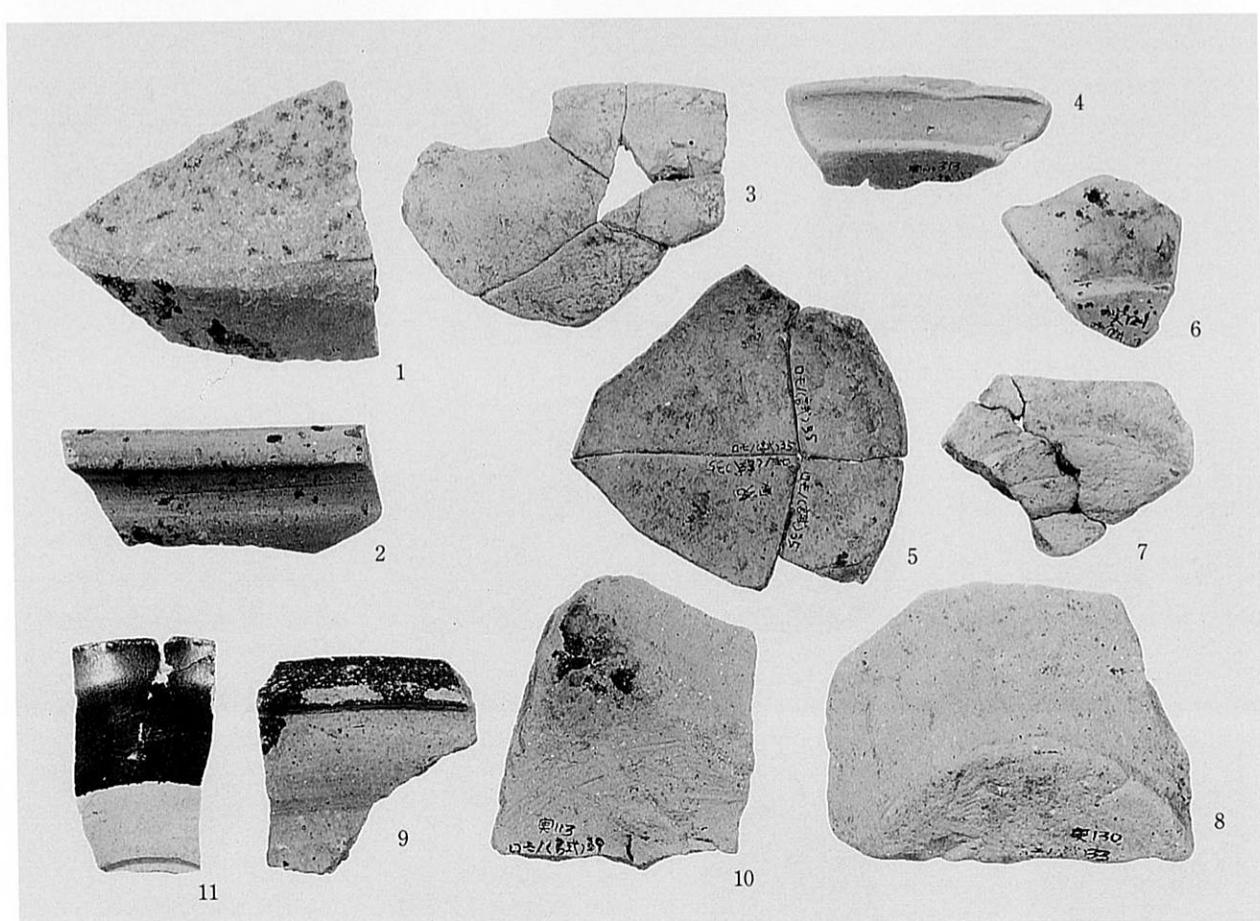
(1/1) e. サヌカイト剝片 (1). 玄武岩剝片 (2). チャート火打石 (3:4) (1/1)





a. B区1層出土土器（1～9）

(2 / 3)

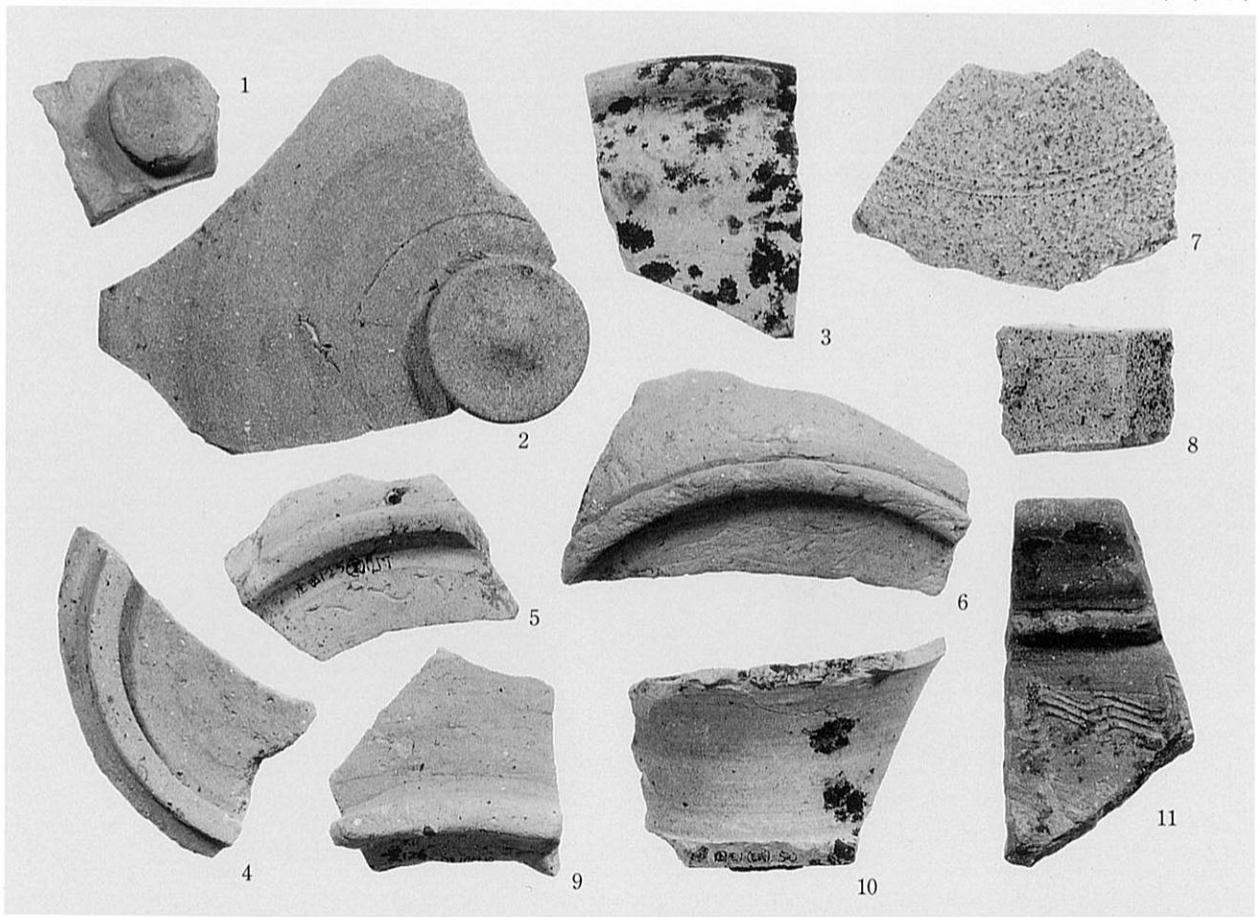


b. B区1層出土土器（1～11）

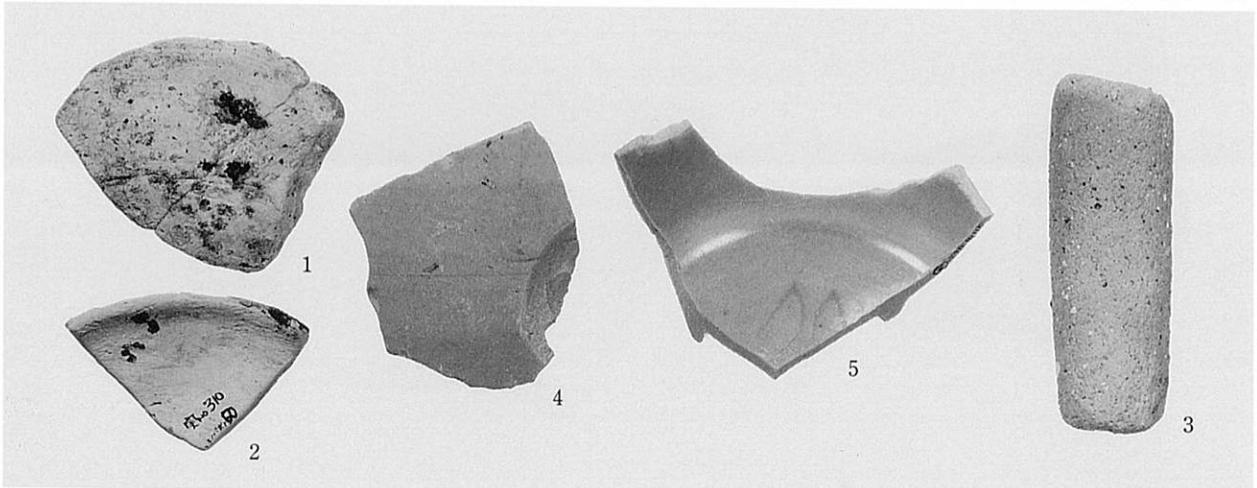
(2 / 3)



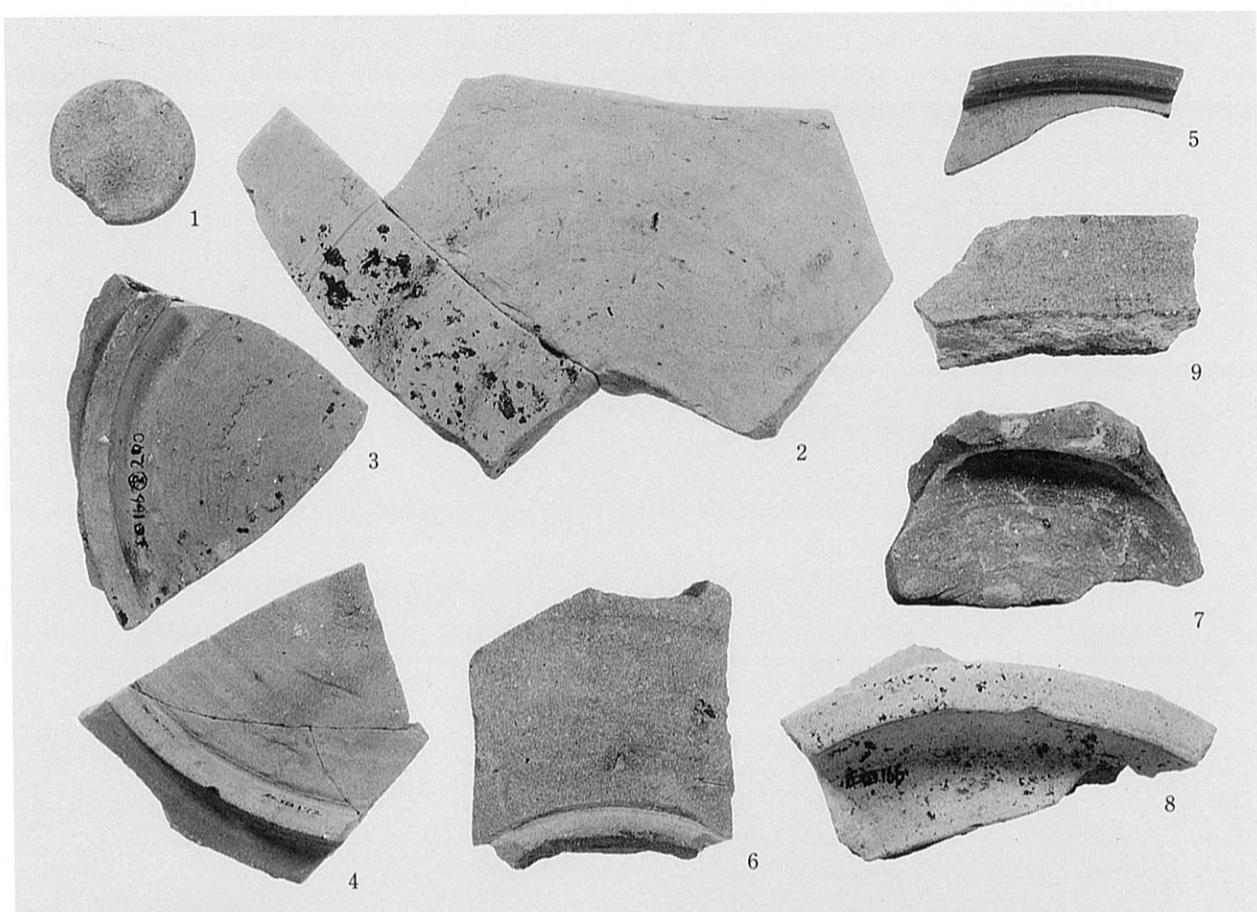
a. B区1層(1). 2層(2)出土土器 (2/3)



b. B区2層出土土器(1~11) (2/3)

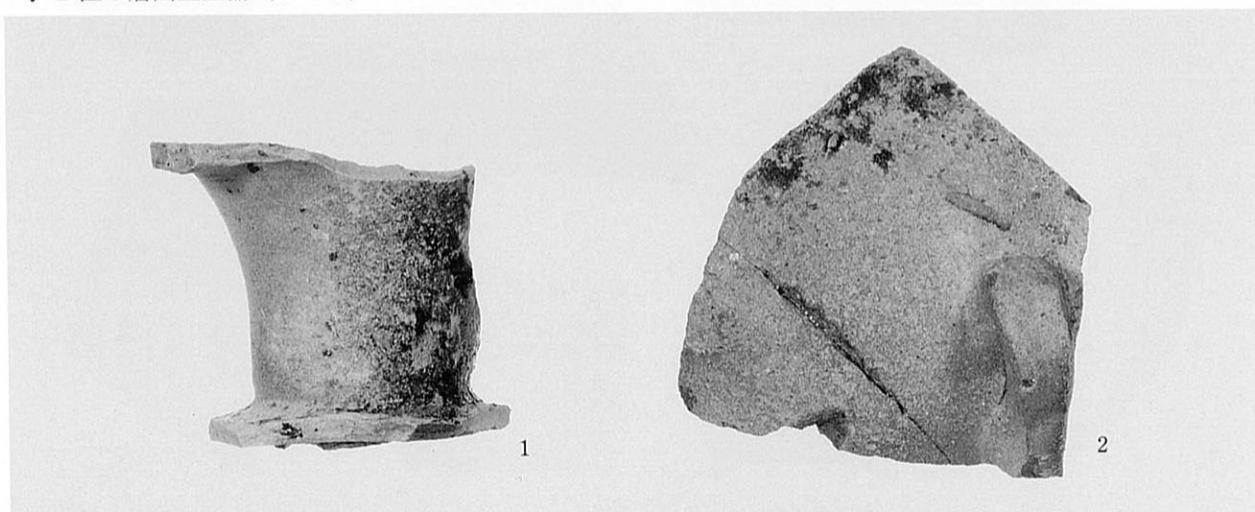


c. B区2層出土土器(1~5) (2/3)



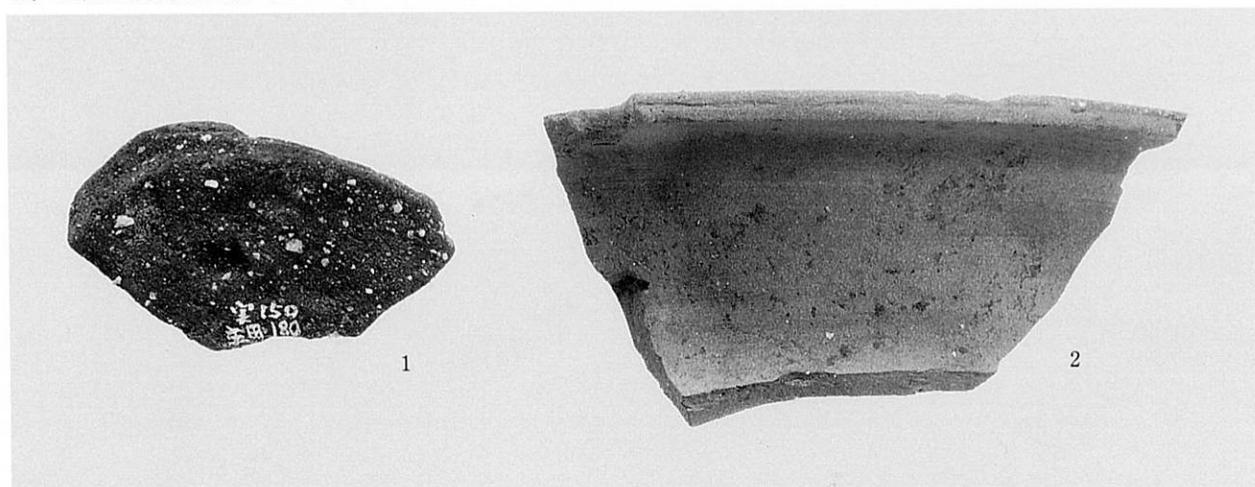
a. B区3層出土土器（1～9）

(2/3)



b. B区3層出土土器（1・2）

(2/3)



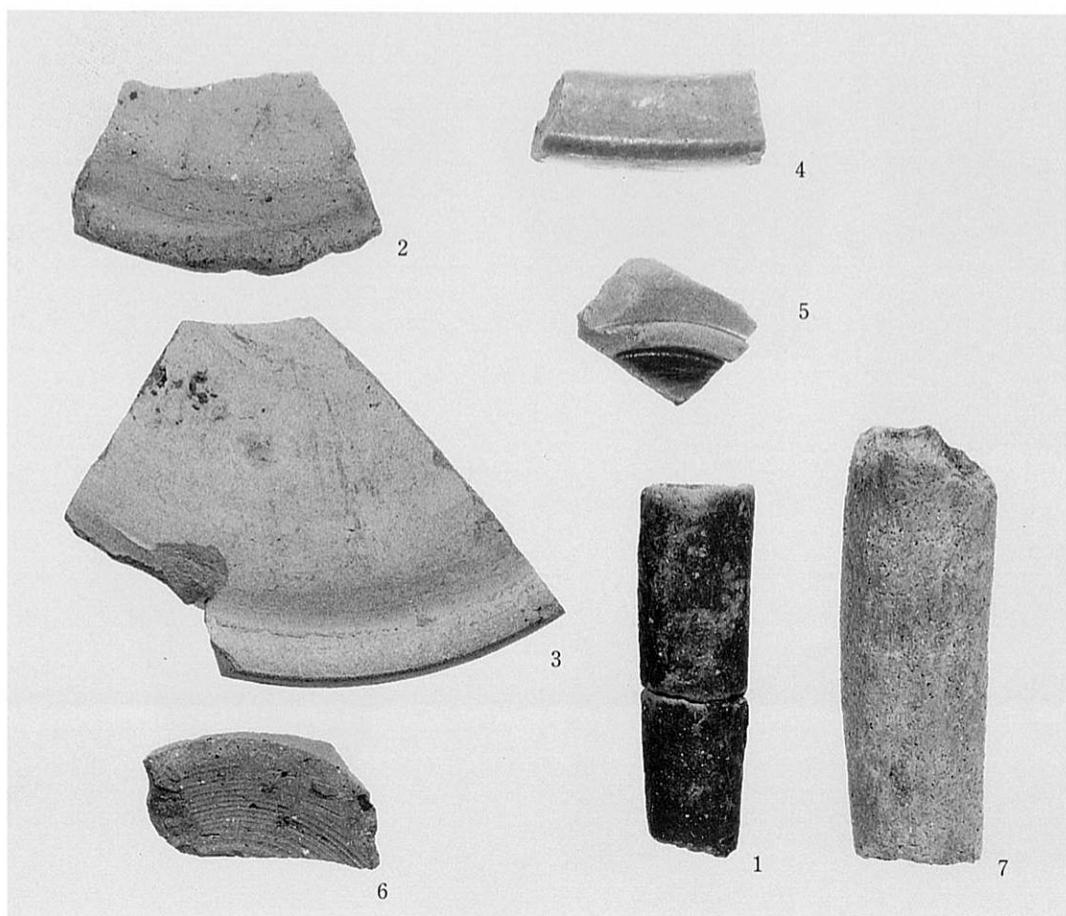
c. B区4層出土土器（1・2）

(4/5)



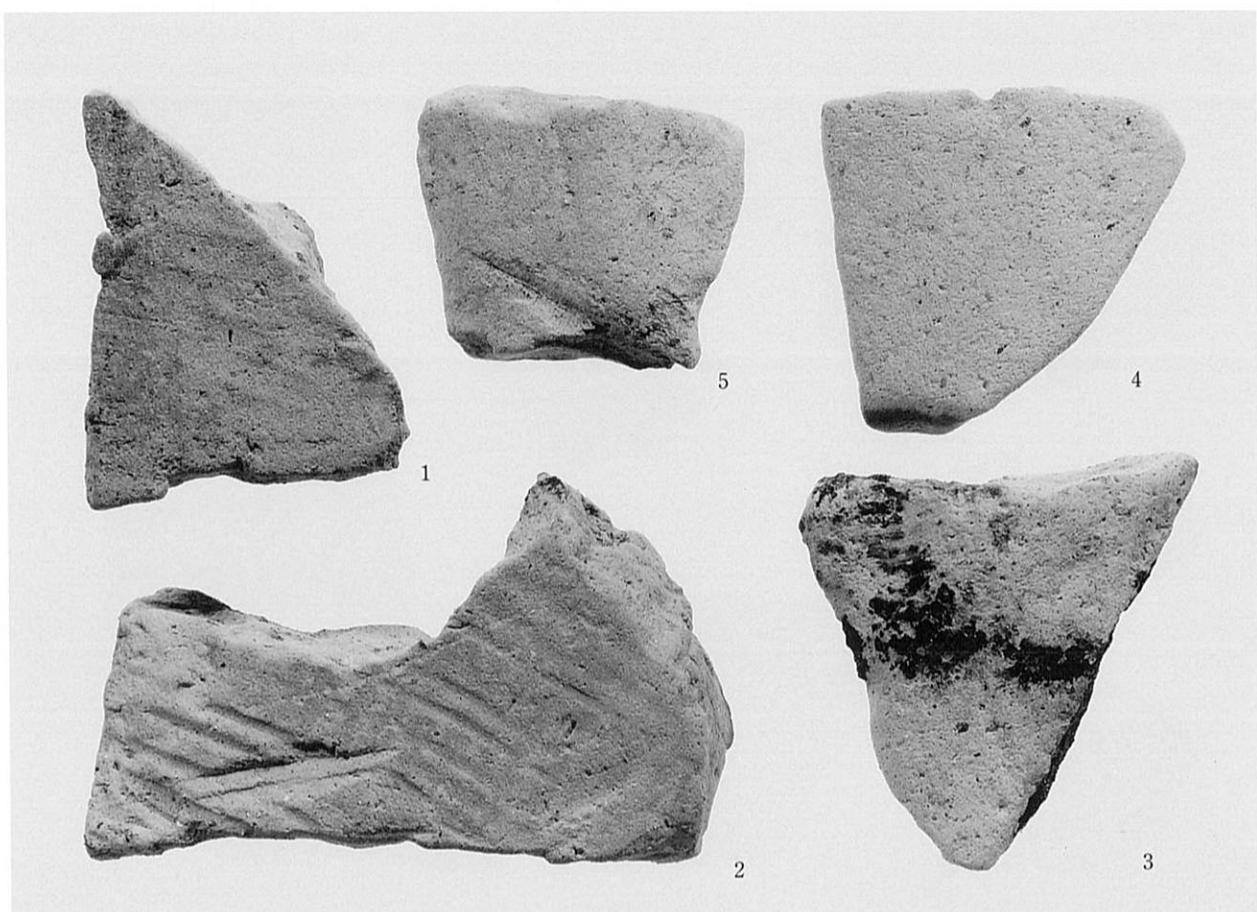
a. B区3層出土土器（1～7）

(3／4)



b. B区耕土（1）、排土（2～7）出土土器

(2／3)



a. 建物4 (1・2). B区1層 (3・4). B区2層 (5) 出土瓦

(3 / 4)



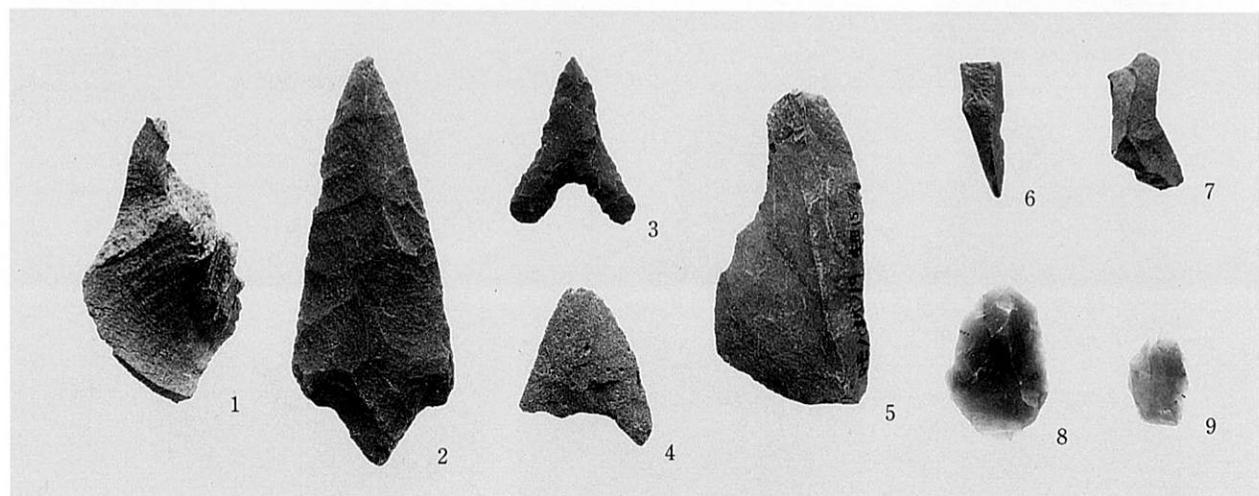
b. 同上內面

(3 / 4)

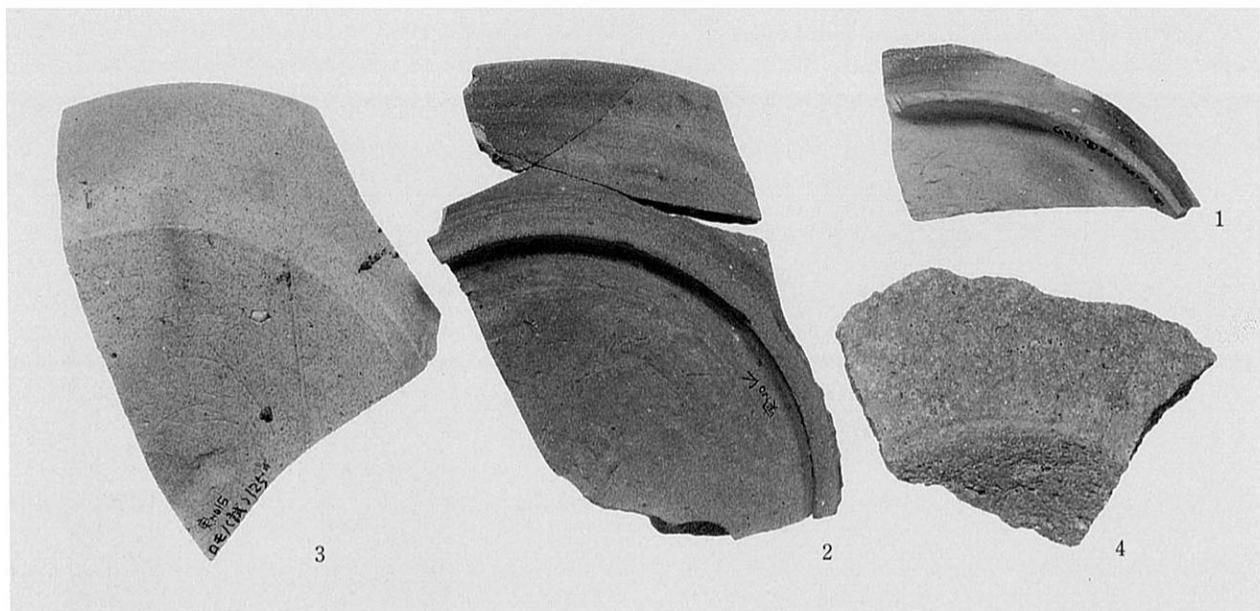


a. B区. 焼土 (1). フイゴ羽口 (2). 土錐 (3). 馬歛の鉄齒 (4)

(1/1)

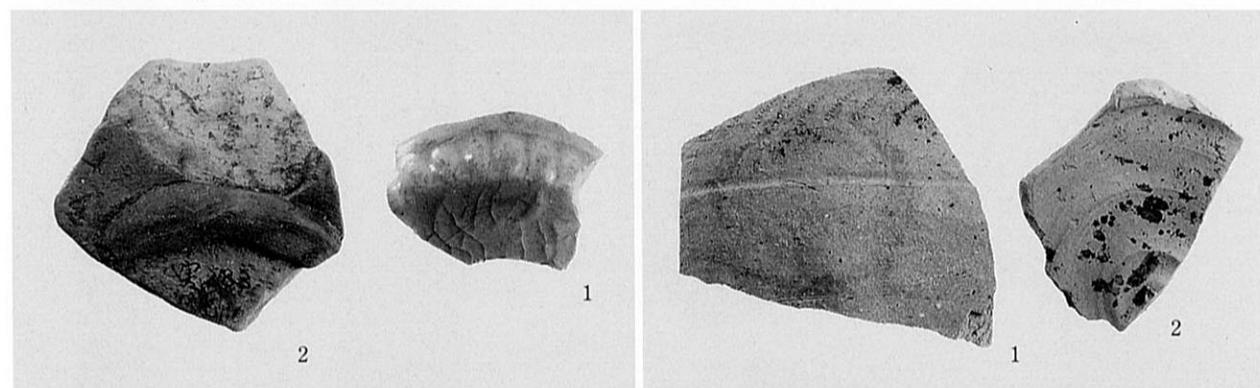
b. B区. 翼状剝片 (1). 有舌尖頭器 (2). 石鏃 (3・4). 楔形石器 (5).
サヌカイト剝片 (6・7). チャート火打石 (8・9)

(1/1)



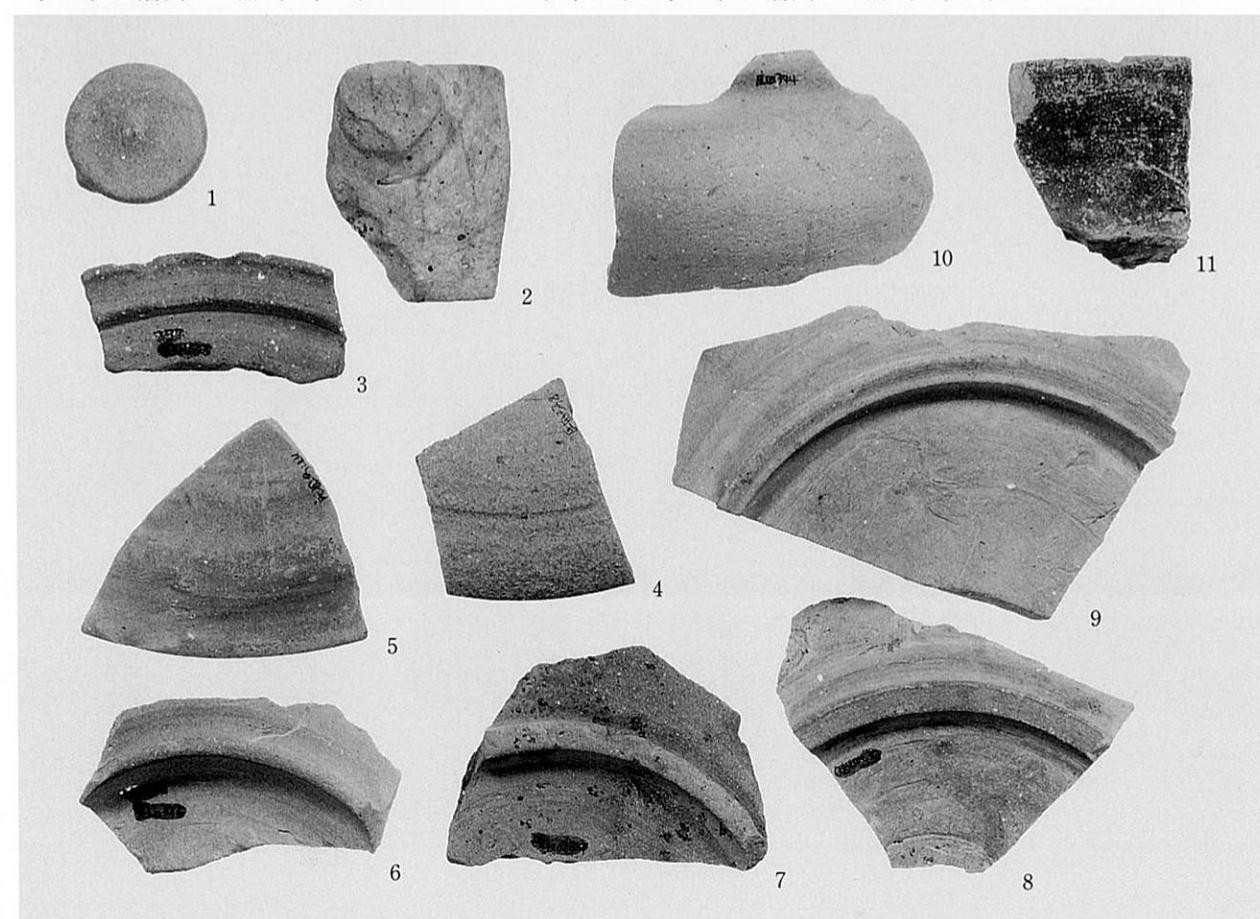
a. C区1層出土土器（1～4）

(2/3)



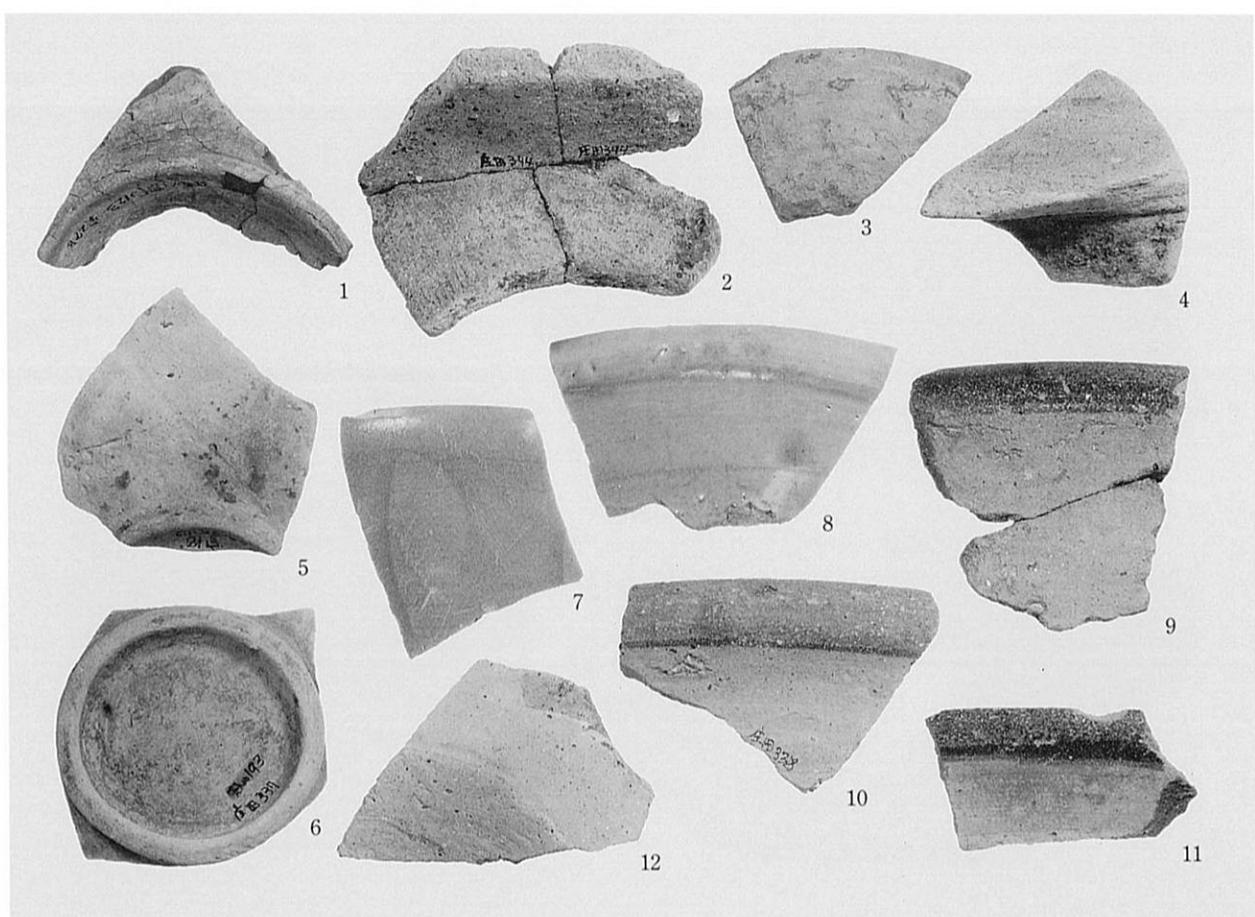
b. C区1層出土土器（1、2）

(1/1) c. C区2層出土土器（1、2）



d. C区2層出土土器（1～11）

(2/3)



a. C区2層出土土器 (1~12)

(2/3)



b. C区3層出土土器 (1~5)

(2/3)



a. C区3層出土土器（1～4）

(2/3)



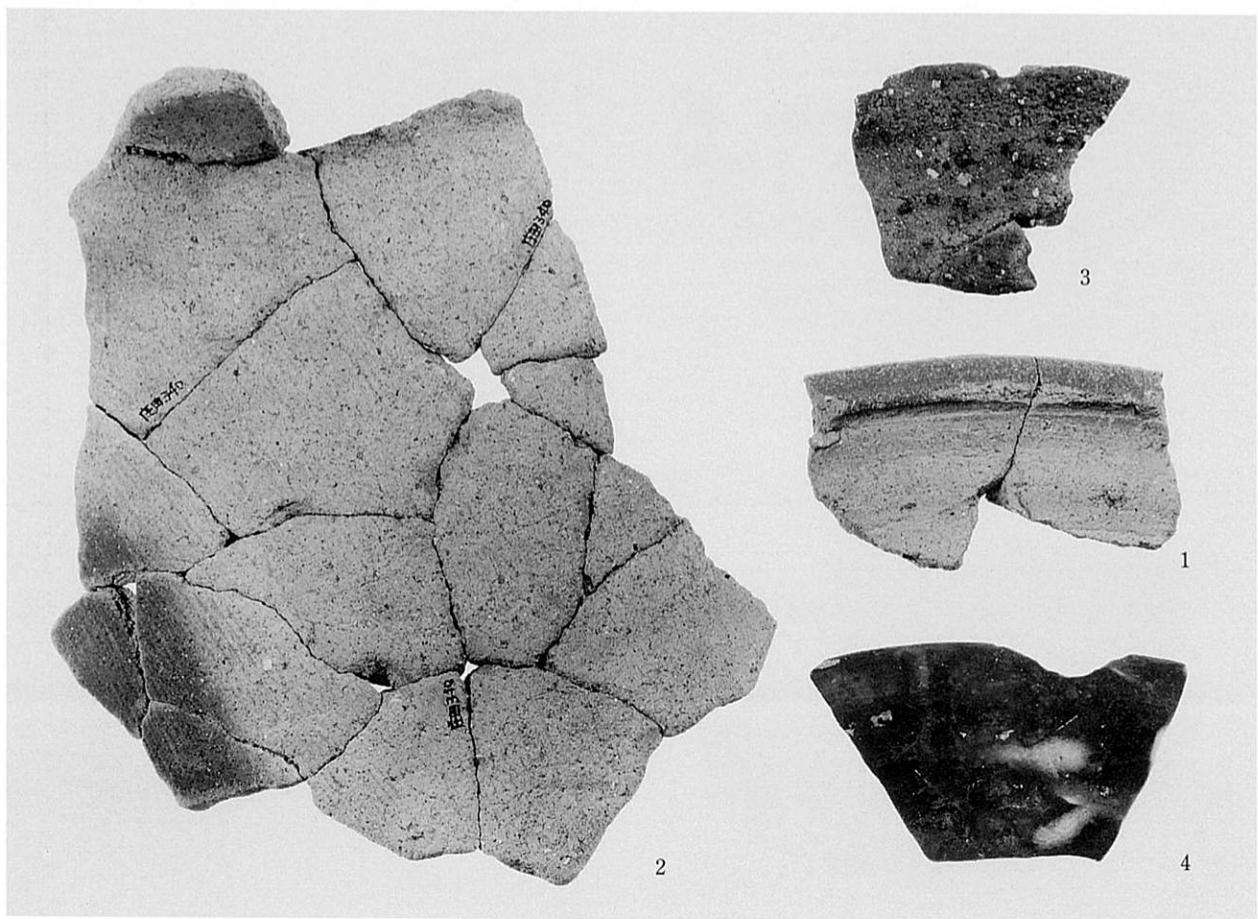
b. C区3層出土土器（1～5）

(2/3)



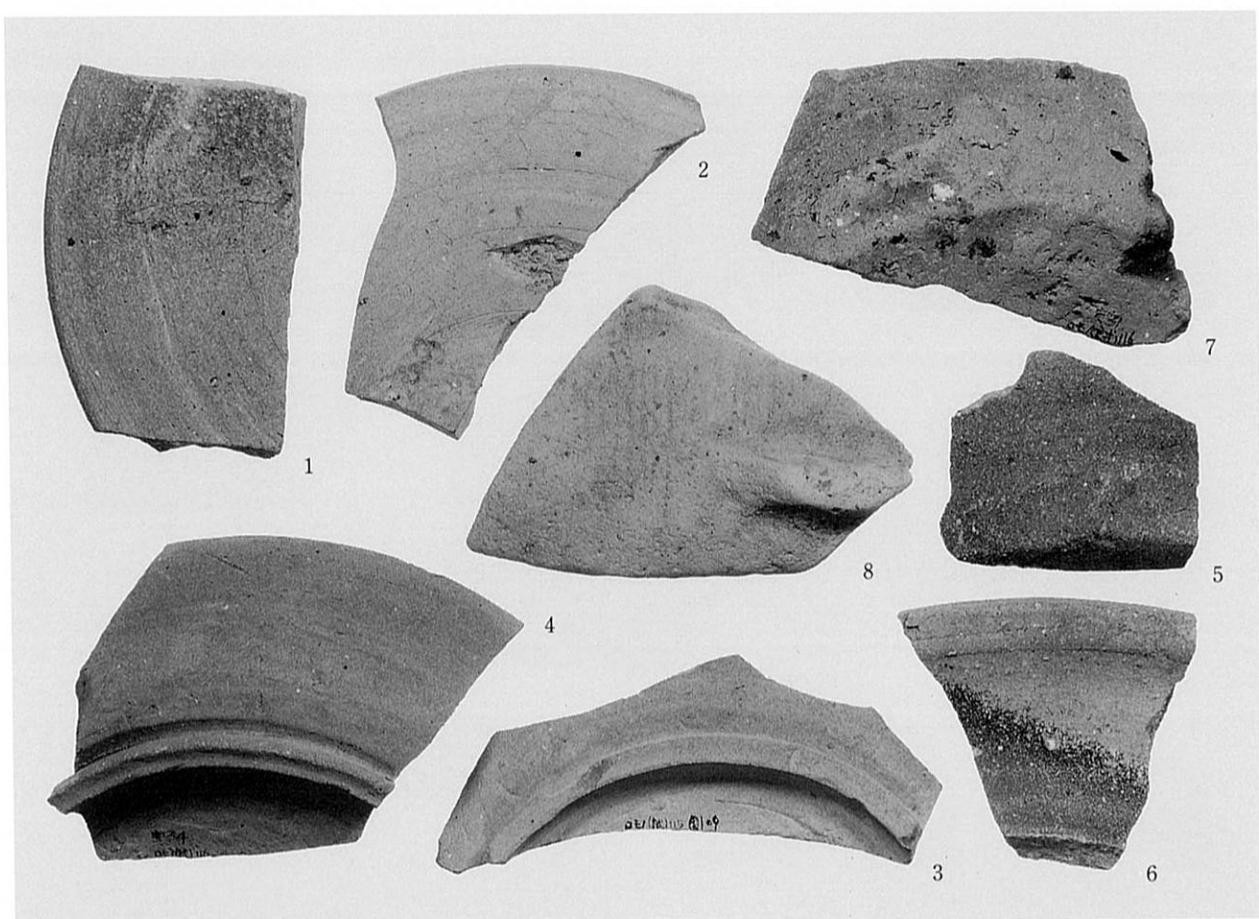
a. C区3層出土土器（1～8）

(2/3)



b. C区3層出土土器（1～4）

(2/3)



a. C区4層出土土器 (1~8)

(2/3)

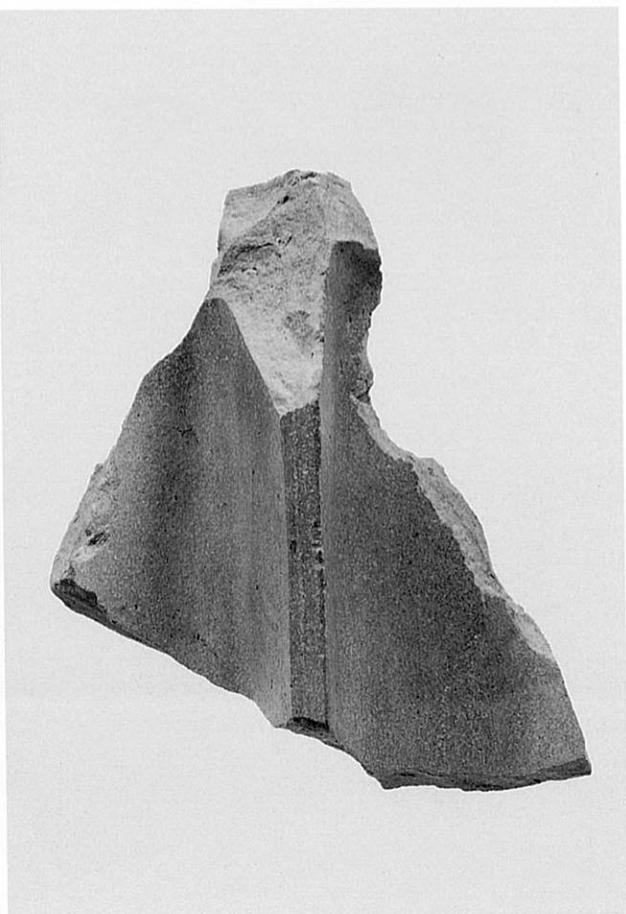


b. C区4層出土土器

(2/3)

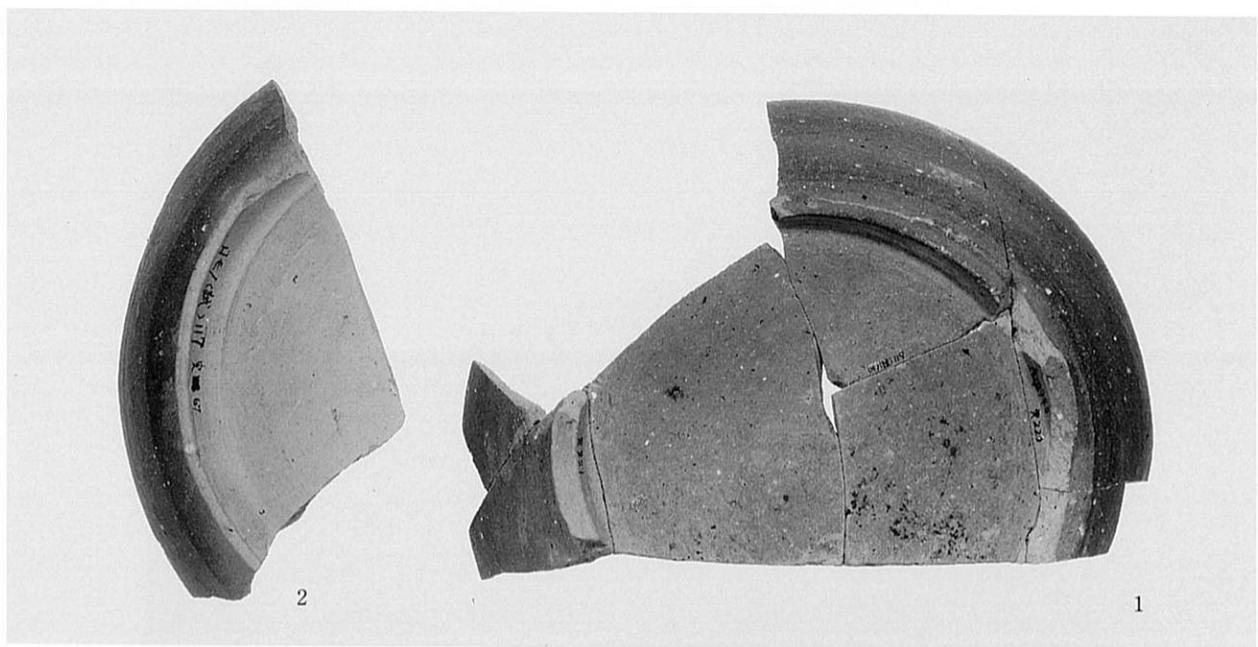


c. C区5層出土土器

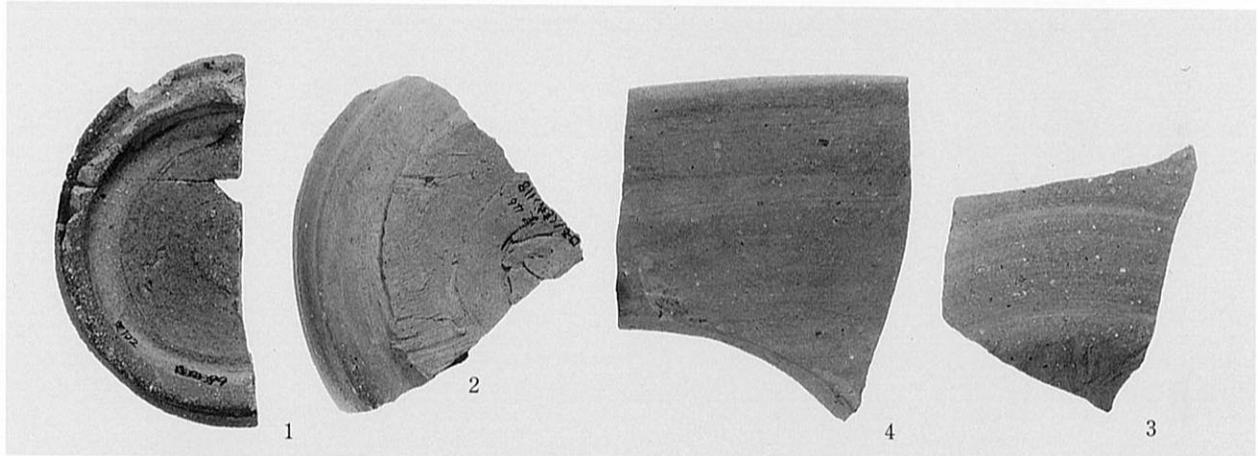


d. C区5層出土土器

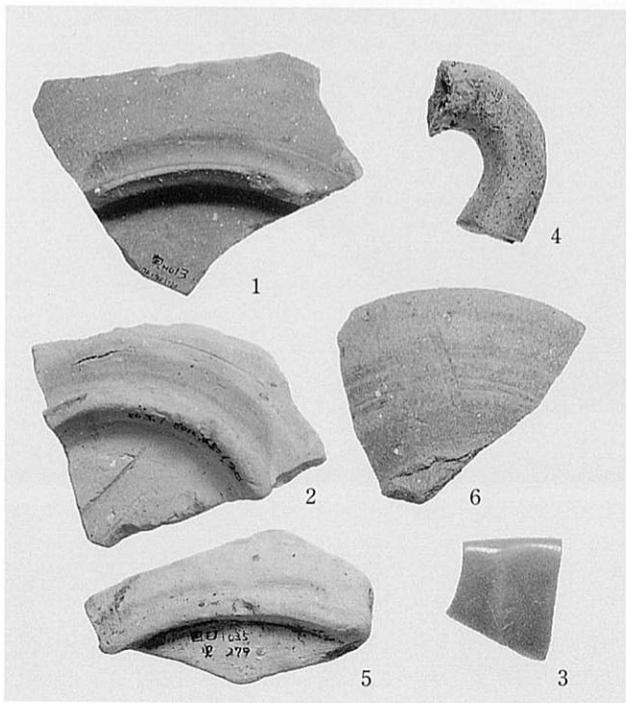
(1/1)



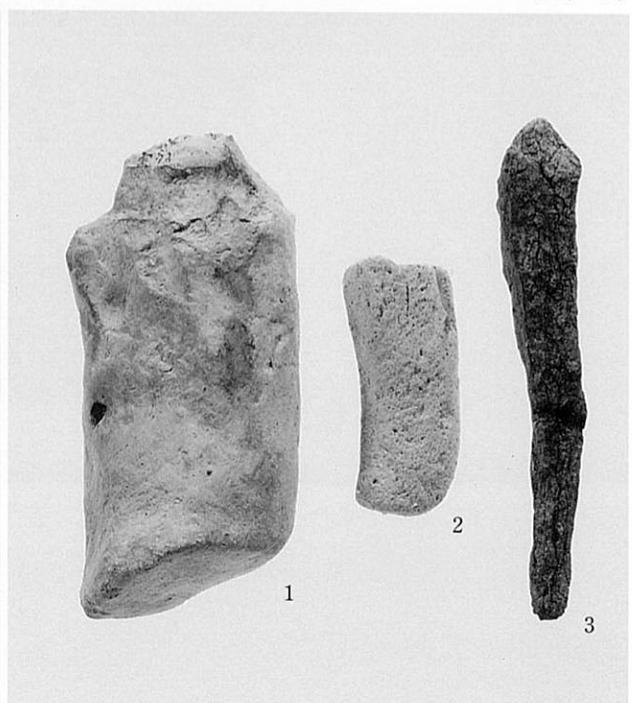
a. C区5層出土土器 (1・2) (3/5)



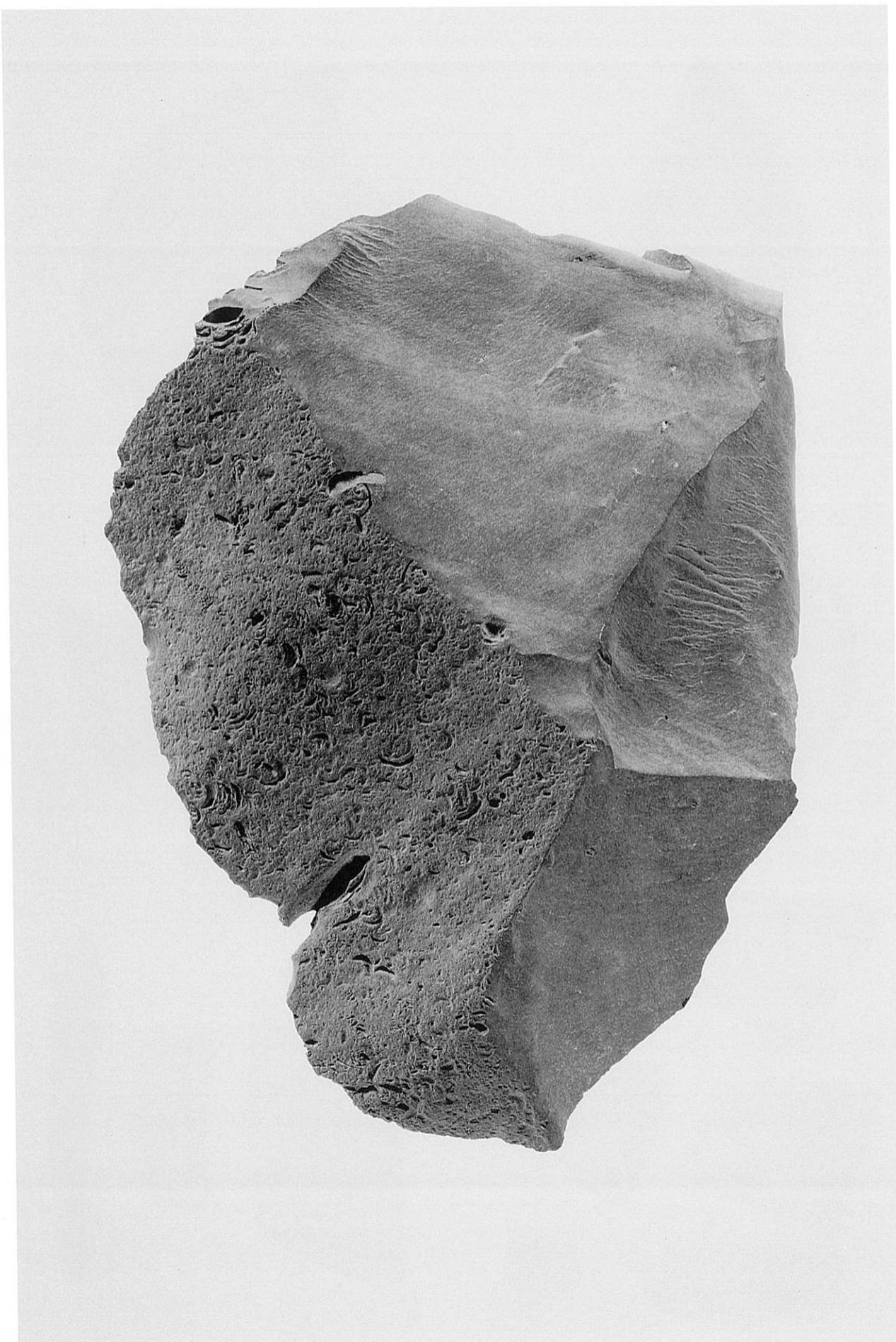
b. C区5層出土土器 (1~4) (3/5)



c. C区耕土・排土出土土器 (1~6) (3/5)

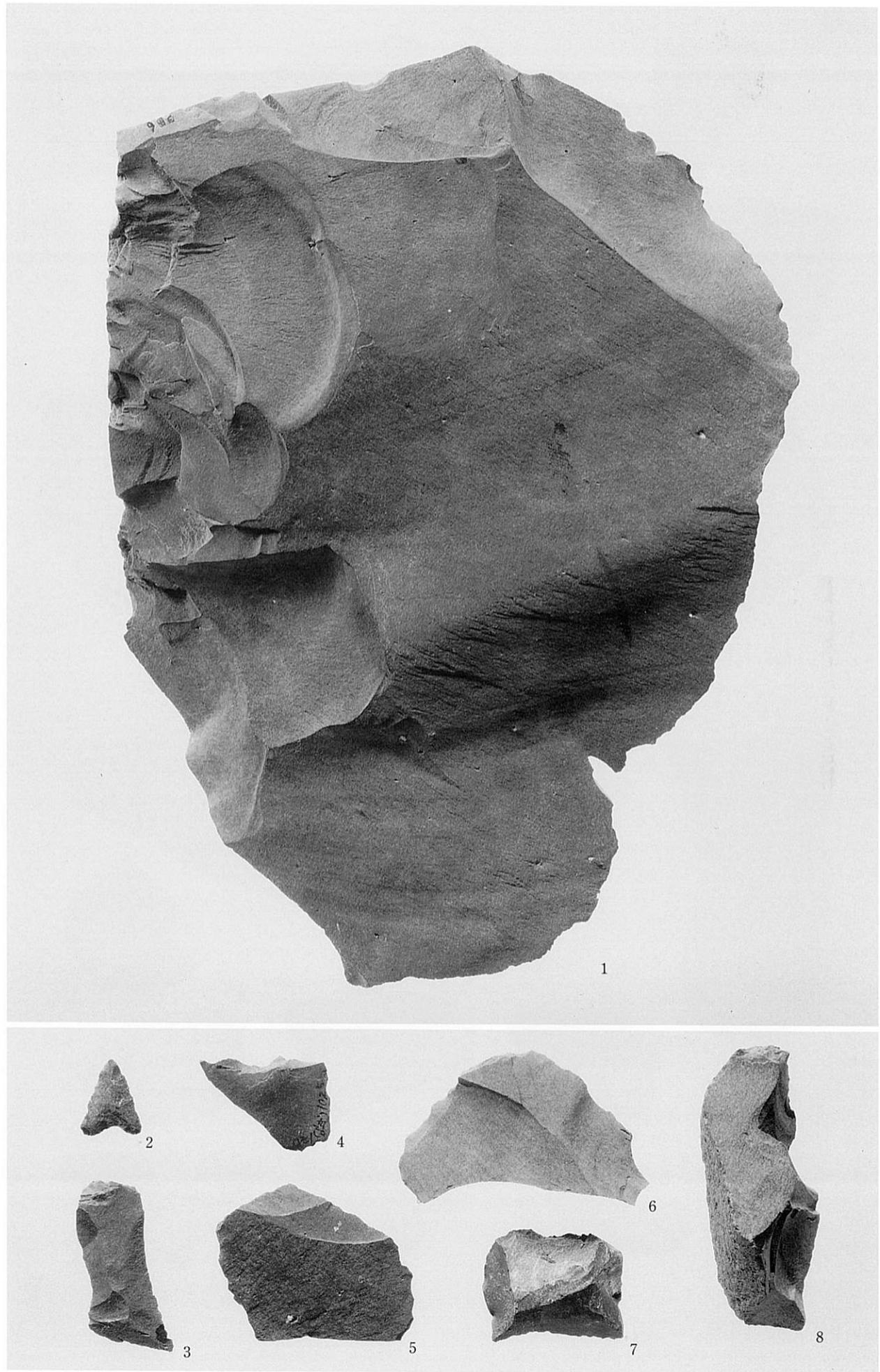


d. 土馬脚 (1・2). 鉄カスガイ (3) (1/1)



a. C区2層出土サヌカイト石核（表面）

(1/1)

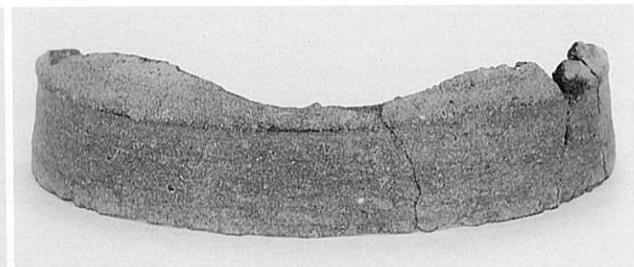


a. サヌカイト石核（裏面）（1）. 石鏸（2）. 剥片（3～7）. 石核（8）

（1／1）

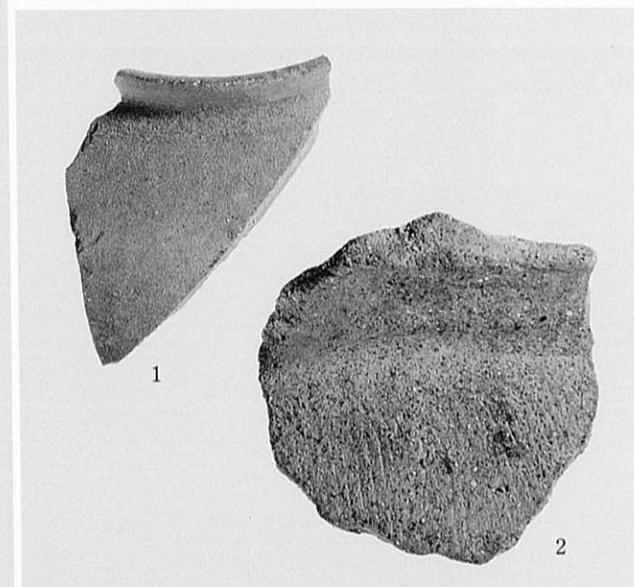


a. D区1層出土土器



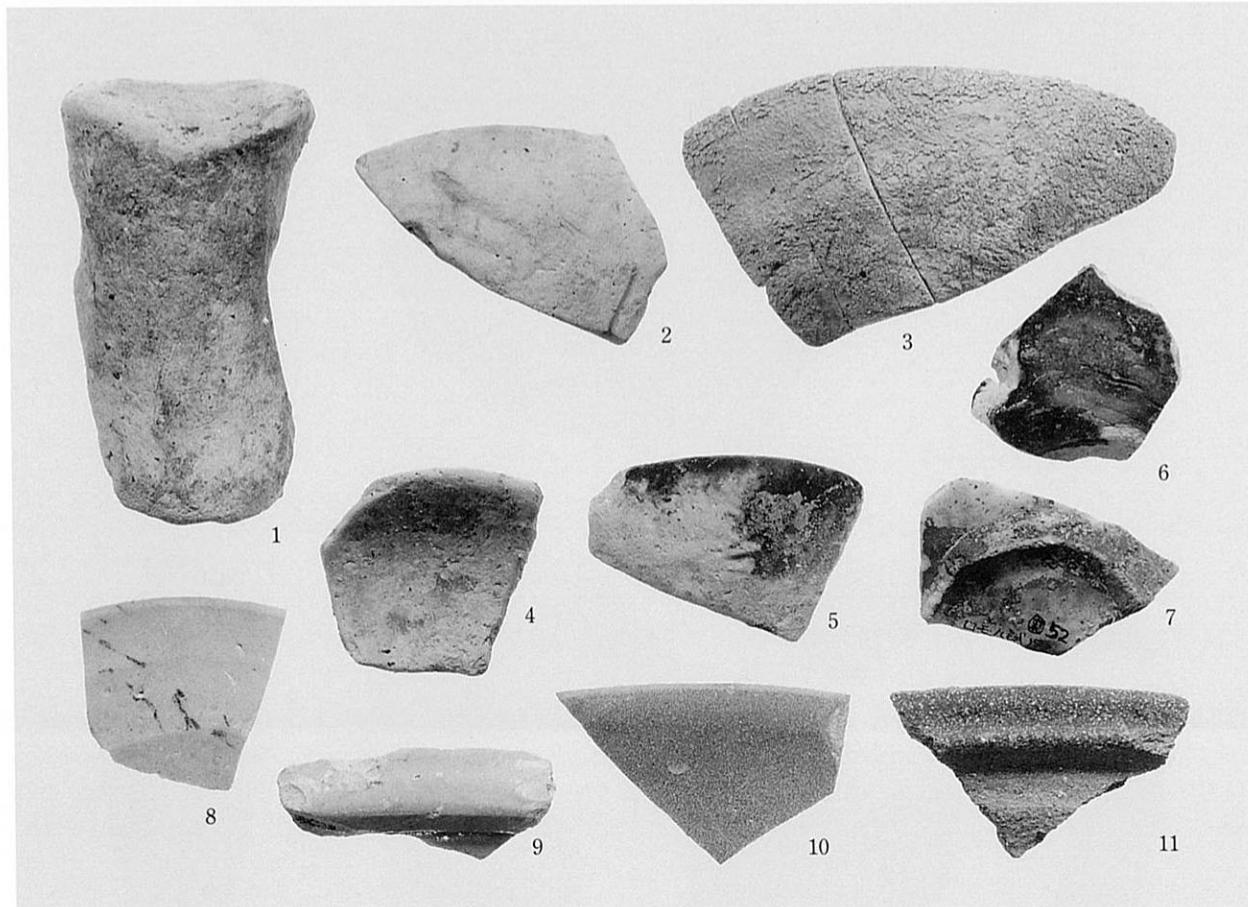
b. D区1層出土土器

(3 / 5)



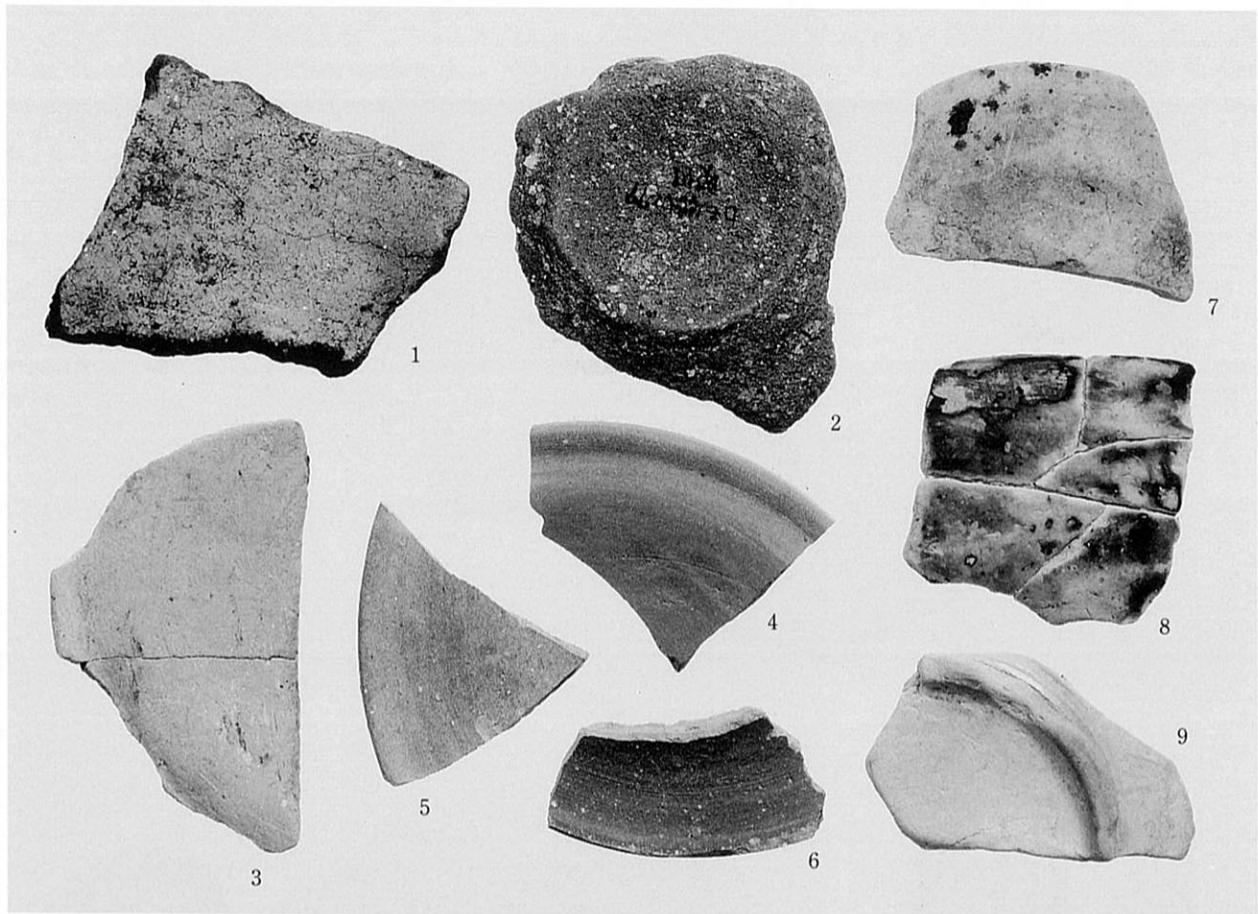
c. D区1層出土土器 (1・2)

(3 / 5)



d. D区1層出土土器 (1~11)

(3 / 4)



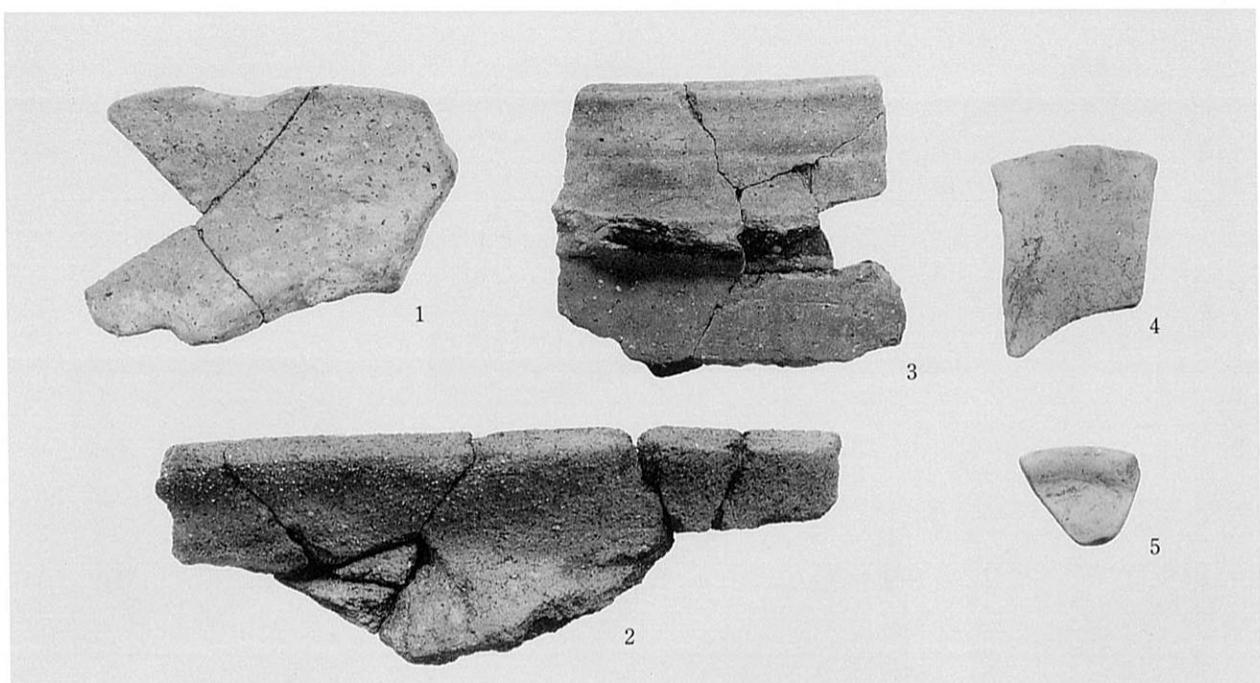
a. D区2層出土土器（1～9）

(2/3)



b. D区2層（1～4）、3層（5～7）出土土器

(2/3)



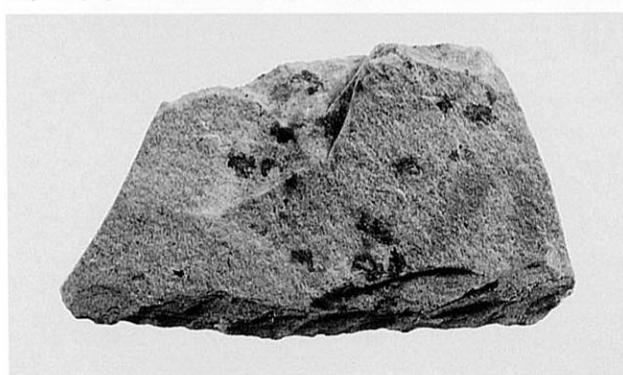
a. D区2層(1~3). 耕土(4). 床土(5). 出土土器

(2/3)



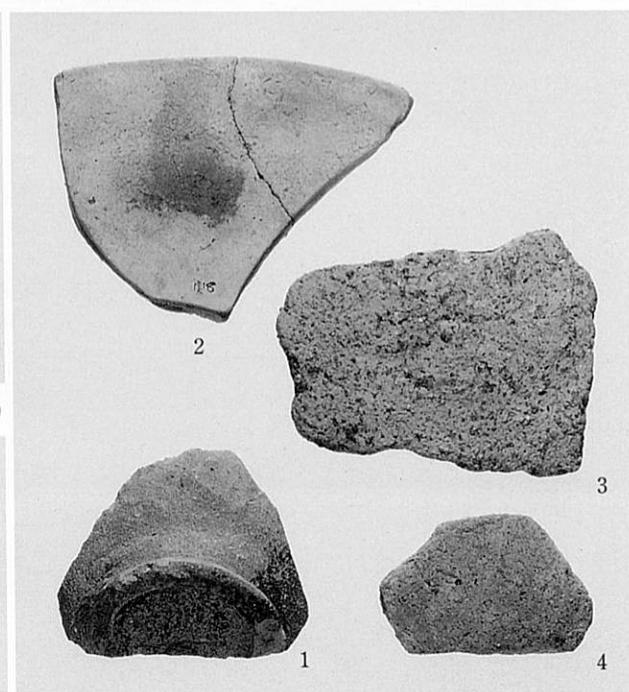
b. D区. サヌカイト石鎌(1). 楔形石器(2). 削器(3). 元豊通宝(4)

(1/1)



c. D区. 削器

(1/1)



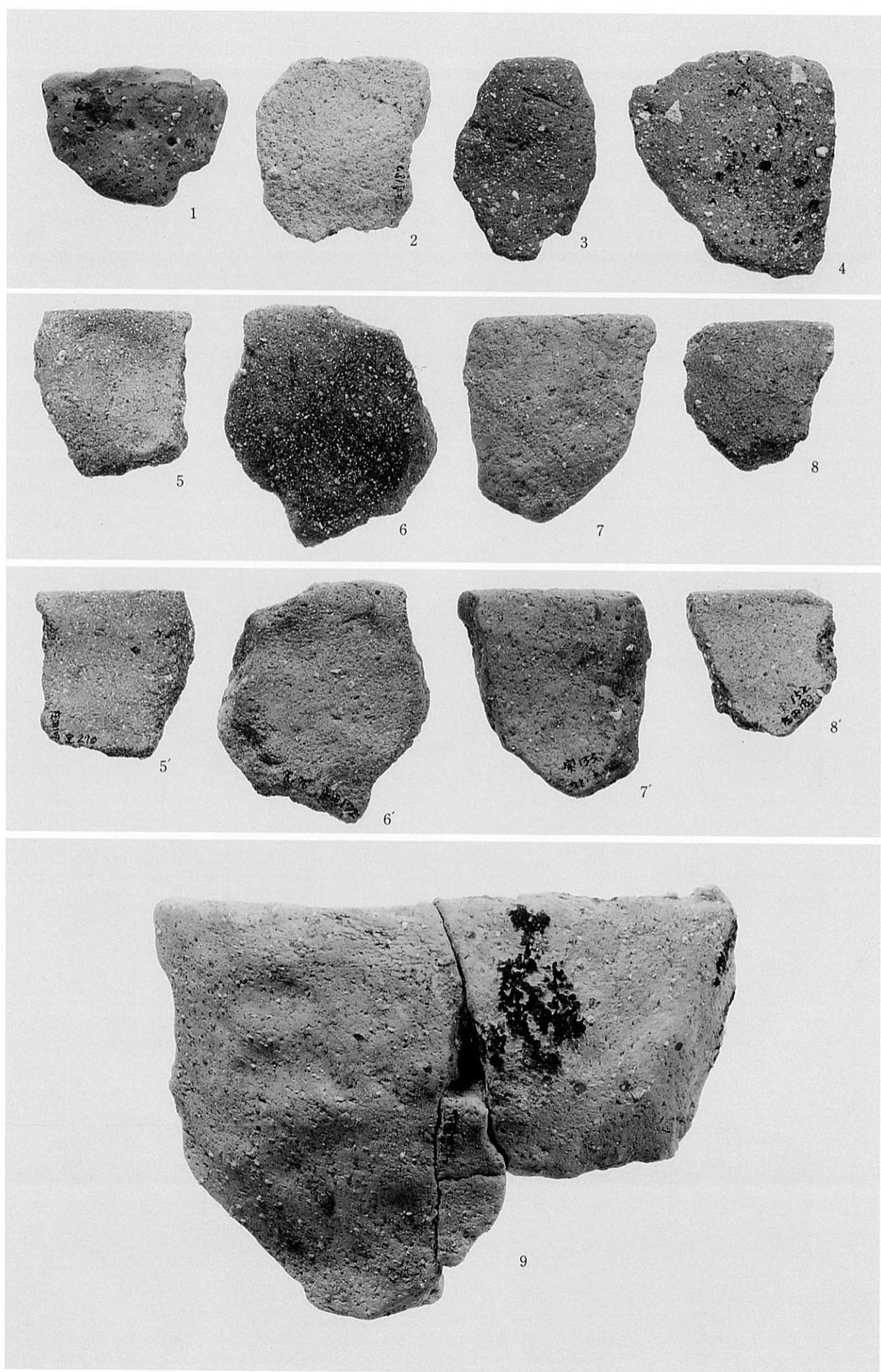
d. 1トレンチサヌカイト剝片(1). 13トレンチ
石鎌(2)

(1/1)

e. 1トレンチ(1・2). 13トレンチ(3・4)

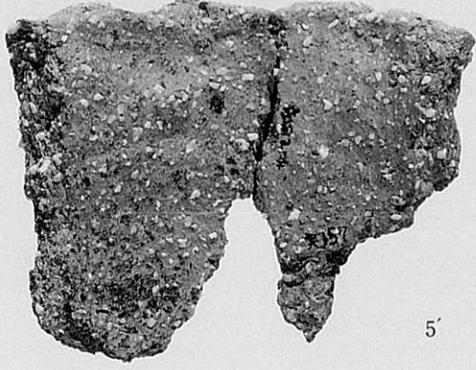
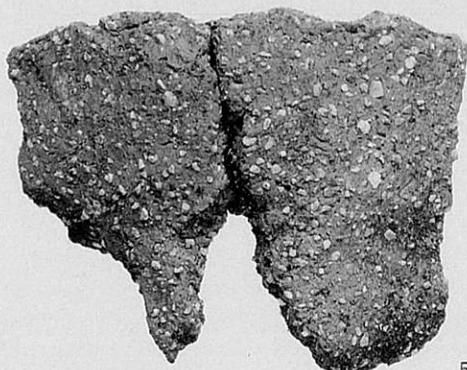
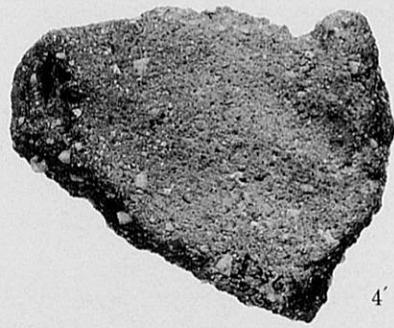
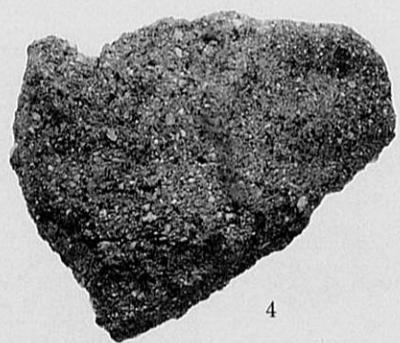
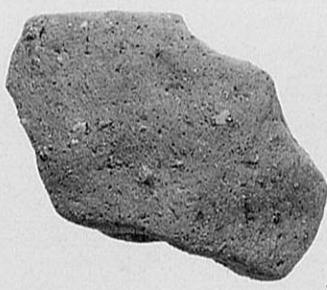
出土土器

(3/5)

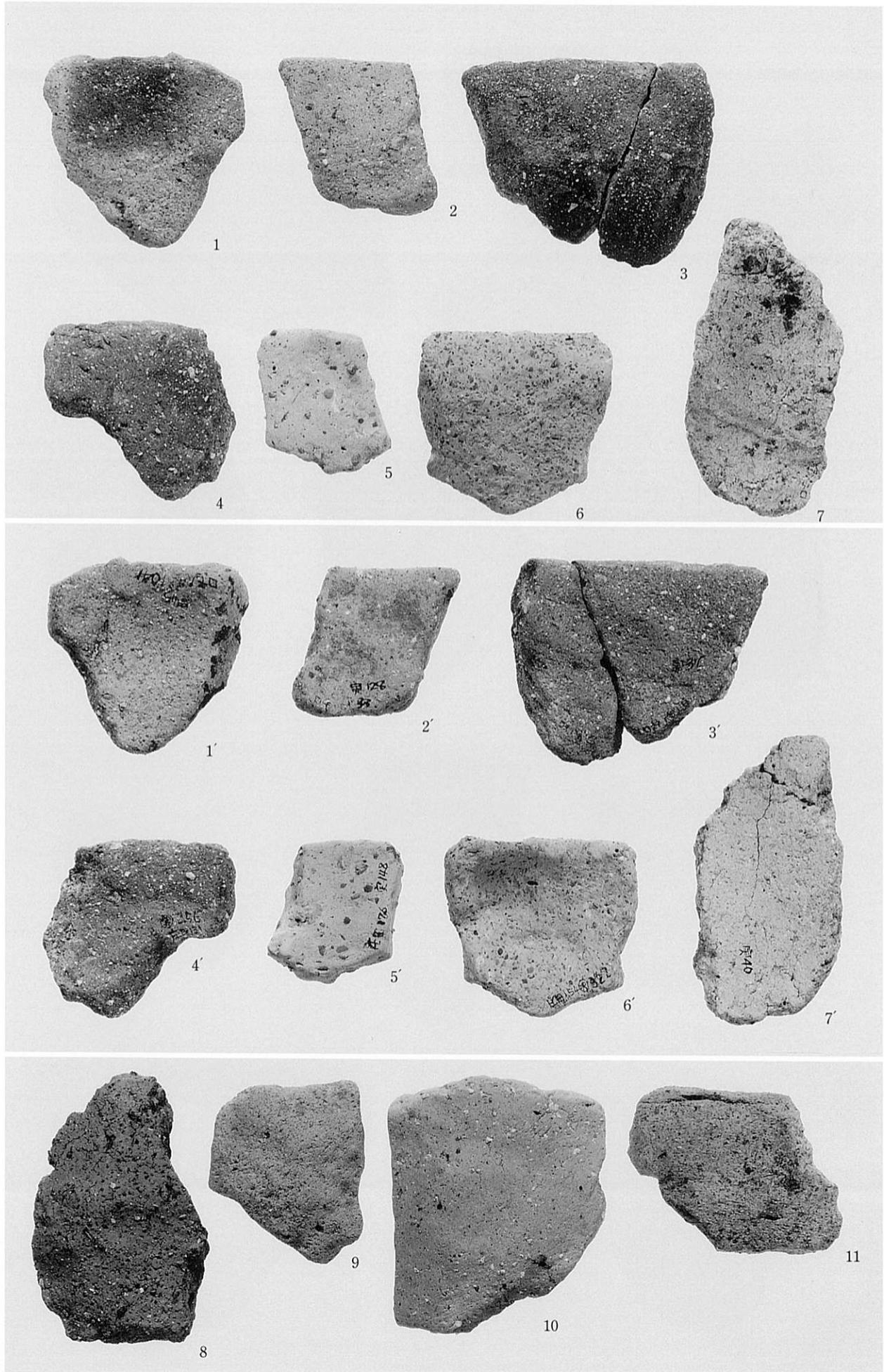


a. 製塩土器 (1~9)

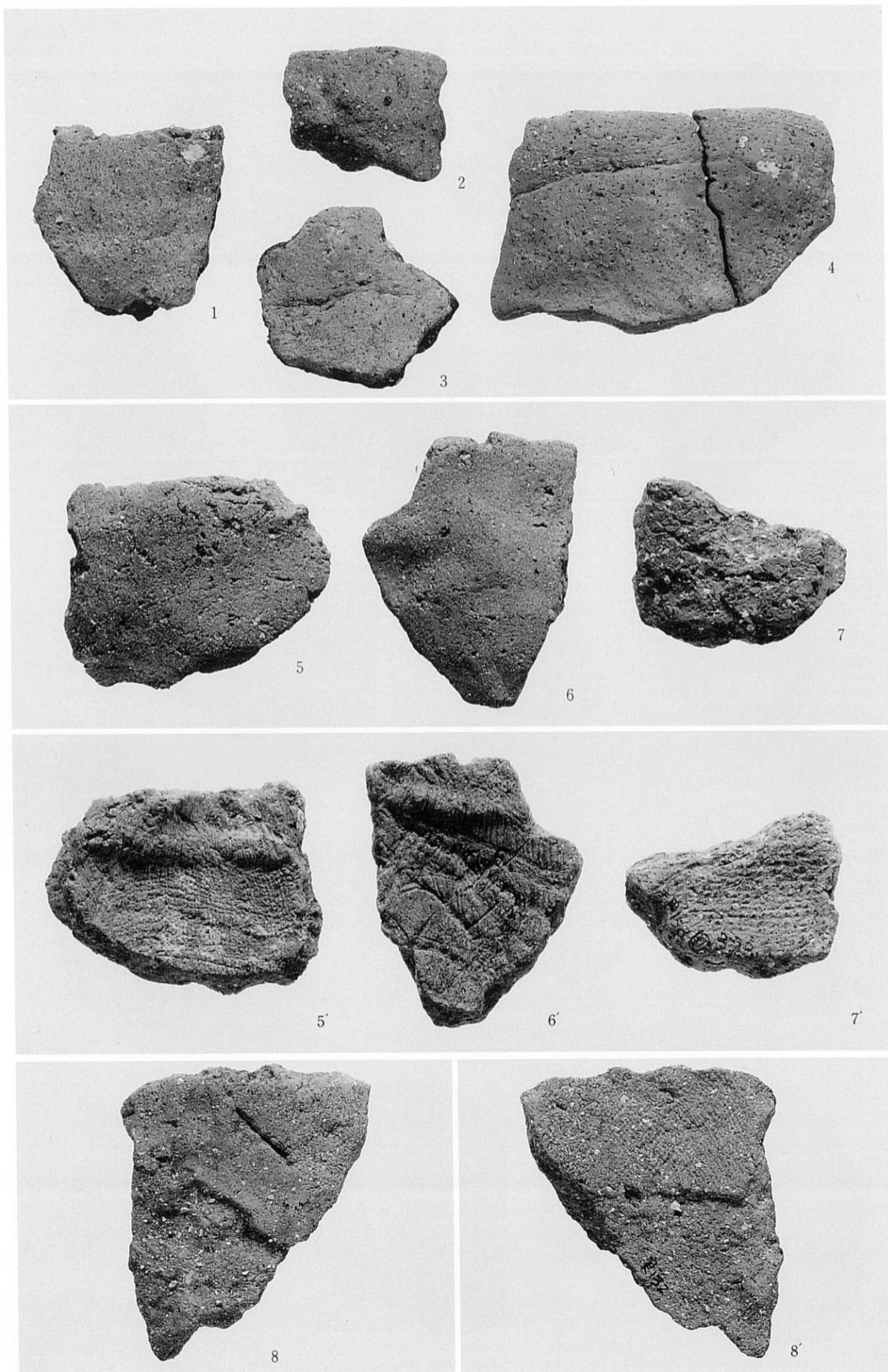
(1 / 1)



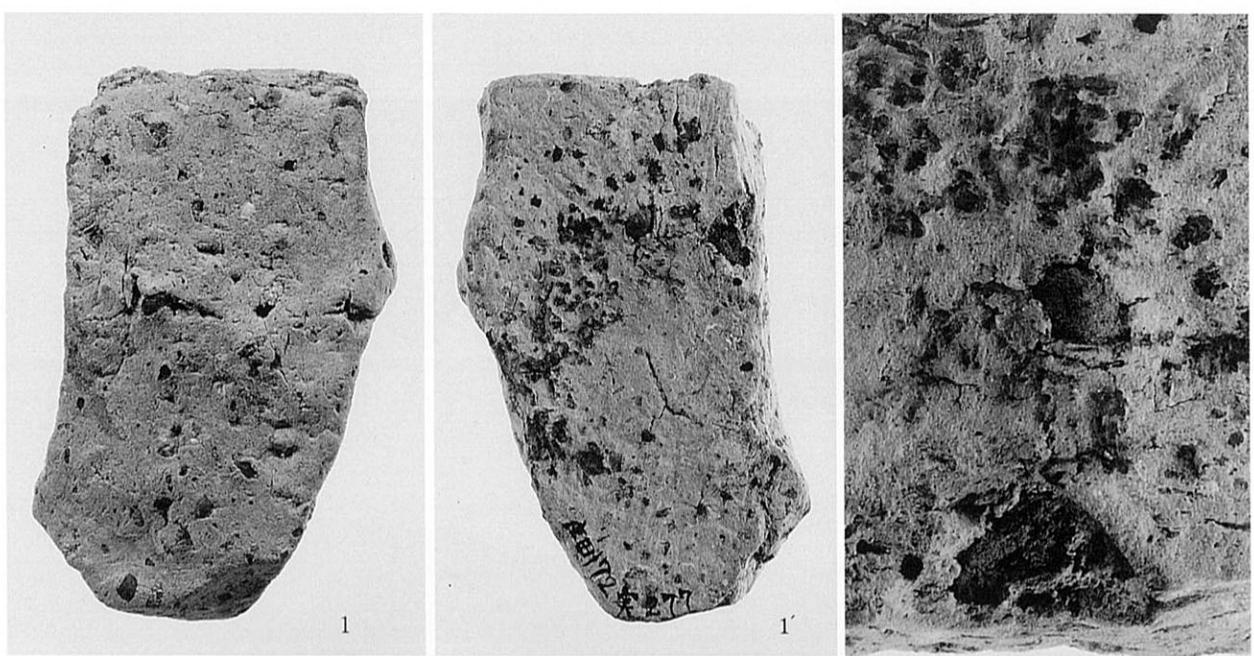
a. 製塩土器 (1~5)



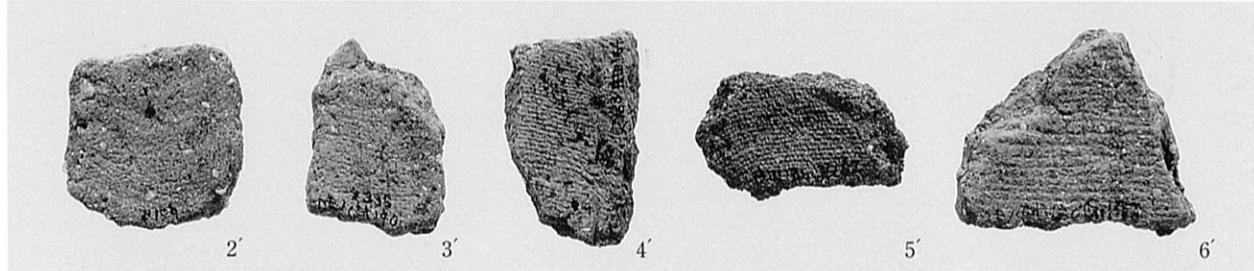
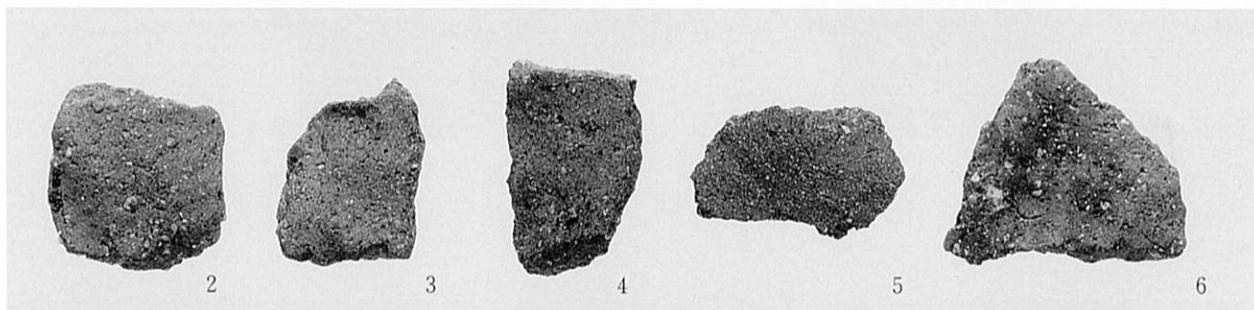
a. 製塙土器 (1~11)



a. 製塩土器 (1~8)

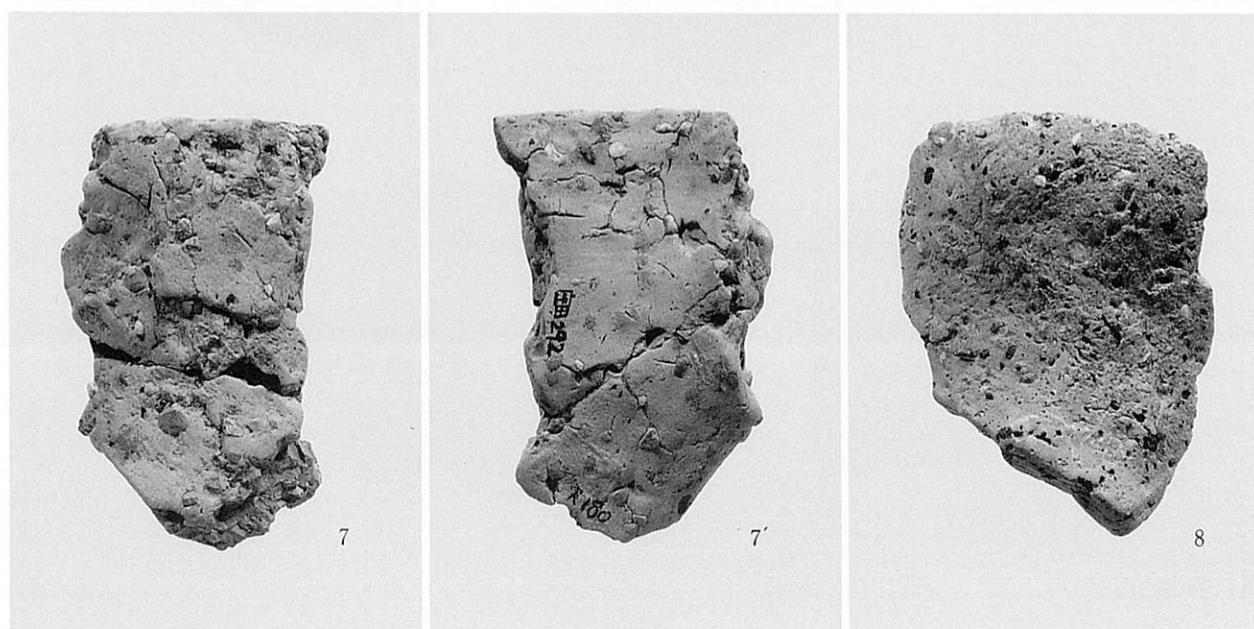


a. 製塩土器（軽石含有）(1)



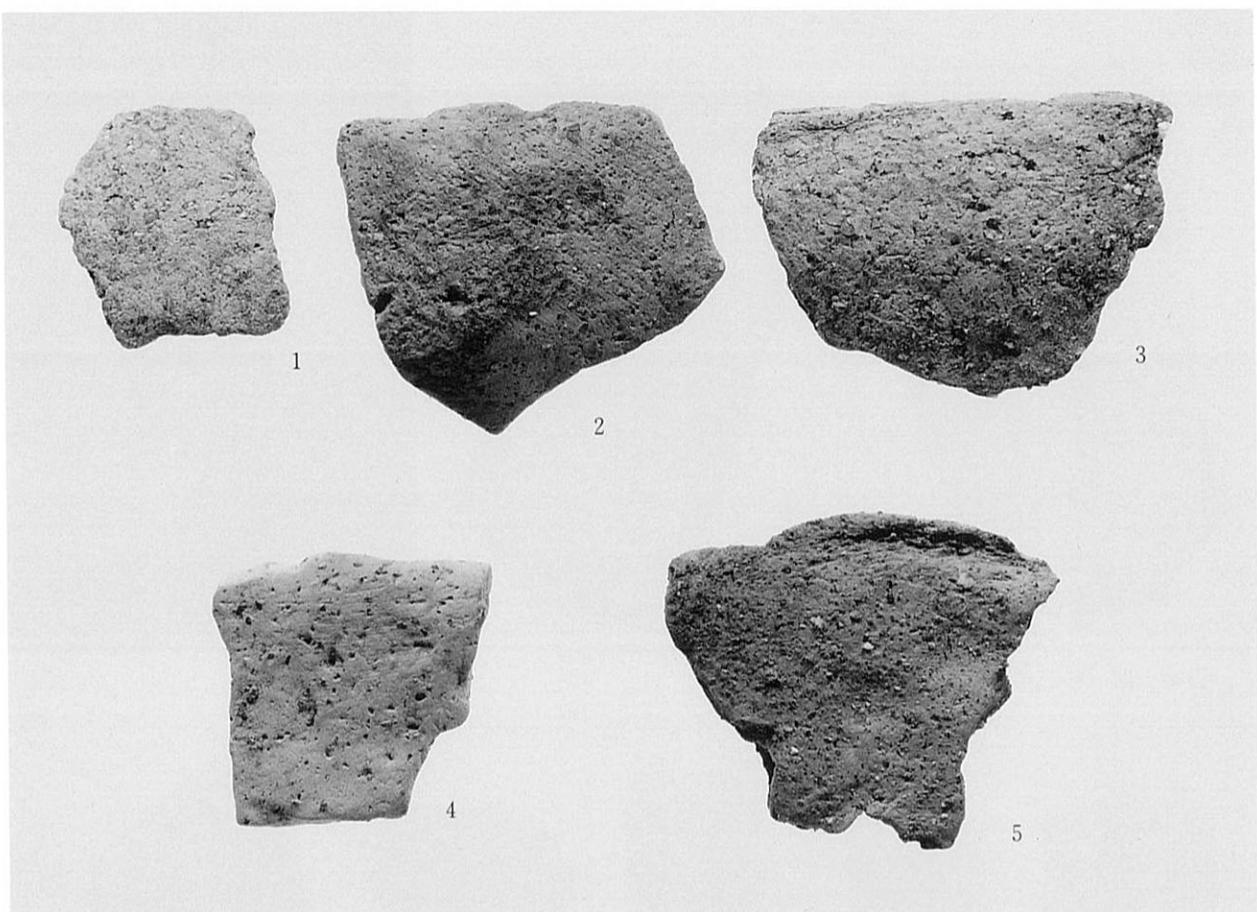
b. 製塩土器（2～6）

(2 / 3)



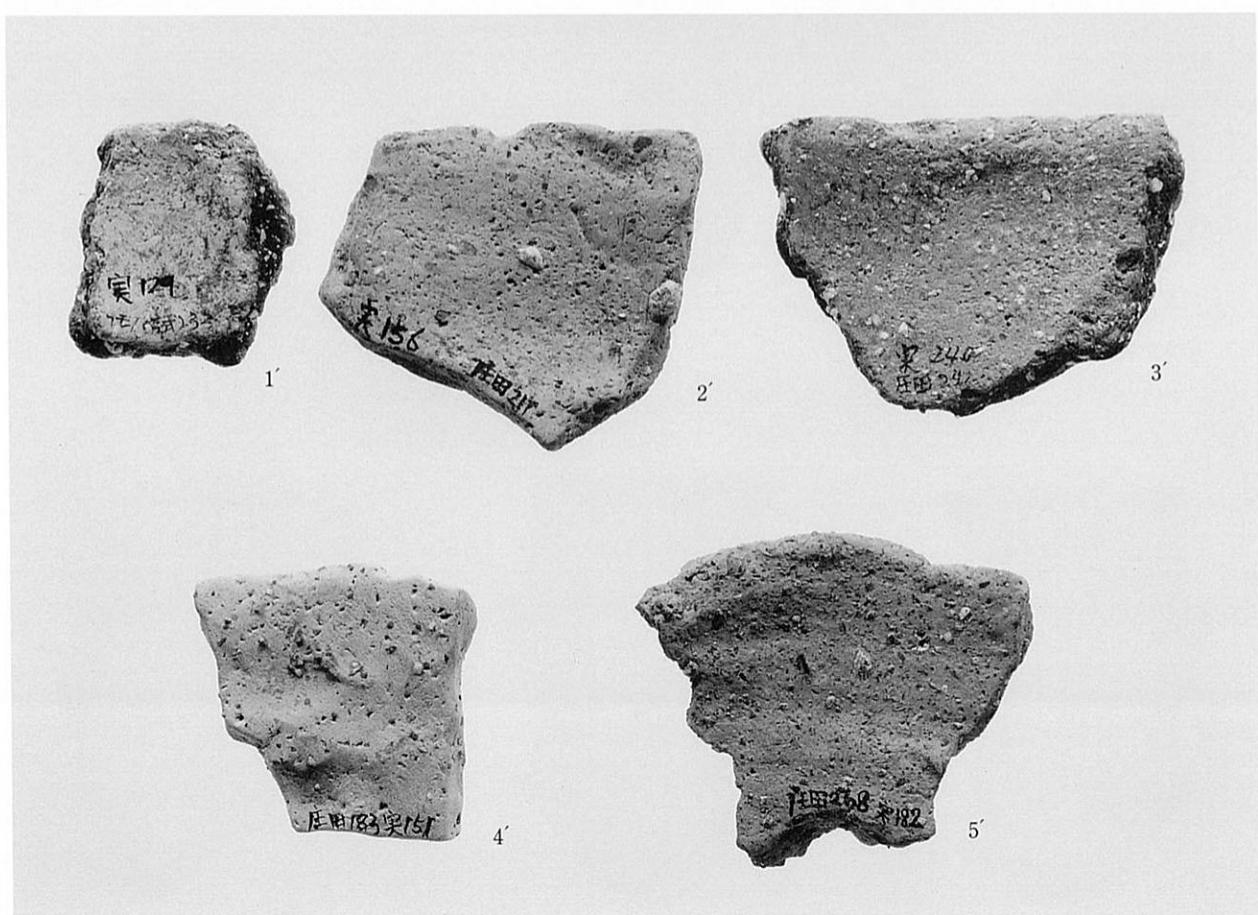
c. 製塩土器（軽石含有）(7・8)

(1 / 1)



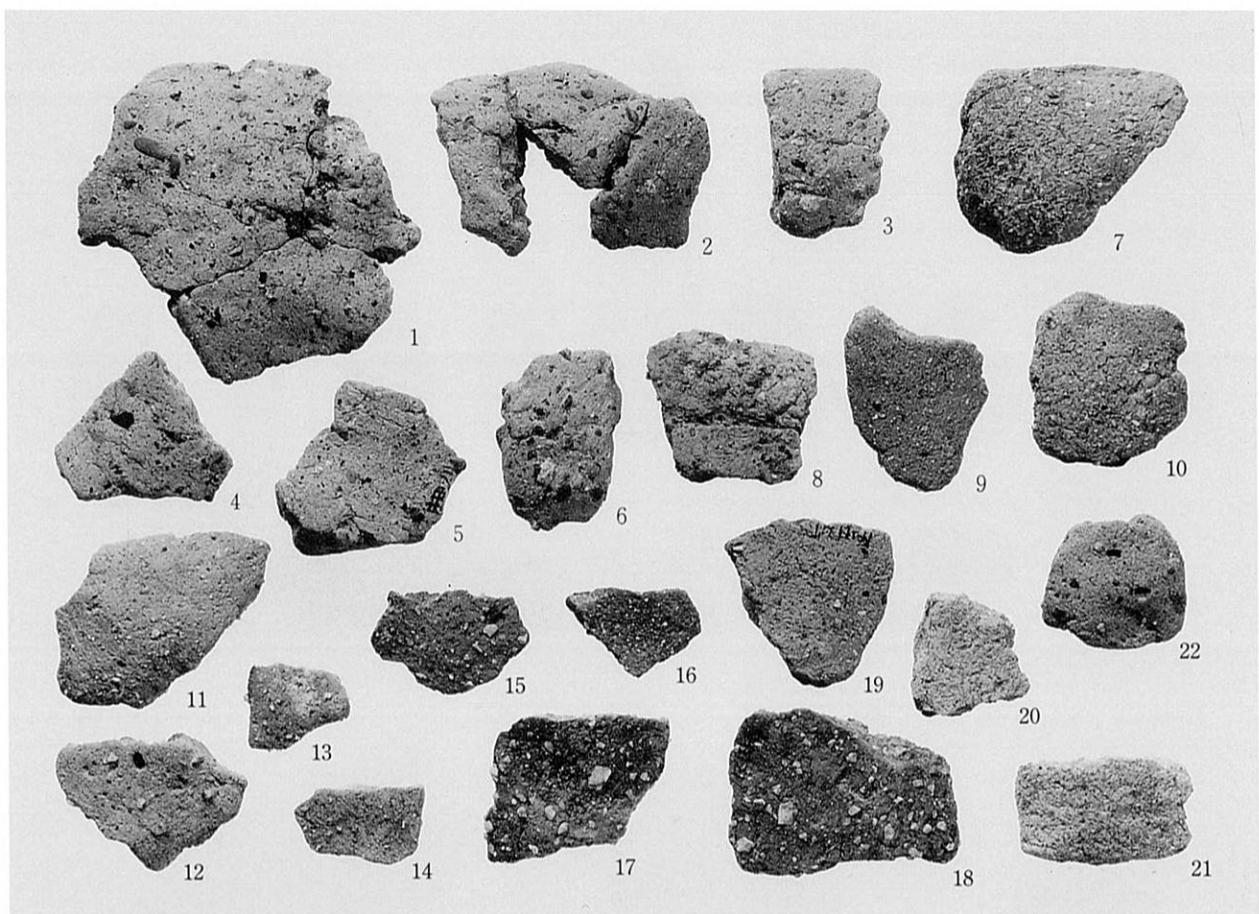
a. 製塩土器 (1~5)

(1/1)



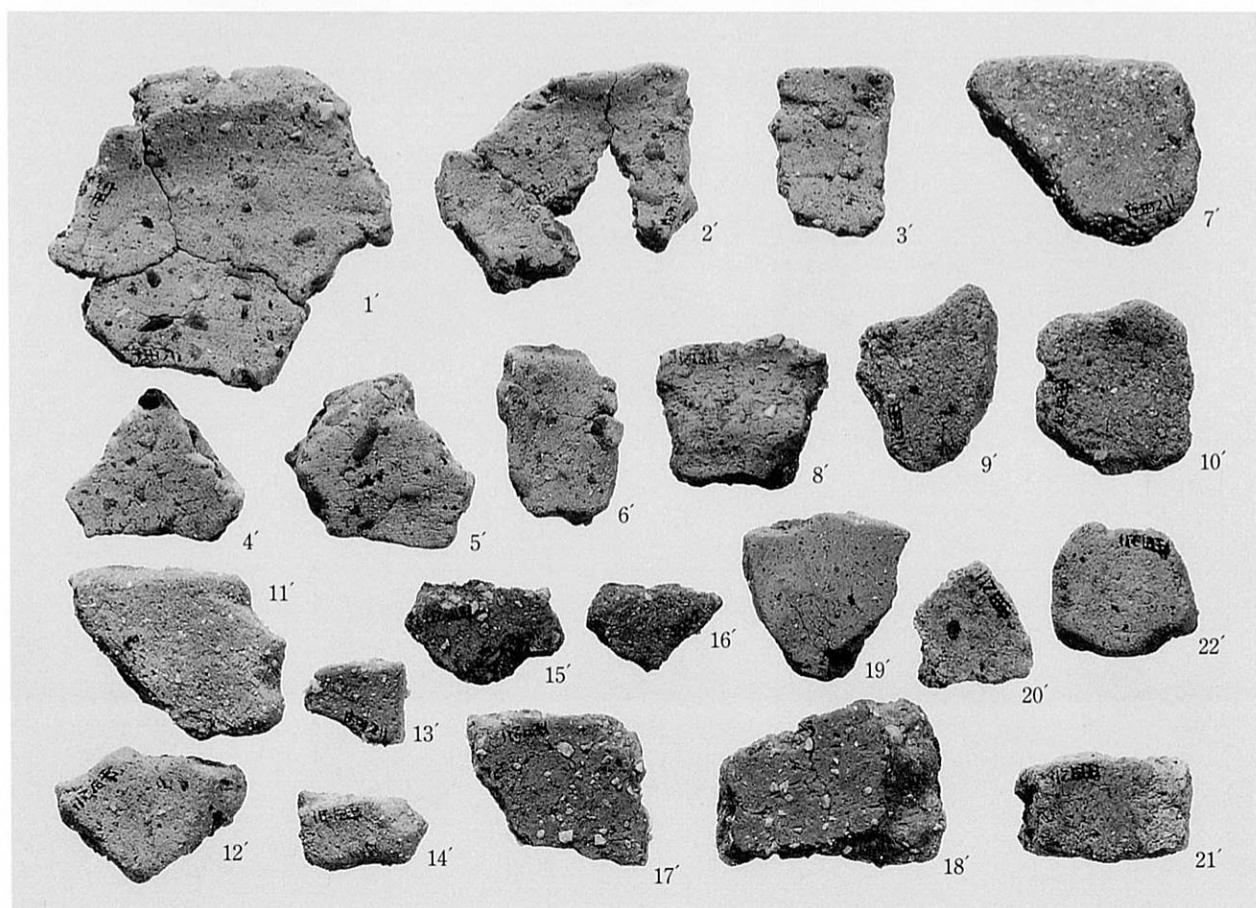
b. 同上内面

(1/1)



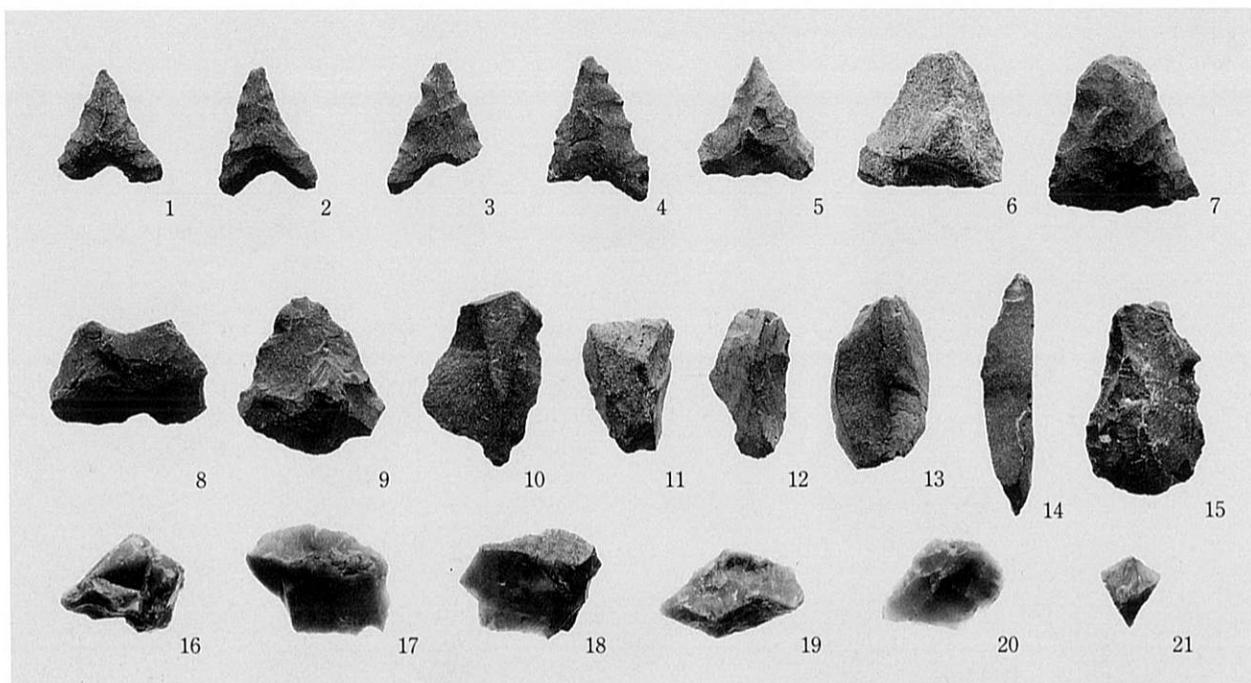
a. 建物5（穴54）出土製塙土器片（1～22）

(4 / 5)

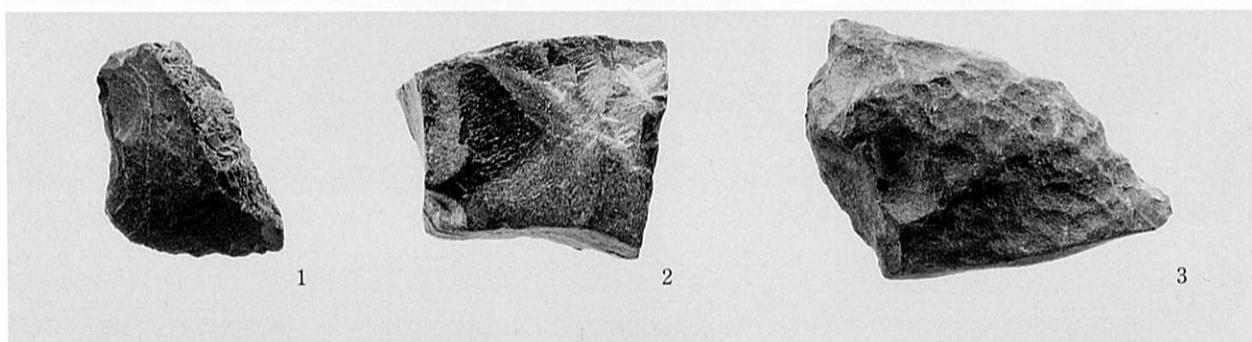


b. 同上内面

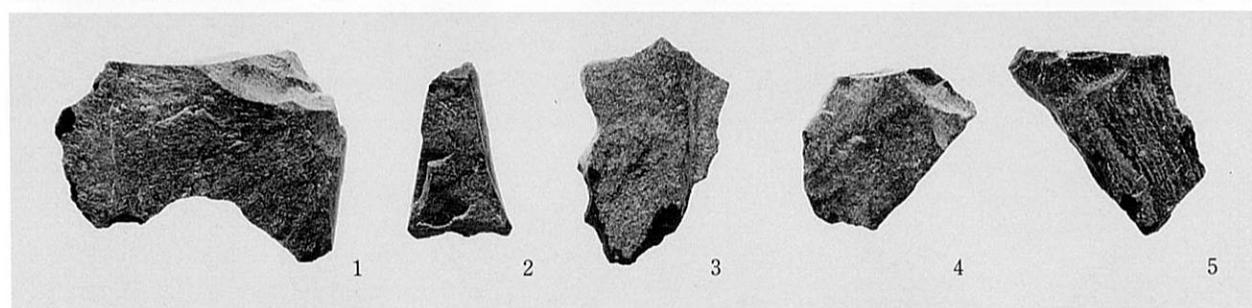
(4 / 5)



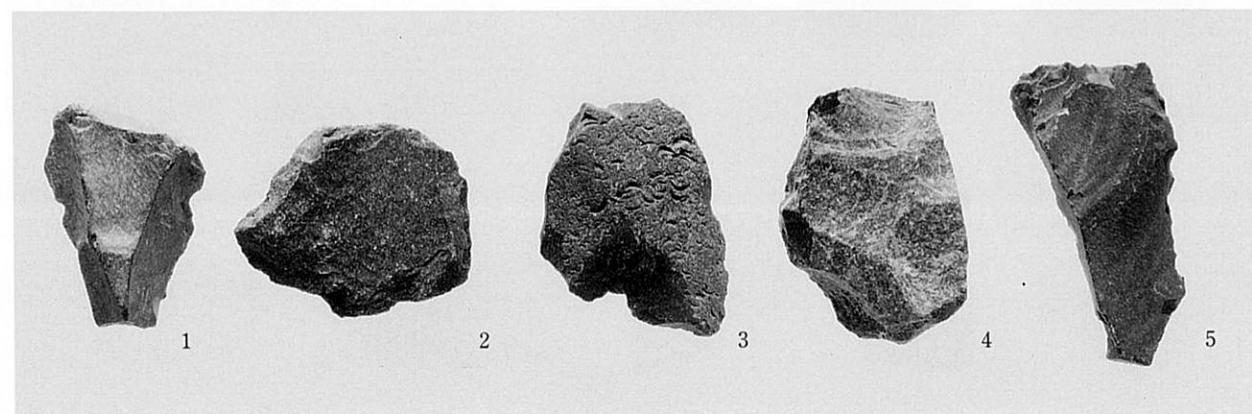
a. 石鏃 (1~9). 石錐 (10). 楔形石器 (11~14). 石鏃未製品 (15). チャート製火打石 (16~21) (1/1)



b. 削器 (1). 石刻 (2・3) (1/1)



c. 金山産サヌカイト剥片 (1~5) (1/1)



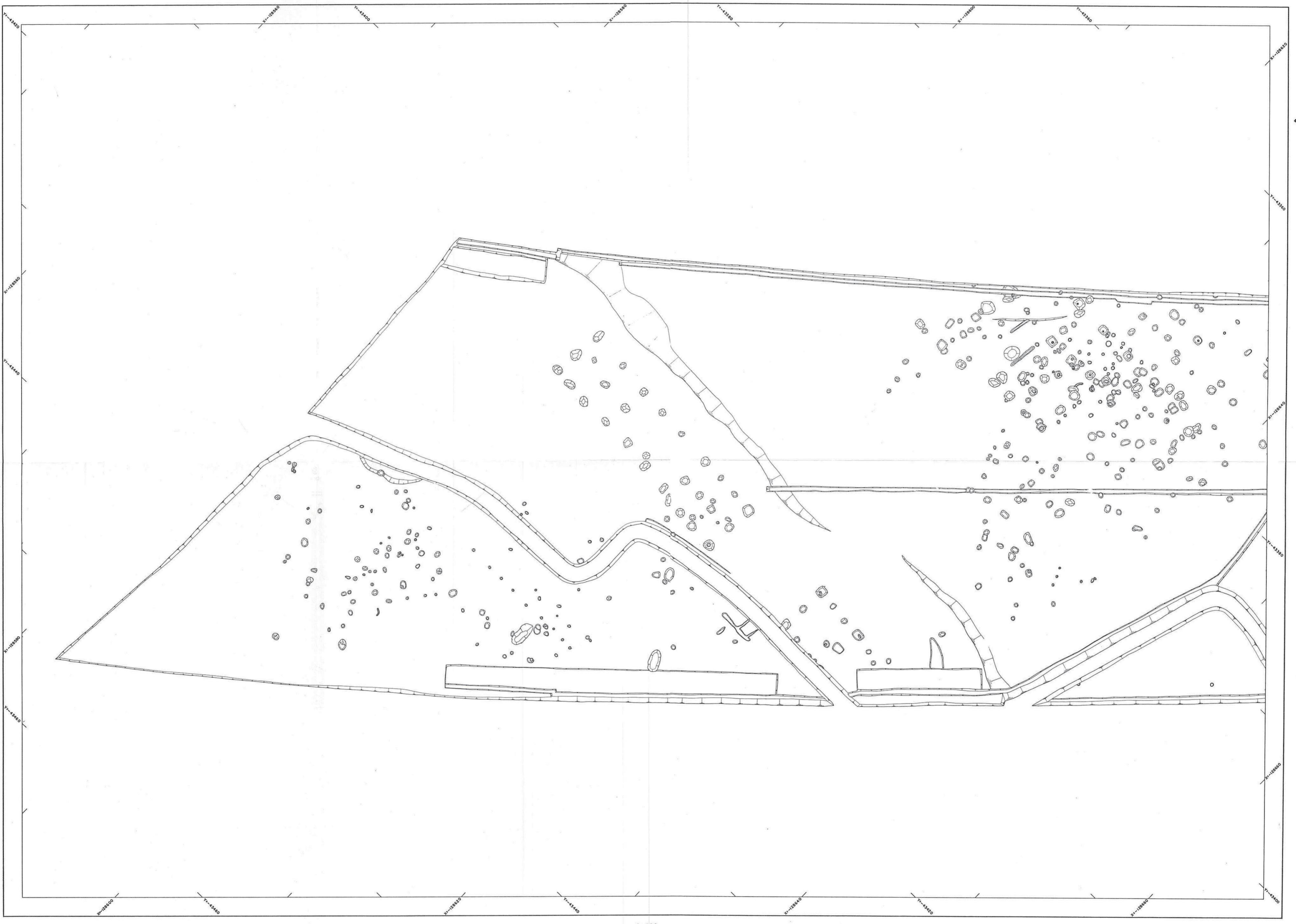
d. 二上山産サヌカイト剥片 (1~5) (1/1)

報告書抄録

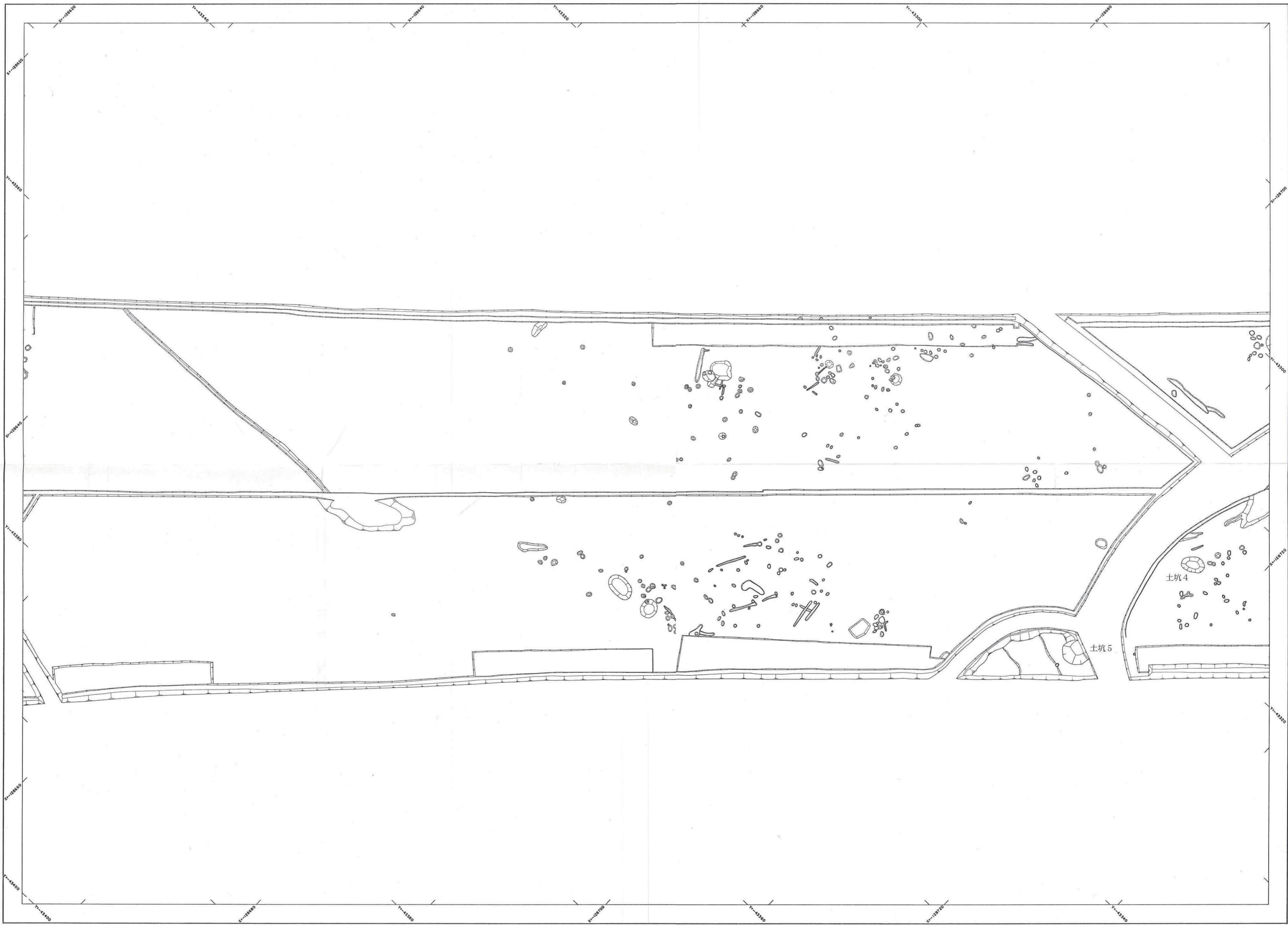
ふりがな	しょうだいせき							
書名	庄田遺跡							
副書名	都市計画道路茨木箕面丘陵線建設に伴う発掘調査報告書							
卷次								
シリーズ名	(財)大阪府文化財調査研究センター調査報告書							
シリーズ番号	第38集							
編集者名	西口陽一・伊藤 武							
編集機関	(財)大阪府文化財調査研究センター							
所在地	〒536-0016 大阪府大阪市城東区蒲生2丁目11-3 小森ビル4階 TEL06-6934-6651							
発行年月日	1999年2月25日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号	X	Y			
しょうだいせき 庄田遺跡	おおさかふ 大阪府 みのおり 箕面市 あおまだにひがし 粟生間谷東	27220		-128.580	-43.220	970925	8,800m ²	都市計画道路 茨木箕面丘陵線 建設に伴う発掘 調査
				～	～			
				-128.840	-43.460			
				34° 50'24"	135° 31'39"			
				～	～			
				34° 50'15"	135° 31'29"			
所収遺跡名	種別	主な時代		主な遺構		主な遺物		特記事項
庄田遺跡	集落	奈良		建物跡 墓跡 溝		土師器 須恵器 琥珀 製塩土器 緑釉 銅鈴 瓦器		
	集落	中世		小穴 溝 土坑				

(財)大阪府文化財調査研究センター調査報告書 第38集
庄田遺跡
都市計画道路茨木箕面丘陵線建設に伴う発掘調査
発行年 1999年2月25日
発行所 (財)大阪府文化財調査研究センター
〒536-0016 大阪府大阪市城東区蒲生2丁目11-3
小森ビル4階
TEL06-6934-6651 FAX06-6934-7029

庄田遺跡遺構図 No.1

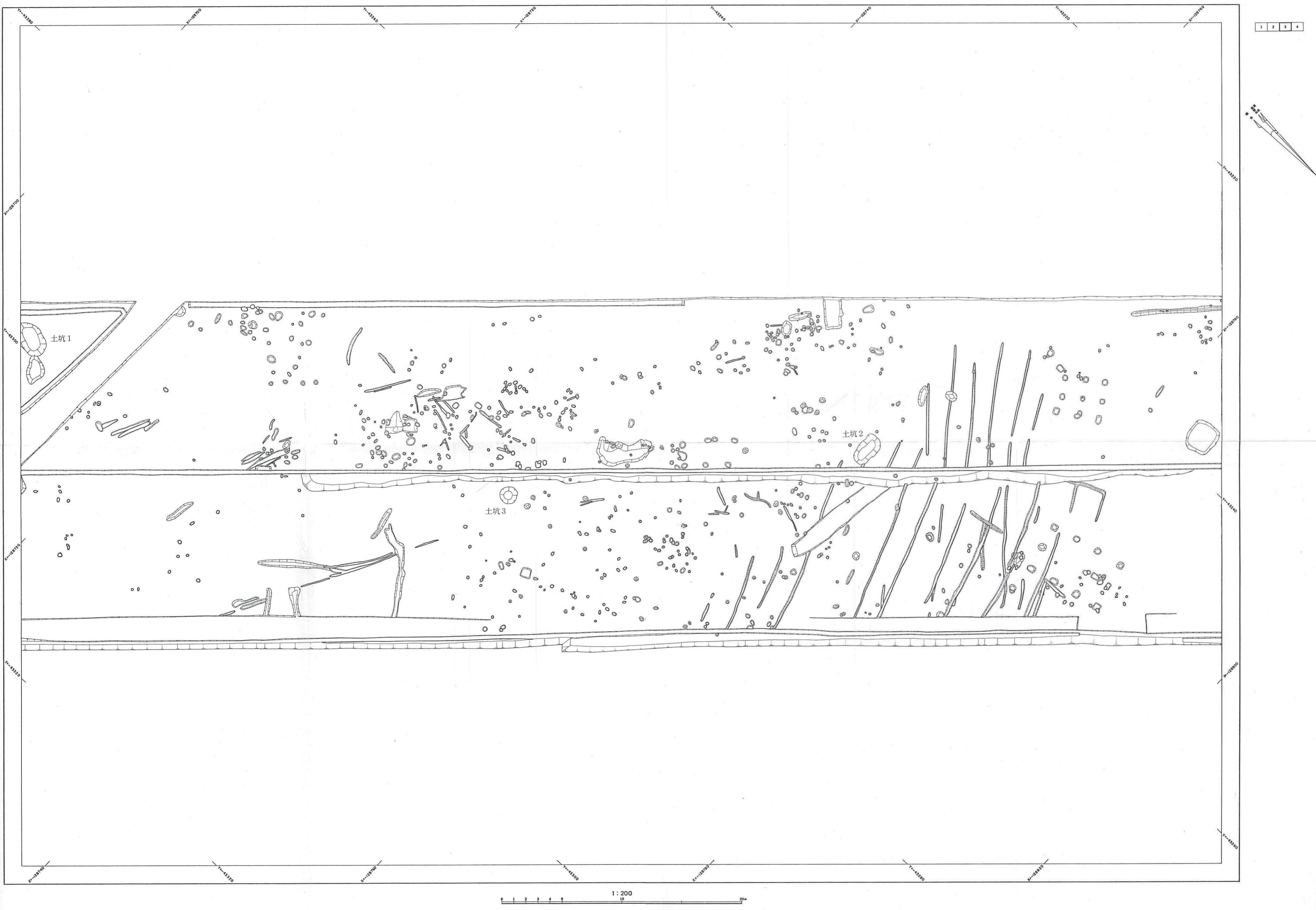


庄田遺跡遺構図 No.2



1 2 3 4

庄田遺跡遺構図 No.3



庄田遺跡遺構図 No.4

1 2 3 4

